熊本県文化財調査報告第243集

二本木遺跡群Ⅱ

（春日地区第1～5・7次）

熊本駅北部線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2008.3

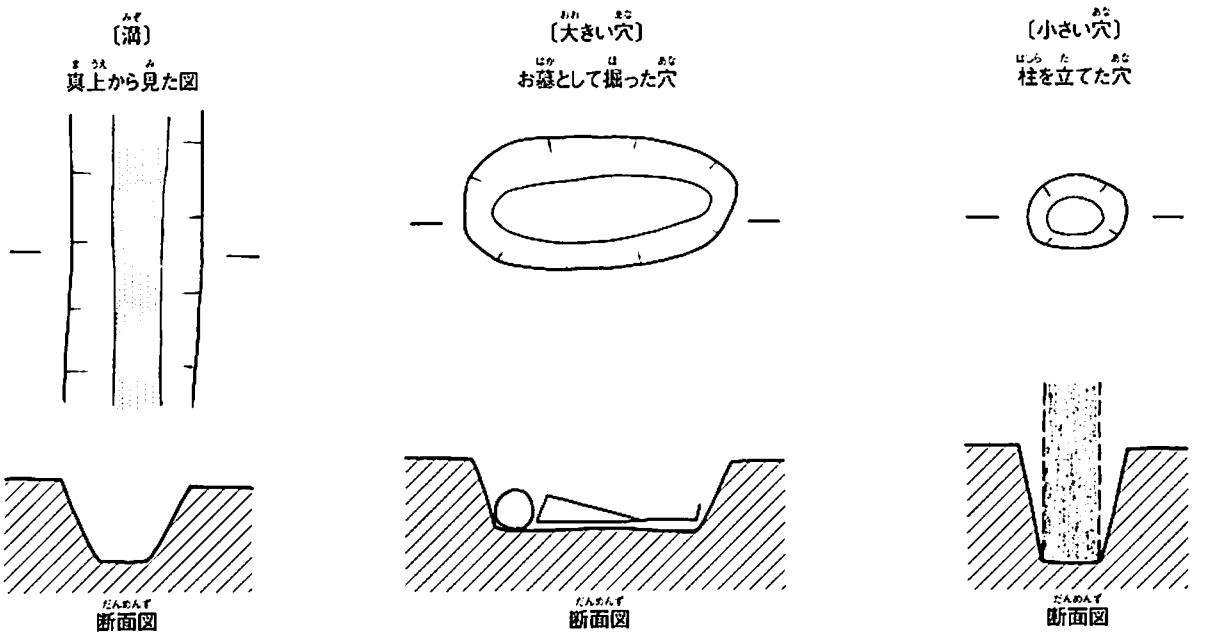
熊本県教育委員会

二本木遺跡群の発掘調査でわかったこと

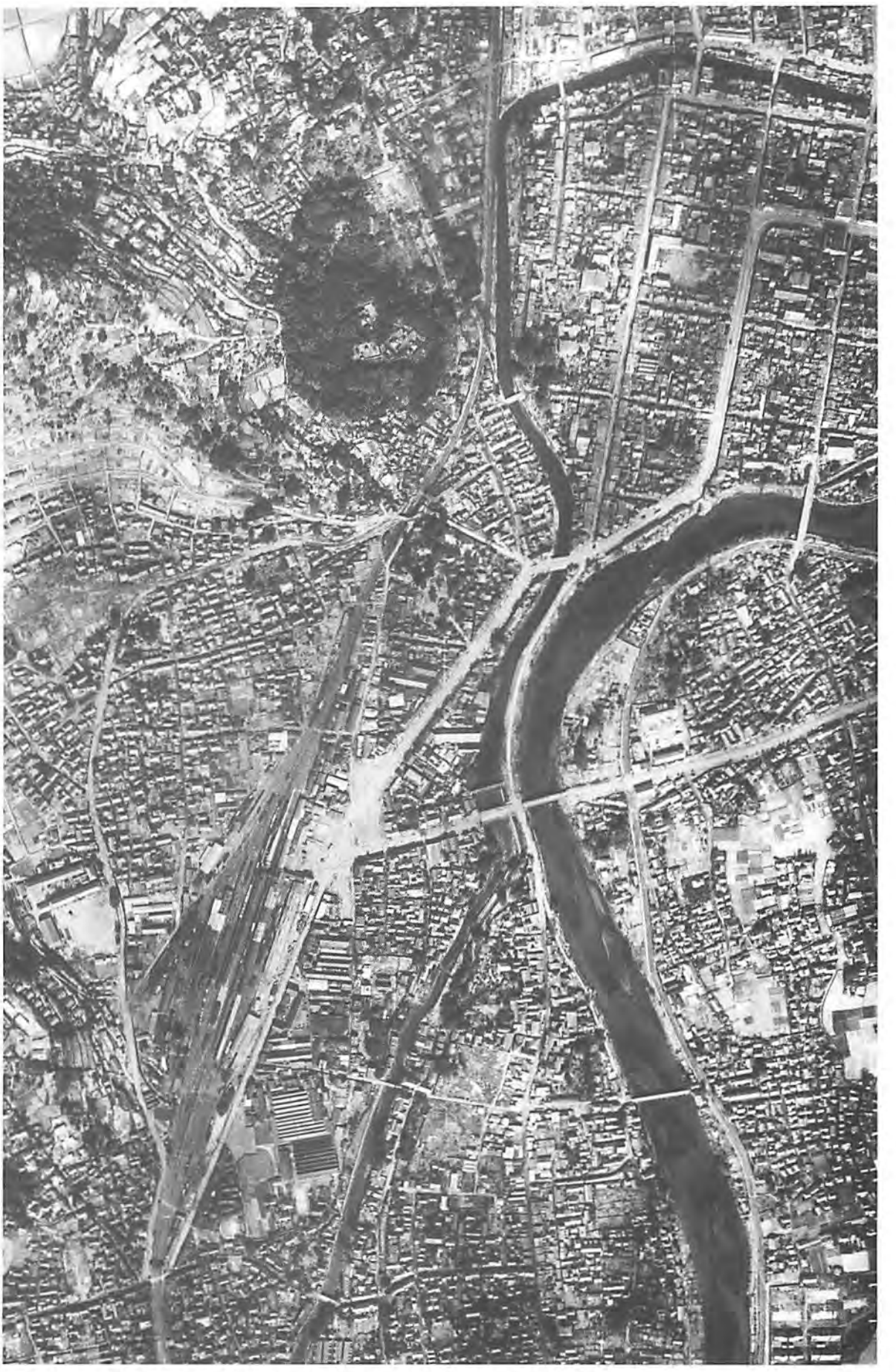
二本木遺跡群のなかで、今回、発掘調査をしたのは、熊本駅に行く道路と歩道をつくる所です。道路と歩道を新しくをつくることで、地面の下にある昔の人たちが生活したあとがなくなってしまうので、発掘調査をしました。

発掘調査で、三つの時代の生活のあとが見つかりました。一番下には奈良時代（約1300年前）、平安時代（約1200年前）の溝（参考：下の図）などがありました。その上には鎌倉時代（約800年前）、室町時代（約600年前）の溝、大きい穴（参考：下の図）や小さい穴（参考：下の図）などが掘ってありました。一番上にも江戸時代（約400年前）から明治時代・大正時代（約100年前）の溝がありました。

この二本木遺跡群には奈良時代から平安時代の肥後の国（昔の熊本県の呼び名）の役所（いまの県庁のようなもの）があったと考えられています。今回の発掘調査で見つかったものは、この役所のものか、役所に関係のあるものと思われます。



空撮１　二本木遺跡群周辺航空写真（熊本県文化財調査報告第174集　二本木遺跡群より抜粋）



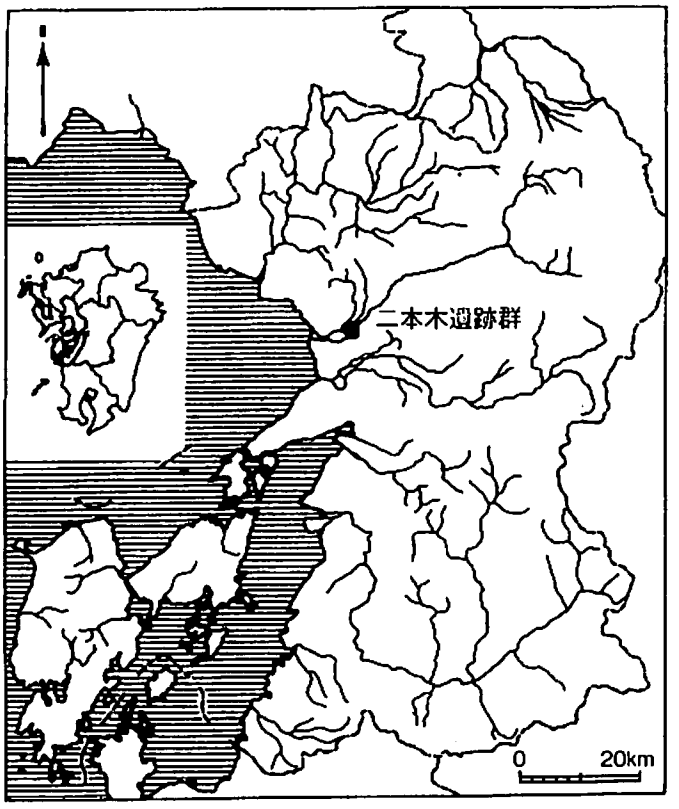
空撮２　昭和22年〔1947〕11月１日　極東米軍撮影空中写真　S＝1/15,960

熊本県文化財調査報告第243集

二本木遺跡群Ⅱ

（春日地区第1～5・7次）

熊本駅北部線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2008.3

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、熊本駅北部線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、熊本市の二本木遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査の結果、古代、中世、近世の溝跡や土壙などを発見しました。そのなかでも、古代、中世を中心にした、二本木遺跡群の北側の端の様相の一部を明らかにすることができました。

この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財の関心と理解を深めていただく一助となれば、喜びに堪えません。

なお、調査の実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、関係機関、並びに指導、助言をいただいた先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成20年３月31日

熊本県教育長　柿　塚　純　男

例　言

1　本書は、熊本駅北部線街路改良事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県熊本市春日に所在する二本木遺跡群の第１次～５次、第７次の発掘調査報告書である。

2　現地調査は、熊本県土木部都市計画課の依頼を受け、平成12年度から平成18年度までの期間に、熊本県教育庁文化課が行った。

3　整理・報告書作成は平成19年度（2007）に行った。

4　国土座標軸による測量基準杭の設定は、第１次調査は㈱埋蔵文化財サポートシステム、第２次調査は㈱文化財環境整備研究所、第３次調査は株式会社九州文化財研究所、第４次調査は㈱埋蔵文化財サポートシステム、第５次調査は㈲坂井設計コンサルタントに委託した。第７次調査は国土座標軸による測量基準及び水準点のデータは、熊本県熊本土木事務所の協力により㈲内田産業から得た。

5　本書に使用した航空写真は、熊本県文化財調査報告第174集で九州航空株式会社に委託したものである。また、昭和22年撮影の空中写真は極東米軍が撮影したものである。

6　本書の周辺遺跡地図で使用した地図は、国土地理院発行の熊本１：50,000地形図である。

7　遺構実測・地形測量及び製図は、一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。

8　遺物実測及び製図は、一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

9　遺物写真撮影は、村田百合子、手嶋裕子が行った。

10　鉄器処理は、今田里枝、谷川亜紀子が行った。

11　自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

12　本書の編集は、西住欣一郎を中心に行い、加藤早織、平川恵里子、松本裕子が補助した。

13　出土遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室に保管している。

凡　例

1　本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。

2　報告書に掲載した実測図の縮尺は不統一であるため、第Ⅲ章～Ⅷ章の調査の成果に明記した。

3　須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。

4　土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局　監修「新版　標準土色帖」（日本色研事業株式会社：2004）に準拠した。

5　写真の縮尺は任意である。

6　発掘遺構には遺構の種別を示す以下の略号を使用した。

SD（溝）　SE（井戸）　SI（竪穴住居）　SK（土壙）　SX（その他、不明遺構）

本文目次

第Ⅰ章　調査の契機と経過……1
　第1節　調査に至る経緯と経過……1
第Ⅱ章　位置と環境……2
　第1節　地理的環境……2
　第2節　歴史的環境……2
第Ⅲ章　春日地区第1次調査の成果　坂口（2000）……9
　第1節　調査の概要……9
　第2節　調査の組織……9
　第3節　調査の方法と経緯……9
　第4節　調査の成果……10
　第5節　まとめ……18
第Ⅳ章　春日地区第2次調査の成果　帆足（2001）……31
　第1節　調査の概要……31
　第2節　調査の方法と経過……31
　第3節　調査の成果……32
　第4節　まとめ……39
第Ⅴ章　春日地区第3次調査の成果　西住（2002）……47
　第1節　調査に至る経緯……47
　第2節　調査の成果……53
第Ⅵ章　春日地区第4次調査の成果　宮崎（2003）……83
　第1節　調査の概要……83
　第2節　調査の成果……84
第Ⅶ章　春日地区第5次調査の成果　松村（2004）……103
　第1節　調査の経緯……103
　第2節　調査の組織……103
　第3節　調査の方法と経過……103
　第4節　調査の成果……104
　第5節　まとめ……120
第Ⅷ章　春日地区第7次調査の成果　岡本（2006）……127
　第1節　調査に至る経緯……127
　第2節　調査の組織……127
　第3節　調査の過程……127
　第4節　調査の概要……128
　第5節　調査の結果……128
　第6節　まとめ……139
　引用・参考文献……143
第Ⅸ章　総括……149

挿図目次

第１図　二本木遺跡群周辺遺跡地図（S＝1/50,000）……4
第２図　二本木遺跡群春日地区第１～５・７次調査位置図（S＝1/3,500）……8

第１次調査
第１図　遺構配置図（S＝1/1,000）……11
第２図　調査Ⅰ区配置図……11
第３図　土壙（SK001・002）実測図……12
第４図　調査Ⅱ区配置図……13
第５図　溝状遺構（SD002・004）実測図……14
第６図　竪穴住居跡（SI001・002）実測図……15
第７図　竪穴住居跡（SI003・004）実測図……16
第８図　竪穴住居跡（SI005）実測図……17
第９図　Ⅰ区出土遺物実測図(1)……18
第10図　Ⅰ区出土遺物実測図(2)……19
第11図　Ⅰ区・Ⅱ区出土遺物実測図……20
第12図　Ⅱ区出土遺物実測図(1)……21
第13図　Ⅱ区出土遺物実測図(2)……22
第14図　Ⅱ区出土遺物実測図(3)……23

第２次調査
第１図　Ⅲ層・Ⅳ層検出遺構配置図……33
第２図　Ⅴ層検出遺構配置図……34
第３図　SD01（１区・２区）実測図……35
第４図　SD02（４区・５区）・SD03（８区南Ⅴ層検出）実測図……36
第５図　１区・２区出土遺物実測図……37
第６図　４区・６区出土遺物実測図……38
第７図　出土遺物（古銭）……39

第３次調査
第１図　調査１区・２区遺構配置図……49
第２図　調査３区・４区遺構配置図……50
第３図　竪穴住居跡（SI017）実測図……54
第４図　土壙（SK001・002・003・007・015・020・023）実測図……55
第５図　土壙（SK029・030・036・037・052・058）実測図……56
第６図　土壙（SK058）出土遺物（古銭）……57
第７図　土壙（SK059・060・061・063）実測図……57
第８図　土壙（SK039）・溝跡（SD004・021・024・031）実測図……58
第９図　溝跡（SD032・033・034）実測図及び出土遺物実測図……59
第10図　溝跡（SD040）・井戸跡（SE041・055）実測図……60
第11図　土壙（SK028・045・046・047・049・050）・溝跡（SD042）・不明遺構（SX044）実測図……61
第12図　竪穴住居跡（SI110）実測図及び出土遺物実測図……62
第13図　土壙（SK078・099）実測図及びSK078出土遺物実測図……63
第14図　土壙（SK067・076）実測図及びSK067出土遺物実測図……64
第15図　土壙（SK066・070・071・072・073・074・075・077）実測図……64
第16図　土壙（SK080・081・087・089・090・093・095・097・098・100）・竪穴住居跡（SI094）実測図……65
第17図　土壙（SK083・085・088・091）・溝跡（SD065・069）実測図……66
第18図　溝跡（SD084・101・102・103・104・105）実測図……67
第19図　３区出土遺物実測図……68
第20図　土壙（SK106・107）実測図……68

第４次調査

第１図　調査区位置図……83
第２図　遺構配置図……84
第３図　南区遺構実測図（SD１～SK12）……86
第４図　北区遺構実測図（SD）……87
第５図　北区遺構実測図（SK）……88
第６図　土器実測図（SD１）……89
第７図　土器実測図（SD32）……90
第８図　土器実測図（SD33）……90
第９図　土器実測図（SD37）……91
第10図　土器実測図（SD38）……91
第11図　土器実測図（SD39）……92
第12図　土器実測図（SD39）……93
第13図　土器実測図（SD39）……94
第14図　土器実測図（SD）……95
第15図　土器実測図（SK２）……96
第16図　土器実測図（SK）……97
第17図　土器実測図（SX６）……98
第18図　土器実測図（墨書土器）……99
第19図　土器実測図（穿孔土器）……100
第20図　土製品実測図……100
第21図　鉄器実測図……101
第22図　貨銭実測図……101

第５次調査

第１図　遺構配置図（S＝1/150）……105
第２図　１区南壁土層断面図……106
第３図　２区・３区南壁土層断面図……107
第４図　井戸跡（SE－９）実測図……108
第５図　土壙（SK－６・７・８）実測図……109
第６図　土壙（SK－14・15・16・17）実測図……110
第７図　溝跡（SD－４・５）実測図……111
第８図　土壙（SK－１）・溝跡（SD－３）実測図……112
第９図　土壙（SK－10・11）実測図……113
第10図　１区出土遺物実測図(1)……114
第11図　１区出土遺物実測図(2)……115
第12図　２区出土遺物実測図……116

第７次調査

第１図　調査区位置図（S＝1/500）……129
第２図　石列（上層）平面図及び断面図……131
第３図　石列見通し断面図……132
第４図　調査区北・西壁土層断面図……133
第５図　大溝（下層）平面図及び断面図……134
第６図　出土遺物実測図……135
第７図　熊本之図……141
第８図　熊本所分絵図　飽田　託摩之内屋敷絵図……142

表 目 次

表1　熊本県教育庁文化課による二本木遺跡群調査一覧表……1
表2　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表1……5
表3　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表2……6
表4　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表3……7

第1次調査
表1　土器観察表……24
表2　瓦観察表……24

第2次調査
表1　古銭観察表……39
表2　土器観察表……40
表3　瓦観察表……40

第3次調査
表1　1区検出遺構一覧表……51
表2　2区検出遺構一覧表……51
表3　3区検出遺構一覧表……52
表4　4区検出遺構一覧表……52
表5　古銭観察表……57
表6　土器観察表……69
表7　瓦観察表……69
表8　未実測土器観察表……70
表9　遺構土層註記表(1)……71
表10　遺構土層註記表(2)……72
表11　遺構土層註記表(3)……73
表12　遺構土層註記表(4)……74

第5次調査
表1　石器観察表……116
表2　瓦観察表……116
表3　土器観察表……117

第7次調査
表1　土器観察表……136
表2　瓦観察表……136
表3　鉄器観察表……136

写真図版

空撮1　二本木遺跡群周辺航空写真(熊本県文化財調査報告第174集　二本木遺跡群より抜粋)……巻頭
空撮2　昭和22年［1947］11月1日極東米軍撮影空中写真……巻頭

第1次調査
PL. 1　Ⅰ区SD001Ⅱ層溝状遺構(北より)……25
PL. 2　Ⅱ区Ⅱ層出土遺物(西より)……25
PL. 3　Ⅱ区SD003・004Ⅲ層溝状遺構(北より)…25
PL. 4　Ⅱ区SI001Ⅲ層完掘状況(西より)……25
PL. 5　Ⅱ区SI003Ⅲ層完掘状況(西より)……25
PL. 6　Ⅱ区Ⅲ層完掘状況(北より)……25
PL. 7　出土遺物(1)……26
PL. 8　出土遺物(2)……27
PL. 9　出土遺物(3)……28
PL. 10　出土遺物(4)……29

第2次調査
PL. 1　Ⅳ層検出状況(北→南)……41
PL. 2　SD01検出状況(北→南)……41
PL. 3　SD01完掘状況(北→南)……41
PL. 4　SD01完掘状況(西→東)……41
PL. 5　SD01土層断面(西→東)……41
PL. 6　3区Ⅴ層完掘状況(西→東)……41
PL. 7　出土遺物(1)……42
PL. 8　出土遺物(2)……43
PL. 9　出土遺物(3)(写真のみ)……44
PL. 10　出土遺物(4)(写真のみ)……45

第3次調査
PL. 1　1－A区完掘状況(北→南)……75
PL. 2　1－B区東側Ⅴ層検出状況(東→西)……75
PL. 3　1－B区西側完掘状況(北→南)……75
PL. 4　1－C区Ⅴ層検出状況(西→東)……75
PL. 5　1－B区SI017完掘状況(南→北)……75
PL. 6　1－B区SI017竈完掘状況(東→西)……75
PL. 7　1－A区SK058完掘状況(北→南)……75
PL. 8　1－A区SK060完掘状況(北→南)……75
PL. 9　1－C区SD032完掘状況(東→西)……76
PL. 10　1－C区SD034完掘状況(東→西)……76
PL. 11　1－C区SE041完掘状況(東→西)……76
PL. 12　1－C区SE055完掘状況(西→東)……76
PL. 13　2－A区完掘状況(西→東)……76
PL. 14　2－B区完掘状況(西→東)……76
PL. 15　3区完掘状況(北→南)……76
PL. 16　3区北側完掘状況(北→南)……76
PL. 17　3区SI110完掘状況……77
PL. 18　3区SI110竈遺物出土状況(東→西)……77
PL. 19　3区SK078遺物出土状況(西→東)……77
PL. 20　3区SK078完掘状況(南→北)……77
PL. 21　3区SK067完掘状況(西→東)……77
PL. 22　3区SK077遺物出土状況(東→西)……77
PL. 23　4区完掘状況(西→東)……77
PL. 24　4区SK107遺物出土状況(北→南)……77
PL. 25　出土遺物(1)……78
PL. 26　出土遺物(2)……79
PL. 27　出土遺物(3)……80
PL. 28　出土遺物(4)……81

第5次調査
PL. 1　1区SK－6完掘状況(東→西)……121
PL. 2　1区SK－7完掘状況(西→東)……121
PL. 3　1区SK－8完掘状況(南→北)……121
PL. 4　1区SK－14完掘状況(西→東)……121
PL. 5　1区SK－15完掘状況(西→東)……121
PL. 6　1区SK－16完掘状況(西→東)……121
PL. 7　1区SK－17完掘状況(西→東)……121
PL. 8　1区SD－4完掘状況(北→南)……121
PL. 9　1区SD－5完掘状況(南→北)……122
PL. 10　1区SE－9完掘状況(北→南)……122
PL. 11　1区SE－9内部状況(北→南)……122
PL. 12　2区SK－1完掘状況(西→東)……122
PL. 13　2区SD－3完掘状況(南→北)……122
PL. 14　3区SK－10完掘状況(北→南)……122
PL. 15　3区SK－11完掘状況(西→東)……122
PL. 16　作業風景……122
PL. 17　1区東側全体完掘状況(東→西)……123
PL. 18　1区西側全体完掘状況(西→東)……123
PL. 19　2区全体完掘状況(南→北)……123
PL. 20　3区全体完掘状況(西→東)……123
PL. 21　調査区遠景……123
PL. 22　出土遺物(1)……124
PL. 23　出土遺物(2)……125

第7次調査
PL. 1　調査地遠景1(白川左岸より)……144
PL. 2　調査地遠景2……144
PL. 3　調査地近景(表土剥ぎ前)……144
PL. 4　上層の石列検出状況……144
PL. 5　石列1・2検出状況……144
PL. 6　石列3・4検出状況……144
PL. 7　久末神社前の仮装行列の参加者……145
PL. 8　石列1検出状況……145
PL. 9　敷石に残る矢穴痕跡……145
PL. 10　下層の大溝掘削状況1……145
PL. 11　下層の大溝掘削状況2……145
PL. 12　下層の大溝掘削状況3……145
PL. 13　大溝の南西側断面状況……146
PL. 14　大溝の北西側断面状況……146
PL. 15　大溝の完掘状況1……146
PL. 16　大溝の完掘状況2……146
PL. 17　出土遺物(1)……147
PL. 18　出土遺物(2)(写真のみ)……148

第Ⅰ章　調査の契機と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

熊本県教育庁文化課は平成11年度に、平成12年度以降の国・県等の公共事業の照会を各事業部局に行った。その際、熊本駅北部線街路改良工事の計画を知り、事業範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地内であるため、熊本県土木部都市計画課・熊本県熊本土木事務所と協議を開始した。

熊本県教育庁文化課と熊本県土木部都市計画課・熊本県熊本土木事務所との協議の結果、遺跡を現状で保存することができないことが判明したため、記録保存目的の発掘調査を実施することになった。

発掘調査を実施する箇所は、熊本市電に面しており、市街地化が進んでいるため、調査予定地を１回の発掘調査で終了することが困難であった。そのため、建物等の解体・撤去に合わせて、第１次（平成12年度）、第２次（平成13年度）、第３次（平成14年度）、第４次（平成15年度）、第５次（平成16年度）、第７次（平成18年度）の６回に分けて発掘調査を実施した。

今回の工事箇所は二本木遺跡群の範囲内であり、複数の発掘調査が実施されており、今後も複数の発掘調査が予定されているので、混乱を避けるために、発掘調査地点を地区名と何回目の発掘調査であるか明示することにした。

今回の発掘調査は、春日地区第１次調査、春日地区第２次調査、春日地区第３次調査、春日地区第４次調査、春日地区第５次調査、春日地区第７次調査とした。

二本木遺跡群の調査区の呼称については、熊本県教育庁文化課と熊本市教育委員会文化財課で協議を行い、次のようにした。

まず、遺跡群を春日地区、田崎地区、二本木地区の三つに大きく分け、それぞれの地区ごとに調査年度の古い方から調査次数をつけることにした。

今回の報告書の中で、第６次調査が抜けているのは、別の事業（九州新幹線建設工事）に伴って発掘調査を実施したからである。

これまでの調査を表にまとめると、表１のようになる。

調査に至る経緯と経過の詳細、調査の組織については、各次の調査報告で述べることにする。

地区名	調査次数	事業名	調査年度
春日地区	1	熊本駅北部線街路改良事業	H12
春日地区	2	熊本駅北部線街路改良事業	H13
春日地区	3	熊本駅北部線街路改良事業	H14
春日地区	4	熊本駅北部線街路改良事業	H15
春日地区	5	熊本駅北部線街路改良事業	H16
春日地区	6	九州新幹線建設工事	H17～18
春日地区	7	熊本駅北部線街路改良事業	H18
春日地区	8	熊本地方合同庁舎新営工事	H18～19

地区名	調査次数	事業名	調査年度
田崎地区	1	整備新幹線駅整備調整事業	H７
田崎地区	2	ＪＲ鹿児島本線・豊肥本線連続立体交差事業 九州新幹線建設工事	H15
田崎地区	3	九州新幹線建設工事	H17～18

地区名	調査次数	事業名	調査年度
二本木地区			

表１　熊本県教育庁文化課による二本木遺跡群調査一覧表

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

熊本県は九州の中西部にあり、九州島本土部と西側の天草諸島で構成されている。県内で最も広い面積を占めるのは山地である。熊本平野と阿蘇山、鞍岳、冠ヶ岳に挟まれた状態で、熊本、菊池、大津などの地域に台地が広く分布しており、火砕流台地、溶岩台地、河成段丘などの地形が存在している。この他に、人吉盆地や阿蘇南郷谷にも台地が形成されている。

県内の主要河川には、北側から菊池川、白川、緑川、氷川、球磨川がある。これらは大きく見ると、東側から西側に向かって流れており、有明海、八代海に注いでいる。これらの河川の下流部や中・上流部には、沖積平野が広がっており、菊池平野、熊本平野、八代平野と呼ばれている。

二本木遺跡群は、白川下流域に位置する。白川は阿蘇中央火口丘の南麓に源を発し、南阿蘇村の白川水源などの湧水が集まり、阿蘇南郷谷を流れ、黒川と合流する。白川は全長約78km、流域面積約498km²で、主に火山灰地域を流域とするため、堆積作用が激しく、豊水期と渇水期の水量の差が大きい。中流域付近には河成段丘が発達しており、有明海沿岸部は藩政時代から造成された干拓地が展開している。

また、白川には加藤清正時代から熊本平野を灌漑する目的で工事を開始したと考えられる用水路・堰が残っている。代表的なものに、瀬田上・下、津久礼、馬場楠などの用水路・堰がある。

二本木遺跡群は、東側から西側に向かって流れている白川が熊本市内で大きく蛇行し、北側から南側に向かって流れを変化させる箇所の西側に位置している。遺跡は白川に隣接し、川の流れに沿った状態で存在する。そのため、遺跡の立地に白川は密接に関連していると考えられる。

第２節　歴史的環境（第１図）

二本木遺跡群の周辺に分布する遺跡を時代ごとに概観してみる。

旧石器時代、縄文時代の遺跡は少なく、二本木遺跡群の北西周辺部に旧石器時代の谷尾崎遺跡・柿原羽山尻遺跡、縄文時代の島崎遺跡、北東周辺部に旧石器時代の古閑前遺跡、縄文時代の打越貝塚が分布している。柿原羽山尻遺跡ではナイフ形石器、打越貝塚では北久根山式土器が見られる。

弥生時代になると、二本木遺跡群の北東部･北部･西部・南部周辺地域に多くの遺跡が分布する。北東部には黒髪町遺跡群、大江白川遺跡、藤園中学校校庭遺跡、船場町遺跡などがある。黒髪町遺跡群では中期の標式土器である黒髪式土器の甕が出土している。北部には井芹遺跡、牧崎遺跡、戸坂遺跡などがあり、甕棺群が確認されている。西部では白川と坪井川に挟まれた低地に上代町遺跡群などがあり、前期土器が出土している。南部には平田町遺跡、白藤遺跡群、護藤遺跡群、八ノ坪遺跡、御幸木部遺跡群などがある。白藤遺跡群、護藤遺跡群、八ノ坪遺跡は白川と緑川に挟まれた低地にあり、氾濫平野の中に島状に形成された自然堤防の上に立地する。最近の発掘調査により大規模な遺跡の一端が明らかになった。護藤遺跡群では弥生時代前期後半～中期後半の遺構・遺物が出土するが、特に中期前半が主体となる。出土遺物の中で、注目されるのは朝鮮系無文土器と磨製石包丁・磨製石剣・柱状石斧・打製石鏃の一群である。白藤遺跡群、八ノ坪遺跡で特筆されるのは、青銅器の鋳型が出土し、工房跡も確認されていることである。現段階では、北部九州弥生文化圏の南端である。御幸木部遺跡群は加勢川両岸の氾濫平野や自然堤防上に立地しており、金海型の大型甕が採集されている。

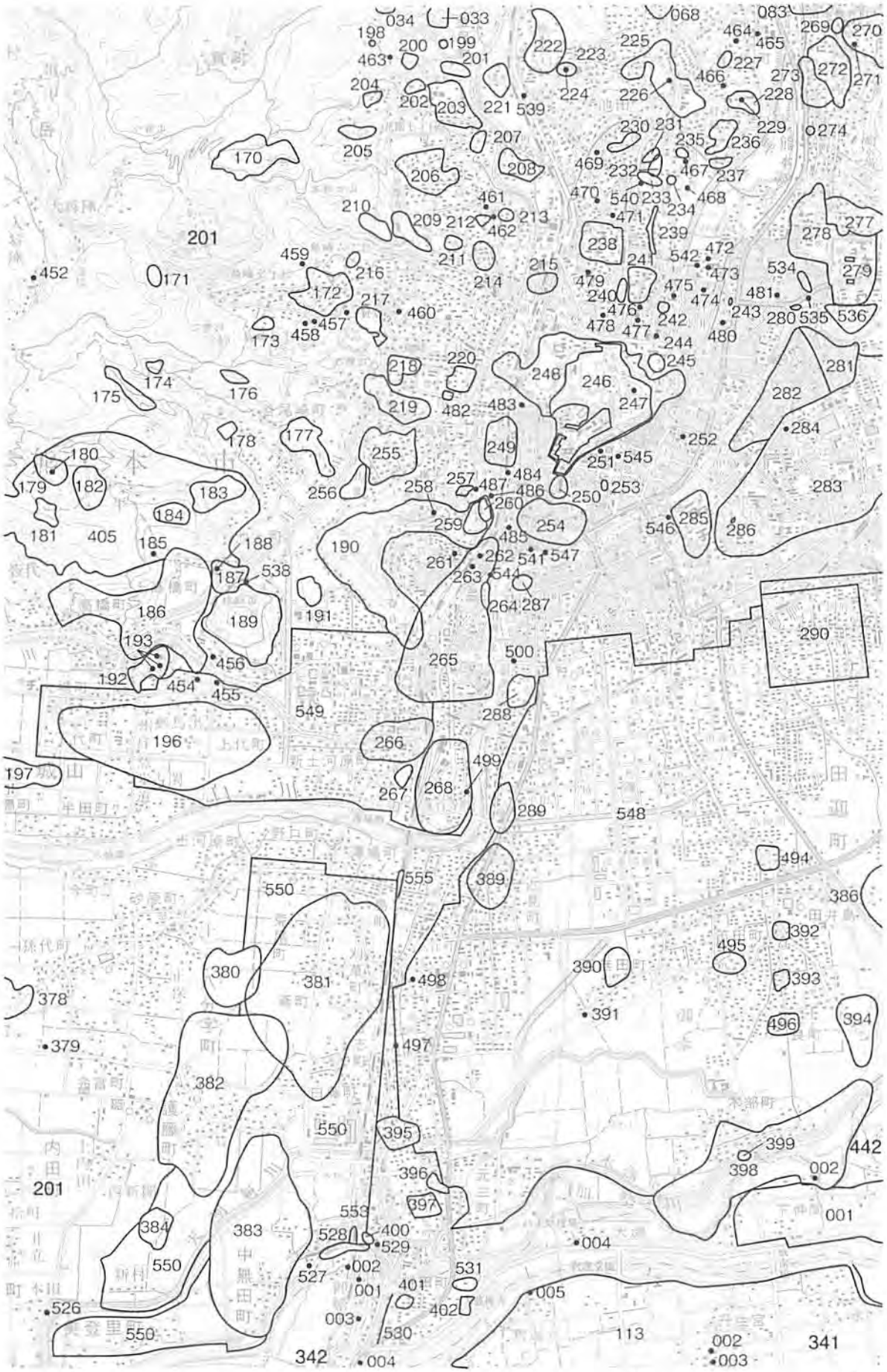
古墳時代の遺跡の分布を見ると、二本木遺跡群の隣接地点・西側及び北側周辺地域に集中している。隣接地点には花岡山・万日山遺跡群、北岡神社境内古墳、北岡横穴群、吉祥寺横穴群などがある。西側には城山遺跡群、城山古墳群、じゅうげんじ山古墳、うまの塚古墳などがある。北側周辺部には富ノ尾古墳群、本妙寺Ａ・Ｂ箱式石棺群、永浦遺跡群、稲荷山古墳、津浦一ノ谷横穴群、稗田横穴群、舟場山古墳、寺原横穴群などがある。これらは坪井川西岸に

集中して分布している。富ノ尾古墳群には３基の古墳があったが、２基は破壊され、うち１基は前方後円墳であったといわれている。現存している１基は円墳で、割石を積んだ横穴式石室が内部主体で、石障をめぐらしている。石室内に装飾文様を描いていたといわれているが、現状は赤色顔料が僅かに残っている。東京国立博物館に展示してある石人は、富ノ尾古墳群のいずれかの古墳に伴うものと思われる。稲荷山古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室の奥にある石屋形内部に装飾文様が描かれていたが、現在はうすれている。北岡神社境内古墳は円墳で、鳥文鏡が出土している。北岡横穴群は春日池上線住宅市街地総合整備事業に伴い平成19年度に発掘調査を実施しており、横穴群に伴う前庭部、墓道などが確認されている。

古代・中世の遺跡は、二本木遺跡群の東側、西側、南側に分布している。東側には新屋敷遺跡、大江遺跡群、出水国府跡、国分寺跡などがある。西側には独鈷山遺跡群、池の上遺跡、高橋町遺跡群、池辺寺関連遺跡群などがある。南側には中無田遺跡群、熊本平野条里跡、川尻外城跡、大慈寺などがある。大江遺跡群は奈良時代後半から平安時代を主体とする複合遺跡であり、遺跡のほぼ中央部に官道が確認されている。国分寺跡は、土地区画整理事業などに伴い熊本県・熊本市教育委員会による発掘調査が実施され、部分的に遺構等の状況を確認しているが、遺跡周辺の市街地が進んでおり、全体像を把握するまでには至っていない。大慈寺は県内最古の曹洞宗寺院で、九州有数の名刹である。弘安５年（1282年）河尻泰明を大檀那として寒巌義尹によって創設された。境内は県指定史跡になっている。この寺院の梵鐘は竜頭・草ノ間の文様に地域色が見られ、銘文から弘安10年に製作されたことが明確であり、重要文化財として国指定されている。この他に、層塔（永仁５年銘）１基、層塔（無銘）１基、宝篋印塔３基、宝塔（元仁元年）１基、木造釈迦如来座像及び両脇侍立像３軀が県指定重要文化財になっている。高橋町遺跡群は旧石器から鎌倉時代の複合遺跡である。その中で、高橋南貝塚、上高橋高田遺跡からは国内外の広域流通品が多量に出土しており、高橋町は港としての機能が推定できる。池辺寺跡は熊本市教育委員会による重要遺跡確認調査の結果、その一部が明らかになっている。百塚地区では３棟の礎石建物や一辺2.4mの方形をした100基（10×10列）の石積みなどが確認され、出土遺物から９世紀前半～後半のものと考えられており、国史跡に指定された。この他に、堂床地区、烏帽子地区、馬場上・来迎院地区などから関連する遺構や遺物が確認されている。

近世の遺跡としては、二本木遺跡群の北側に熊本城跡、妙解寺跡、花畑館跡などがある。南側には御船手永会所跡、川尻船着場跡などがある。熊本城跡は加藤清正の居城として慶長６年（1601年）～12年の築造であり、壮大な規模と石垣をもつ国の特別史跡である。城内の13棟の櫓などは国の重要文化財（建造物）となっている。妙解寺跡は熊本藩主細川家墓所であり、阿部一族の墓もある。川尻船着場跡は加勢川が緑川と合流する箇所の上流で、大きく湾曲する地点の右岸にあり、舟が停泊するのに適した環境にある。最近の熊本県教育庁文化課、熊本市教育委員会文化財課の調査で、船着き場階段の構造などが明らかになっている。

参考文献　「新熊本市史」別編　第２巻　民俗・文化財　熊本市　平成８年



第１図　二本木遺跡群　周辺遺跡地図

熊本県（43）　熊本市（201）

県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
033	釜尾山遺跡群	釜尾町堂山	古墳	包蔵地		釜尾遺跡・釜尾堂山古墳・釜尾堂山箱式石棺群	円墳２基以上、箱式石棺多数
034	天福寺裏山古墳群	花園町柿原	古墳	古墳	市	豪潮宝篋印塔も市指定	円墳３基（横穴式石室）
068	徳王	徳王町ほか	縄文～平安	包蔵地		徳王寺跡・徳王寺跡板碑	縄文後期、弥生内行花文鏡出土
083	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地		亀井遺跡・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地・亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文２年銘
170	馬ノ水	花園町	縄文・弥生	包蔵地			縄文晩期、弥生櫛描波状文・重弧文
171	上荒尾箱式石棺群	島崎町	古墳	埋葬			
172	島崎	島崎町島崎紙屋	縄文	包蔵地			石斧
173	荒尾南	島崎町	縄文～中世	包蔵地			
174	西大谷	谷尾崎町	縄文～中世	包蔵地			
175	西谷院平	谷尾崎町	縄文～中世	包蔵地			
176	谷尾崎	谷尾崎町	旧石器	包蔵地			肥後考古
177	野添平	池上町野添平	縄文～中世	包蔵地			県では野添遺跡
178	谷隠軒跡	池上町	中世	包蔵地			
179	西平山A	池上町西平山	平安	包蔵地			金子塔の周辺遺跡
180	金子塔	池上町平　国有林内	平安	石造物	市		
181	西平山B	池上町西平山	古代	包蔵地			
182	池辺寺跡	池上町平山	平安	寺社	国	百塚・根本中堂跡・池上百塚古墳群	
183	池辺寺塔遺跡群	池上町池上	古代	寺社		堂床遺跡・ババドン・ライゴウインビラ・池の上十三塚	
184	日影城跡	池上町	中世	城			池辺の城推定地
185	二軒小屋古墳	池上町池上	古墳	古墳			２基横穴式石室
186	高橋町遺跡群	高橋町	古墳～平安	包蔵地		高坊古墳・背城古墳群・二本松古墳群・小松山古墳群・烏帽子山古墳・堂ノ園古墳・高橋窯跡・上高橋堂園遺跡・上高橋高田遺跡・網打遺跡・高橋貝塚・高橋南貝塚・官山古墳・聖徳寺跡・烏帽子山遺跡・上高橋遺跡・高坊遺跡・浦田坂遺跡・放牛阿弥陀像	
187	池の上	池上町池上	古代・中世	包蔵地			
188	池辺寺関係石造物	池上町池上	古代・中世	石造物	市		宝塔、一字一石碑、板碑、石灯篭、孤峰秀見池辺寺再興碑
189	独鈷山遺跡群	池上町池上、城山上代町	古墳～中世	包蔵地		独鈷山山頂遺跡・独鈷山西麓遺跡・高野辺田遺跡・金光寺跡石碑・兜率石・妙相水・高野辺田の洞仏・紀州高野山弥生遺跡・独鈷山中腹遺跡	
190	花岡山・万日山遺跡群	横手町、春日町	古墳	古墳		花岡山遺跡・万日山遺跡・万日山古墳群・万日山墳墓群・花岡山箱式石棺群・長谷寺跡・来迎院・長谷寺境内古塔碑群	万日山古墳群４基以上、長持型石棺、家形石棺横穴式石室
191	清水原	池上町	縄文～中世	包蔵地			
192	城山遺跡群	城山上代町	古墳～中世	包蔵地		箱式石棺群・上代城跡・高橋稲荷山古墳群・高橋稲荷山神社	古墳群３基以上
193	城山古墳群	城山町上代町城山	古墳	古墳	市	一～三の塚	円墳
196	上代町遺跡群	城山上代町	縄文～平安	包蔵地		上代町遺跡・下代遺跡・中代遺跡・お徳・徳兵衛古墳	弥生前期土器
197	城山薬師	城山薬師町	縄文～平安	包蔵地			
198	成道寺六地蔵塔（２基） 成道寺五輪塔 成道寺板碑（４基）	花園７丁目	中世	石造物	市	成道寺庭園・成道寺六地蔵石龕・成道寺地蔵板碑３基・沢村大学逆修碑・成道寺古塔碑群・久布白対馬守五輪塔	
199	柿原道手古墳	花園町柿原	古墳	古墳			
200	畑ノ原古墳群	花園町	古墳	古墳			
201	羽山遺跡群	花園町柿原字羽山		包蔵地		羽山古墳・羽山遺跡	
202	ジブラ墓地	花園７丁目	中世	墓地			板碑・地蔵板碑・家型石棺蓋
203	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	包蔵地		柿原城跡・柿原甕棺群遺跡・柿原城の原六地蔵	柿原城鹿子木寂心居城
204	柿原馬の木	花園町	縄文～中世	包蔵地			
205	柿原羽山尻	花園町	旧石器・古墳	包蔵地		フグリ塚古墳	ナイフ形石器、径30m円墳
206	経塚遺跡群	花園町柿原字経塚	弥生・古墳	包蔵地		経塚古墳群２基・柿原美女尻甕棺遺跡・中尾遺跡	巨石墳須恵器多数、合口須玖式
207	柿原宮ノ原廃寺	花園町柿原	中世	寺院		柿原寺跡五輪塔群	
208	池亀	池亀町	弥生	包蔵地		池亀の放牛地蔵・六地蔵・池亀八幡境内板碑	板碑阿弥陀三尊、地蔵
209	本妙寺A箱式石棺群	花園町４丁目	古墳	埋葬			
210	本妙寺B箱式石棺群	花園町４丁目	古墳	埋葬		本妙寺寺山古墳	
211	本妙寺北	花園町４丁目	古墳～中世	包蔵地			
212	井芹城跡	花園町４丁目	中世	城			井芹氏の居城
213	井芹	花園町５丁目	弥生	包蔵地			黒髪式・須玖式甕棺多数
214	中尾丸城跡	花園町４丁目	中世	城			文政７年供養碑
215	牧崎	花園町１丁目	弥生	包蔵地			甕棺14基以上
216	小山田	島崎町	縄文～中世	包蔵地			
217	釣耕園 叢桂園 百梅園跡	島崎５丁目 島崎５丁目 島崎４丁目	江戸	園池	市		
218	石神原	島崎町３丁目	弥生～平安	包蔵地		宇佐公光墓・島崎城跡	
219	千原台遺跡群	島崎町３丁目ほか	縄文～平安	包蔵地		千原台遺跡・城西小学校敷地内遺跡・消防学校遺跡・放牛の墓	
220	迎田	島崎町	縄文～平安	包蔵地			
221	北島遺跡群	池田町４丁目	弥生～中世	包蔵地		北島城跡・北島城跡周辺土器散布地	
222	熊本工大	池田町４丁目	弥生	墳墓			合口甕棺
223	富ノ尾古墳群	池田３丁目	古墳	古墳			円墳、前方後円墳、石人あり
224	富ノ尾古墳１号墳	池田３丁目	古墳	古墳	市		円墳横穴式石室
225	池田山伏塚遺跡群	池田２丁目、清水町高平	弥生・古墳	包蔵地		山伏塚Ａ～Ｃ遺跡・長迫古墳・電通学園石棺・長迫遺跡	電通石棺箱式珠文鏡、長迫横穴式石室
226	山伏塚	池田２丁目	中世	墳墓	市		
227	高平箱式石棺	清水町高平	古墳	埋葬		名義尾塚	
228	永浦遺跡群	清水町打越、永浦	古墳・中世	包蔵地		稲荷山古墳・白川学園石棺・永浦城跡・天福寺	
229	稲荷山古墳	清水町打越	古墳	古墳	県		円墳、装飾古墳、横穴式小口積石室
230	池田町（池田小学校）	池田町１丁目	弥生～平安	包蔵地			池田小学校庭甕棺群
231	津浦一ノ谷横穴群	清水町津浦字鍋迫	古墳	古墳			６基以上
232	一ノ谷	清水町津浦字中谷	古墳～平安	包蔵地			
233	稗田横穴群	池田町稗田字猪迫	古墳	古墳			６基以上
234	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地			
235	舟場山古墳	清水町津浦字舟場	古墳	古墳			円墳、石棺
236	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	包蔵地		打越城跡・打越甕棺遺跡	
237	打越貝塚	清水町打越	縄文	貝塚			北久根山式
238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地		伝赤尾丸城跡・熊本営林局構内弥生式土器出土地・静慶庵跡	
239	寺原横穴群	京町	古墳	古墳			多数の横穴
240	京町２丁目	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地			
241	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地			伝大道寺跡を含む

表２　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表１

熊本県（43）　熊本市（201）							
県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
242	内坪井	内坪井町	弥生	包蔵地			
243	安元元年笠塔婆塔身	坪井４丁目	古代	石造物	県		県重要文化財、本光寺
	安元元年笠塔婆						市指定建造物
244	夏目漱石内坪井旧居	内坪井４丁目	明治	石造物	市		市指定建造物
245	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地			甕棺群あり
246	熊本城跡遺跡群	古城・古京・千葉城町	古墳～近世	包蔵地		古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・茶臼山廃寺跡・藤崎宮跡・段山遺跡・千葉城跡・千葉城箱式石棺・古城跡・古城洋学校・医学学校・新町一丁目卿門跡	
247	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	城	国	熊本城跡・鑑物台遺跡・熊本歩兵13連隊跡・一日亭跡・不開門六地蔵・小天守台遺跡・国立病院（一字一石碑・六地蔵）・陸軍兵器廠	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長12年
248	旧細川刑部邸	三の丸・古京町	近世	建造物	県		県指定重要文化財
249	新鳥畑	新町３丁目	古墳～平安	包蔵地			須恵器
250	船場町	新町２丁目、鍛冶屋町	弥生	包蔵地		新町２丁目甕棺	甕棺群
251	山崎古墳	桜町	古墳	古墳			石室
252	小泉八雲熊本旧居	安政町	明治	建造物	市		市指定建造物
253	辛島町	辛島町	弥生・古墳	包蔵地			
254	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	包蔵地		令永寺跡・勧院松林寺跡・本覚寺福聚山多聞院跡・護国寺常住院跡・霊山寺跡・古往生院跡・明十橋際遺跡	
255	戸坂	戸坂町	弥生～平安	包蔵地		戸坂五輪塔群	甕棺群
256	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世	包蔵地			
257	吉祥寺横穴群	横手町	古墳	古墳			
258	花岡山陸軍埋葬地	横手２丁目	明治	墓地	市		明治９年神風連の変戦死者
259	妙解寺細川家霊廟及び門	横手２丁目	江戸	建造物	国		
260	細川家菩提寺妙解寺跡	横手２丁目	江戸	建造物	市		市指定史跡
261	山由雲院（春日寺）	春日３丁目	江戸	寺社	市	細川忠利公火葬の地のみ市指定	市指定史跡
262	北岡神社境内古墳	春日１丁目	古墳	古墳			円墳鳥文鏡
263	北岡横穴群	春日１丁目	古墳	古墳			
264	石塘（白川橋）	二本木１・２丁目	弥生～中世	建造物			
265	二本木遺跡群	二本木１・２丁目ほか	弥生～中世	包蔵地		二本木国府跡及び関連遺跡・春日町遺跡・田崎本町遺跡・古町小学校校庭遺跡・延命寺塔心礎	二本木国府推定地
266	八島町遺跡	八島町	弥生	包蔵地			
267	道城方遺跡	蓮台寺町道城方	弥生・古代	包蔵地			
268	南新宮遺跡	蓮台寺町南新宮	弥生～中世	包蔵地			
269	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地			旧石器
270	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	県調査あり
271	万石塚坊主古墳群	清水町大字万石	古墳	古墳			２基円墳
272	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地		松崎甕棺遺跡・松崎中世遺跡・松崎薬山天神跡	
273	松崎八幡箱式石棺	清水町松崎字上屋敷	古墳	埋葬		松崎石棺	
274	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地			
277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		金光山無相寺跡	
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		黒髪町遺跡（済々黌高校敷地）・九州女学院遺跡・坪井古屋敷出土の甕棺	一帯に甕棺墓群
279	旧第五高等中学校本館・化学実験場・表門	黒髪２丁目	明治	建造物	国		国指定重要文化財、イギリスのフィーン・アン様式
280	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地			
281	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	包蔵地		旧往生院跡・善行寺の板碑・放生地蔵	甕棺
282	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地			弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵地		大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校校庭遺跡・渡鹿田電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・護鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館遺跡他	
284	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江４丁目	明治	建造物	県		大江義塾：県指定史跡、徳富旧邸：市指定史跡
285	本庄（熊大病院敷地）	本荘２丁目	古墳～平安	包蔵地			熊大理文調査室調査
286	不動院跡の六地蔵塔	九品寺４丁目	中世	石造物	県		県指定重要文化財
287	本山城跡（本庄城跡）	本山町城の本	弥生～中世	包蔵地			元弘年間に詫麻宗直
288	世安池田遺跡	世安町池田	弥生～中世	包蔵地			輸入陶磁器など
289	平田町遺跡	平田１丁目	弥生～平安	包蔵地			甕棺群
290	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地			
378	保慈寺	飽田町	古墳～平安	包蔵地			
379	明神社古墳	会富町	古墳	古墳			
380	古護藤	八分字町	弥生～中世	包蔵地		須玖式甕棺	
381	白藤遺跡群	島町、白藤町ほか	弥生～中世	包蔵地		倉小路箱式石棺・倉小路甕棺遺跡・屋敷遺跡・今村遺跡・刈草遺跡・亀町遺跡	白藤遺跡青銅器鋳型、ミニチュア青銅矛
382	護藤遺跡群	護藤町	古墳～中世	包蔵地		戸崎Ｂ（馬場）遺跡	
383	中馬田遺跡群	護藤町	弥生・中世	包蔵地		戸崎Ａ遺跡を含む	輸入陶磁器（青磁）多数
384	八ノ坪	護藤町	古墳～中世	包蔵地			
386	重富遺跡	画図町	古墳～平安	包蔵地			
389	近見遺跡	近見町	縄文～中世	包蔵地			
390	西無田遺跡	御幸西無田町	弥生～平安	包蔵地			甕棺、石包丁
391	明治天皇御幸御野立所	御幸西無田町 山田堀	明治		市		市指定史跡
392	下乙地頭館跡	田迎町	中世	包蔵地			土器残存
393	四才町敵屋敷遺跡	田迎町	中世	包蔵地			土器残存
394	良町二石遺跡	田迎町	弥生・古墳	包蔵地			弥生前期土器出土
395	南高江西馬出遺跡	南高江町	弥生～中世	包蔵地			
396	中惟田遺跡	八幡町	古墳～中世	包蔵地			青磁
397	マツヒサ屋敷遺跡	八幡町	古墳～中世	包蔵地			土器残存
398	御幸木部遺跡群	御幸木部町	弥生～中世	包蔵地		御幸木部遺跡・木部箱式石棺・阿弥陀来迎図像・芹川守拙観音図像線刻板碑	地蔵文明７、阿弥陀天文２、観音寛政６
399	木部六地蔵塔	御幸木部町	中世	石造物	市	遺伝寺跡	
	木部六地蔵堂敷地			包蔵地	市		
400	川尻外城跡	川尻町	中世	城			川尻氏の居城、川尻城跡
401	学永院跡	野田町	平安	寺社			平安時代阿弥、天台宗
402	大慈寺の層塔	野田町508	鎌倉	石造物	県		２基、九重石塔本来は十三、永仁５年銘
	大慈寺の宝篋印塔			石造物			
	大慈寺の宝塔			石造物			
	大慈寺境内			寺社			弘安５年寒戒義伊創建、肥後最古の曹洞宗寺院

表３　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表２

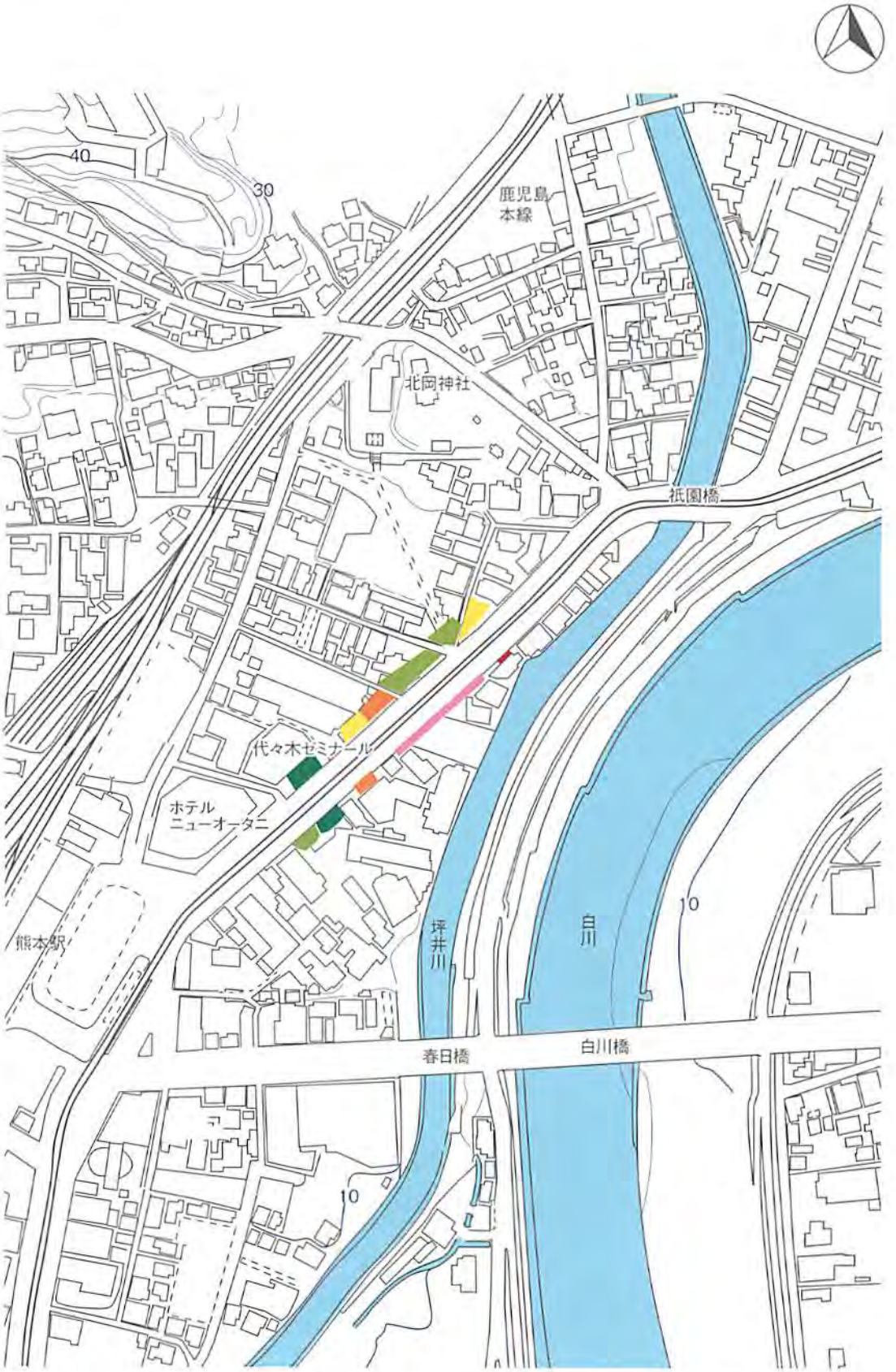
熊本県（43）　熊本市（201）							
県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
405	池辺寺関連遺跡群	池上町	平安～中世	寺社			
452	お薬園跡	河内町岳	中世	包蔵地			
454	じゅうげんじ山古墳	城山上代町	古墳	古墳			
455	うまの塚古墳	城山上代町	古墳	古墳			
456	享禄の板碑	城山上代町	中世	石造物			
457	岳林寺跡	島崎町島崎	中世	寺社			五輪塔、大永銘板碑
458	城親賢の墓	島崎町島崎	中世	墓			岳林寺境内墓地主墓，天正９年銘
459	霊樹庵跡	島崎町島崎	中世	寺社			
460	鬼塚さん古墳	島崎町三軒屋	古墳	古墳			
461	井芹五輪塔・宝塔群	花園町井芹	中世	石造物			
462	井芹城跡推定地	花園町	中世	城			
463	菱江和尚碑	花園町柿原	江戸	石造物			寛永12年銘
464	永福寺跡	清水町高平	中世	寺社			臨済宗天文21年
465	浄国禅寺古塔碑	清水町高平	中世	石造物	県		塑像巡礼姿観音立像，松本喜三郎の作
466	天福寺跡	清水町打越	中世	寺社			天台、布目瓦出土
467	駒場山古墳	清水町津浦	古墳	古墳			円墳、墳丘破壊
468	宗厳寺跡	清水町津浦	中世	寺社			寛文12年
469	池田城跡	池田町岩立	中世	城			
470	池田八幡放牛地蔵	京町	近世	石造物			享保10年
471	往生院境内石造物	池田町	中世・近世	石造物			豪潮宝篋印塔・放牛地蔵
472	探釣園跡	坪井４丁目	近世	園池			
473	長岡監物屋敷跡	坪井４丁目	近世	包蔵地			
474	成就院大喜山覚勝寺跡	中坪井町	中世	寺社			
475	浄国寺跡	壺川１丁目	中世	寺社			
476	金剛寺南乾山跡	新坪井町中坂	中世	寺社			弁天窟、25菩薩あり
477	仙勝院跡	京町１丁目	中世	寺社			
478	円光寺跡	京町１丁目	近世	寺社			藤崎宮社家代々墓あり
479	慈授寺跡	京町２丁目	近世	寺社			
480	報恩禅寺境内石造物	坪井３丁目	中世	石造物			豪潮宝篋印塔・坪井の跡
481	お薬園跡	薬園町	近世	包蔵地			藩主重賢開園
482	遠矢塚	島崎町	中世	墳墓			
483	新町古寺跡・高麗門跡	新町３丁目	近世	寺社			
484	古往生院跡	古鍛冶屋町	近世	寺社			阿弥陀堂石主、六地蔵、十三塔、五輪塔
485	板屋町・細工町寺院群	板屋町、細工町	近世	寺社			
486	願行寺跡	横手町	近世	寺社			
487	横手町寺院群	横手町	近世	寺社			
494	田迎下乙遺跡	田迎町田井の島	古代・中世	包蔵地			六地蔵、一字一石
495	御幸笛田神社遺跡	御幸笛田町	弥生～中世	包蔵地			
496	良町遺跡	田迎町良町	弥生	包蔵地			
497	南高江六地蔵塔	南高江町居屋敷	中世	石造物			
498	高江城跡	南高江町居屋敷	中世	城			
500	無漏寺跡	世安町川端	中世	寺社			古塔碑
526	本田の板碑	銭塘町	中世	石造物			大永８年
527	御船手永会所跡	川尻町	江戸	包蔵地			出入船舶監視の役所
528	川尻船着場跡	川尻町	近世	包蔵地			150m、13段の石垣
529	西郷本営跡	川尻町	明治	軍事			
530	大渡旧街道	野田町	江戸	交通			
531	野田町田寺跡	野田町	近世	寺社			
534	七軒町	七軒町	縄文～中世	包蔵地			
535	一夜塘	小磯町	近世	建造物			
536	上河原	黒髪町	縄文～古代	包蔵地			
538	仁王堂板碑	池上町	中世	石造物			
539	北島五輪塔群	池田町	中世	石造物			
540	出町土居跡	京町	近世	城			
541	光明寺跡	呉服町万２丁目ほか	近世	寺社			
542	峰雲院跡墓地	中坪井	中世	墓地			
544	熊本駅前の石塘	春日町	近世	建造物			
545	花畑館跡	花畑町	近世	包蔵地			
546	代継神社の層塔	本荘３丁目	中世	建造物			
547	浄信寺跡	呉服町万２丁目ほか	中世	寺社			
548	熊本平野条里跡		古代・中世	生産			
549	熊本平野条里跡		古代・中世	生産			
550	熊本平野条里跡		古代・中世	生産			
553	川尻外城町遺跡	川尻３丁目	中世・近世	包蔵地			川尻船着場を一部範囲修正
555	上の郷遺跡	島町	弥生～古代	包蔵地		甕棺12基・土壙墓６基・弥生時代後期住居跡・古代住居跡	

熊本県（43）　城南町（341）							
県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
002	高の石造六地蔵塔	高	中世	石造物			
003	高の石造宝塔	高	中世	石造物	町		正応四年銘、１基個人蔵
113	条里跡		古代・中世	生産			

熊本県（43）　富合（342）							
県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
001	観音寺跡	杉島　中崎	古代・中世	寺社			開山日羅、道元とも「肥後国誌」に記
002	開眼の浜	御船手	中世	縁地			道元、船板に観音像を刻み開眼の地という
003	円通寺跡	杉島　久保田	中世	寺社			禅曹、観世音、本尊
004	福勝寺跡	杉島　南江	古代・中世	寺社			薬師三尊をまつる、台宗、天台延暦末寺
005	極楽寺跡	釈迦堂　天神免	古代・中世	寺社			曹洞禅、本尊釈迦仏

熊本県（43）　嘉島町（442）							
県No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
001	加瀬川流域条里跡	下仲間	古代・中世	生産			
002	浄尊寺跡	下仲間	中世	寺社			

表４　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表３



H12調査　坂口　　H14調査　河野　　H16調査　松村

H13調査　帆足　　H15調査　宮崎　　H18調査　岡本

第２図　二本木遺跡群　春日地区第１～５・７次調査位置図（Ｓ＝1/3, 500）

第Ⅲ章　春日地区第１次調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査の契機

熊本県教育庁文化課は熊本駅北部線（県道熊本高森線）街路改良事業に伴い、事業用地内での埋蔵文化財確認調査を平成12年１月19日から同年１月21日にかけて実施した。この調査により事業用地内の一部については埋蔵文化財の存在を確認した。この結果を受けて、熊本県教育庁文化課と熊本県熊本土木事務所は埋蔵文化財の取り扱いについて協議に入った。協議の結果、記録保存の為の発掘調査の実施が決定した。

平成12年３月22日付け熊土第2672号における周知の埋蔵文化財包蔵地での発掘通知を受けて、同年８月10日より埋蔵文化財発掘調査を開始し、同年10月31日に調査を終了した。その後事業用地における埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の全ての完了を待って平成19年度に調査報告書作成にあたった。

第２節　調査の組織

総務係　（事務手続き等）
文化係　（文化振興・文化財の指定・補助金等）
調査第一係（受託事業）
調査第二係（県事業・指定文化財現状変更等）

【平成11年度（1999）　確認調査】

調査責任者　豊田貞二（文化課長）
調査総括　　川上康治（課長補佐）
　　島津義昭（課長補佐）
調査調整　　江本　直（主幹兼文化財調査第二係長）
　　村崎孝宏（文化財保護主事）
調査担当　　後藤貴美子（文化財保護主事）
調査事務　　小斉久代（総務係長）
　　広瀬泰之（参事）
　　川口久夫（主事）

【平成12年度（2000）　本調査】

調査責任者　阪井大文（文化課長）
調査総括　　川上康治（課長補佐）
　　島津義昭（課長補佐）
調査調整　　江本　直（主幹兼文化財調査第二係長）
　　村崎孝宏（文化財保護主事）
調査担当　　坂口圭太郎（文化財保護主事）
　　宮崎　拓（非常勤職員）
調査事務　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　広瀬泰之（参事）
　　杉村輝彦（主事）

【平成19年度（2007）　整理・報告書作成】

整理責任者　梶野英二（文化課長）
整理総括　　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　江本　直（課長補佐）
　　野田拓治（文化財資料室長）
　　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
整理担当　　坂口圭太郎（参事）
　　加藤早織（非常勤職員）
整理事務　　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参事）
　　高松克行（主任主事）

第３節　調査の方法と経緯

１　調査の方法

今回の調査区は事業予定地が二箇所に離れていたため、北東側をⅠ区、南西側をⅡ区とした。いずれも市電の通りに近接した細長い調査区である。

調査区は宅地であったので、まず重機による表土除去を行った。続いて、遺構の配置図作成のために国土座標軸に合わせたグリッドを調査区内に設定した。設定した方眼の一辺の長さは５mとした。

表土掘削後に遺構検出を行ったが、Ⅰ区は戦前と戦後の宅地造成により遺構が大きく撹乱を受けていた。

Ⅱ区は比較的撹乱の影響が少なく、遺構の残存はⅠ区に比べて良好であった。

2　調査の経緯

二本木遺跡群春日地区は平成12年８月10日に本調査を開始し、同年10月31日に終了した。

【平成12年８月】

10日　現場事務所設置。

14日　調査資材等搬入。

16日　Ⅱ区の重機による表土除去開始。

17日　Ⅱ区の表土除去終了に引き続き遺構検出開始。

18日　Ⅰ区の重機による表土除去開始。

25日　Ⅰ区の表土除去終了に引き続き遺構検出開始。

28日　Ⅰ・Ⅱ区の現代の撹乱掘削開始。

【平成12年９月】

６日　Ⅱ区の古代の包含層掘削開始。

８日　台風15号接近により風養生の措置を講ずる。

12日　Ⅰ区の遺構実測開始。

14日　Ⅱ区において古代の遺構を確認。

19日　Ⅰ区の溝状遺構を完掘。北西から南東に向けて直線上に延び、かつ南西へT字上に分岐していることを確認する。併せてⅡ区の遺構検出状況の全体写真撮影を行う。

21日　熊本市教育委員会稲津氏来跡。Ⅰ区の溝状遺構について教示を受ける。

22日　Ⅰ区の完掘状況記録のための全体清掃。

25日　Ⅱ区の遺構検出状況記録のための全体清掃。

【平成12年10月】

２日　Ⅰ区の遺構実測。

３日　Ⅰ区の溝状遺構完掘。

４日　Ⅱ区の古代包含層掘削完了。以降Ⅱ区は古代の遺構検出を進める。

５日　Ⅰ区の全体写真撮影。

６日　Ⅰ区の調査終了。

10日　Ⅱ区の竪穴住居跡掘削開始。

18日　Ⅱ区の竪穴住居跡実測開始。

27日　Ⅰ区の埋め戻し開始。

30日　Ⅰ区の埋め戻し終了。Ⅱ区の埋め戻し開始。

31日　Ⅱ区の埋め戻し終了。調査機材等搬出。

第４節　調査の成果

1　基本土層

今回の調査区の基本土層は以下のとおりである。近現代の撹乱により土層が乱されていたため、基本層序の説明に留めておく。

Ⅰ層　表土、撹乱土。近現代の生活具と整地の際に持ち込まれた礫や砕石が混入している。

Ⅱ層　この調査区では確認できなかったが、近世以降の整地層と考えられる。

Ⅲ層　黒褐色粘質土。ややしまりがある。土中に鉄分を含む。中世の遺物包含層である。

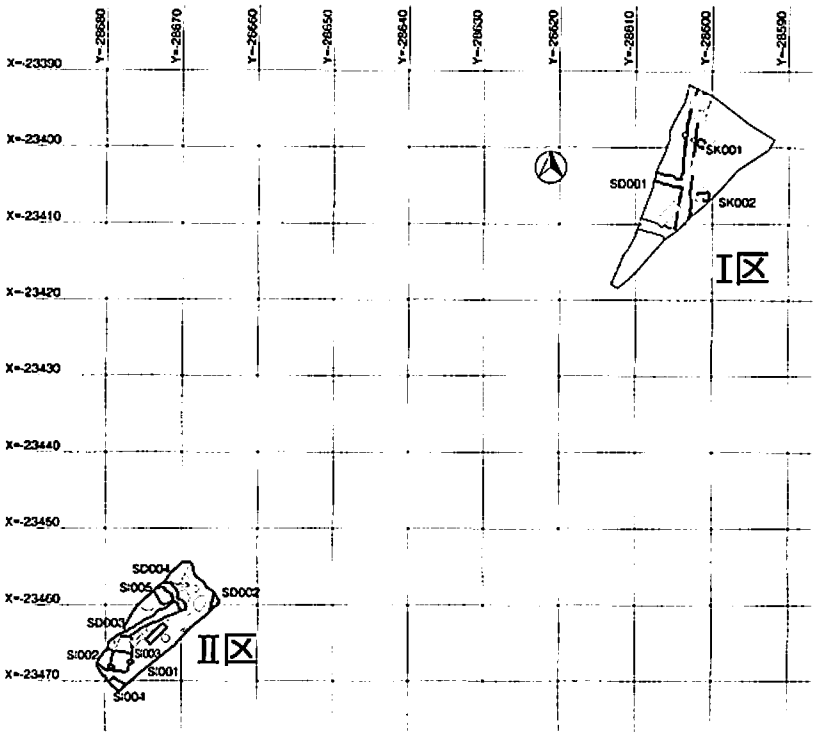
Ⅳ層　黒褐色砂質土。Ⅲ層と比べるとややしまりがない。古代の遺物包含層である。土中に鉄分を含む。

Ⅴ層　黄褐色砂質土。ややしまりがない。この層の上面で古代の遺構を検出した。

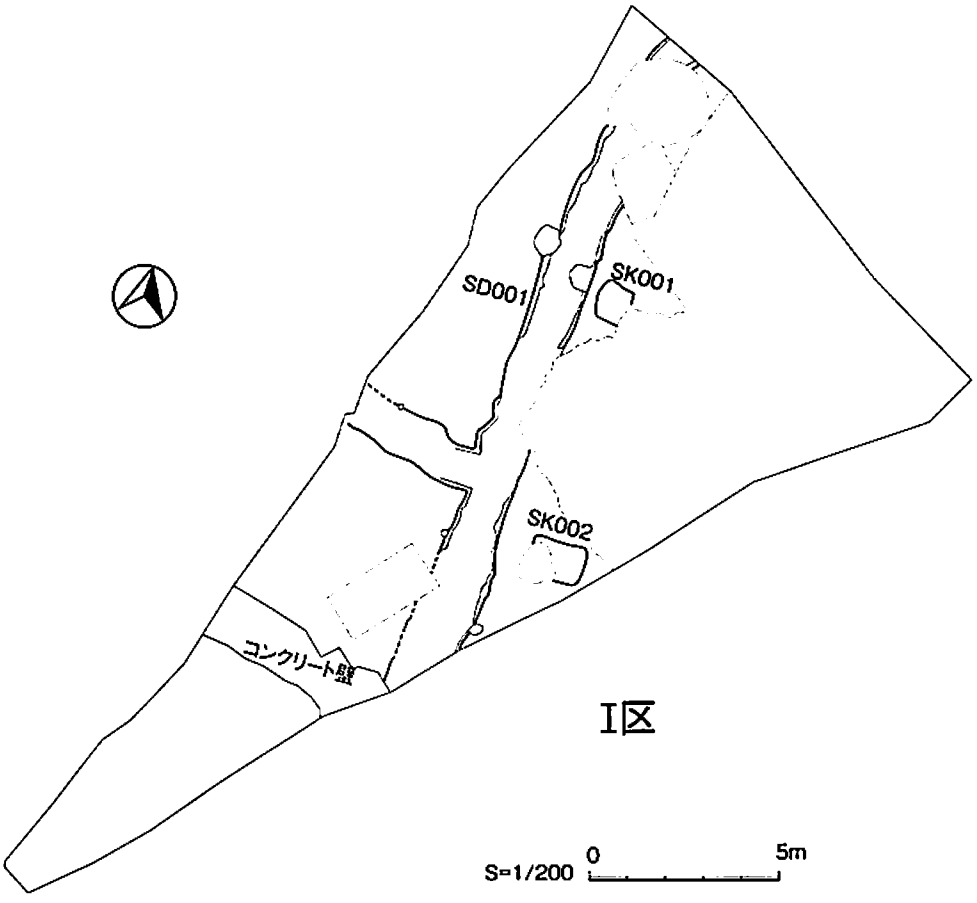
Ⅵ層　明黄褐色砂質土。粘性はないが硬くしまっている。

Ⅶ層　この調査区では確認できなかった。

Ⅷ層　緑灰色砂質土。粘性はなくⅦ層よりさらにしまっている。



第１図　遺構配置図（S＝1/1,000）



第２図　調査Ⅰ区配置図

2　遺構

【Ⅰ区】

Ⅰ区については、後世の撹乱が調査区全体に及んでおり、遺構検出は困難を極めた。しかし、この調査区ではほぼ南北東西方向に延びる溝状遺構を検出できた事は幸いであった。時期を特定出来る遺物は残念ながら遺構からは検出出来なかったが、遺構の埋土からⅡ区で検出した竪穴住居跡とほぼ同時期に埋まったものと考えられる。

(1)溝状遺構

ＳＤ００１（第２図）

ほぼ南北と東西方向に直行する。確認できた南北の長さは18.5m、幅は最も広い箇所で1.60m、狭い箇所で1.20mを測る。溝の形状は逆かまぼこ形を呈す。

底部においては流水や踏みしめられた痕跡は確認できなかった。共伴遺物が無いため時期の特定は困難であるが、埋土の状況から古代の溝状遺構と考えられる。

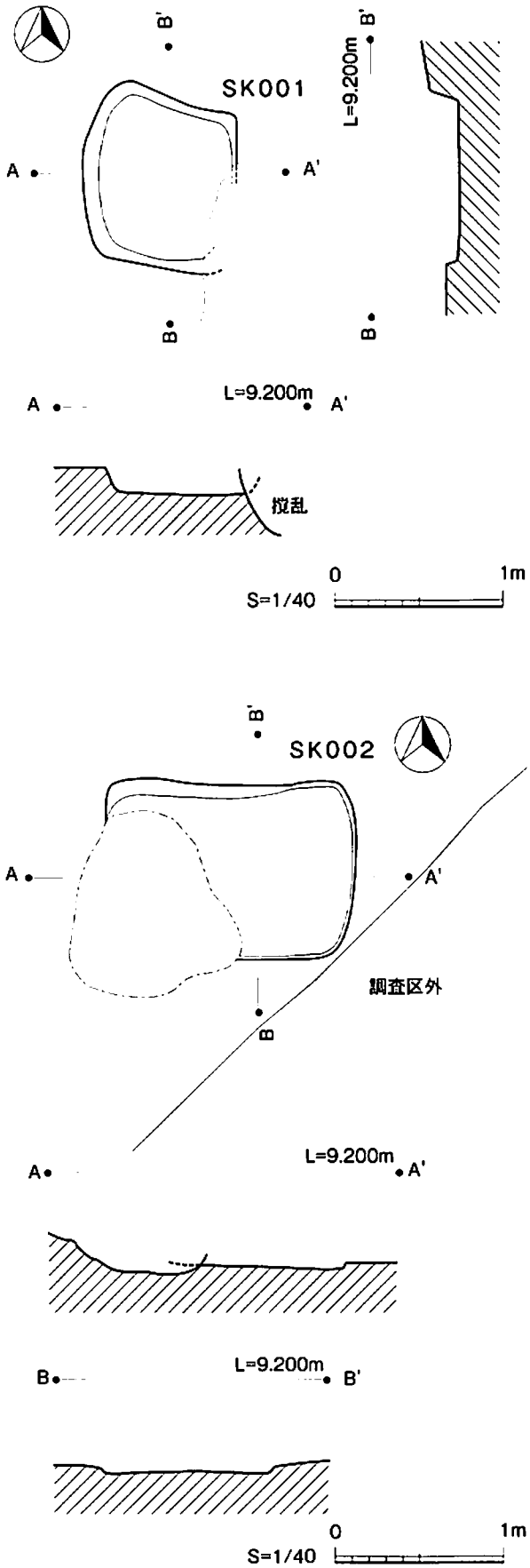
(2)土壙

ＳＫ００１（第３図）

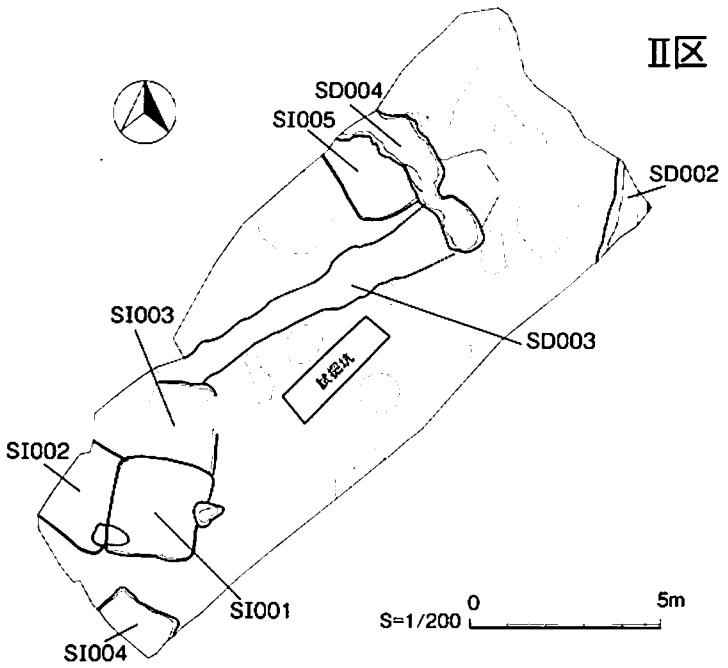
土壙の平面形態はやや歪な隅丸方形を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.91m、深さは0.12mを測る。底部はフラットである。後世の撹乱により大きく削平を受けている。この遺構の時期は共伴遺物が無いため特定出来なかった。

ＳＫ００２（第３図）

土壙の平面形態はやや歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.50m、短軸1.10m、深さは0.06mを測る。底部はフラットである。後世の撹乱により西側が大きく削平を受けている。この遺構の時期は共伴遺物が無いため特定出来なかった。



第３図　土壙（SK001・002）実測図



第４図　調査Ⅱ区配置図

【Ⅱ区】

Ⅱ区はⅠ区に比べ比較的、後世の撹乱が少なく遺構の残存状況は良好であった。この調査区では２条の溝状遺構と５軒の竪穴住居跡を確認した。遺構の共伴遺物と埋土の状況から古代に作られたと考えられる。

(1)溝状遺構

ＳＤ００２(第５図)

北西から東南方向にやや弧状に延びる。確認できた長さは2.80m、幅は最も広い箇所で1.02m、深さは約0.34mである。溝の形状は逆かまぼこ形を呈する。

ＳＤ００３(第４図)

ほぼ南北方向に直行する。確認できた南北の長さは約８m、幅は最も広い箇所で約1.3mを測る。溝の形状はV字状を呈する。

ＳＤ００４(第５図)

北東から南西方向にやや屈曲して走っている。確認できた長さは4.6m以上、幅は最も広い箇所で1.30mを測る。深さは0.16mを測る。溝の形状は逆かまぼこ状を呈する。

(2)竪穴住居跡

ＳＩ００１(第６図)

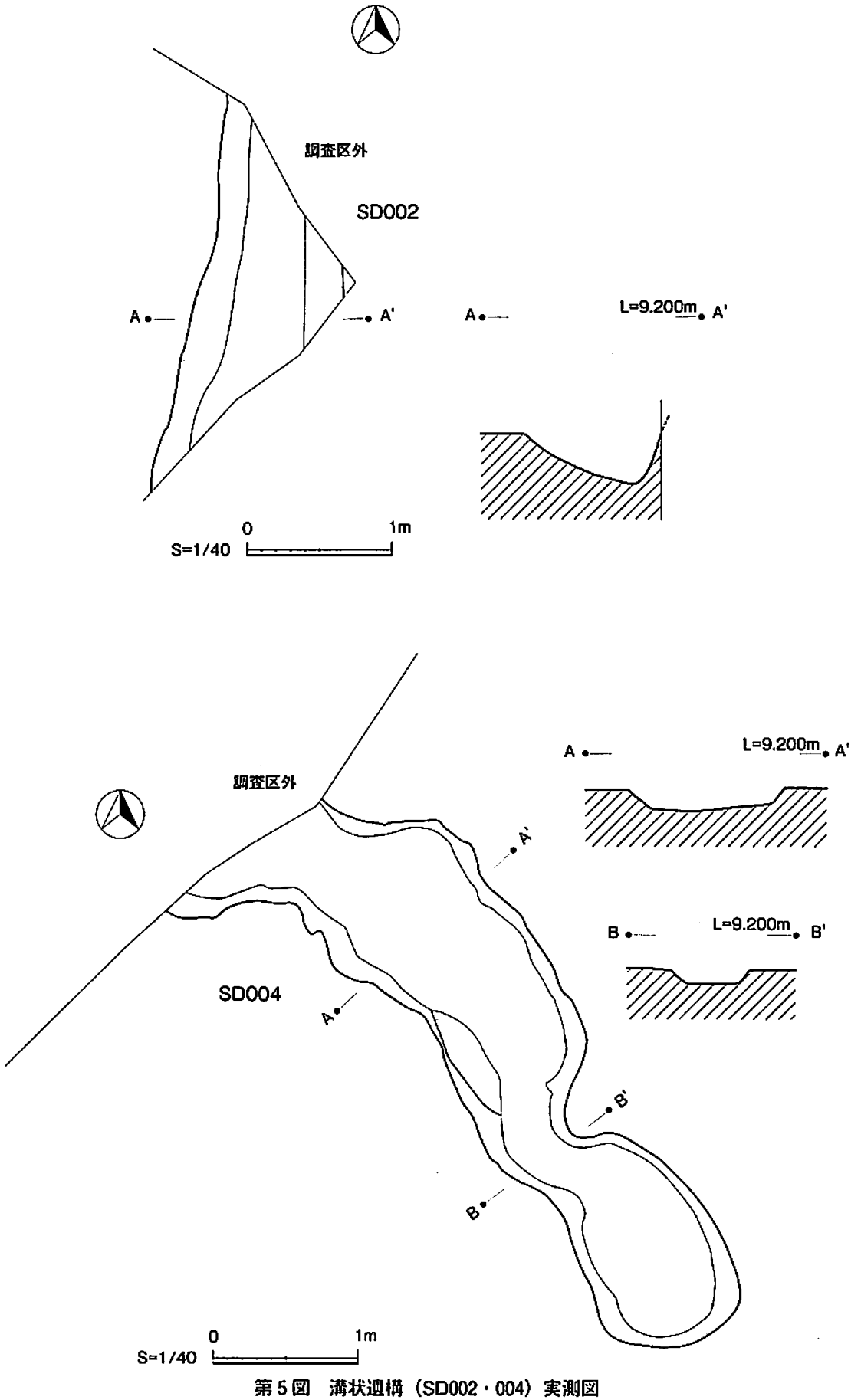
住居の平面形態は隅丸方形を呈する。規模は南北軸2.60m、東西軸2.52m、深さは0.20mを測る。住居跡からは４本の主柱穴を検出した。この遺構は東側に竈を作っている。共伴遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＩ００２(第６図)

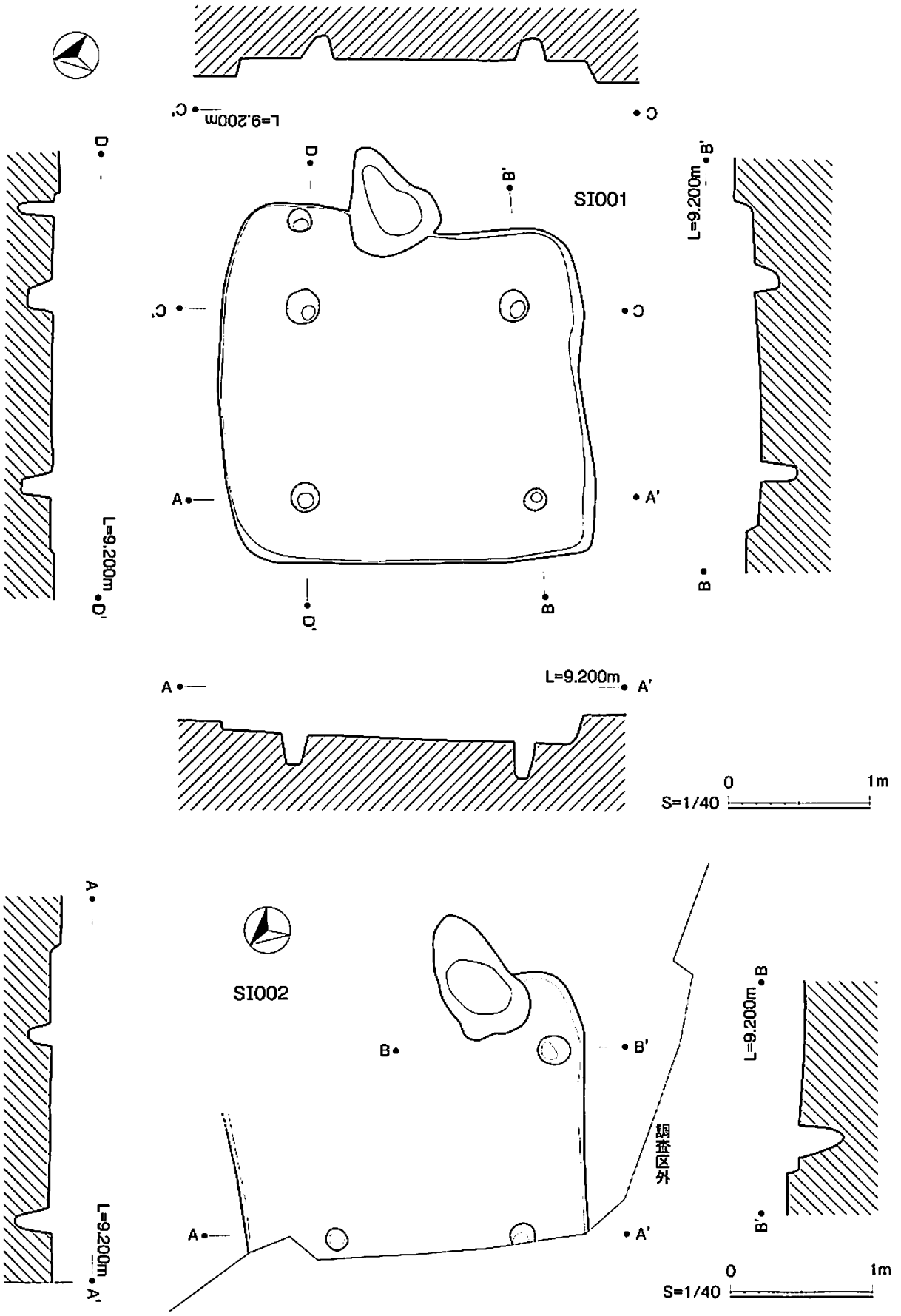
住居の平面形態は隅丸方形を呈する。西側は調査区外で東側は別の住居跡により壊されているため、確認できた規模は南北軸2.56m、東西軸1.67m以上、深さは0.08mを測る。この住居跡からは３本の主柱穴を検出した。この遺構も東側に竈を作っている。共伴遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＩ００３(第７図)

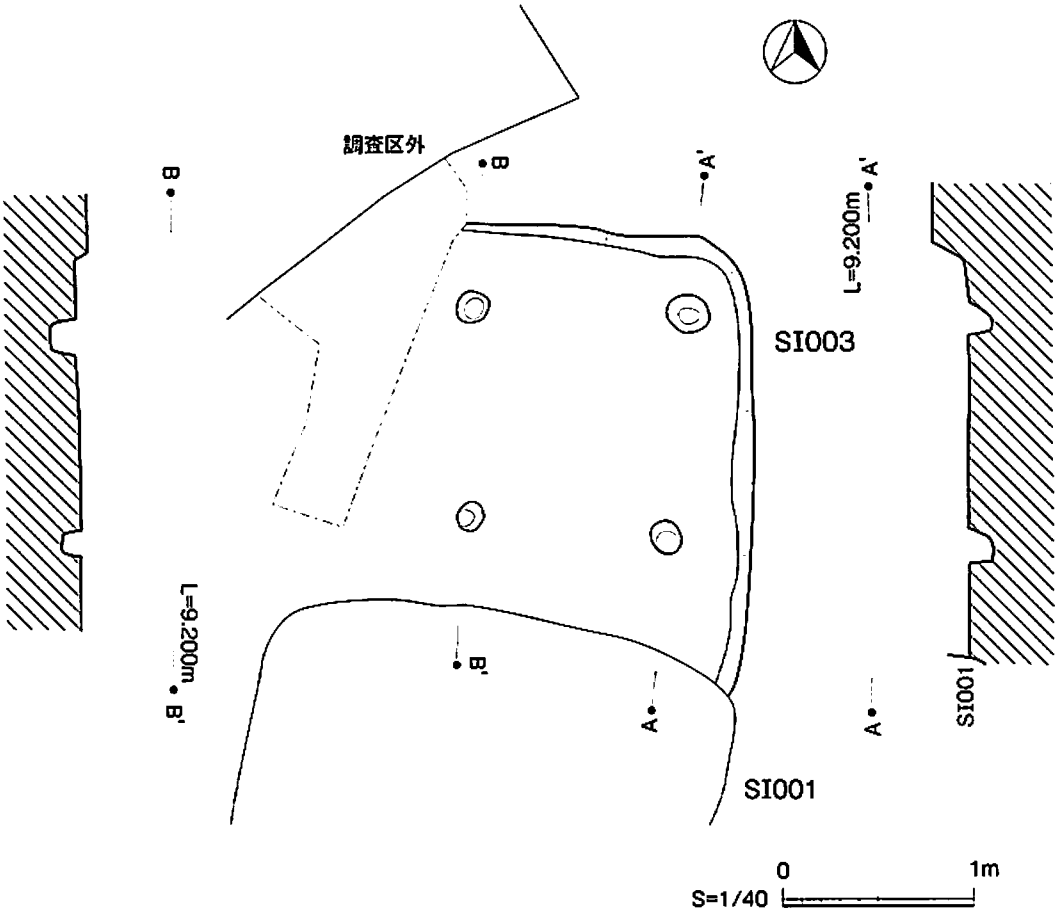
住居の平面形態は隅丸方形を呈していると考えられる。西側は撹乱で南側は別の住居跡により壊されているため、確認できた規模は南北軸2.40m、東西軸1.40m以上、深さは0.18mを測る。住居跡からは４本の主柱穴を検出した。共伴遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

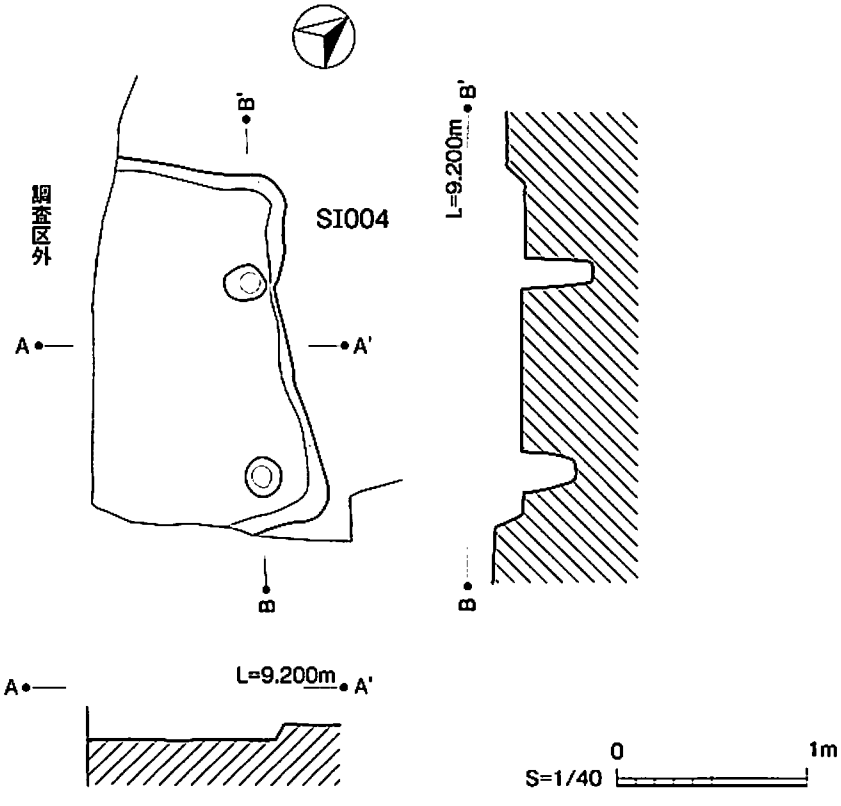


第５図　溝状遺構（SD002・004）実測図

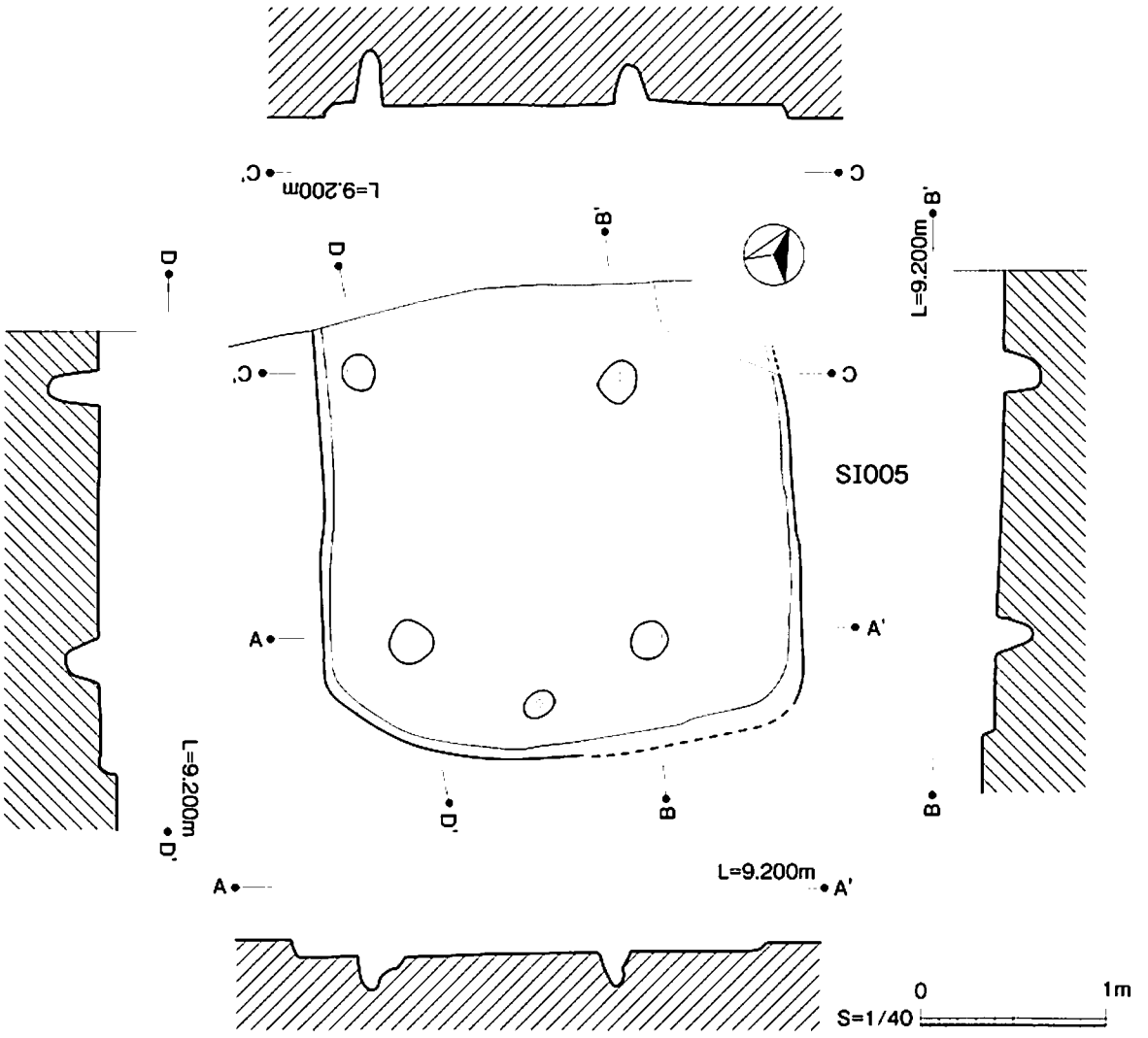


第６図　竪穴住居跡（SI001・002）実測図





第７図　竪穴住居跡（SI003・004）実測図



第8図　竪穴住居跡（SI005）実測図

ＳＩ００４（第７図）

この遺構は調査区の最も南側で検出した。住居の平面形態は隅丸方形を呈していると考えられる。確認出来た規模は南北軸1.90m、東西軸1.25m以上、深さは0.18mを測る。この住居跡からは２本の主柱穴を検出した。共伴遺物は無いが埋土の状況から奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＩ００５（第８図）

住居の平面形態は隅丸方形を呈する。規模は南北軸2.54m、東西軸2.62m、深さは0.08mを測る。住居跡からは４本の主柱穴を検出した。共伴遺物は無いが埋土の状況から奈良時代の遺構と考えられる。

３　遺物

Ⅰ、Ⅱ区とも近現代の撹乱の影響で遺構の上面が大きく削平されており、遺構に伴う遺物が少量であった。また今回の調査区は近世の二本木遊郭が存在した場所であり、当時の遺物が多く出土した。以下で近世と古代の遺物について述べる。

１は甑である。胴部の両側に摘みをもつ。２は両側に把手を持つ浅鉢である。底は平らであり、煤が底部外面で認められることから、穀物等を炒るために用いられたと考えられる。３も２と同様の浅鉢である。２に比べやや底が丸みを持つ。４は短頸壺である。５は３個の脚を持つ火鉢である。「政」の刻印が認められる。胴部中ほどの透かしと大きく上部に開く開口部が特徴的である。単独で用いるものではなく、内側にさらに容器を入れて用いられたと考え

られるが、他に類例が無いため詳細は不明である。6は台付火鉢である。ハート型の透かしと大きく開いた正面の開口部が特徴的である。内面は良く焼けている。7は組み合わせ式の瓦である。8は皿、9は杯である。10は瓦である。11は甕の口縁である。12は皿、13・14は杯である。15・18は甕の口縁である。16・17は杯の蓋である。19は杯の身である。20は瓦である。21は大甕の胴部である。22は甕である。23の器種は不明であるが小型の盤と考えられる。24・25・26は瓦である。27は台付火鉢である。胴部に鶴や松等を掘り込んでいる。

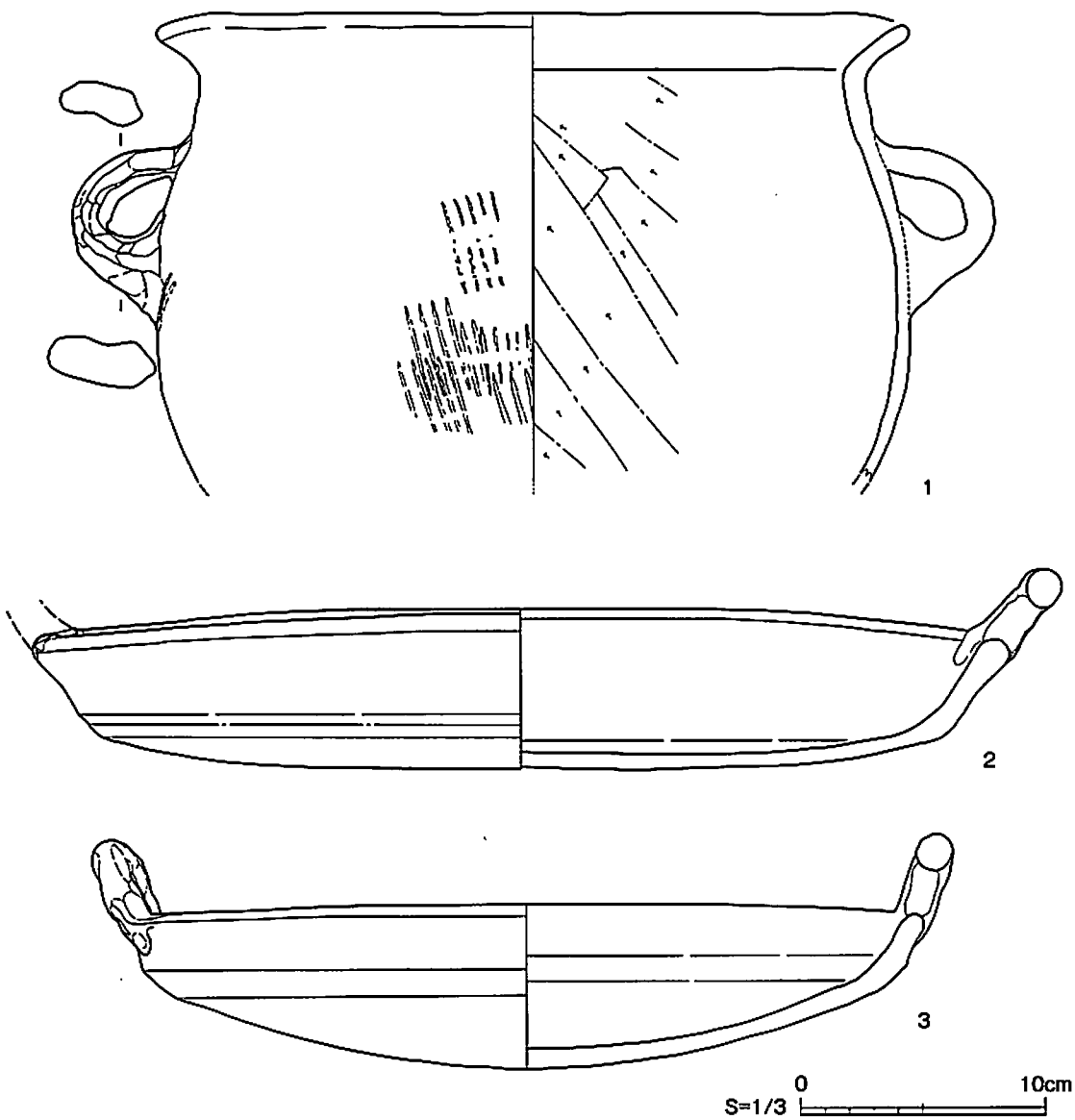
第５節　まとめ

今回の調査ではⅠ区で検出した溝状遺構とⅡ区で検出した竪穴住居跡が主な成果である。

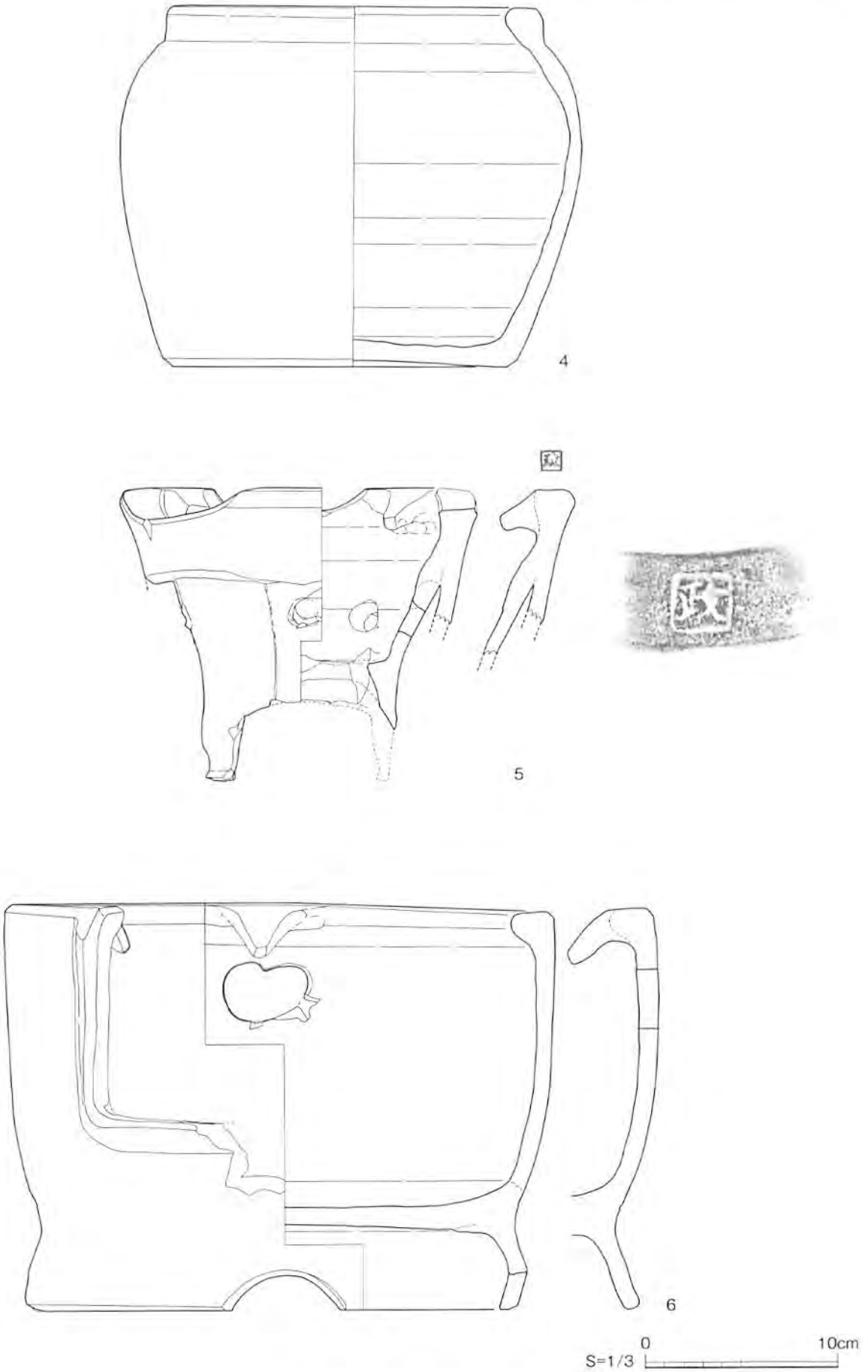
Ⅰ区の溝状遺構は条里制に伴う区画のための溝であった可能性があり、古代の区画整理の一端を垣間見させてくれる遺構と考えられる。

Ⅱ区の竪穴住居跡は二本木遺跡群の集落の様相を検証するための重要な資料となり得る。

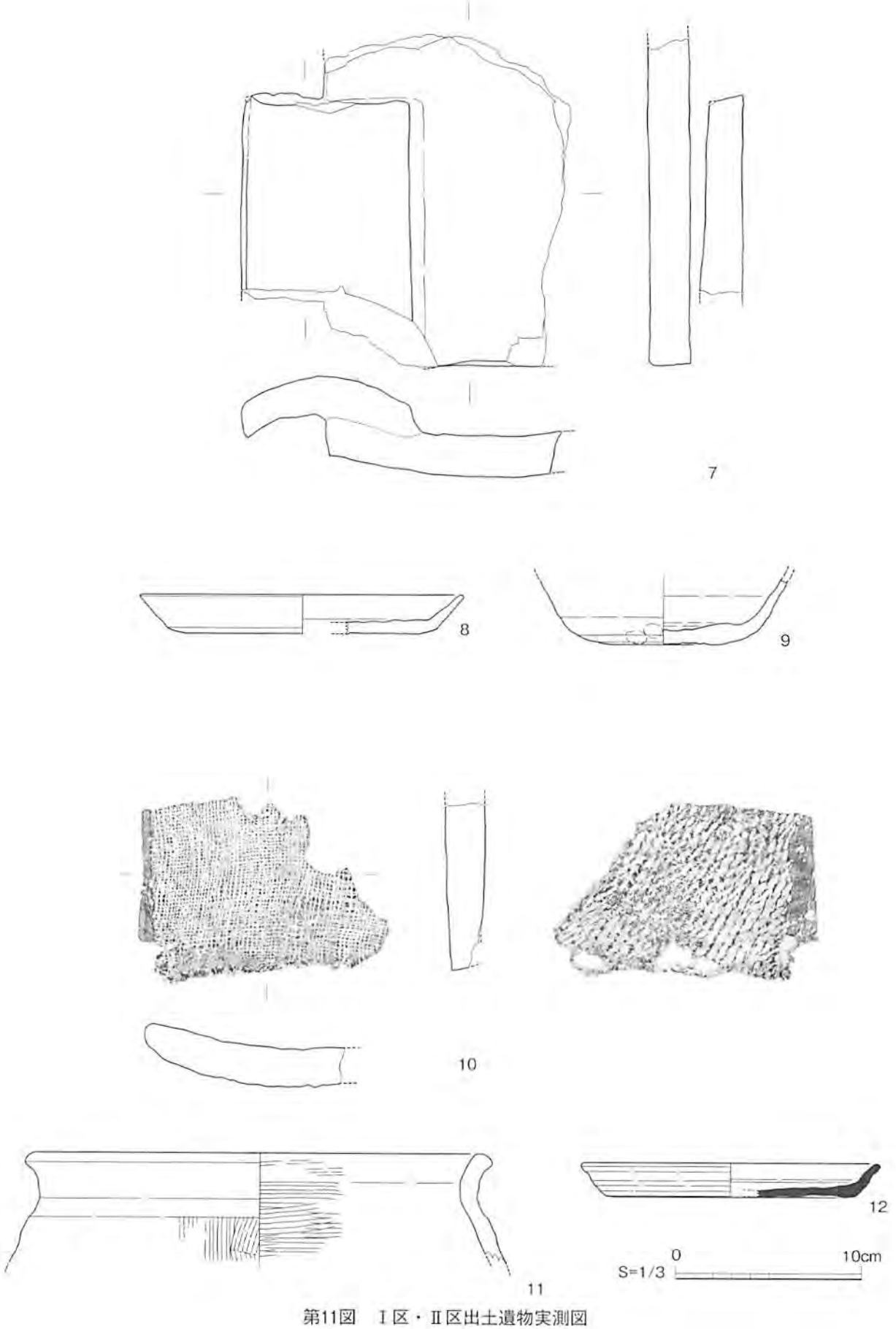
限られた調査範囲の中で十分な遺構検証は出来なかったが、今後の周辺調査と併せて二本木遺跡群の全容を解明する資料として役立てて頂けることを切に望みまとめとする。



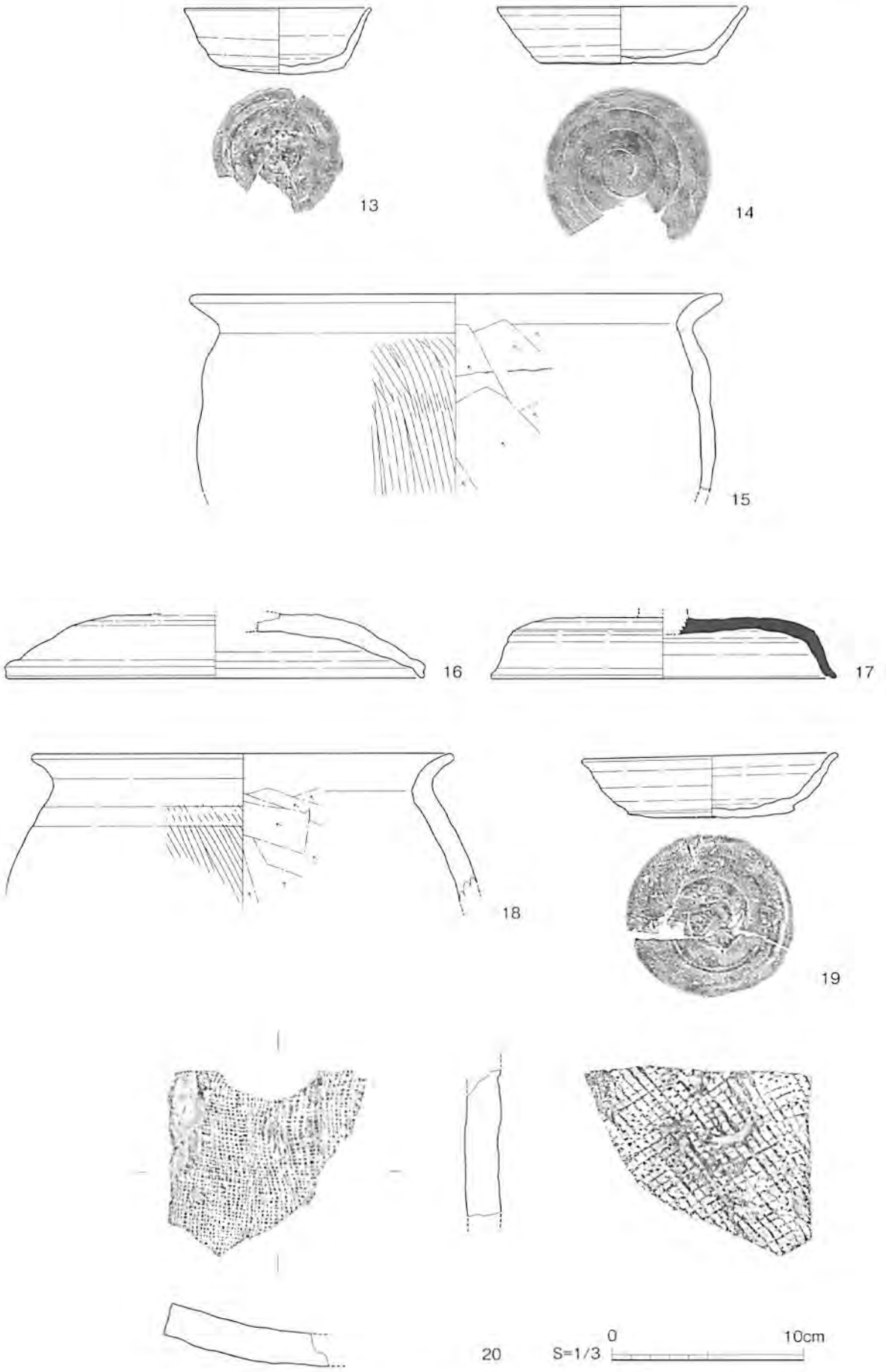
第９図　Ⅰ区出土遺物実測図 (1)



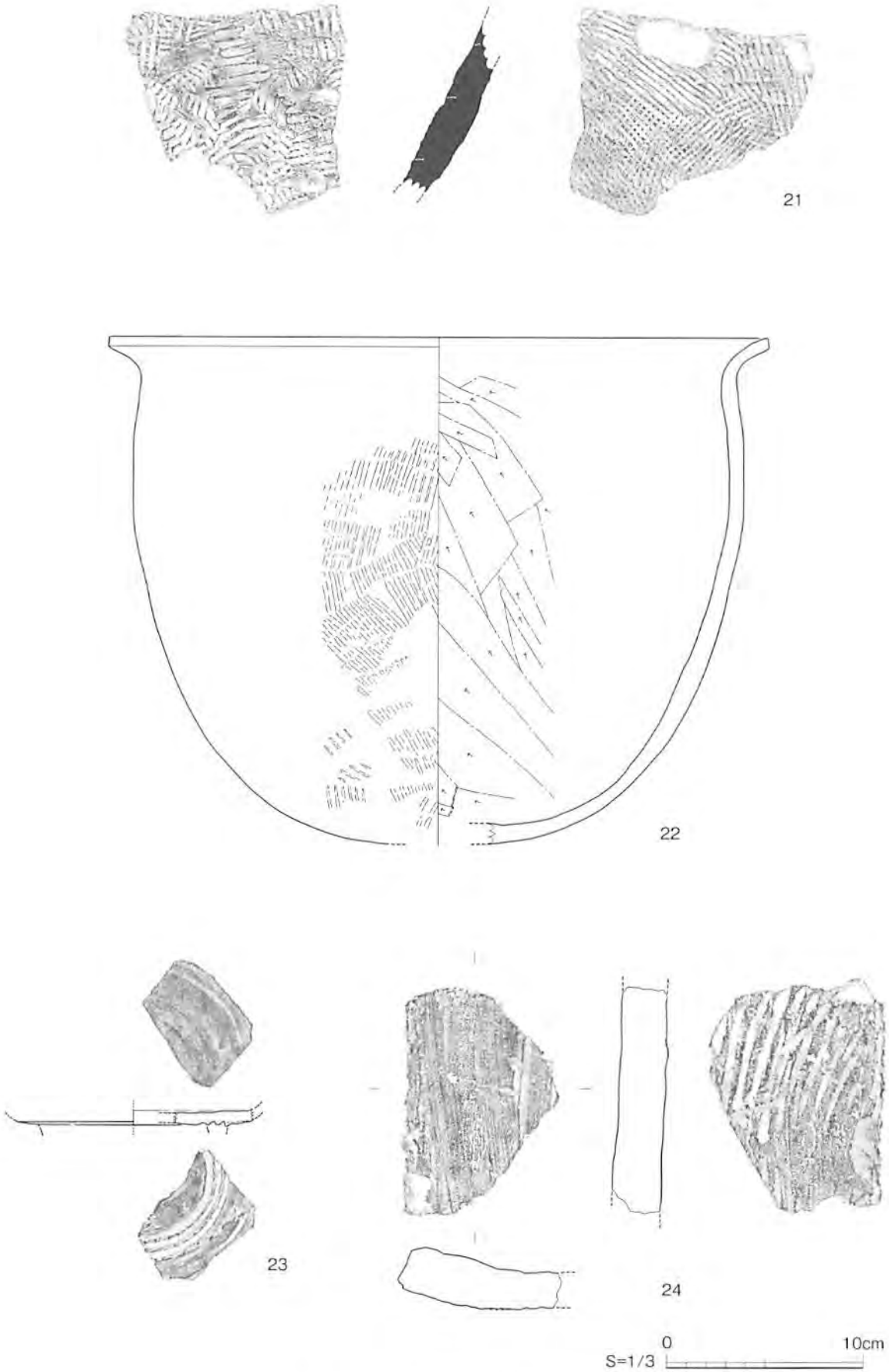
第10図　Ⅰ区出土遺物実測図 (2)



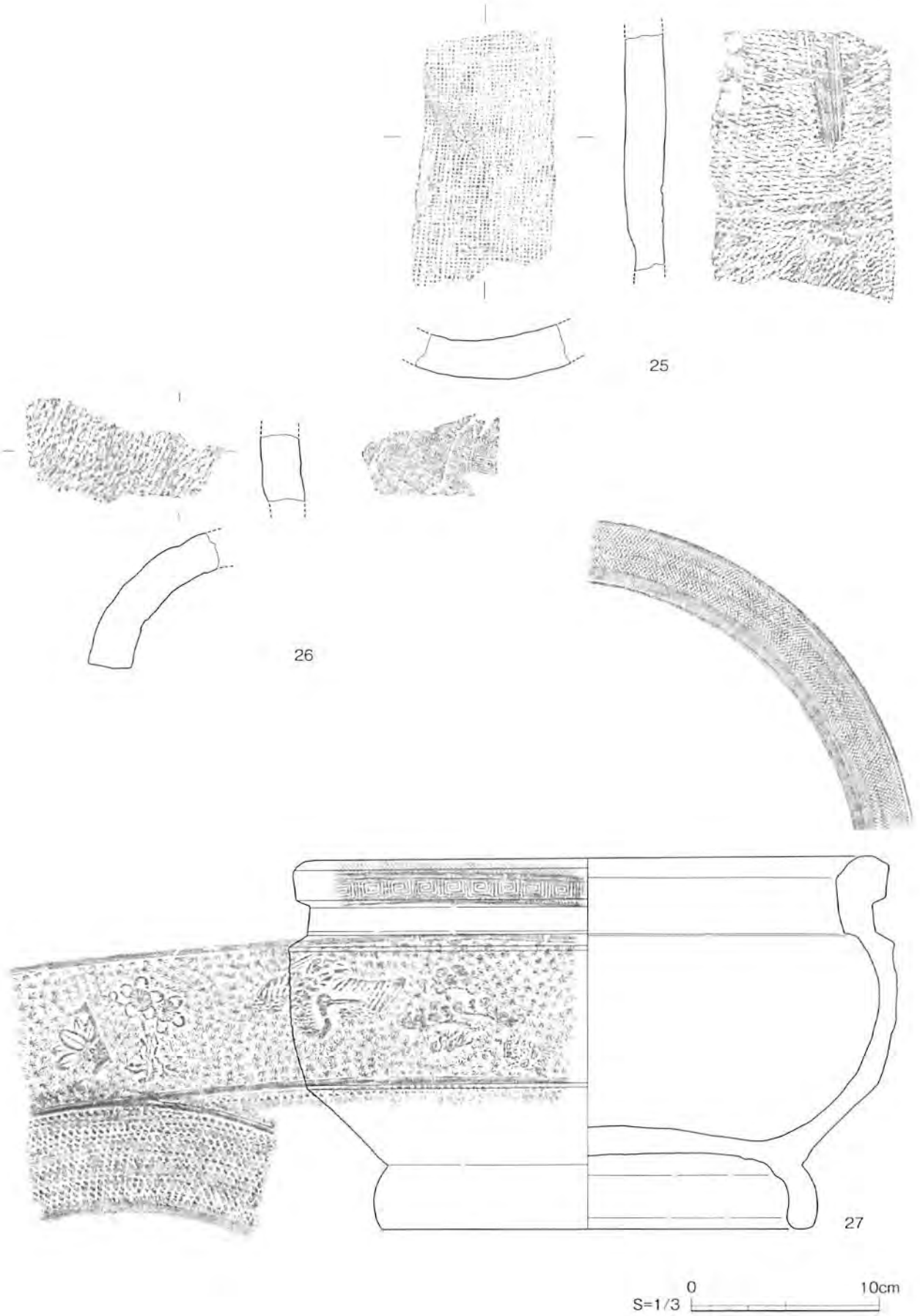
第11図　Ⅰ区・Ⅱ区出土遺物実測図



第12図　Ⅱ区出土遺物実測図（1）



第13図　Ⅱ区出土遺物実測図 (2)



第14図　Ⅱ区出土遺物実測図 (3)

法量（　）は復元値

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	時期	出土地点	層位 (取上No)	胎土	備考
9	1	土師器	甑	口縁～胴部	(31.0)	－	－	19.2～	ヨコナデ、ヘラケズリ	タタキ後ナデ	褐灰 10YR6/1	灰黄褐 10YR6/2	良	古代	Ⅰ区	No.2	微細～3㎜の砂粒、角閃石、石英、赤褐色粒	把手1ヶ残存
9	2	土師器	浅鉢（焙烙）	完形	40.2	34.6	8.2	－	ヨコナデ、スス付着	回転ヘラケズリ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良	近世	Ⅰ区	表土	長石、赤褐色粒、砂粒	把手1ヶ欠損、底部受熱
9	3	土師器	浅鉢（焙烙）	完形	32.6	28.9	9.8	－	回転ナデ、スス付着	回転ヘラケズリ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良	近世	Ⅰ区	表土	微細な砂粒、角閃石、雲母、赤褐色粒	底部受熱
10	4	瓦質土器	短頸壺	口縁～底部	19.9	(17.7)	19.9	－	ヨコナデ、スス付着	型押し後ナデ	にぶい橙 10YR7/2	にぶい橙 10YR7/2	良	近世	Ⅰ区	表土	微細～3㎜の砂粒、角閃石、石英	口縁は歪みあり
10	5	土師質土器	火鉢	口縁～底部	(18.9)	－	15.3	－	ヨコナデ、スス付着	型押し、ナデ	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	良	近世～近代	Ⅰ区	－	微細な砂粒、雲母、赤褐色粒	「政」の刻印あり、穿孔5ヶ所
10	6	土師質土器	火鉢	口縁～底部	28.3	26.4	21.4	－	ヨコナデ、スス付着	型押し後ナデ	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良	近世～近代	Ⅰ区	Ⅰ・Ⅱ層	微細～1㎜の砂粒、角閃石、金雲母、長石、赤褐色粒	
11	8	土師器	皿	口縁～底部	(17.6)	(14.6)	2.1	－	ヨコナデ	回転ヘラ切り後ナデ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	良	古代	Ⅱ区 SI003	No.5	微細な砂粒、金雲母、赤褐色粒	
11	9	土師器	杯	底部	－	9.2	－	3.6～	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良	古代	Ⅱ区 SD003	－	微細な砂粒、金雲母、赤褐色粒	指頭圧痕
11	11	土師器	甕	口縁～体部	(25.4)	－	－	6.0～	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、スス付着？	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	良	古代	Ⅱ区 SI001	No.14	微細な砂粒、角閃石	
11	12	須恵器	皿	口縁～底部	(16.2)	13.4	1.9	－	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	黄灰 2.5Y6/	灰白 5Y8/1	良	古代	Ⅱ区 SI001	上層	微細な滑石粒	
12	13	土師器	杯	口縁～底部	9.9	6.6	3.5	－	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	良	古代	Ⅱ区 SI001	No.6・8	微細な砂粒	赤彩
12	14	土師器	杯	口縁～底部	(13.2)	8.9	3.0	－	回転ヘラミガキ	回転ナデ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	良	古代	Ⅱ区 SI001	Ⅰ層	微細な砂粒、金雲母、赤褐色粒	赤彩
12	15	土師器	甕	口縁～胴部	(28.2)	－	－	10.5～	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	古代	Ⅱ区 SI002	No.16	微細な砂粒、小石粒、角閃石、石英	
12	16	土師器	蓋	口縁～体部	(22.2)	－	－	3.4～	ヨコナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6	良	古代	Ⅱ区 SI002	カマド	微細な砂粒	赤彩、つまみ欠損
12	17	須恵器	蓋	口縁～体部	(18.2)	－	－	3.3～	ヨコナデ	回転ナデ	褐灰 5YR4/1	暗赤褐 2.5YR3/2	良	古代	Ⅱ区 SI002	Ⅰ層	微細な砂粒	つまみ欠損
12	18	土師器	甕	口縁～胴部	(22.4)	－	－	7.9～	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	良	古代	Ⅱ区 SI003	Ⅲ層	角閃石、微細～1.5㎜の砂粒	
12	19	土師器	杯	口縁～底部	(13.9)	8.7	3.4	－	回転ナデ	回転ナデ	橙 2.5YR6/8	浅黄橙 10YR8/3	良	古代	Ⅱ区 SI002	カマド	微細な砂粒、角閃石、金雲母、石英、赤褐色粒	赤彩
13	21	須恵器	大甕	胴部？	－	－	－	8.9～	平行タタキ	平行タタキ	灰 N6/	灰 N6/	良	古代	Ⅱ区 SD003	－	長石、赤褐色粒、砂粒	
13	22	土師器	甕	口縁～底部	(34.0)	(15.8)	－	25.9～	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、タタキ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	良	古代	Ⅱ区	Ⅰ・Ⅱ層	微細～2㎜の砂粒、角閃石、石英、赤褐色粒	
13	23	土師器	不明	底部	－	－	－	0.9～	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	良	不明	Ⅱ区	Ⅱ層	微細な砂粒、雲母	赤彩
14	27	瓦質土器	火鉢	完形	32.0	23.4	20.1	－	ヨコナデ後ミガキ、スス付着	施文、面取り後ミガキ	灰 N5/.4/	灰N4/ 暗灰色 N3/	良	近世～近代	Ⅱ区	－	微細～2㎜の砂粒	すかし有り

表1　土器観察表

図版番号	遺物番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	出土地点	層位（取上げNo）	備考
11	7	ローソク桟瓦	17.8～	18.0～	5.4	近代	Ⅰ区	表土	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
11	10	平瓦	9.9～	13.4～	2.1	古代	Ⅱ区SD003	－	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
12	20	平瓦	9.9～	11.4～	1.8	古代	Ⅱ区SI002	No.30	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
13	24	平瓦	12.2～	8.9～	2.5	古代	Ⅱ区	Ⅱ層No.13	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
14	25	平瓦	14.1～	8.7～	2.9	古代	Ⅱ区	No.5	表に布目、裏に工具によるタタキ目あり
14	26	丸瓦	5.9～	7.1～	2.1	古代	Ⅱ区	Ⅱ層	

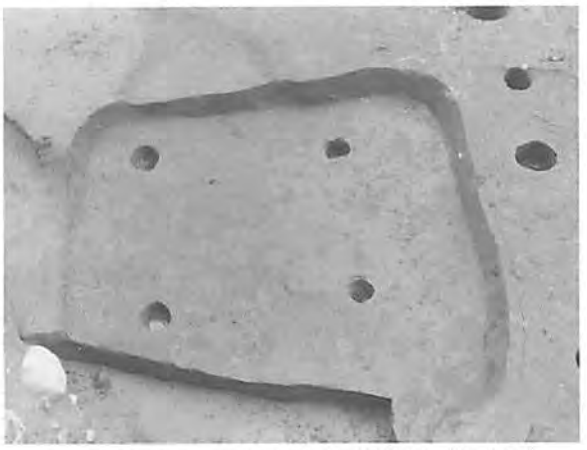
表2　瓦観察表

PL. 1　Ⅰ区　SD001Ⅱ層溝状遺構（北より）

PL. 2　Ⅱ区　Ⅱ層出土遺物（西より）

PL. 3　Ⅱ区　SD003･004Ⅲ層溝状遺構（北より）

PL. 4　Ⅱ区　SI001Ⅲ層完掘状況（西より）



PL. 5　Ⅱ区　SI003Ⅲ層完掘状況（西より）

PL. 6　Ⅱ区　Ⅲ層完掘状況（北より）

1

2

3

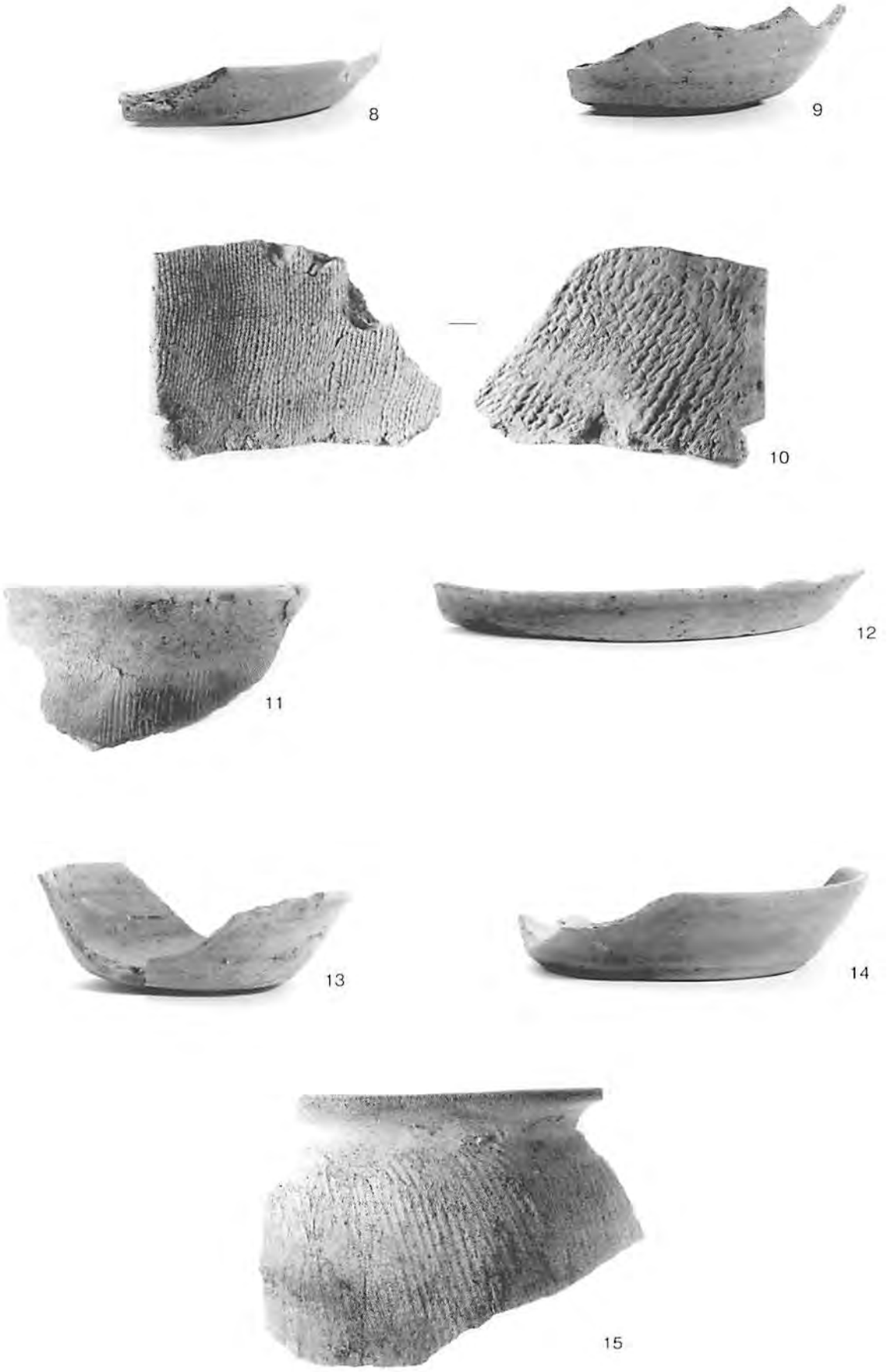
4

5

6

7

PL. 7　出土遺物 (1)



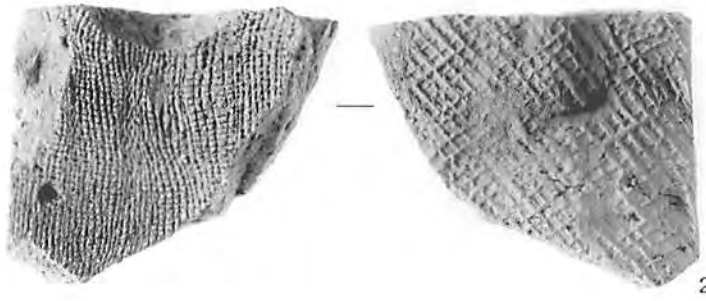
PL. 8　出土遺物 (2)

16

17

18

19

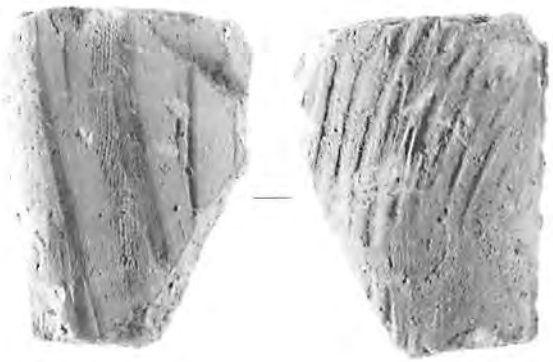

20

21

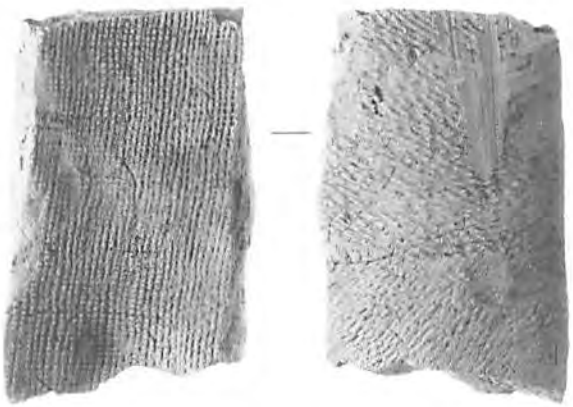
22

PL. 9　出土遺物 (3)

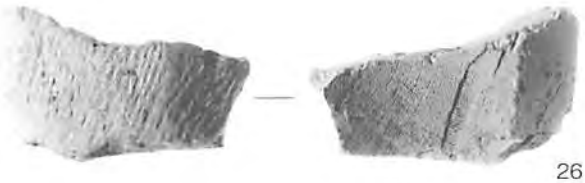
23



24



25



26

27

PL. 10　出土遺物 (4)

第Ⅳ章　春日地区第２次調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査の契機

熊本県教育庁文化課は、熊本駅北部線（県道熊本高森線）街路改良事業に伴い、事業用地内での埋蔵文化財確認調査を実施した。第１次の確認調査を平成12年１月19日から同年１月21日に実施した。その後、随時、調査が可能になった地区の確認調査を継続して実施した。

これらの一連の調査により、事業用地内の一部については埋蔵文化財の存在を確認した。この結果を受けて、熊本県教育庁文化課と事業担当の熊本県熊本土木事務所は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺構が存在する地区については、工事着手前に記録保存の為の発掘調査を実施することになった。

平成13年４月に熊本県知事から、周知の埋蔵文化財包蔵地での発掘通知が提出され、それに対し、熊本県教育長から発掘調査の指示が出された。発掘調査の事前準備を行い、現地での発掘調査は平成13年12月19日に開始、平成14年１月31日に終了した。その後、関係する調査区での現地での発掘調査が終了した後、平成19年度に調査報告書作成を行った。

２　調査の組織

【平成11年度（1999）　確認調査】

調査責任者　豊田貞二（文化課長）
調査総括　　川上康治（課長補佐）
　　島津義昭（課長補佐）
調査調整　　江本　直（主幹兼文化財調査第二係長）
　　村崎孝宏（文化財保護主事）
調査担当　　後藤貴美子（文化財保護主事）
調査事務　　小斉久代（総務係長）
　　広瀬泰之（参事）
　　川口久夫（主事）

【平成13年度（2001）　本調査】

調査責任者　阪井大文（文化課長）
調査総括　　島津義昭（課長補佐）
調査調整　　木崎康弘（文化財調査第二係長）
調査担当　　帆足俊文（主任学芸員）
調査事務　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　広瀬泰之（参事）
　　杉村輝彦（主事）

【平成19年度（2007）　整理・報告書作成】

整理責任者　梶野英二（文化課長）
整理総括　　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　江本　直（課長補佐）
　　野田拓治（文化財資料室長）
　　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
整理担当　　帆足俊文（主任学芸員）
　　加藤早織（非常勤職員）
整理事務　　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参事）
　　高松克行（主任主事）

第２節　調査の方法と経過

１　調査区の設定

今回の調査は街路改良事業が原因事業のため、県道熊本高森線（通称「電車通り」）沿いの現歩道上に調査区を設定した。主な調査区は、熊本高森線を熊本駅に向かって右側に設置した幅約７m×長さ約35mの長方形の調査区である。この調査区を水道管等で掘削できない部分を土層観察用のベルト（未掘部分）として６区に設定し、それぞれの調査区を１～６区とした。また、この１～６区と道路を挟んで向かい側（熊本駅に向かって左側）に約３×６mの小規模な調査区を設定し、その中を８区北・８区南とした（第１～２図。７区は欠番）。

なお、この調査区名は二本木遺跡群2001年度の調査区にのみ利用した呼称である。

２　調査の方法と経過

発掘調査は、１～６区の調査から着手した。

調査前の調査区は県道の歩道であった。そのため、歩道の路盤を除去した後、重機により表土（後に記す基本土層のⅠ層。以下、同じ）除去作業を行った。続いて、遺構の位置を記録するために、調査区際に基準点を設置した。それに基づき、調査区内に杭を打設し、国土座標軸に合わせたグリッドを設定した。

幅が狭い調査区のため、設定したグリッドの一辺の長さは５mとした。

表土除去後にⅡ層及びⅢ層を対象として、それぞれ人力による掘削を実施した。Ⅱ層からは古代から近世までの遺物が出土し、Ⅲ層は古代から中世までの遺物が出土した。Ⅱ層及びⅢ層は当時の生活面が流出した後に堆積した埋没土であり、撹乱を受けている部分も多く、各層から明確な遺構を検出することはできなかった。

２区で検出した近世の溝であるSD01はⅢ層上面の遺構としているが、実際にはⅣ層上面で検出して、断面によりⅢ層上面から切り込んでいることを確認したものである。遺構の時期は、溝の埋土に含まれる遺物から判断した。

その後、Ⅳ層の掘削を行った。Ⅳ層はⅢ層とⅤ層の漸移層であり、古代から中世までの遺物を含んでいた。その掘削の途中で一部、検出できる遺構もあるが、ほとんどの遺構は下層であるⅤ層上面まで掘削を行わない限り、検出が不可能であった。そのため、Ⅴ層上面でほとんどの遺構を検出することとなった。結果的に、Ⅴ層上面で検出した遺構には、古代の遺構と中世の遺構が混在した状態となった。

遺構の時期の判断と同時期の遺構のセット関係については、遺構の埋土、そこに含まれる遺物から判断した。ただし、遺構から出土している遺物は少なく、時期を限定する根拠としては弱いと言わざるを得ない。

本報告では、遺構の時期として近世と判断したものについては、「Ⅲ層検出遺構」として表現し、中世の遺構と判断したものについては、Ⅳ層途中で検出した遺構も含めて、「Ⅳ層検出遺構」として表現している。また、同じく古代の遺構と判断したものについては、「Ⅴ層検出遺構」として表現した（第１～２図）。

全ての遺構を掘削・記録した後、部分的に確認のためにⅥ層上面まで掘削を実施したが、遺構・遺物を確認しなかった。そのため、１～６区の調査を終了した。その後、８区についても同じ手順で調査を行い、その記録を行った後、全ての調査を終了した。

第３節　調査の成果

１　基本土層

今回の調査区の基本土層は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土、撹乱土。近現代の生活具と整地の際に持ち込まれた礫や砕石が混入している。

Ⅱ層　黒褐色シルト。やや粘性がある。古代から近世の遺物を含む。

Ⅲ層　暗褐色シルト。若干、粘性があるが、全体的にはパサパサした土質。古代から中世の遺物を含むが、時期は限定されない。

Ⅱ層・Ⅲ層はそれぞれ、中世又は近世までに埋没が完了した堆積土であり、本来の各時期の生活面は流出していると判断した。

Ⅳ層　Ⅲ層とⅤ層の漸移層。Ⅴ層の褐色シルト層に、５～15cm大の暗褐色シルトの丸い土塊が多量に入る。古代の遺物も含む。部分的に、層中で遺構が検出できる場合がある。

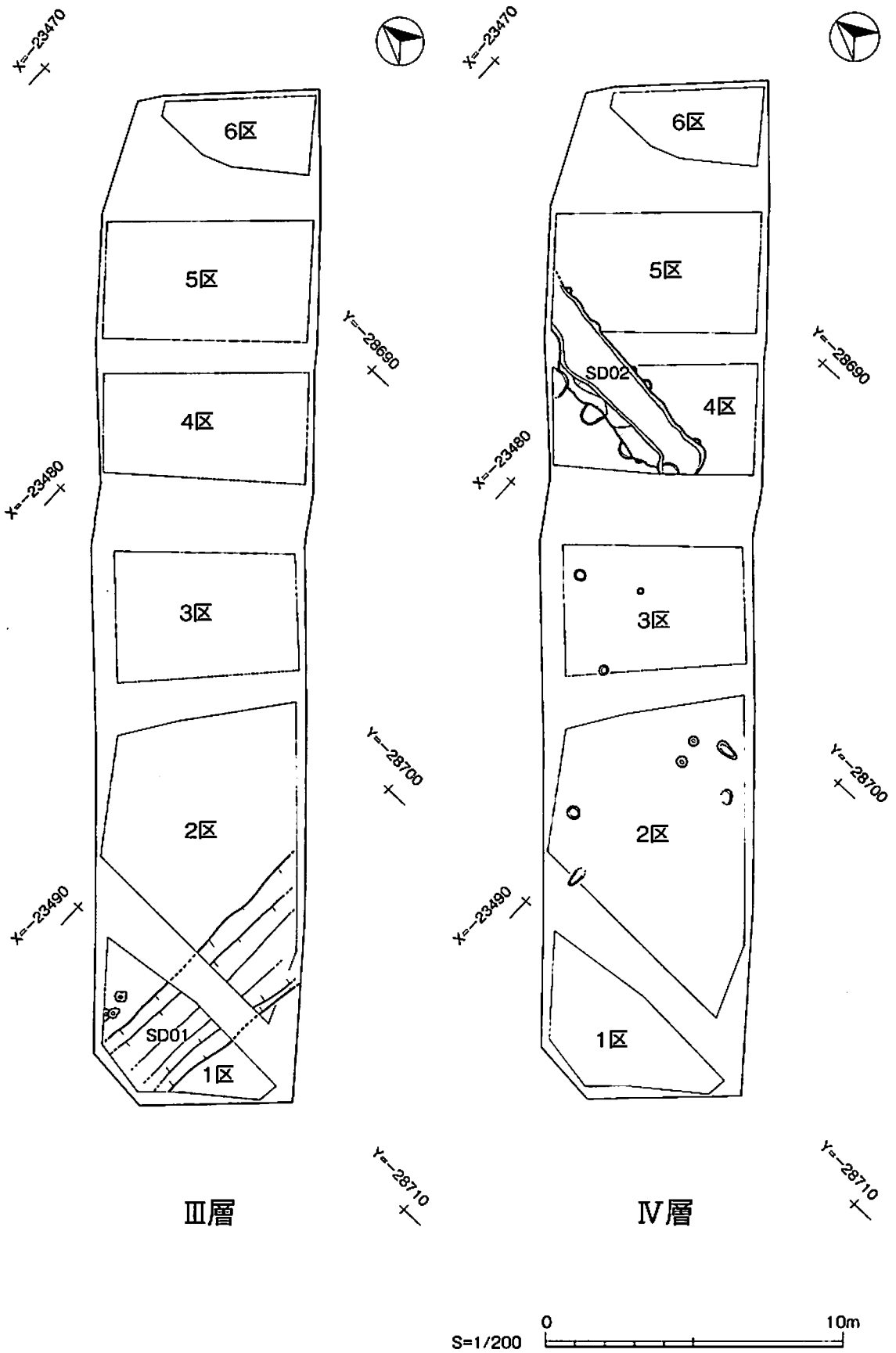
Ⅴ層　褐色シルト。粘性はあまりなくサラサラしている。主に、この層の上面で遺構を検出した。検出した遺構の時期は、古代と中世の両時期のものがある。埋土と出土遺物等でその時期を判断した。古代の本来の生活面ではない。

Ⅵ層　黄褐色シルト。粘性はなく硬くしまっている。

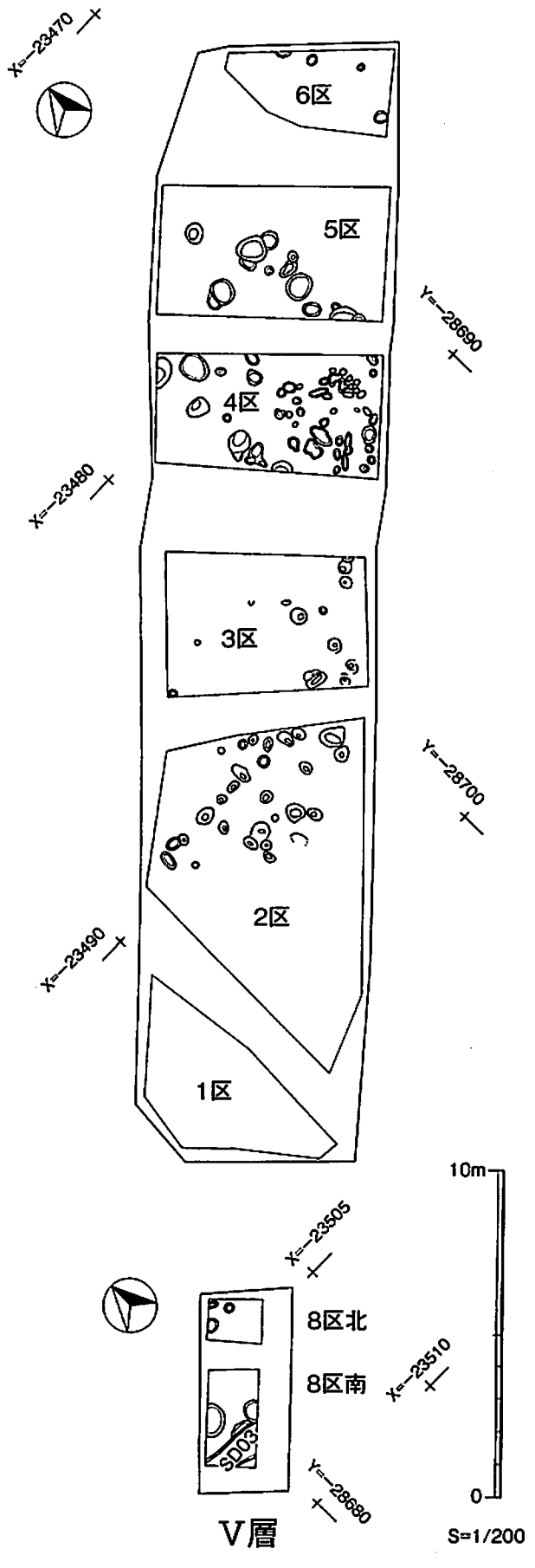
Ⅶ層　灰色シルト。粘性はない。やや粗めのシルト。

Ⅷ層　明灰色シルト。粘性はない。Ⅶ層よりやや明るい色調。

Ⅸ層　暗灰色シルト。粘性はない。人力の掘削はほぼ不可能なほど、強烈に硬く締まる。



第１図　Ⅲ層・Ⅳ層検出遺構配置図



第２図　Ｖ層検出遺構配置図

２　遺構

ここでは、調査区を分けずに、発掘調査を実施した全ての調査区の遺構について説明する。遺構検出の状況と時期決定の方法は、第２節及び第３節基本土層で記したとおりである。

【Ⅲ層検出遺構】

近世の遺構と判断したもの。その時期は出土遺物から、概ね17世紀頃と考えている。

(1)溝状遺構

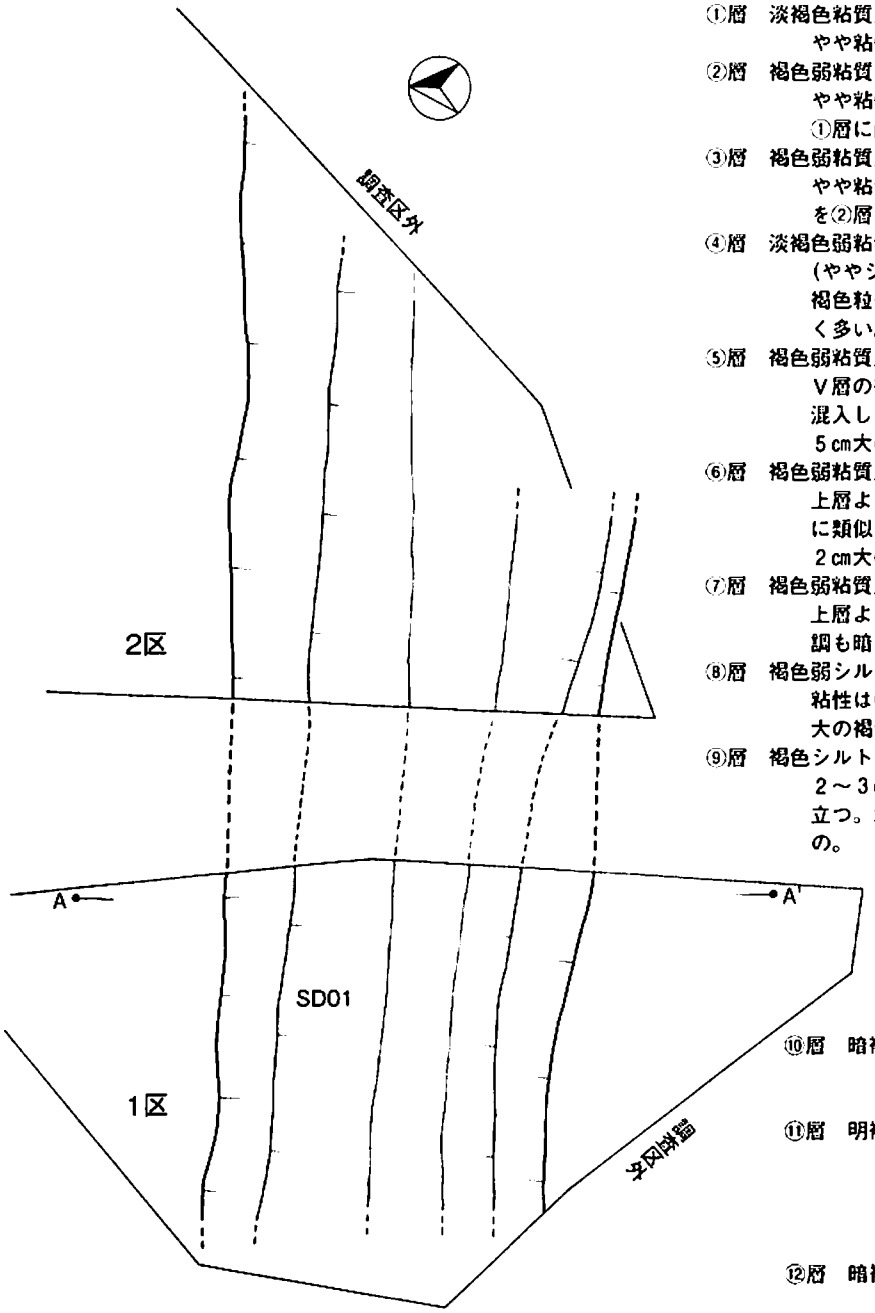
ＳＤ０１（第３図）

１区と２区の南端で検出した。東西方向にのびる。実際はⅣ層上面で検出したが、断面でⅢ層を切り込んでいることを確認した。断面上で確認した溝の最大幅は3.8m、底面の幅は、0.6m、残存部の深さは、1.8mである。

溝の形状は、逆台形を呈する。底部は、Ⅸ層の上面に到達したところで掘削を終了したと考えられる。溝は深く、上端の幅も広いことから、何らかの区画を意識した可能性が高いと考えている。

(2)土壙

同時期と考えられる小土壙を３基、検出した。その性格は不明である。（第１図）



①層　淡褐色粘質土
やや粘性あり、近世陶磁器を含む。

②層　褐色弱粘質土
やや粘性あり、１cm大の黄褐色粒を含む。①層に酷似する。

③層　褐色弱粘質土
やや粘質あり、１～２cm大の黄褐色粒子を②層よりやや多く含む。

④層　淡褐色弱粘質土
(ややシルト質にも近い) １～２cm大の黄褐色粒子を含む。粒子は②層よりや大きく多い。

⑤層　褐色弱粘質土
Ⅴ層の褐色土やその下の黄褐色粘土層が混入して生成されたと考えられる。３～５cm大の黄褐色粘土ブロックを含む。

⑥層　褐色弱粘質土
上層より水分がやや多くなる。③・④層に類似しているが色調がやや暗い。１～２cm大の黄褐色ブロックを少量含む。

⑦層　褐色弱粘質土
上層よりやや粘質が強くなってくる。色調も暗く黄褐色粘土ブロックも少量含む。

⑧層　褐色弱シルト
粘性は中で、土の粒子はシルト質。２cm大の褐色粘土ブロックが目立つ。

⑨層　褐色シルト
２～３cm大の褐色粘土ブロックが多く目立つ。地山層の粘土が崩れて混入したもの。

⑩層　暗褐色シルト
粘性は中で、粘土ブロックは含まない。

⑪層　明褐色シルト
２～３cm大の黄褐色粘土ブロックを多く含む。⑨層等と同様に地山の粘土ブロックが混入したもの。

⑫層　暗褐色シルト
水分量は多く、シルト質だがベタベタしている。１cm大の粘土ブロックを少量含む。

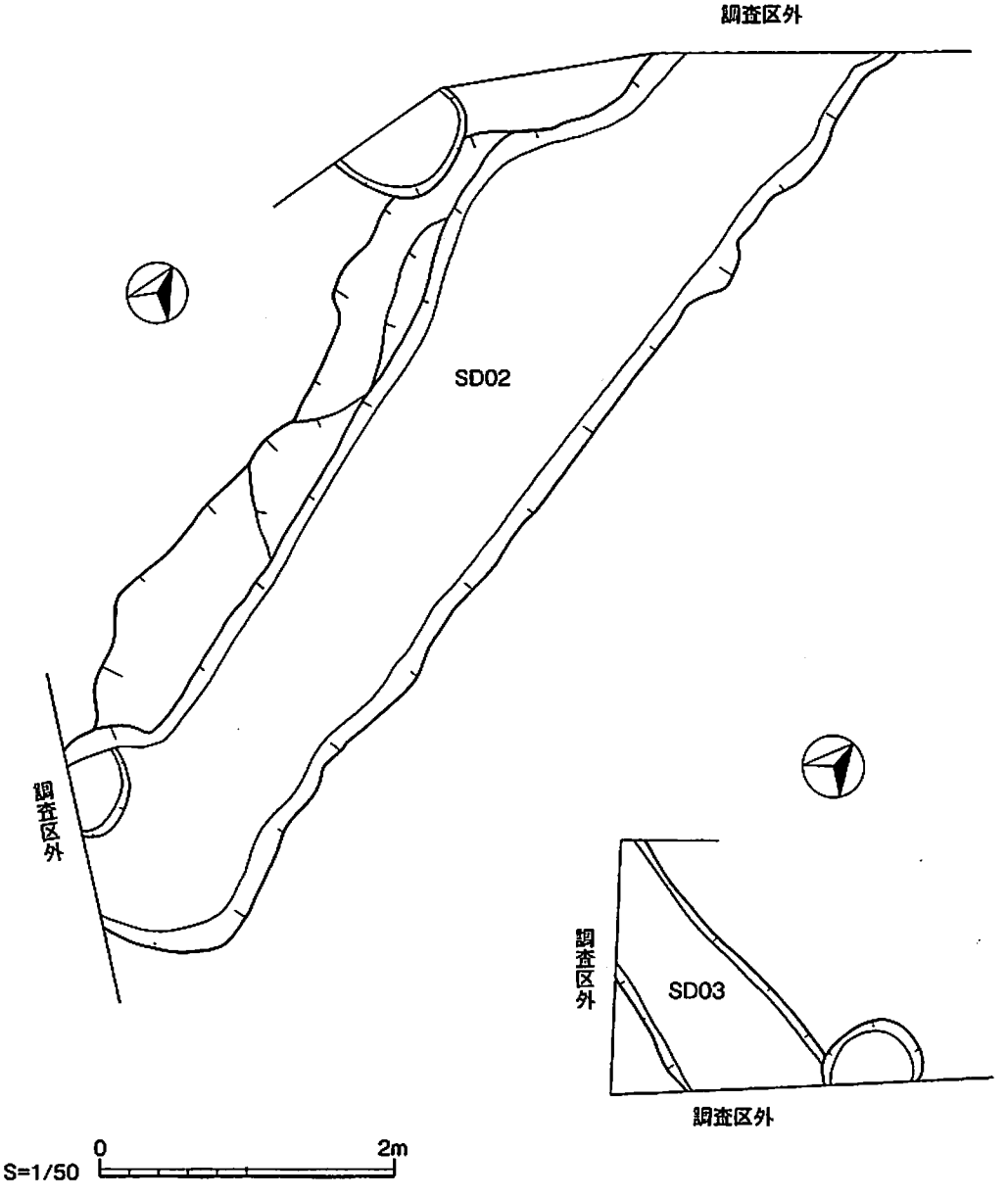
⑬層　褐色シルト
粘性は中で、２cm大の黄褐色ブロックを含む。細かなシルト質であるが、水分量も多く粘質もあり。

⑭層　明褐色シルト
２～５cm大の黄褐色粘土ブロックを多量に含む。地山の黄褐色粘土が多量に入ったもの。

⑮層　暗褐色シルト
水分量は多く、やや粗いシルト。粘土ブロックはごく少量しか含まない。

S=1/60　0　2m

第３図　SD０１（１区・２区）実測図



第４図　SD０２（４区・５区）・SD０３（8区南Ⅴ層検出）実測図

【Ⅳ層検出遺構】

中世の遺構と判断したもの。その時期は、出土遺物から、概ね13世紀から14世紀頃と考えている。

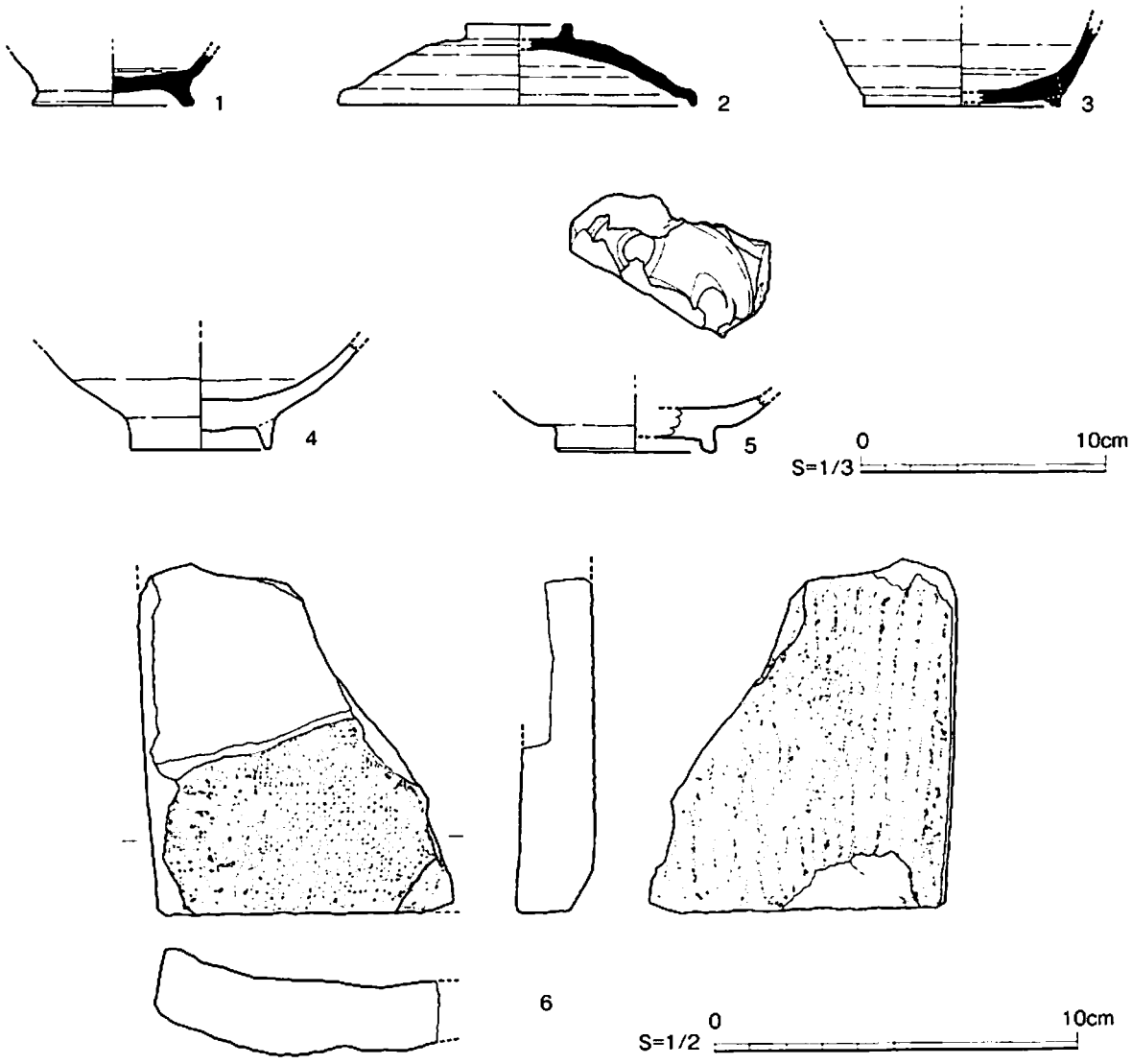
(1)溝状遺構

SD０２（第４図）

４区と５区にまたがって検出した。南北方向にのびる。南端は４区端で東西方向に曲がるが、その先は３・４区間のベルト（未掘）部分で終わるため、溝の全体形状は不明。幅は約1.8mで、部分的に２段掘りの形状になる。溝の詳しい性格を判断する材料はない。

(2)土壙

同時期と考えられる小土壙を数基検出した。いずれも、その性格は不明である。（第１図）



第５図　１区・２区出土遺物実測図

【Ⅴ層検出遺構】

古代の遺構と判断したもの。その時期は出土遺物から、概ね８世紀から９世紀頃の時期と考えている。

(1)溝状遺構

SD０３（第４図）

８区南で検出。ほぼ、東西方向にのびる。検出した範囲が狭いため、方位や区画を意識したものかどうかは分からない。

溝上端の幅は約0.9mを測る。溝の性格は不明である。

(2)土壙

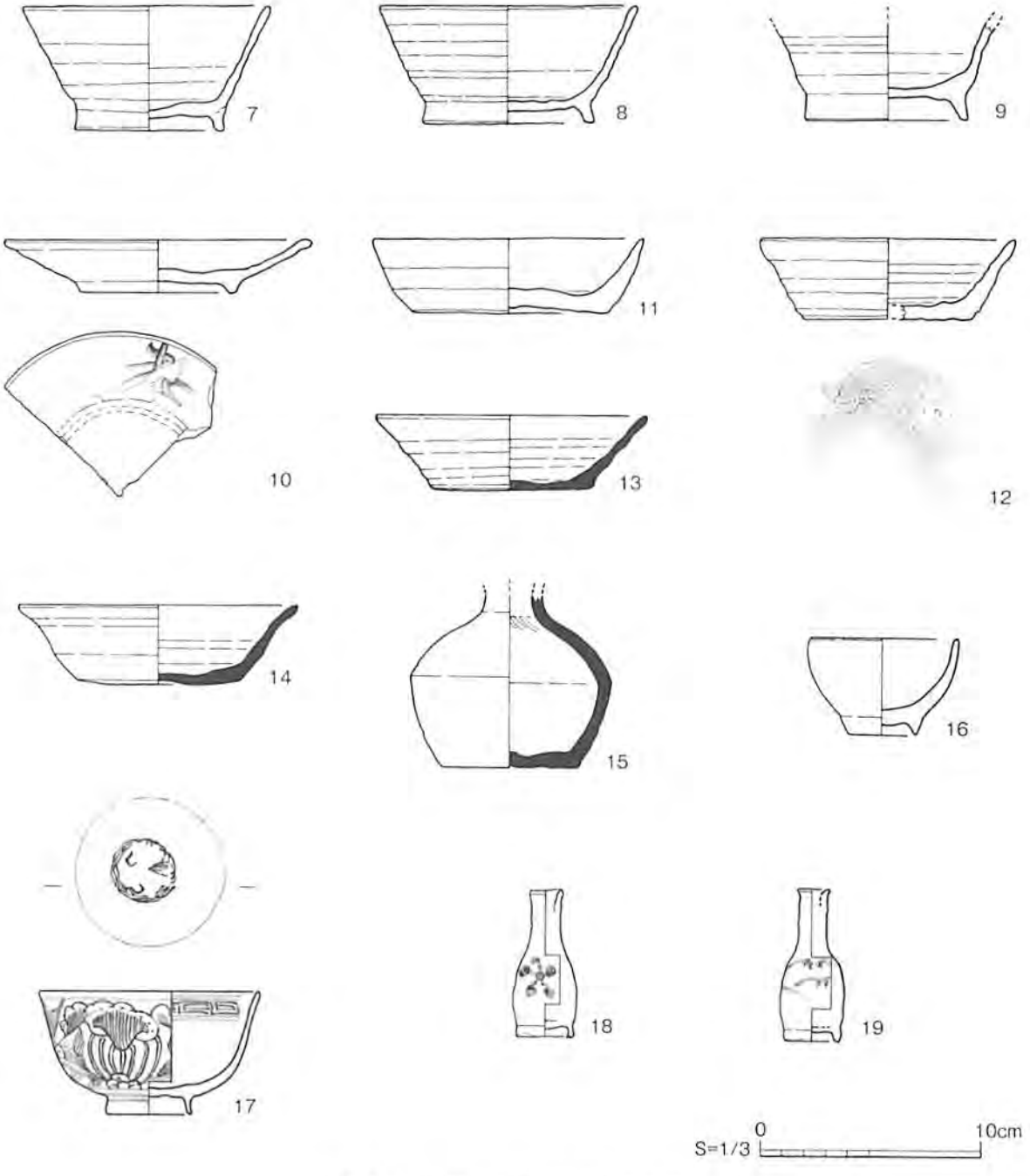
同時期と考えられる土壙を多数検出した。いずれも、その性格は不明である。（第２図）

Ⅴ層検出の土壙については、次の２群について、何らかの関連がある一連の遺構としての可能性を検討した。

①２区北側の土壙群については、東西方向に直線的に並ぶ配置であったため、杭列や柱穴等の可能性。

②４区及び５区の土壙については、方形に並ぶ配置の一連の遺構（建物の柱穴等）の可能性。

しかし、遺構の掘り方や柱痕跡を確認することはできず、土壙埋土を検討した結果、類似した埋土の土壙同士でのセット関係をつかむことができなかった。そのため、個別の土壙として記録するに留めた。

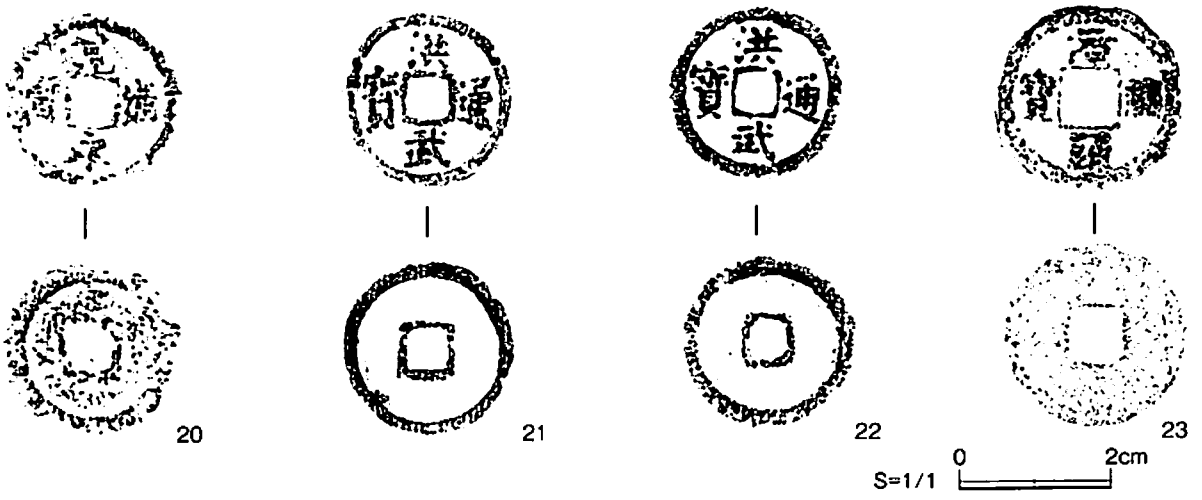


第６図　４区・６区出土遺物実測図

3　遺物

調査区から出土した遺物は、古代から近世までの時期の遺物である。前述のとおり、各層から出土する遺物は時期幅があり、各層の時期を限定する根拠としては弱い。

ここでは、出土した遺物の出土地点や出土層位にこだわらず、残存度が高いものを掲載した。出土位置等の情報や個別遺物の解説については、観察表で示すことにする（表１～３）。



第７図　出土遺物（古銭）

図版番号	遺物番号	種　類	径（mm）	重量（g）	出土地点	層　位	取り上げNo.	備　考
7	20	寛永通宝	24.3	1.8	6区SX01	－	－	1634年初鋳
7	21	洪武通宝	22.7	3.0	2区Ⅳ層SP04	埋土	－	1368年初鋳
7	22	洪武通宝	23.7	2.7	2区Ⅴ層SP36	埋土	－	〃
7	23	元豊通宝	23.7	2.7	表土	－	－	1078年初鋳
		寛永通宝	22.8	2.2	6区SX01	－	－	1636年初鋳　写真のみ
		寛永通宝	23.2	2.5	－	－	－	〃

表１　古銭観察表

第４節　まとめ

今回の調査区では、概ね３時期の遺構を確認した。それは、古代・中世・近世の遺構である。遺物包含層はそれぞれの時期の生活面が流出した後の堆積土であり、遺物包含層から出土した遺物により、遺構の時期を限定することは難しい。検出した遺構の時期については、遺構埋土から少量、出土した遺物の時期から推定せざるを得なかった。

そのため、ここではおおまかな３時期区分のみで報告したが、本来は、各時期に比定した遺構についても、多くの時期に区分できるはずである。今回は、そこまでの時期認定はできなかったことを記載しておく。

検出した３条の各時期の溝については、いずれも、東西又は南北方向等、方位に沿った溝である。近世のSD01は区画することを目的として、方位に沿って掘削された可能性が高い。それ以外の２条の溝については時期は異なるが、いずれも方位に沿ったものであり、当地区の遺構配置が方位に沿ったものである可能性を示している。

土壙群については、いずれの時期の土壙についても明確な性格を認定できたものはない。しかし、古代の土壙群は方位に沿った配置をしている可能性があり、溝と同様、当地区の土地利用の状況を示している可能性がある。

土壙群については、建物の柱穴や杭列等の可能性も検討したが、今回は特定できていない。

今回の調査では、ほとんどの遺構について、その性格や時期を明確にすることができていない。確認できなかった遺構の性格については、今後、周辺地区の調査結果等と比較検討して、総合的に検討する必要があると考える。

法量（　）は復元値

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存高(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	焼成	出土地点	層位(取上No.)	胎土	備考
5	1	須恵器	高台付杯	底部～体部	－	6.6	－	2.2～	不定方向ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	灰黄褐 10YR 6/2	灰黄褐 10YR 6/2	良	Ⅰ区SD01	埋土	長石、褐色粒、黒色粒、雲母	
5	2	須恵器	蓋	口唇部～つまみ	(14.8)	－	3.3	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/2	良	2区	Ⅳ層	長石、黒色粒	
5	3	須恵器	高台付杯	底部～体部	－	8.0	－	3.4～	回転ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ	灰褐 7.5YR 4/2	灰 5Y 4/1	良	2区	Ⅳ層	石英、砂粒	
5	4	白磁	椀	底部～体部	－	5.8	－	4.4～	施釉	施釉	灰白 5Y 7/2	灰白 5Y 7/2	良	2区	Ⅳ層		
5	5	青磁	椀	底部	－	6.3	－	2.1～	施釉	施釉	オリーブ黄 7.5Y 5/3	オリーブ黄 7.5Y 5/3	良	2区SD01	埋土		
6	7	土師器	高台付椀	ほぼ完形	10.8	6.6	5.65	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	良	4区SX03	SP78 上層ベルト	微細な砂粒、角閃石、石英	
6	8	土師器	高台付椀	口縁～底部	(11.9)	7.7	5.3	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	良	4区	Ⅲ層	微細な砂粒	底部に板状圧痕とヘラ記号
6	9	土師器	高台付椀	底部～体部	－	7.1	－	4.4～	ヨコナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 7.5YR 6/4	良	4区	Ⅲ層	雲母、黒色粒、赤褐色粒	内部に指頭圧痕
6	10	土師器	高台付小皿	口縁～底部	13.4	7.0	2.4	－	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ヘラ切り	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	良	4区	Ⅲ層	雲母、赤褐色粒	外面に墨書あり
6	11	土師器	杯	ほぼ完形	12.5	9.0	3.4	－	不定方向ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	橙 7.5YR 7/6	橙 7.5YR 7/6	良	4区SD02	－	微細な砂粒、雲母	
6	12	土師器	杯	ほぼ完形	(11.4)	(7.1)	3.6	－	粗目のナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	にぶい褐 7.5YR 6/3	にぶい褐 7.5YR 6/3	良	4区SD02	－	赤褐色粒、微細な砂粒、雲母	
6	13	須恵器	杯	ほぼ完形	12.4	7.4	3.4	－	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	良	4区SD02	－	長石、黒色砂粒	底部に糸切り離し
6	14	須恵器	杯	口縁～底部	(12.4)	7.2	3.6	－	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	良	4区SD02	SP64	長石、黒色砂粒	ヘラ切り離し
6	15	須恵器	壺	頸部～底部	－	6.2	7.8～	最大胴径 9.3	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	灰 5Y 5/1	灰 5Y 5/1	良	4区	SP78	砂粒	
6	16	青磁	杯	ほぼ完形	6.6	3.0	4.3	－	施釉	施釉	緑灰 7.5GY 6/1	緑灰 7.5GY 6/1	良	6区SX01	撹乱	精	両面細かい貫入あり
6	17	染付	椀	ほぼ完形	9.9	3.7	5.6	－	施釉	施釉	灰白 10Y 8/1	灰白 10Y 8/1	良	6区SX01	撹乱	精	
6	18	染付	御神酒徳利?	完形	1.4	2.6	6.7	－	施釉	施釉	灰白 N 8/	灰白 N 8/	良	6区SX01	－	精	用途不明
6	19	染付	御神酒徳利?	完形	1.3	2.4	6.9	－	施釉	施釉	灰白 N 8/	灰白 N 8/	良	6区SX01	－	精	用途不明

表2　土器観察表

図版番号	遺物番号	器種	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	出土地点	層位(取上No.)	備考
5	6	平瓦		9.5～	8.5～	2.1	Ⅰ区SD01		表に布目、裏に縄状のタタキ目あり

表3　瓦観察表

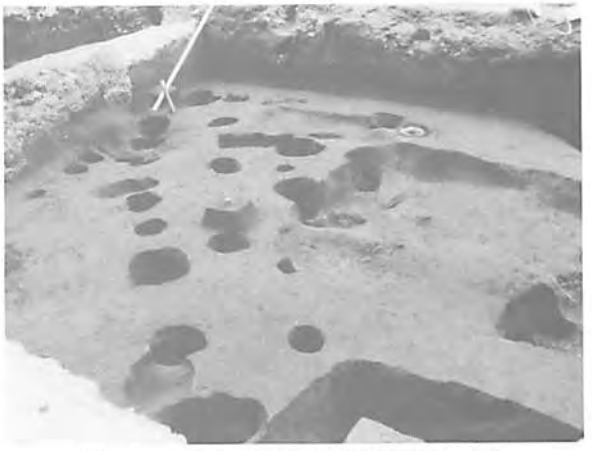
PL. 1　Ⅳ層検出状況（北→南）

PL. 2　SD01検出状況（北→南）

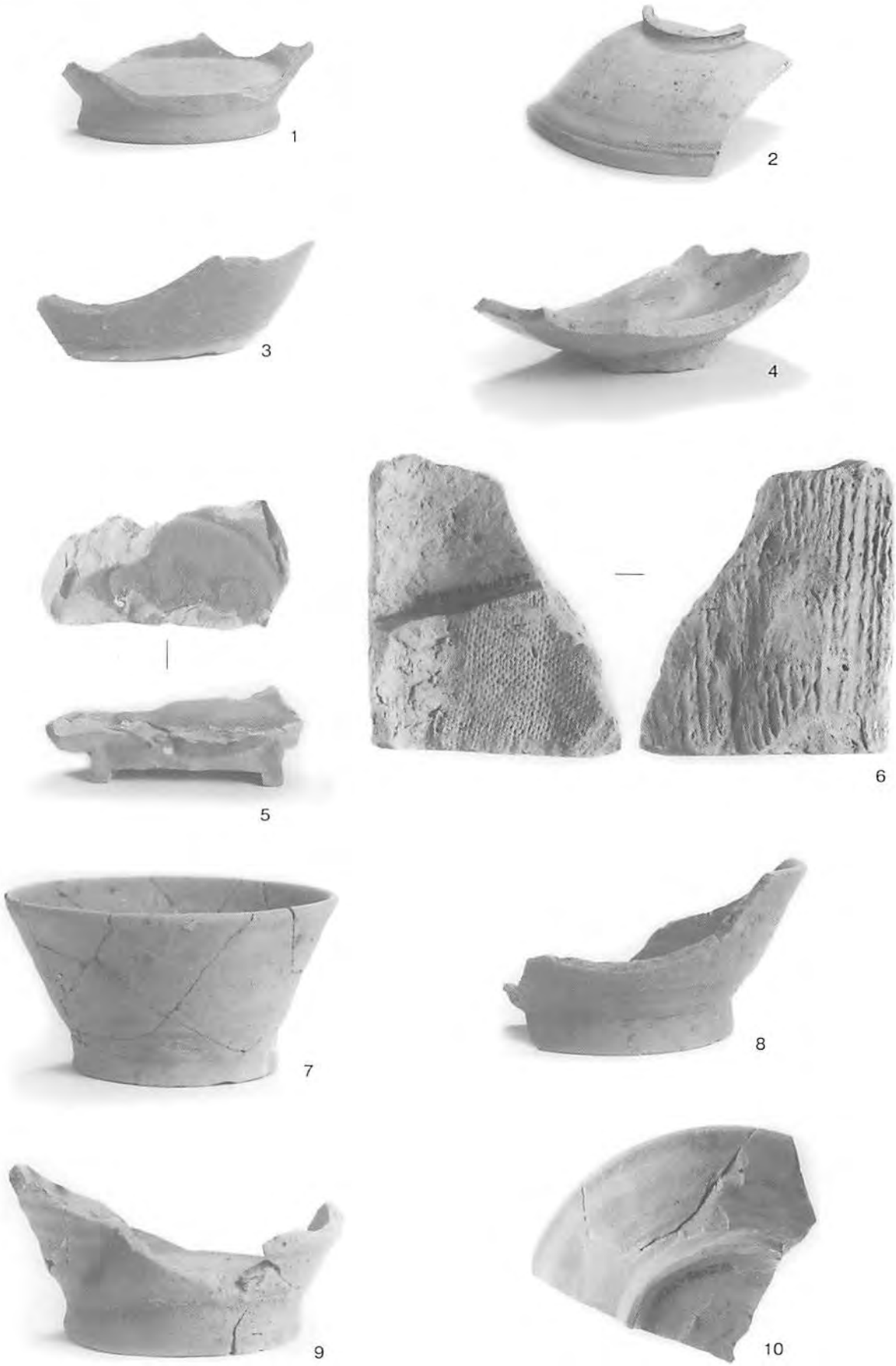
PL. 3　SD01完掘状況（北→南）

PL. 4　SD01完掘状況（西→東）

PL. 5　SD01土層断面（西→東）



PL. 6　３区　Ⅴ層完掘状況（西→東）



PL. 7　出土遺物 (1)

11

12

13

14

15

17

16

19　18

20　21　22　23

PL. 8　出土遺物 (2)

PL. 9　出土遺物 (3)（写真のみ）

PL. 10　出土遺物 (4)（写真のみ）

第Ⅴ章　春日地区第３次調査の成果

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査は、熊本駅北部線街路改良事業に伴う二本木遺跡群の発掘調査である。

平成14年５月８日付け熊土第329号熊本県熊本土木事務所長により、二本木遺跡群（熊本市春日１丁目8021他11筆、調査対象面積約465㎡）の本調査実施を依頼された。本調査区は平成12年度と平成13年度の発掘調査実施区に挟まれた場所であり、速やかに調査をすすめるため、確認調査を省き本調査に入った。本調査は、文化財保護主事河野真理子、非常勤職員宮崎拓が担当となった。

また、平成14年７月29日付け熊土第775号により熊本市春日１丁目766－48他２筆（調査対象面積約130㎡）の確認調査の依頼があった。主任学芸員亀田学、宮崎拓が担当となり、８月12日に実施したところ平安時代の溝跡と住居跡の存在を確認した。このため、平成14年８月29日付け教文第1087号により、事業の実施に当たっては本調査が必要な旨、熊本県熊本土木事務所長あて通知を行った。

ここは、本来平成15年度工事着手予定地であるが、関連業者等の都合により予定を早めることとなり、本年度予定の調査が終わり次第引き続き、河野真理子、宮崎拓で本調査をすることとなった。（平成14年９月24日付け熊土第1048号）

本調査の期間は、第329号依頼分が平成14年６月３日から９月17日まで、第1048号依頼分が同年10月１日から11月29日までである。

１　調査区について（第１～２図）

発掘調査は次のような調査区に分けて実施した。

主要地方道熊本高森線の北側に１区と２区、南側に３区と４区を設定した。１区は米本陶磁器店前、２区は１区の東側のマンション前、３区は肥後銀行熊本駅前支店の東側隣接地点、４区は３区東側隣接箇所である。廃土置き場と通路確保のため、１区をA、B、Cの３つ、２区をA、Bの２つに分けて調査した。

２　進行状況

【６月】

３日　１－B区の表土剥ぎ。現上下水道管と井戸跡があり、慎重に行われた。

４～７日　撹乱を取り除きながら、遺構検出のできるⅣ層まで掘り下げと清掃を実施した。

５日　測量杭設置、掘り下げと清掃を実施した。

10～14日　Ⅳ層検出の土壙や溝を掘削・完掘、写真撮影と手測りによる図面実測にて記録を残す。

17・18日　Ⅴ層（古代・中世の遺構検出面）まで掘り下げと清掃を行った。

19日～　Ⅴ層検出遺構の掘削・完掘、写真撮影、実測を行った。

【７月】

引き続き、１－B区の調査を実施した。

２・３日　２－B区の表土剥ぎと埋設管除去を行った。現上下水道管・ガス管他埋設管によりかなり壊されていた。

４日　２－B区の測量杭を設置した。ほとんど地山が残っていないので、調査区内には基準杭が打てない。作業は風雨対策のため土嚢積みを実施した。

５日　１－B区の調査を終了した。２－B区は風雨対策を行った。

８日　１－B区の埋め戻しと１－C区の表土剥ぎを実施し、２－B区のⅢ層を検出した。

９日　１－C区の表土剥ぎと清掃を実施した。

10日　１－C区の測量杭を設置し、撹乱部分の掘削を行った。

11日　１－C区の撹乱部分を掘削した。２－B区のⅢ・Ⅳ層を掘削し、遺構を検出した。

12日～　１－C区・２－B区の遺構の掘削・完掘、写真撮影、実測を実施した。

17日　１－C区は遺構密度が高いので、遺構内の測量杭を抜いた。２－B区は撹乱が多く、測量杭が調査区内にないので、光波測距儀による実測を開始した。

18日　２－B区の調査を終了した。

26日　２－B区の埋め戻しを完了した。

29日　２－A区の表土剥ぎと調査区内整備を行った。

31日　２－A区の測量杭を設置した。

【８月】

７日　１－C区の遺構掘削にかなりの時間を要することがわかり、さらに１－A区をまだ残している状態なので、終了予定の９月２日には間に合わないと判断した。調査終了を９月27日まで延期することにした。

７日～８日　２－A区の撹乱、Ⅲ・Ⅳ層を掘削した。

９日　２－A区の遺構を検出した。

12日～　２－A区の遺構の掘削・完掘、写真撮影、実測を行った。

22日　２－A区の調査を終了し、埋設管の業者に現場を引き渡した。

28日　１－C区の調査を終了した。

29日　１－C区の埋め戻し、１－A区の表土剥ぎを実施した。

30日　１－A区の表土剥ぎ、廃土置き場の整備を行った。

【９月】

２日　１－A区内を清掃し、撹乱を掘削した。

３日　測量杭を設置し、撹乱、Ⅳ層を掘削した。

６日　遺構検出を実施した。

13日　１－A区の調査を終了した。来年度調査予定の一部約130㎡を10月から引き続き調査することになり、手続きを始める。

17日　１－A区の埋め戻しを実施した。これより月末まで図面整理に入る。

【10月】

１日　３区の表土剥ぎを行ったが、現上下水道管が２ケ所走っており、その部分の調査を断念した。
今回の調査区は非常に狭く、廃土置き場を調査区内につくることは難しいため、電車通りを挟んだ合同倉庫前の県所有地まで運ぶことになった。交通量が多く横断歩道まで遠いので、一輪車を使って人力で運ぶのはかなり効率が悪いが条件的に仕方がないと判断した。作業員の安全には十分気を付けて作業を実施した。
４区については隣で行われているＮＴＴの工事が終わり次第、調査に入ることになった。

３日　測量杭を設置した。調査区内の基準杭が２本とも上下水道管の位置にあり、調査区内には逃げ杭しか打てなかった。撹乱、Ⅲ層を掘削した。

７日　Ⅳ層を掘削した。

11日　３区の遺構を検出し、遺構の掘削・完掘、写真撮影を行い、実測を開始した。

25日　４区の表土剥ぎを実施した。以前あった建物の地下室が存在し、約半分が調査できない。

28日　４区の環境整備を行い、Ⅲ層を掘削した。

29日　Ⅳ層を掘削した。

30日　４区の遺構を検出し、遺構の掘削・完掘、写真撮影を行い、実測を開始した。

【11月】

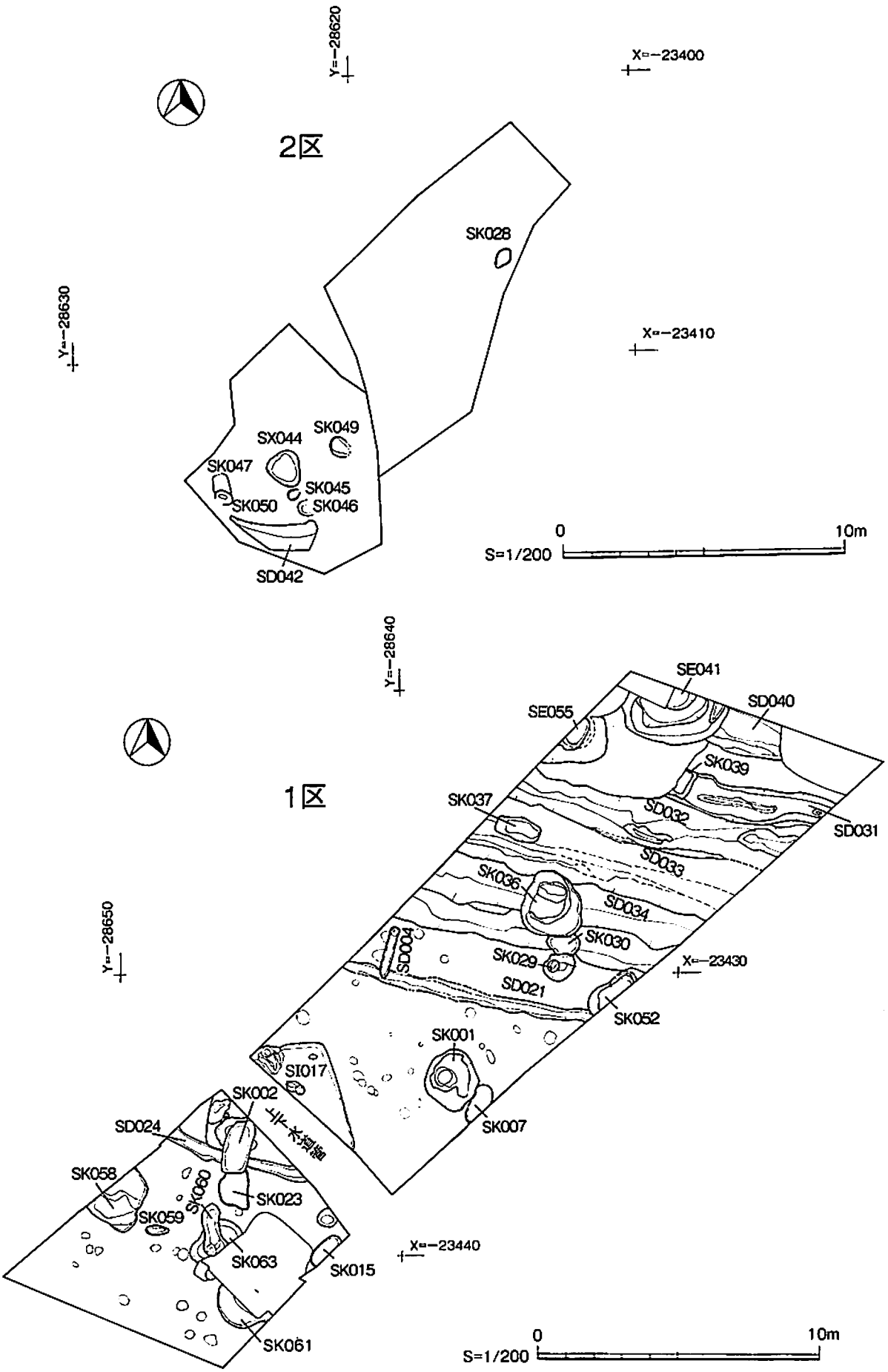
引き続き３・４区の遺構の掘削・完掘、写真撮影、実測を行った。

12日　４区全体を完掘し、土層観察用として西側に深堀トレンチを入れる。

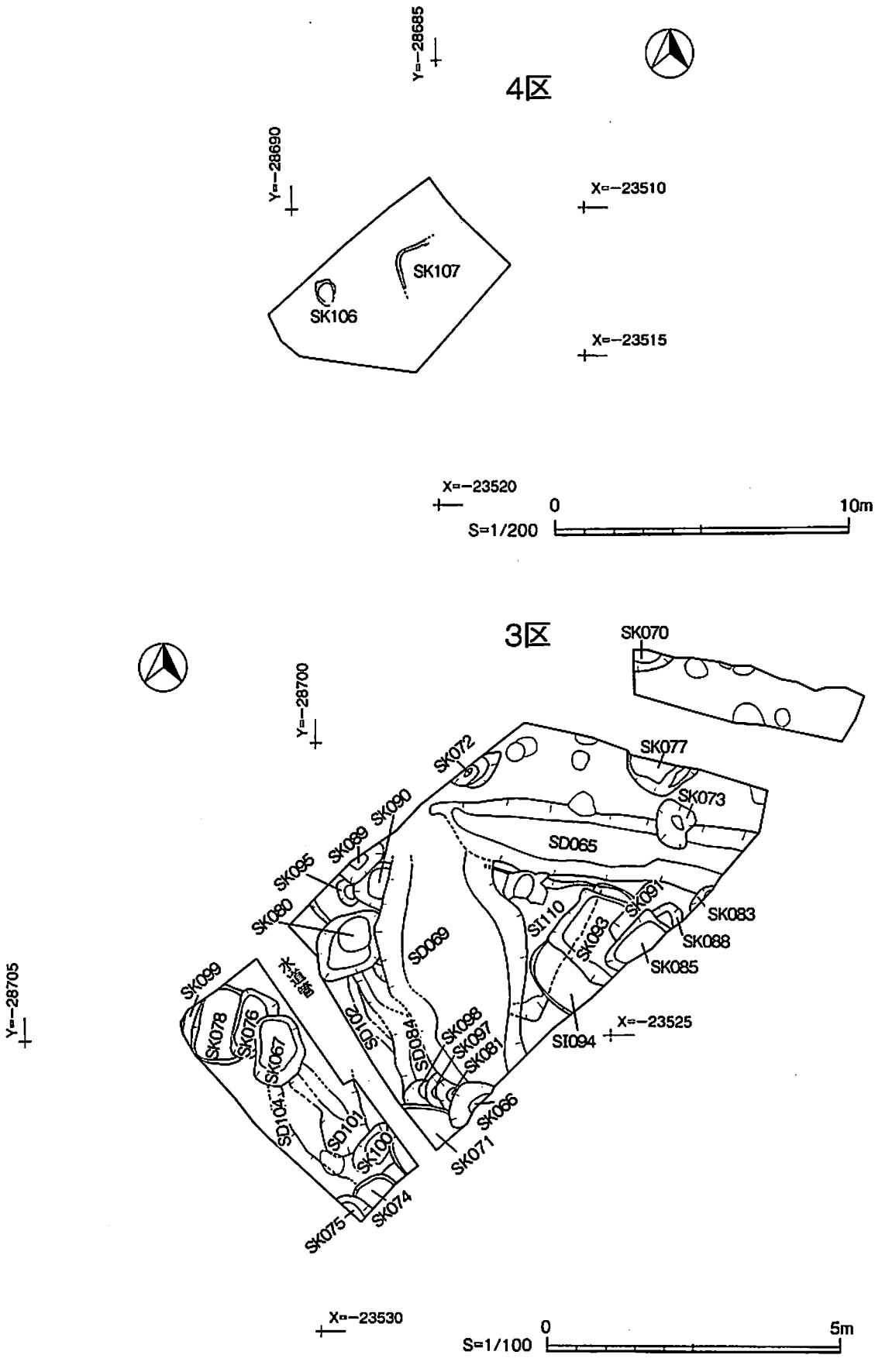
19日　３区全体を完掘した。

20日～28日　遺物整理及び図面整理を行った。

29日　残務整理を行った後、調査を終了した。



第１図　調査１区・２区遺構配置図



第２図　調査３区・４区遺構配置図

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	平面形	長軸	短軸	断面形	深さ	備考
土壙	SK001	略円形	2.02	2.02	筒状	0.85	
	SK002	長方形	1.59	0.94	略台形	0.83	
	SK003	半円形	1.47～	0.53～	略台形	0.30	約1/2が撹乱されている
	SK007	楕円形？	1.42～	0.69～	台形？	0.21	約1/2は調査区外にのびる
	SK015	楕円形？	1.31	0.46～	台形？	0.11	約1/2は調査区外にのびる
	SK020	不整円形？	0.67～	0.61	略台形	0.18	
	SK023	略長方形？	1.67～	1.02	台形	0.21	両端が撹乱されている
	SK029	略円形	1.12	0.97	略三角形	0.36	SK030を切る
	SK030	略楕円形	1.17	0.78	略台形	0.26	
	SK036	不整円形	2.26	2.05	略三角形	0.87	
	SK037	略長方形	1.62	0.85	略台形	0.43	
	SK039	方形？	1.04	0.67～	不正台形	0.20	約1/2は調査区外にのびる
	SK052	略円形？	1.88	0.50～	不正台形	0.82	約1/2は調査区外にのびる
	SK058	略方形？	2.14	1.40～	略台形？	0.25	約1/2は調査区外にのびる
	SK059	略楕円形	0.84	0.34	台形	0.17	
	SK060	略楕円形？	1.92～	0.56	不正台形	0.66	一部分が撹乱されている
	SK061	略円形？	1.91	0.87～	略台形	0.14	約1/2が撹乱されている
	SK063	略円形？	1.98	1.07～	略台形	0.32	約1/2が撹乱されている
竪穴住居跡	SI017	略方形？	4.77	4.32	略台形	0.30	SK002に切られ、撹乱されている。約1/2が残存している
井戸跡	SE041	略円形？	3.65～	2.00～	段をもつ筒状	2.95～	約1/2を検出、掘削可能な深さで止めている
	SE055	不整方形？	2.20～	1.50～	段をもつ筒状	2.30～	調査区外にのびる
溝跡	SD004	略長方形	1.83	0.32	台形	0.16	
	SD021	略長方形	4.55～	0.26	略台形	0.14	一部分が撹乱されている
	SD024	略長方形	5.20～	0.45	台形	0.26	
	SD031	略長方形	4.61～	1.07	略台形	0.25	SK039が切っている
	SD032	帯状	9.52～	1.33～	深い皿状	0.62	
	SD033	帯状	8.82～	？	深い皿状	0.96	SD032が切っている
	SD034	帯状	9.21～	？	段をもつ略台形	1.86	SD033が切っている
	SD040	略長方形？	3.37～	1.46～	略台形？	0.65	約1/2は調査区外にのびる

表１　１区検出遺構一覧表

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	平面形	長軸	短軸	断面形	深さ	備考
土壙	SK028	楕円形	0.78	0.52	台形	0.12	
	SK045	楕円形？	0.33～	0.38	台形	0.08	約1/2を他の遺構から切られている
	SK046	楕円形？	0.28～	0.54	台形	0.11	約2/3を他の遺構から切られている
	SK047	不整長方形	0.58～	0.56	台形	0.20	約1/3をSK050から切られている
	SK049	不整楕円形	0.56～	0.61	台形	0.12	
	SK050	楕円形？	0.67	0.50	台形	0.54	約1/2を他の遺構から切られている
溝跡	SD042	帯状	2.58～	0.88～	（台形）	0.55	他の遺構から切られている
不明遺構	SX044	隅丸三角形	1.20～	1.18	台形	0.52	瓦器椀片が出土

表２　２区検出遺構一覧表

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	平面形	長軸	短軸	断面形	深さ	備考
土壙	SK066	不整円形？	0.96	0.45～	台形	0.50	約1/2は調査区外にのびる
	SK067	不整方形	1.20	0.86	皿状	0.20	須恵器出土
	SK070	楕円形？	0.66	0.48	深い皿状？	0.34	約3/4は調査区外にのびる
	SK071	楕円形？	0.97～	1.25～	台形？	0.41	SK066に切られ、調査区外にのびる
	SK072	不整楕円形？	0.95	0.37～	U字状	0.50	約1/2は調査区外にのびる
	SK073	不整円形？	0.74	0.66	U字状	0.62	
	SK074	円形？	0.60～	0.46～	深い皿状？	0.30	SK075に切られ、調査区外にのびる
	SK075	楕円形？	0.57～	0.30～	深い皿状？	0.30	調査区外にのびる
	SK076	隅丸方形？	1.22	0.67	台形	0.19	SK067に切られている
	SK077	不整方形？	1.13	0.47～	2段掘り	0.37	約1/2は調査区外にのびる。小骨片出土
	SK078	隅丸方形？	1.33	0.70～	深い皿状で、ほぼ中央に凹み	0.35	遺物出土
	SK080	隅丸方形	1.10～	1.02	深い皿状の2段掘り	0.51	
	SK081	楕円形？	0.37～	0.56～	U字状	0.43	SD069に切られている
	SK083	不整方形？	0.58～	0.15～	深い皿状？	0.14～	約2/3は調査区外にのびる
	SK085	隅丸方形？	1.12～	0.53～	不整台形？	0.42	約1/2は調査区外にのびる
	SK087	不整楕円形	0.40～	0.20～	深い皿状？	0.25	他の遺構に切られている
	SK088	不整方形	0.45～	0.36～	浅い皿状？	0.13	他の遺構に切られ、調査区外にのびる
	SK089	楕円形？	0.85	0.34～	不整台形	0.42	攪乱され、調査区外にのびる
	SK090	不整方形？	0.80	0.56～	略台形？	0.31	SD069に切られている
	SK091	不整方形？	1.20～	0.40～	台形？	0.16～	他の遺構に切られている
	SK093	不整方形？	1.30～	1.25	皿状	0.24	他の遺構に切られている
	SK095	方形？	0.42～	0.30～	台形？	0.29	SK090に切られている
	SK097	不整楕円形？	0.60～	0.40～	U字状？	0.42	SK081に切られている
	SK098	不整楕円形？	0.38～	0.47	深い皿状？	0.43	SK097に切られている
	SK099	円形？	0.90～	0.17～	深い皿状？	0.20	SK078に切られている
	SK100	楕円形？	0.93～	0.64	深い皿状	0.17	他の遺構に切られている
竪穴住居跡	SI094	隅丸方形？	1.27～	2.22	浅い皿状	0.06	SK093に切られ、調査区外にのびる
	SI110	方形？	2.50	2.00～	深い皿状	0.30	他の遺構に切られている
溝跡	SD065	帯状？	5.69～	1.25	略台形	0.56	調査区外にのびる
	SD069	帯状？	4.95～	2.55	略台形	0.50～	調査区外にのびる
	SD084	帯状？	3.50～	0.72～	深い皿状？	0.15	他の遺構に切られている
	SD101	帯状？	3.65～	1.04	不整台形	0.58	
	SD102	帯状？	2.10～	0.82～	2段の深い皿状?	0.62	
	SD103	不明	－	－	不明	－	土層断面で確認
	SD104	帯状？	2.62～	0.70～	深い皿状？	0.18	
	SD105	不明	－	－	不明	－	土層断面で確認

表３　３区検出遺構一覧表

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	平面形	長軸	短軸	断面形	深さ	備考
土壙	SK106	不整方形	0.63～	0.64	略台形	0.24	調査区外にのびる
	SK107	方形？	1.30～	0.95～	略台形	0.31～	他の遺構に切られている

表４　４区検出遺構一覧表

第２節　調査の成果

１　基本土層

Ⅰ層：撹乱･表土層である。

Ⅱ層：近世～近代の整地層で、褐灰～暗褐色を呈し、シルト質である。

Ⅲ層：古代～中世の遺物包含層である。黒褐色のシルト質である。

Ⅳ層：古代～中世の遺物包含層で、Ⅲ～Ⅴ層の漸移層である。

Ⅴ層：黄褐色土層である。

Ⅵ層：黄色細砂層である。

Ⅶ層：灰色の粘土質の層である。鉄分が沈着する。

Ⅷ層：暗オリーブ灰色の粗砂層である。

Ⅸ層：にぶい黄色粘土層で、粘土と細砂のラミナが見られ､鉄分が沈着する。

Ⅹ層：にぶい黄橙色粘土層で、粘土と細砂のラミナが見られ､鉄分が沈着する。

XI層：暗青灰色細砂層で、下部に１～３cm同色粘土が堆積する。

XII層：にぶい黄橙色粘土層で、上部に暗青灰色細砂のラミナが見られる。

XIII層：暗オリーブ灰色の細砂層である。

XIV層：オリーブ灰色の粘土層である。

XV層：黒色の細砂層である。

XVI層：にぶい黄褐色の粘土層である。

２　遺構について

各遺構の形状、大きさ等については表１～４、遺構から出土した遺物の詳細については表５～８のとおりである。

ここでは、主な遺構の特徴的なことについて記述する。検出遺構土層注記は表９～12のとおりである。

(1) １区の遺構

遺構分布状況

１区の遺構分布状況を見ると、７条の溝跡がほぼ北西から南東の同じ方向に伸びており、切り合い関係が確認できる。溝跡が伸びる方向に、規則性があると考えられる。

井戸跡２基が調査区の北東隅に、竪穴住居跡１基が調査区の西側に寄った箇所にある。土壙は調査区の全域に分布している。

竪穴住居跡

ＳＩ０１７

遺構のほぼ中央部は水道管によって破壊されており、さらにSK002によって切られている。遺構の残存状況は悪い。北側端部に竈を作っている。主柱穴は北東部と南西部の２基しか確認できていない（第３図）。

土壙

ＳＫ０５８

土層を観察すると、板状のものが立っていた痕跡が確認できる。このことから、木棺の可能性がある。覆土①層の下面から銅銭５枚が重なって出土した。また、覆土①層からは中世の土師皿片も出土している（第５図）。

出土した銅銭は１・２が洪武通宝、３が元符通宝？、４が天聖通宝、５が政和通宝である（第６図）。

ＳＫ０６０

床面の片方端部に、ピット状の掘り込みがある（第７図）。

溝跡

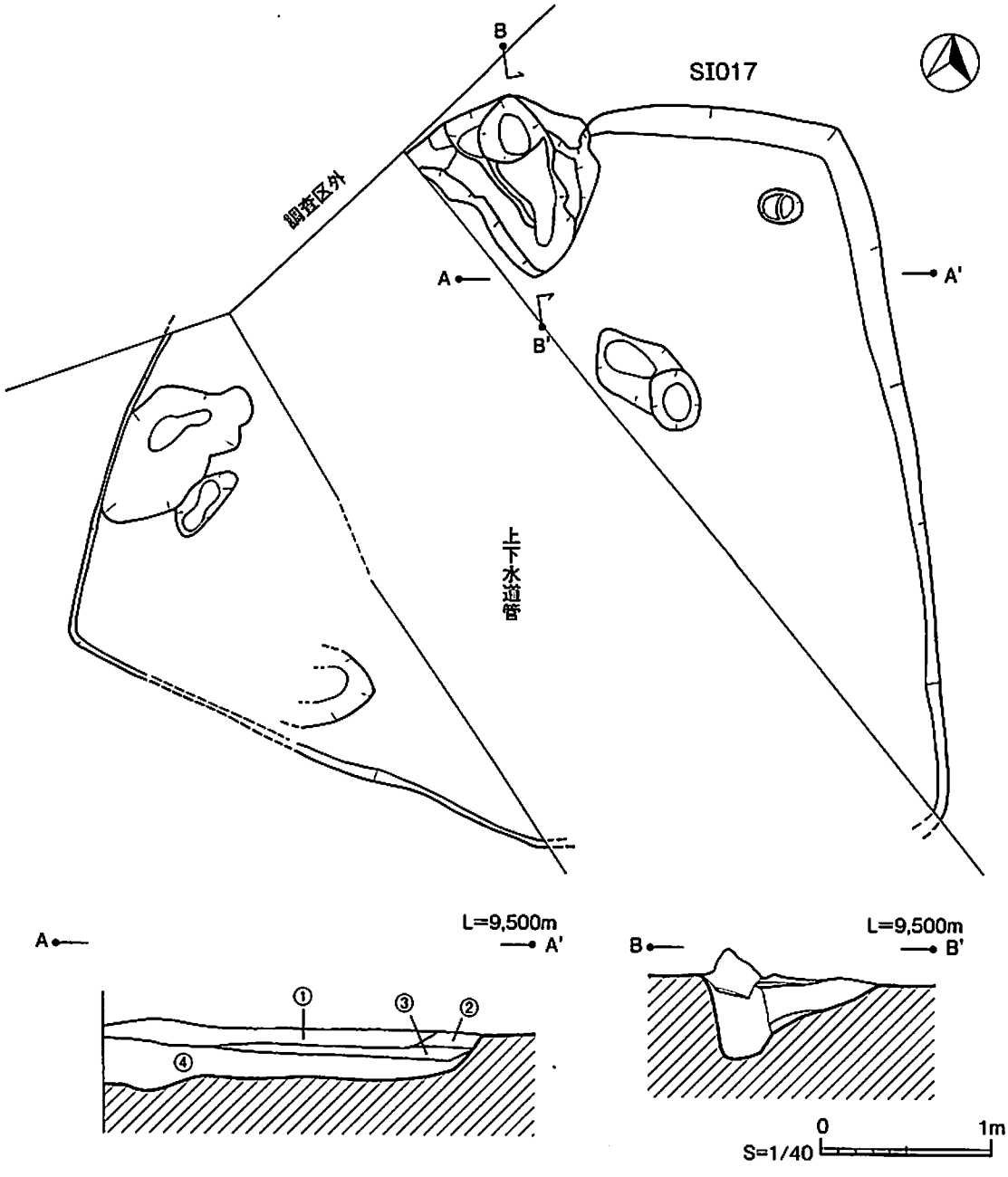
ＳＤ０３２･ＳＤ０３３･ＳＤ０３４

土層を観察すると、SD034→SD033→SD032の切り合い関係を確認できる（第９図）。

井戸跡

ＳＥ０４１

北側約半分は調査区外にある。調査の安全確保のため、底面までは調査せず、途中で掘削を止めている。覆土出土の遺物は、９世紀後半～終末の土師器片が大半で、少量の13世紀中頃～後期の青磁片が混じる（第10図）。



第３図　竪穴住居跡（SI017）実測図

(2) ２区の遺構

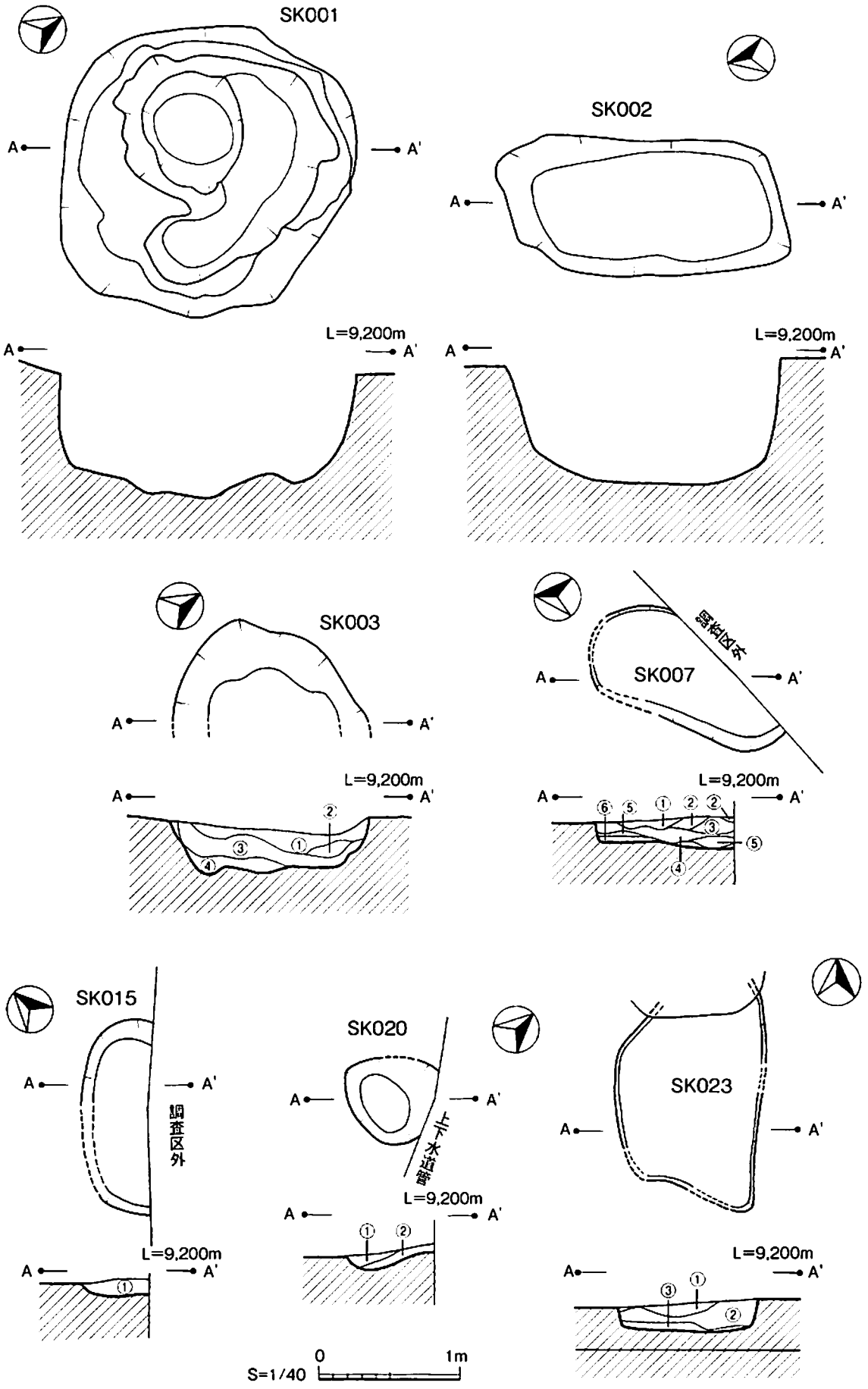
遺構分布状況

２区の大半は撹乱されている。撹乱が及んでいない部分に土壙等がある。

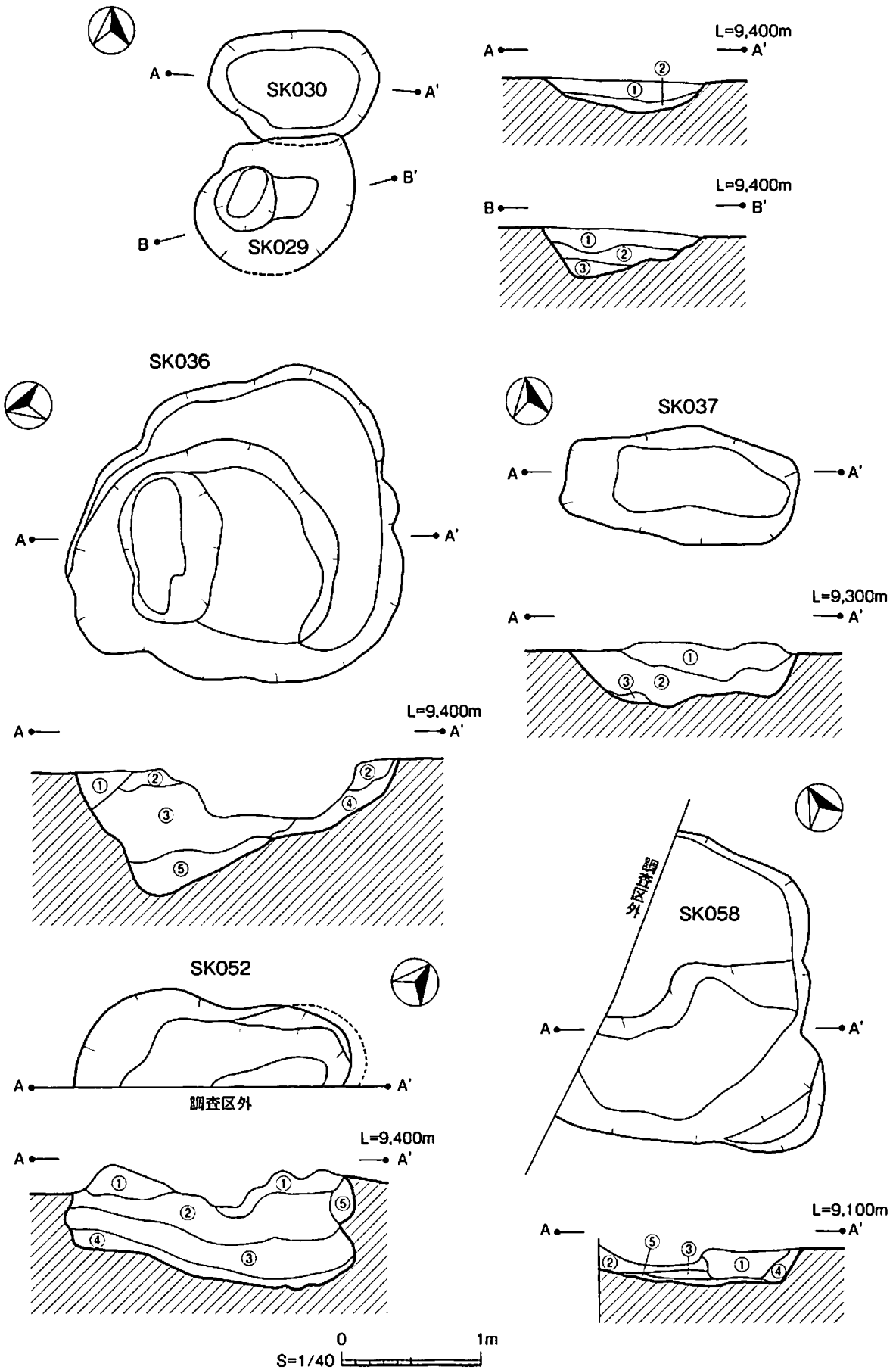
(3) ３区の遺構

遺構分布状況

調査区のほぼ中央に、東西方向、北西から南東方向にのびる溝跡が各１本ある。これらの溝跡の周辺に土壙や竪穴住居跡が分布している。



第４図　土壙（SK001・002・003・007・015・020・023）実測図

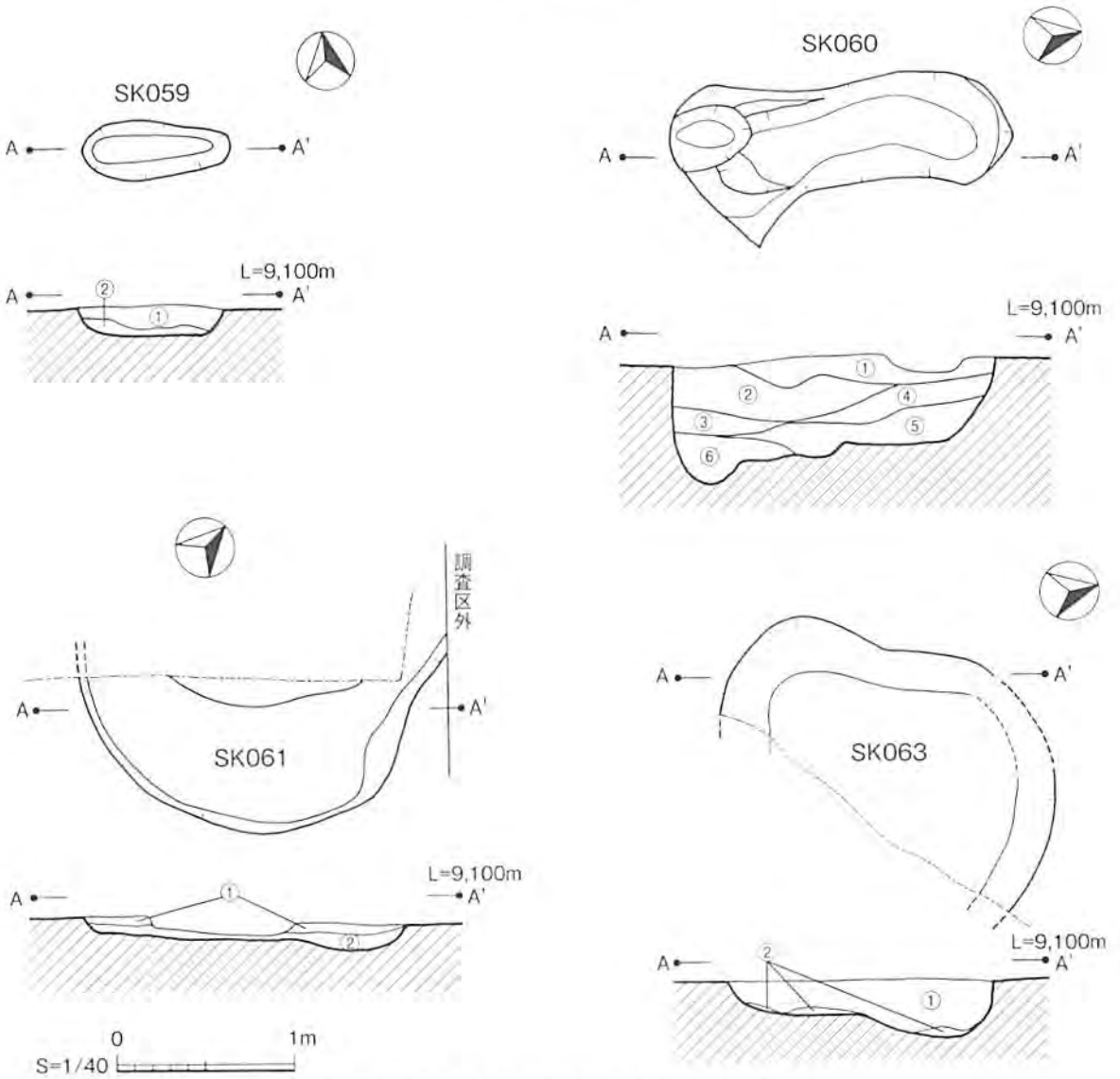


第5図　土壙（SK029・030・036・037・052・058）実測図

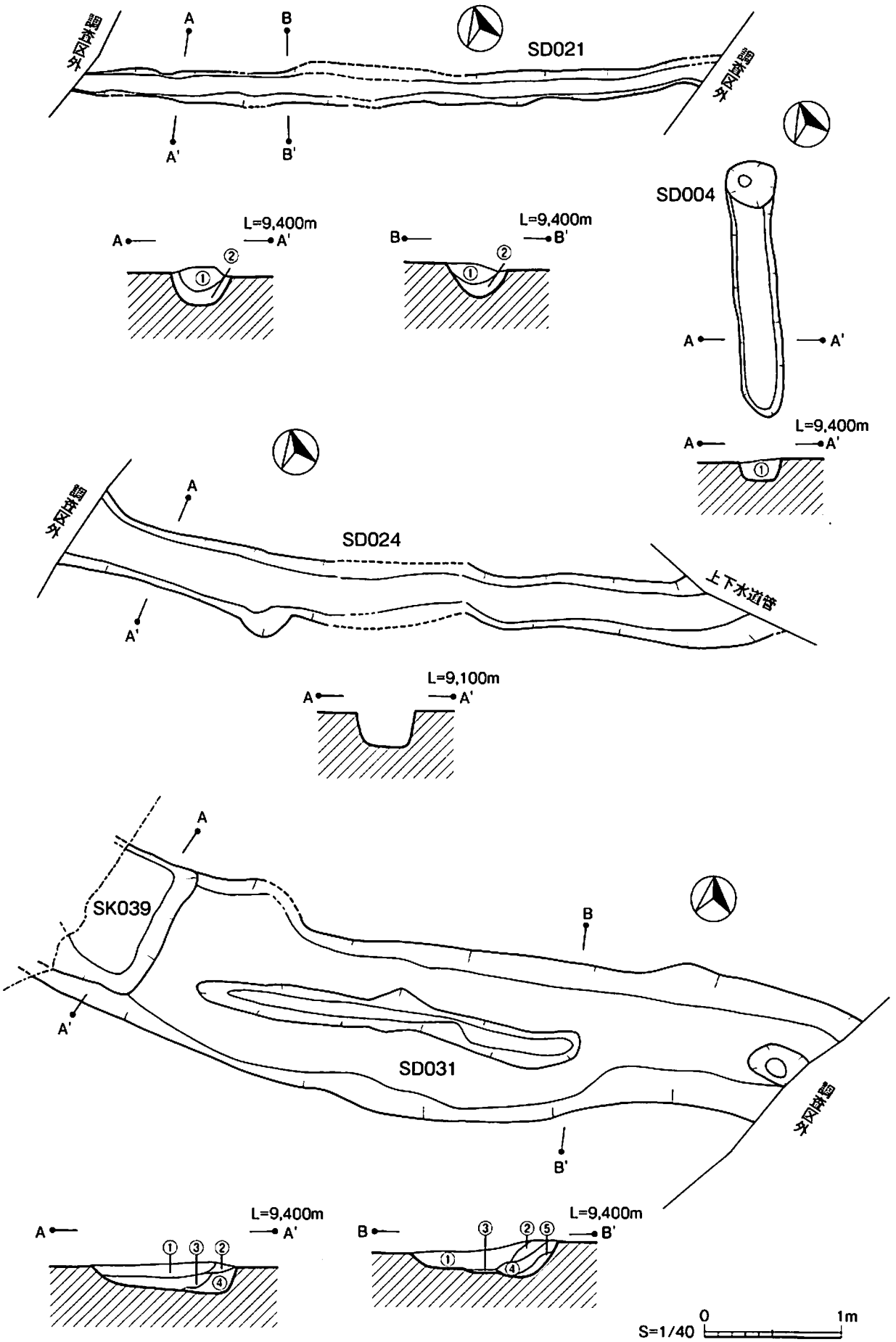
第６図　土壙（SK058）出土遺物（古銭）

図版番号	遺物番号	種　類	径（mm）	重量（g）	出土地点	層位	備　考
6	1	洪武通宝	22.0	2.6	1区SK058	－	
6	2	洪武通宝	22.8	2.2	1区SK058	－	
6	3	元符通宝？	23.2	2.5	1区SK058	－	
6	4	天聖元宝	22.7	3.0	1区SK058	－	
6	5	政和通宝	23.7	2.7	1区SK058	－	

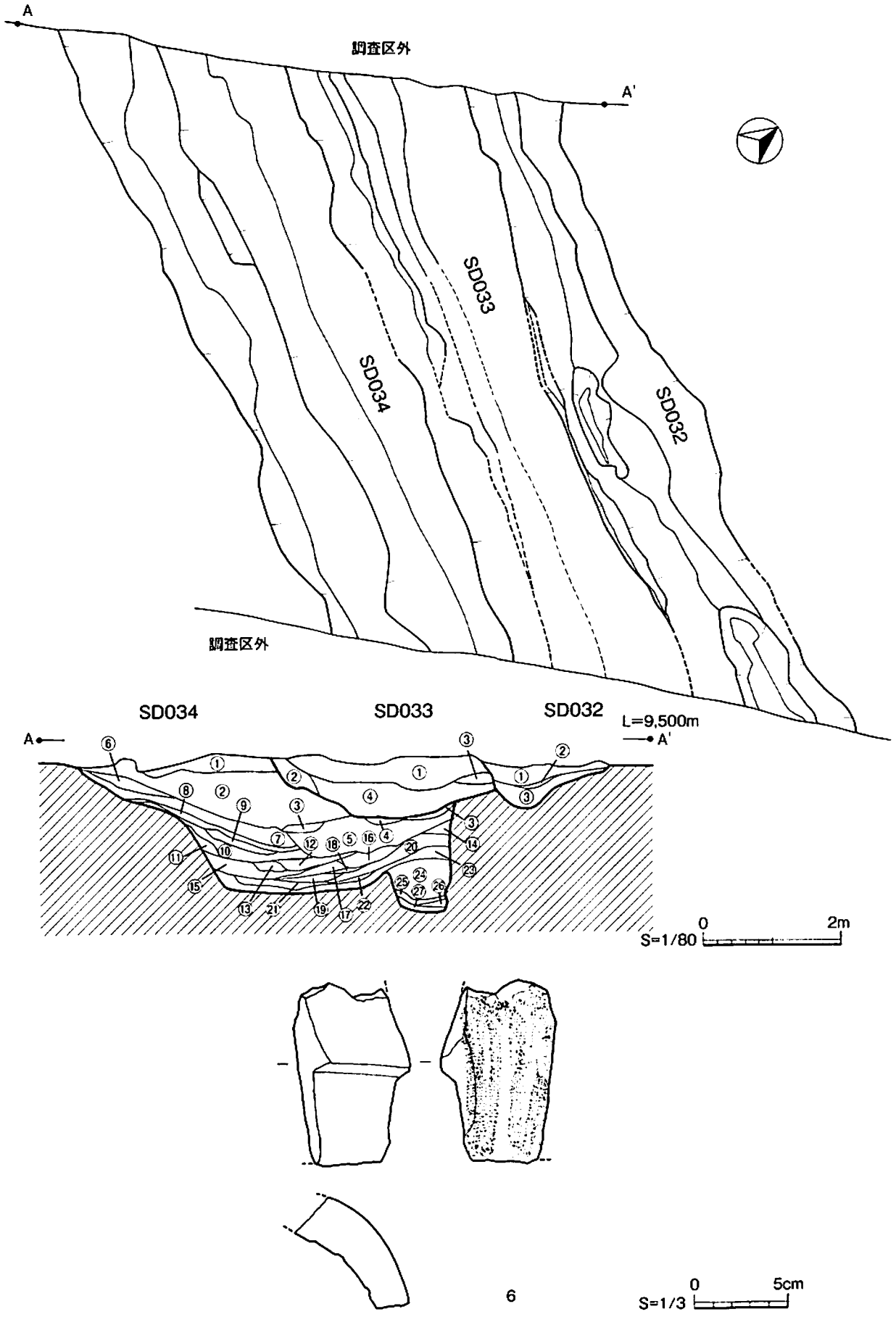
表５　古銭観察表



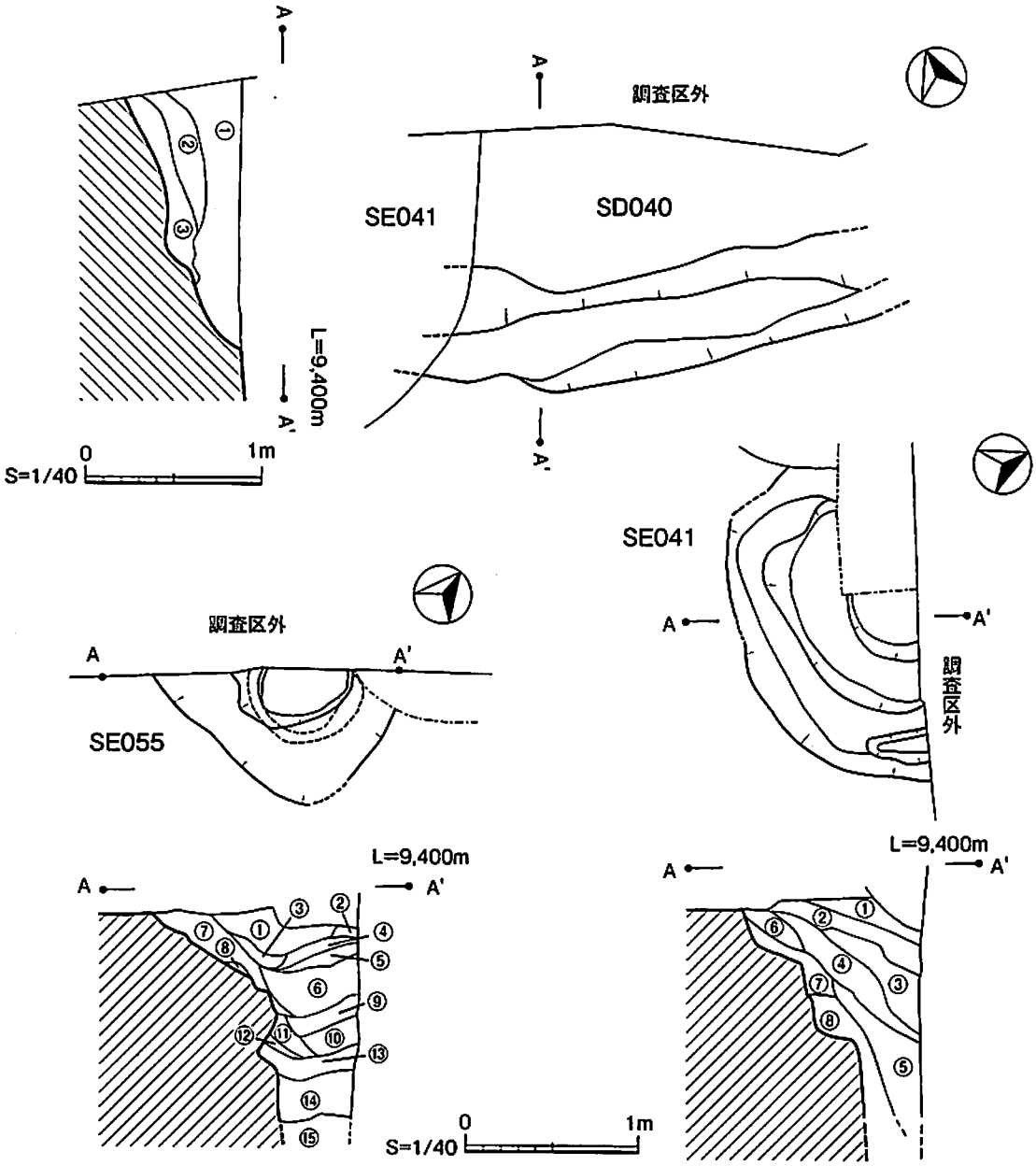
第７図　土壙（SK059・060・061・063）実測図



第８図　土壙（SK039）・溝跡（SD004・021・024・031）実測図



第９図　溝跡（SD032・033・034）実測図及び出土遺物実測図



第10図　溝跡（SD040）・井戸跡（SE041・055）実測図

土壙

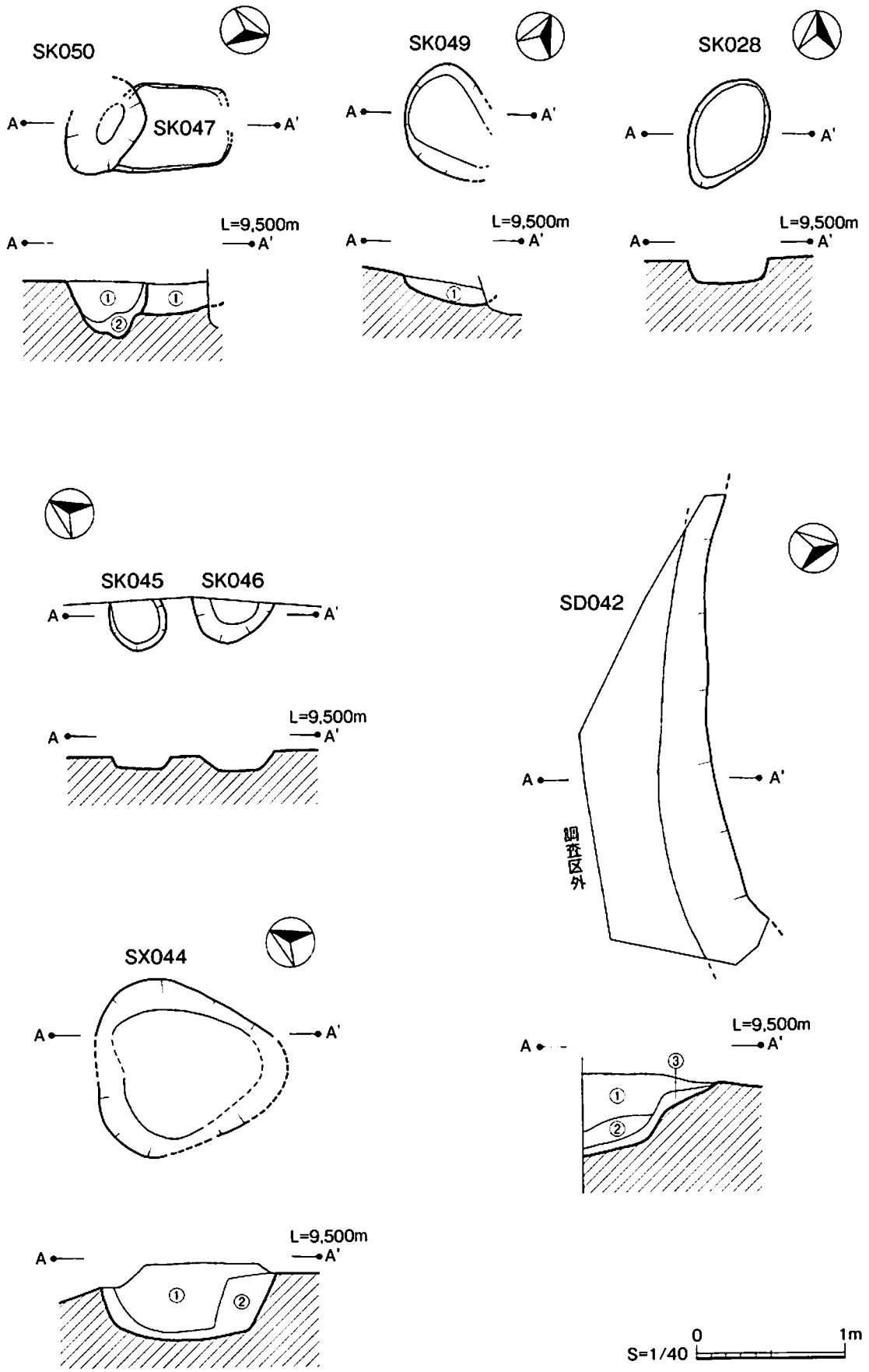
ＳＫ０６７

土壙の北西隅に床に置いた状態で高台付須恵器が出土した。出土状況から、供献されたものと考えられる。出土した須恵器の高台は、「ハ」の字形に開いたやや高めものである。体部はほぼ直線的にのび、底部との境が明確である。須恵器の年代は８世紀後半～９世紀前半に考えられる（第14図）。

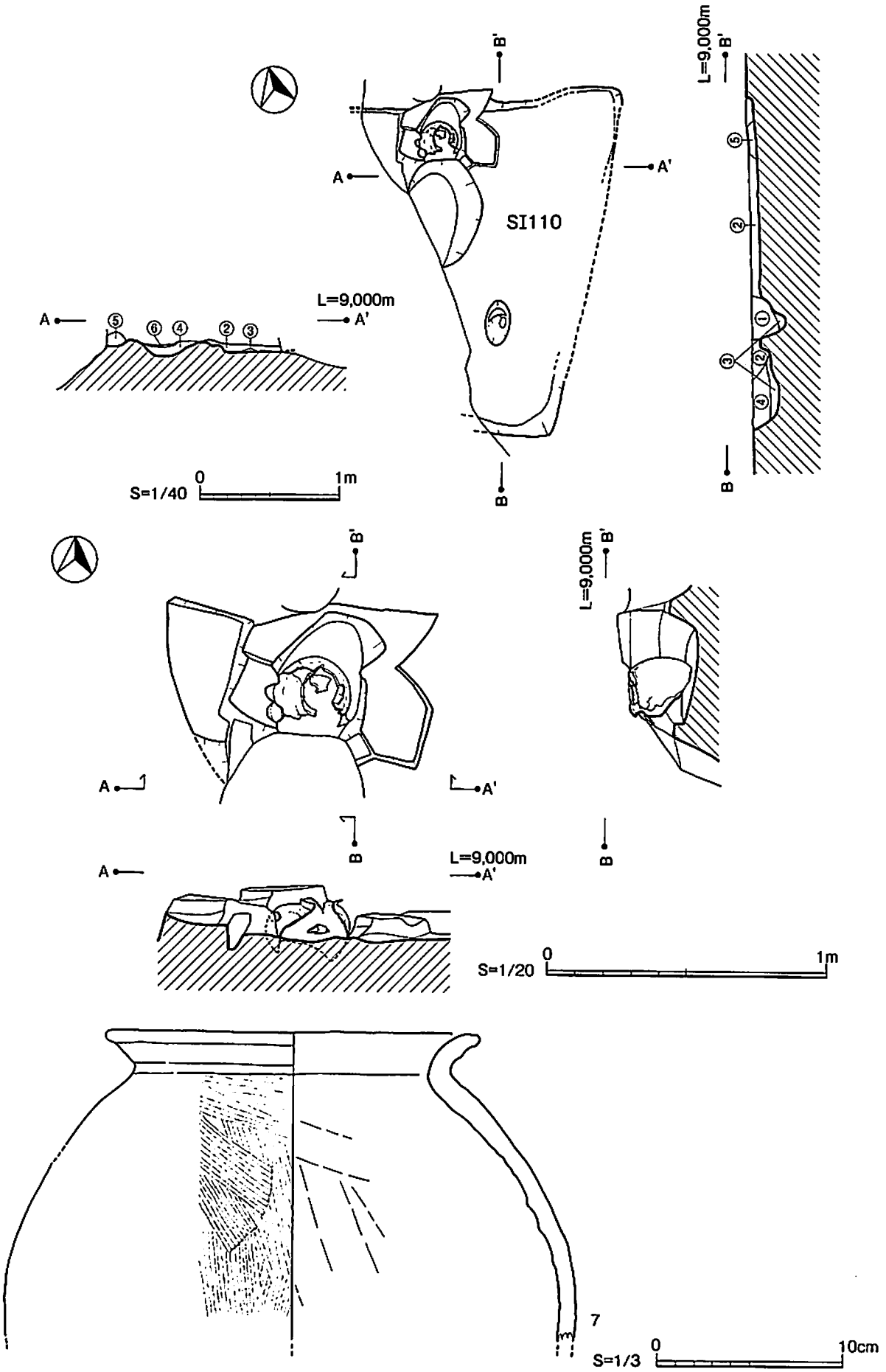
ＳＫ０７８

土壙の北側に寄った箇所から、土師器・須恵器、礫が一括して出土した。礫は床に着いた状態であったが、土師器・須恵器は覆土中から出土した（第13図）。

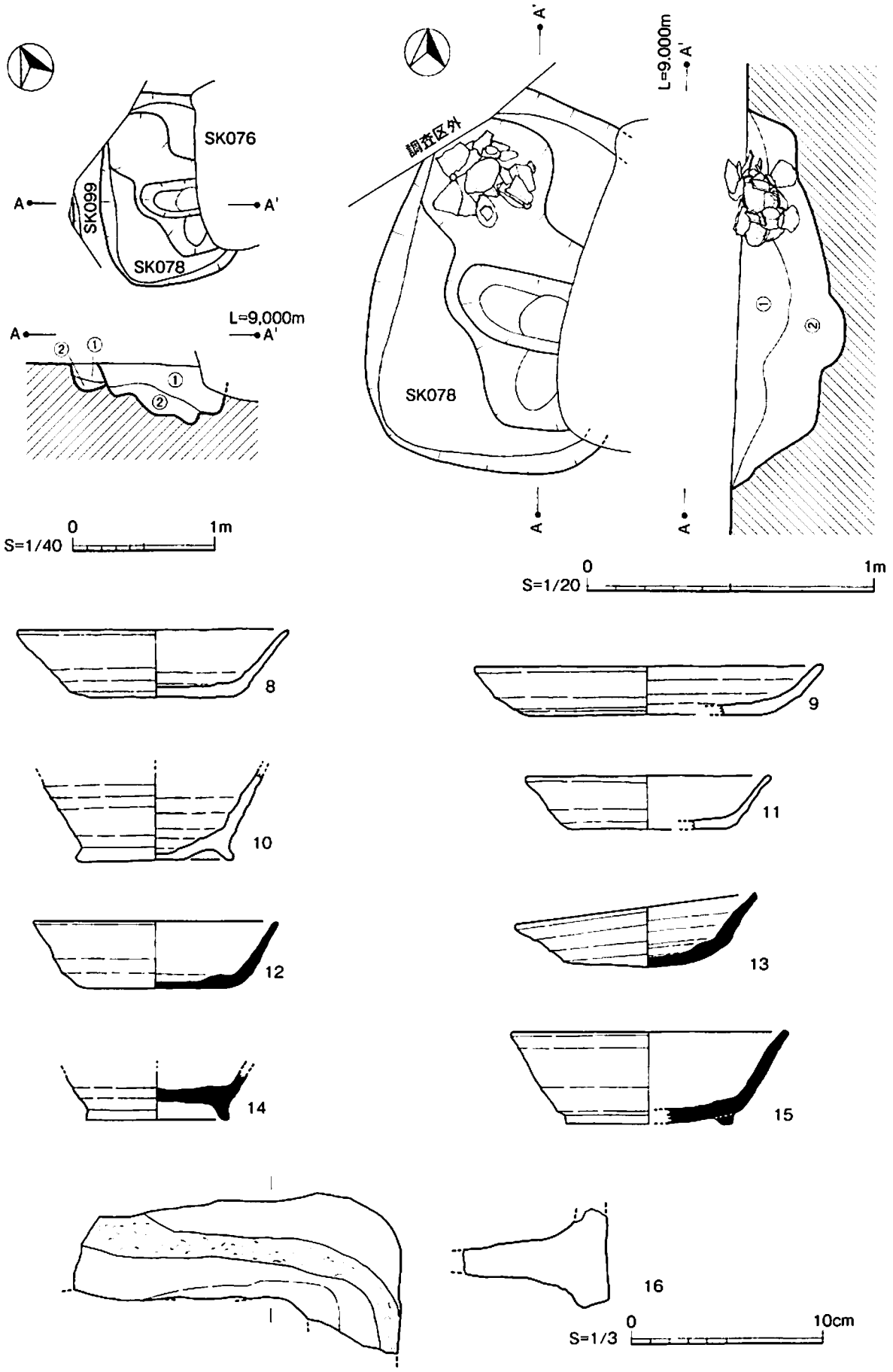
出土した土師器は４点である。８・９・11は杯である。10は高台付杯である。須恵器は４点出土しており、12・13は杯、14・15は高台付杯である。一括して出土した遺物の年代は８世紀後半～９世紀前半と考えられる。16は甕片である。右上端部付近の部位であろう。



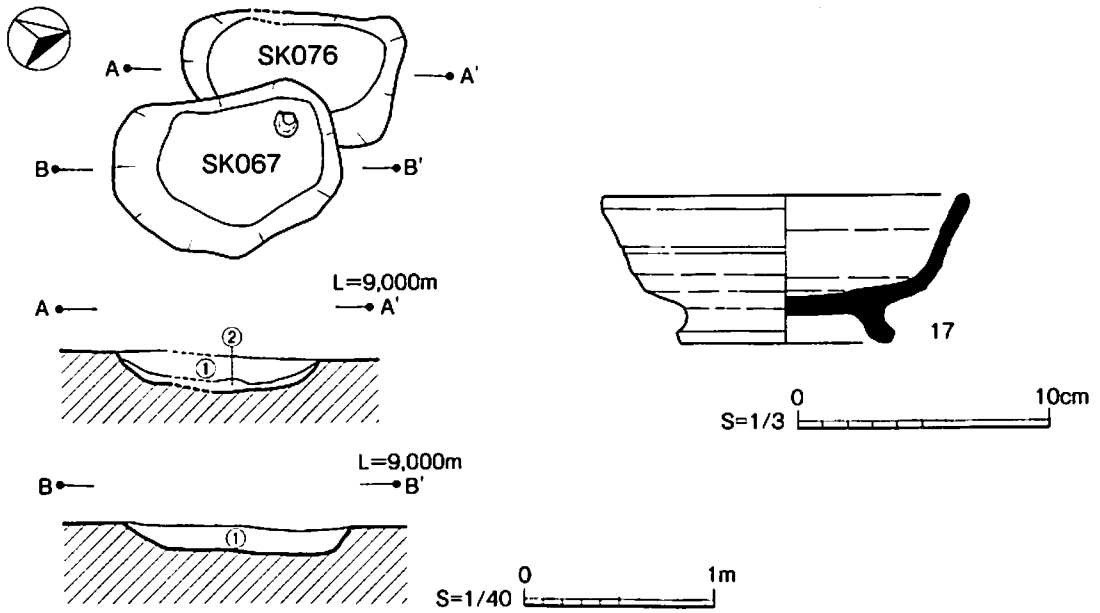
第11図　土壙（SK028・045・046・047・049・050）・溝跡（SD042）・不明遺構（SX044）実測図



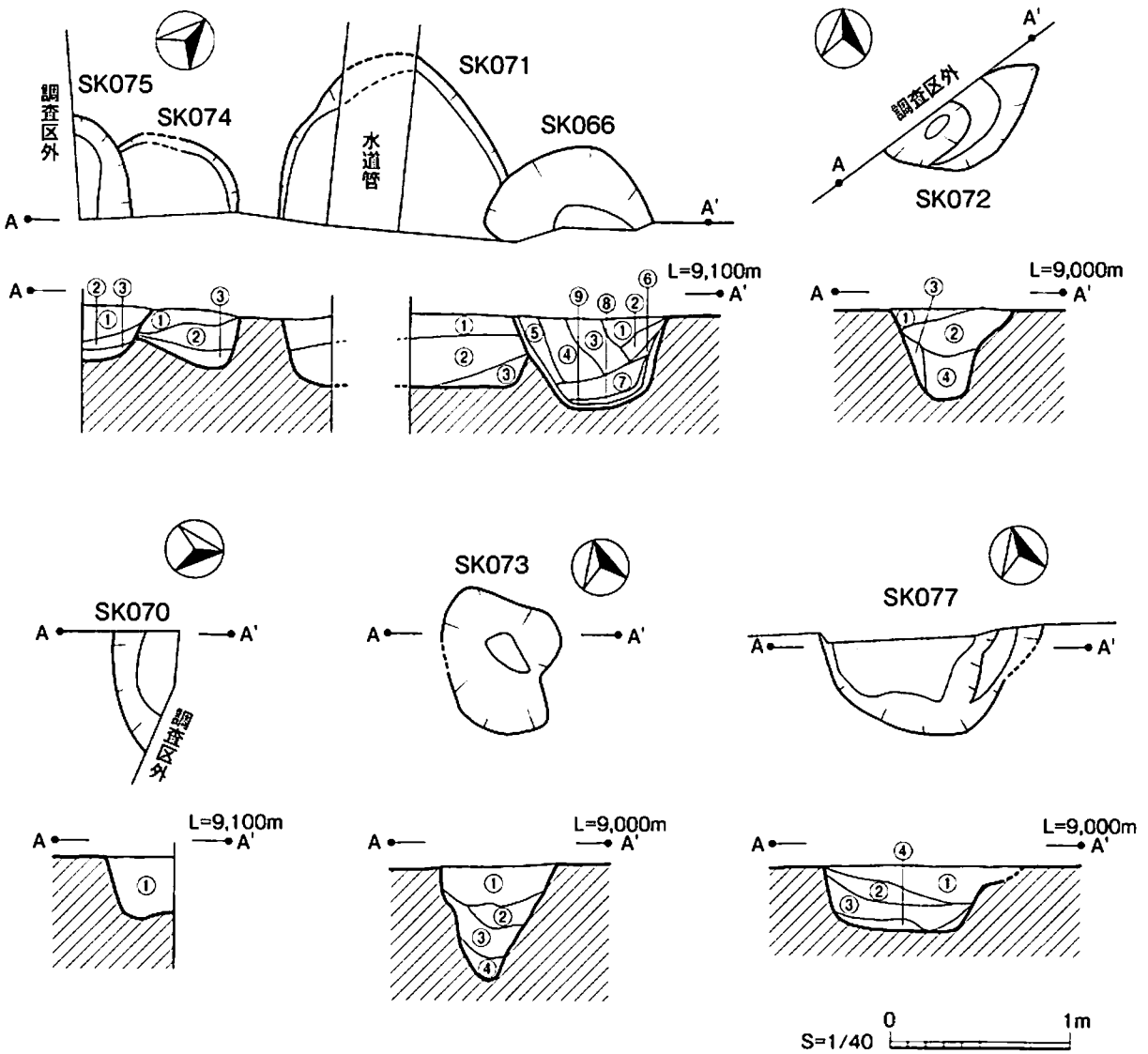
第12図　竪穴住居跡（SI110）実測図及び出土遺物実測図



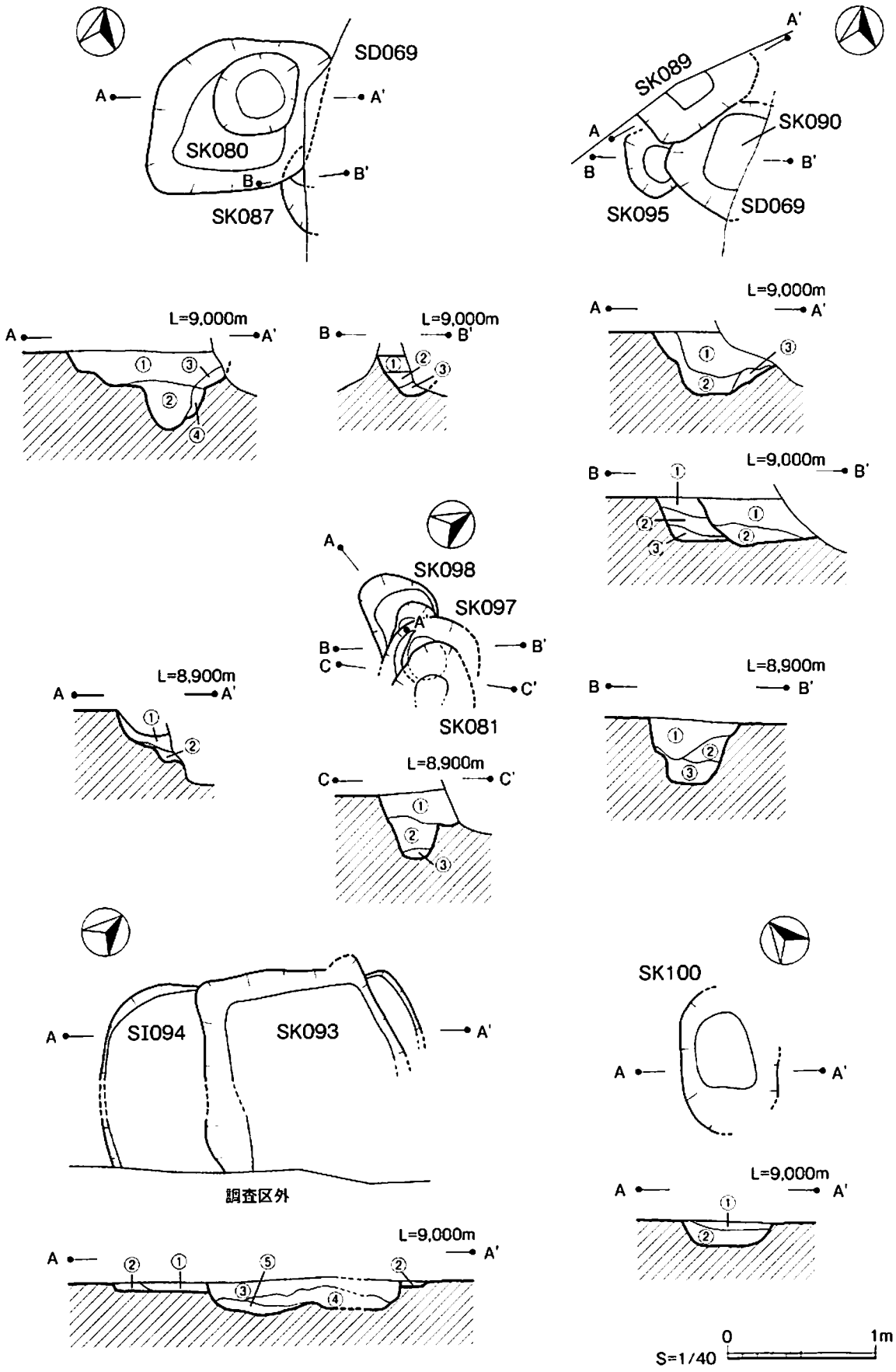
第13図　土壙（SK078・099）実測図及びSK078出土遺物実測図



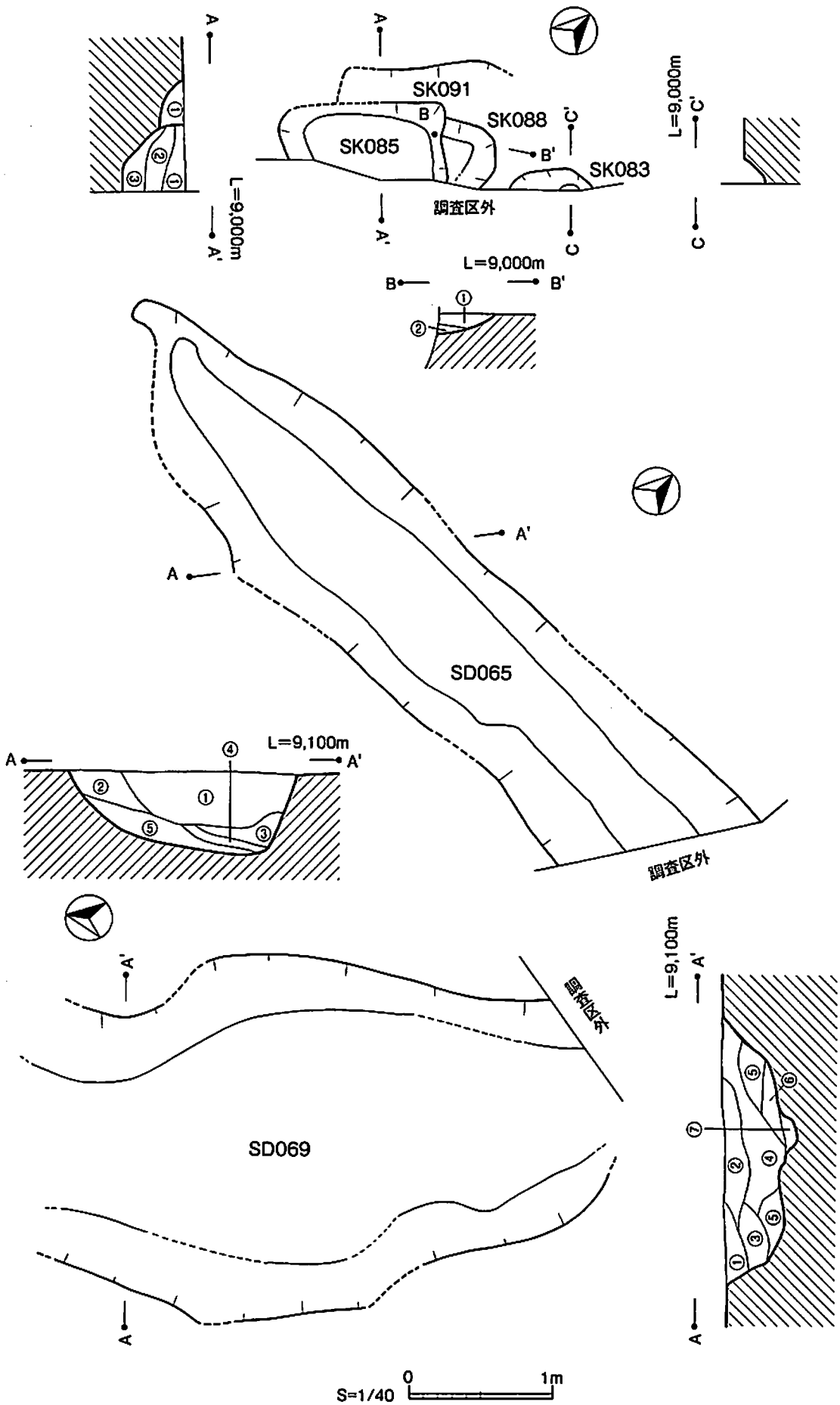
第14図　土壙（SK067・076）実測図及びSK067出土遺物実測図



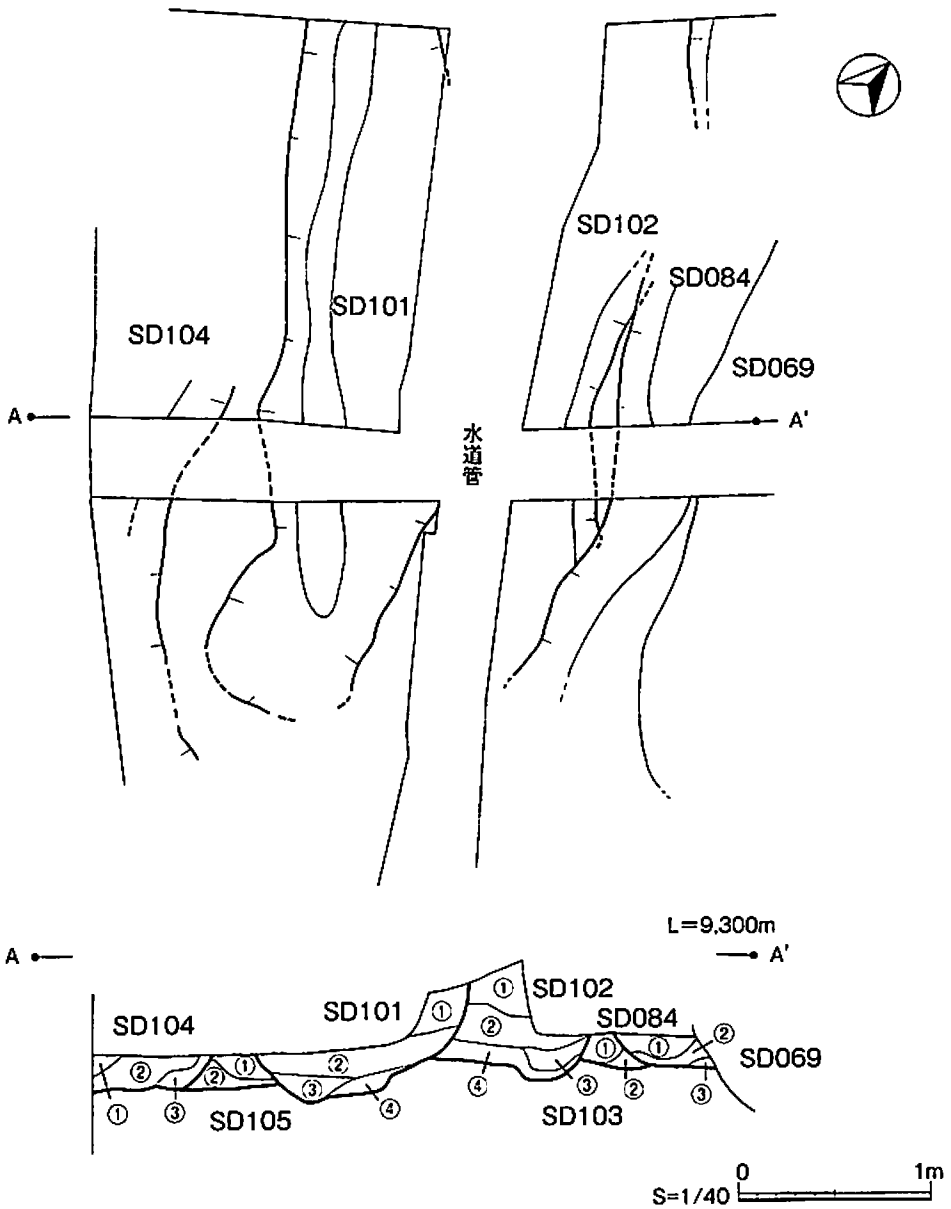
第15図　土壙（SK066・070・071・072・073・074・075・077）実測図



第16図　土壙（SK080・081・087・089・090・093・095・097・098・100）・竪穴住居跡（SI094）実測図



第17図　土壙（SK083・085・088・091）・溝跡（SD065・069）実測図



第18図　溝跡（SD084・101・102・103・104・105）実測図

竪穴住居跡

Ｓ１１１０

SI110はSD069によって切られており、約半分が残っている。北側端部に竈があり、竈内に座った状態で底部を欠いた土師器の甕が出土した。出土状況を観察すると、甕は支脚として使用された可能性が高い。竈の前面には穴が掘られており、この穴の覆土と住居跡の覆土は同一である。７は竈内から出土した土師器の甕である。「く」の字形に屈曲した頸部に丸い胴部がつづく。甕は８世紀後半～９世紀前半のものであろう。（第12図）

(4) ４区の遺構

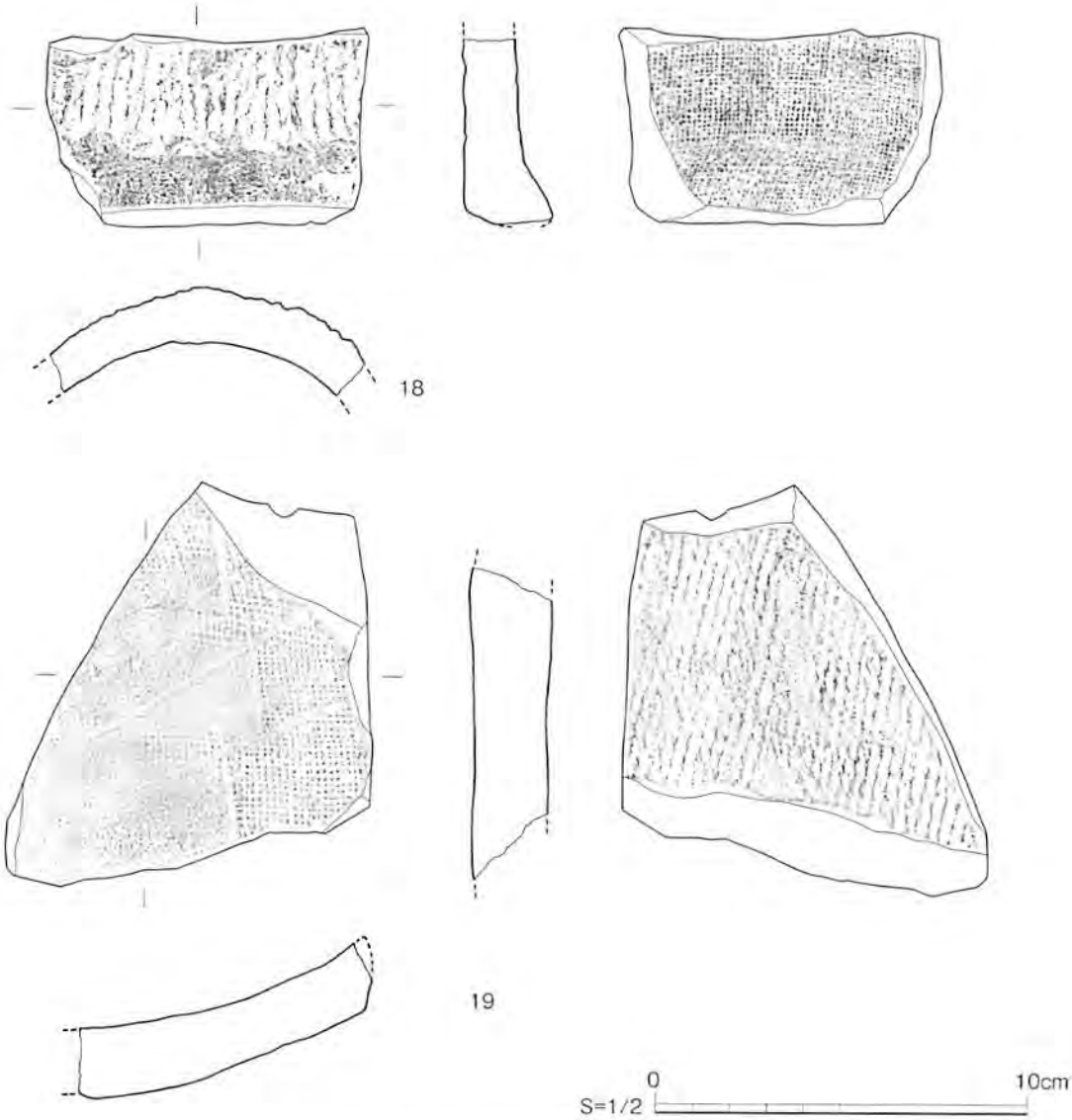
遺構分布状況

４区の殆どは撹乱されている。

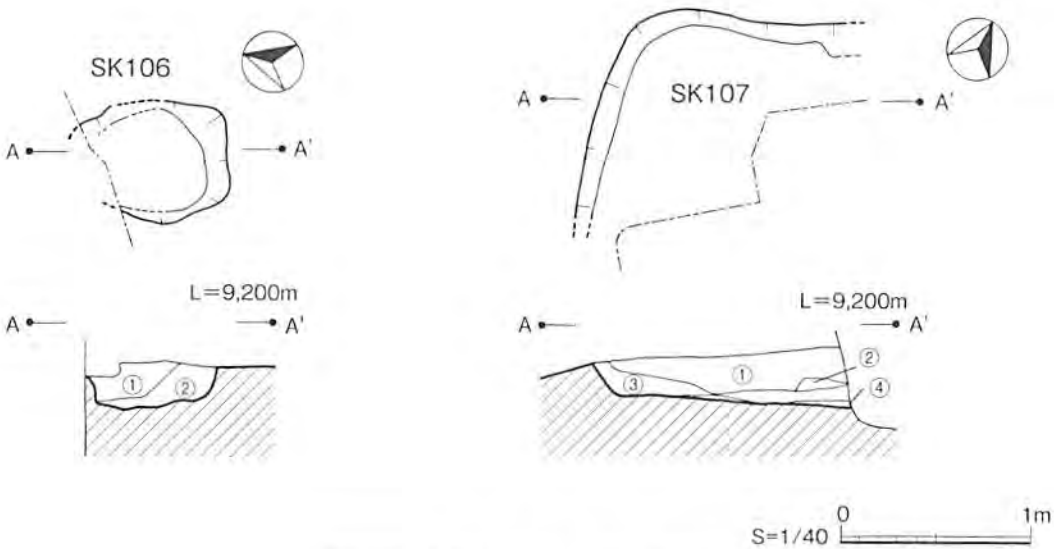
３　遺物について

ここでは、遺構覆土、包含層から出土した遺物の中で、主なものを取り上げる。

遺物の詳細については、表５～８のとおりである。



第19図　３区出土遺物実測図



第20図　土壙（SK106・107）実測図

法量（　）は復元値

図版番号	遺物番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	出土地点	層位	胎土	備考
12	7	土師器	甕	(20.0)	–	(16.3)	–	ヨコナデ、斜め方向ヘラケズリ	ヨコ・ナナメハケ、ヨコナデ	褐 7.5YR4/6	褐 7.5YR4/6	良	3区SI110	竈内	密、細砂粒中量	
13	8	土師器	杯	14.2	8.6	3.4	–	ヨコナデ後不定方向のナデ	丁寧なヨコナデ、回転ヘラ切り	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	3区SK078	–	密、細砂粒少量、雲母微量	内外器面に赤色顔料塗布、底部に板状圧痕
13	9	土師器	杯	(18.2)	(12.0)	2.6	–	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	3区SK078	–	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
13	10	土師器	高台付杯	–	8.0	4.6～	0.5	ヨコナデ、ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	3区SK078	–	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
13	11	土師器	杯	(12.4)	(8.2)	2.6	–	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	3区SK078	–	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
13	12	須恵器	杯	12.6	7.4	3.5	–	ヨコナデ、不定方向のナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り	青灰 5PB6/1	灰 N6/	やや良	3区SK078	–	密、細砂粒、雲母微量	
13	13	須恵器	杯	12.6	8.0	3.6	–	ヨコナデ、不定方向のナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良	3区SK078	–	密、細砂粒、雲母微量	
13	14	須恵器	高台付杯	–	7.5	2.5～	0.6	ヨコ方向のナデ	ヨコナデ	灰白 N7/	灰白 N7/	良	3区SK078	–	密、細砂粒微量	
13	15	須恵器	高台付杯	(14.4)	(8.6)	5.8	0.3	ヨコナデ、不定方向のナデ	ヨコナデ	灰白 7.5YR8/2	灰 N6/	良	3区SK078	–	密、細砂粒微量	底部に板状圧痕、器形全体が歪む
13	16	土師質	竈	長 17.2～	幅 7.1～	厚み 7.5～	–	荒いナデ	荒いナデ	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	良	3区SK078	–	密、細砂粒多量	
14	17	須恵器	高台付杯	(14.4)	8.4	5.7	–	ヨコナデ	ヨコナデ、不定方向のナデ	暗灰 N3/	灰 N4/	良	3区SK067	–	密、細砂粒多量	

表6　土器観察表

図版番号	遺物番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	層位 (取上No.)	備考
9	6	行基式丸瓦	10.1～	6.2～	2.8～	1区SD034	6層	表はタタキ後丁寧なナデ消し、裏に布目痕と補板圧痕
19	18	丸瓦	4.9～	8.4～	2.3	3区e-2G	Ⅲ層一括	表に縄目タタキ、裏に布目痕
19	19	平瓦	10.2～	9.6～	2.2	3区	撹乱	表に布目痕（一部ナデ消し）、裏に縄目タタキ

表7　瓦観察表

法量（　）は復元値

写真図版	遺物番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	出土地点	層位	胎土	備考
25	(20)	土師器	皿	6.2	3.8	1.0	–	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	明褐灰 5YR7/2	明褐灰 5YR7/2	良	SK001	一括	密、細砂粒少量	口縁部外側にスス付着、底部に板状圧痕
25	(21)	土師質土器	浅鉢（焙烙）	33.6	31.0	6.0	–	ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	良	SK002	覆土	密、細砂粒微量	口縁部2箇所に把手が付く、底部は緩い丸底である、外底部から外体部の一部にスス付着
25	(22)	瓦質土器	火鉢	24.8	21.5	19.8	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	暗灰 N3/	暗灰 N3/	良	SK002	覆土	密、細砂粒微量	体部一箇所に窓がある、口縁部内側端部付近に3箇所の突起がある、4脚であろう
25	(23)	土師器	杯	13.4	10.1	4.3	–	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	良	SK060	覆土	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
25	(24)	土師器	杯	12.6	7.4	3.2	–	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	良	SK078	覆土	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布、底部に板状圧痕
26	(25)	土師器	杯	12.7	9.3	3.8	–	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	にぶい橙 5YR7/3	にぶい橙 5YR7/3	良	SD021	覆土	密、細砂粒微量、中型砂粒微量	
26	(26)	須恵器	高台付杯	14.2	8.6	3.4	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰 N 5/	灰 N 5/	良	SD069	1層	密、細砂粒微量	
26	(27)	土師器	高台付杯	11.8	7.6	3.5	1.9	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良	SE041	1d層	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
26	(28)	土師器	高台付杯	19.4	(11.0)	10.9	0.9	ヨコナデ、横方向のナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り後ナデ	灰褐 5YR6/2	灰褐 5YR6/2	良	SE041	1e層	密、細砂粒微量	内外器面に赤色顔料塗布
26	(29)	青磁	椀	(16.0)	(5.8)	4.5	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	緑灰 7.5GY6/1	緑灰 7.5GY6/1	良	SE041	1d層	密、しまりが良い	高台接地面が褐色に変化
26	(30)	縄文土器	深鉢	36.0	(8.6)	48.0	–	丁寧なナデ	横方向、斜め方向の条痕後ナデ	灰褐 5YR4/2	灰褐 5YR4/2	良	SD034 SD039	覆土	密、細砂粒少量	
26	(31)	土師器	杯	11.6	6.6	3.2	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	良	SD034	5層	密、細砂粒少量、大型砂粒微量	
27	(32)	須恵器	杯	12.7	7.4	3.8	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰 N 5/	灰 N 5/	良	SE041	1d層	密、細砂粒微量	
27	(33)	黒色土器	高台付杯	(16.0)	8.8	7.2	1.5	丁寧な磨研	ヨコナデ、ナデ	暗灰 N/	にぶい黄橙 10YR7/3	良	SE041	1a層	密、細砂粒微量	黒色土器A
27	(34)	土師器	甑	30.0	18.8	23.8	–	ヨコナデ、縦横方向ヘラ削り	縦横方向のハケ目	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	良	SE041	1e層	密、細砂粒少量	把手部分は粘土塊を折り曲げる、外器面に部分的にスス付着
27	(35)	須恵器	高台付杯	15.0	8.3	3.7	0.6	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰 N 5/	灰 N 5/ 灰白 N7/	良	3区	Ⅲ層	密、細砂粒微量	底部に板状圧痕
28	(36)	緑釉陶器	椀？	長 (3.3)	幅 (1.4)	厚み (0.4)	–	施釉	施釉	オリーブ黄 7.5Y6/3	オリーブ黄 7.5Y6/3	良	3区	Ⅳ層	密	
28	(37)	土師器	不明	長 (5.3)	幅 (3.6)	厚み (0.7)	–	ヨコナデ	ナデ	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	良	3区	Ⅲ層	密、細砂粒微量	体部内器面に「V」の字状のヘラ書き
28	(38)	土師器	杯	(14.0)	–	(2.1)	–	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良	1区	撹乱層	密、細砂粒微量	体部内器面に「ム」の字状墨書
28	(39)	須恵器	高台付杯	–	6.4	4.1	0.6	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰 N 6/	灰 N 6/	良	SX052	3層	密、細砂粒微量	体部内器面に「井？」の墨書
28	(40)	土師器 9片	杯底部	–	–	–	–	–	–	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良	1・3・4区	–	密、細砂粒微量	9片とも外底部に判読不可能な墨書

表8　未実測土器観察表

調査区	遺構番号	層順	土層註記 土層名	土色記号	特徴
1区（第3図）	SI017	①	暗褐色シルト質	−	しまり強く、粘性中。
		②	暗褐色シルト質	−	明黄褐色細砂が非常に多く入る。三角堆積。しまり中、粘性小。
		③	?	−	炭化物混じりの黒い埋土が集中して②の下部に入っている。
		④	褐色シルト質	−	白、赤色粘土を多く含む。しまり強めの中、粘性強めの中。
1区（第4図）	SK003	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。
		②	オリーブ黄色細砂	Hue5Y6/4	しまり中、粘性弱。黒褐色シルトが若干混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。オリーブ黄色細砂が約40%混じる。
		④	オリーブ黄色細砂	Hue5Y6/4	しまり中、粘性弱。黒褐色シルトが若干混じる。
	SK007	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。焼土をわずかに含む。鉄分が若干沈着する。
		②	灰黄褐色シルト	Hue10YR5/2	しまり大、粘性中。焼土、炭化物をわずかに含む。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR5/1	しまり大、粘性強。炭化物、白色粘土ブロックを若干含む。
		④	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。焼土、明黄褐色細砂を若干含む。
		⑤	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。焼土、炭化物、明黄褐色細砂を含む。
		⑥	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり大、粘性中。褐灰色シルトブロックを約40%含む。
	SK015	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。微細な炭化物、土師器片、浅黄色細砂のブロックをわずかに含む。
	SK023	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。炭化物を若干含む。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが①より多く混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックが多く混じる。
1区（第5図）	SK029	①	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。炭化物を若干含む。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロック、微細な土師片が混じる。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK030	①	灰色シルト	Hue2.5Y4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		②	黄灰色シルト	Hue2.5Y4/1	しまり大、粘性中。
	SK036	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。鉄分が沈着する。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが約15%混じる。
		③	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが約30%混じる。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが約15%混じる。
		⑤	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが約40%混じる。
	SK037	①	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。炭化物を含む。マンガンが沈着する。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR5/1	しまり中、粘性中。灰白色細砂がわずかに混じる。鉄分が沈着する。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。灰黄色細砂のブロックがわずかに混じる。
	SK058	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックがわずかに混じる。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性小。明黄褐色細砂のブロックがわずかに混じる。焼土、炭化物を含む。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性小。焼土、炭化物を含む。
		④	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックがわずかに混じる。
		⑤	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが④より多く混じる。
1区（第7図）	SK059	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片を含む。
		②	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
	SK060	①	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり大、粘性大。明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		③	黒色シルト	Hue10YR2/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂、明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		⑤	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黄色細砂、明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑥	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。炭化物、土師片が混じる。
	SK061	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		②	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK063	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性小。明黄褐色細砂のブロックが約40%混じる。粉状の土師片を含む。
		②	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックがわずかに混じる。
1区（第8図）	SK039	①	暗褐色シルト質	−	黄褐色細砂混。炭化物、白粘土含む。しまり中、粘性小。
		②	暗褐色シルト質	−	①の黄褐色細砂の割合がかなり増える。しまり中、粘性小。
		③	暗褐色シルト質	−	①より暗めの暗褐、黄褐色細砂わずかに混じる。炭化物、白粘土含む。①に比べしまり強めの中、粘性中。
		④	暗褐色シルト質	−	③の黄褐色細砂の割合が増える。①に比べしまり強めの白粘土を含む。粘性中。
	SD004	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。
	SD021	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。炭化物、灰白色粘土のブロックが混じる。土器片を多く包含する。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。土器片を少量包含する。
	SD031	①	黒褐色シルト質	−	黄褐色細砂混。炭化物、白粘土、土師片含む。しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト質	−	①の黄褐色細砂の割合がかなり増える。しまり小、粘性小。
		③	黒褐色シルト質	−	①と②の間。暗褐色と黄褐色が1：1位で混じる。
		④	暗褐色シルト質	−	①より暗めの暗褐色シルトに黄褐色細砂混じる。しまりは①より弱めの中、粘性も弱めの中。
		⑤	暗褐色シルト質	−	④とほぼ同じだが、しまり・粘性共に中。

表９　遺構土層註記表（1）

調査区	遺構番号	層順	土層註記		特徴
			土層名	土色記号	
1区（第9図）	SD032	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。土器片を最も多く包含する。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが約10%混じる。土器片を包含する。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。暗褐色シルトのブロックが約40%混じる。土器片を少量包含する。
	SD033	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり大、粘性中。SK037の影響か鉄分が沈着する。黄色細砂，明黄褐色細砂、オリーブ灰色細砂のブロックが混じる。炭化物、土師片の粉を含む。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり大、粘性中。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		④	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックが約30%混じる。
1区（第10図）	SD040	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。炭化物、粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックが混じる。
	SE041	①	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが混じる。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。焼土、炭化物を含む。土器片を大量に包含する。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR5/1	しまり大、粘性大。焼土、炭化物、灰白色粘土を大量に含む。特に下部は灰が堆積している。土器片を大量に包含する。
		④	にぶい黄褐色シルト	Hue10YR4/3	しまり中、粘性中。焼土、炭化物を含む。下部に灰が堆積する。土器片を大量に包含する。
		⑤	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。焼土、炭化物を含む。下部に灰が堆積する。土器片を大量に包含する。
		⑥	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが混じる。
		⑦	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが⑥より多く混じる。
		⑧	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂、緑灰色細砂のブロックが混じる。炭化物、粉状の土師片を含む。
	SE055	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが混じる。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが①より多く混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		④	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
		⑤	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑥	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		⑦	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが⑥より多く混じる。
		⑧	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが⑦より多く混じる。
		⑨	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑩	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。
		⑪	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		⑫	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり中、粘性中。
		⑬	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックがわずかに混じる。
		⑭	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。
		⑮	黒色シルト	Hue10YR7/1	しまり中、粘性大。保水性が高い。
2区（第11図）	SK047	①	暗褐色シルト質	－	黄褐色細砂がSK050より多く混じる。炭化物、土師片、小さな白色粘土ブロック混じる。しまり中、粘性中。
	SK049	①	暗褐色シルト質	－	暗褐色シルト質に黄褐色細砂が多量に混じる。炭化物少し含む。しまり中，粘性小。
	SK050	①	黒褐色シルト質	－	炭化物、土師片、白色粘土ブロック含む。全体的に黄褐色細砂混じる。しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト質	－	黒褐色シルトに黄褐色細砂多量に混じる。しまり小，粘性小。
	SD042	①	暗褐色シルト質	－	土師片、白色粘土混じる。しまり強、粘性中。小さな白色細砂含む。
		②	暗褐色シルト質	－	①に黒褐色シルトが混じり、①より大きめの白色細砂ブロック含む。しまり中、粘性①より強めの中。
		③	黒褐色シルト質	－	黒褐色シルト質に黄褐色細砂多く混じる。土師片、白粘土を含む。しまり②より弱めの中。
	SX044	①	黒褐色シルト質	－	黒褐色シルト質に明黄褐色細砂が所々に混じる。炭化物、土師片、小さな白色粘土ブロック含む。しまり中、粘性中。
		②	黄褐色細砂	－	黄褐色細砂に黒褐色シルトがわずかに混じる。
3区（第12図）	SI110	①	褐灰色シルト	Hue7.5YR4/1	しまり大、粘性中。炭化物、粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue7.5YR3/1	しまり大、粘性中。炭化物、粉状の土師片、灰白色粘土のブロックを含む。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		④	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。①～③よりさらに固くしまる。
		⑤	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑥	褐灰色シルト	Hue10YR5/1	しまり大、粘性中。焼土が混じる。
3区（第13図）	SK078	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。灰白色粘土のブロック、粉状の土師片、炭化物を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK099	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。灰白色粘土のブロックを含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
3区（第14図）	SK067	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。灰白色粘土、焼土、粉状の土師片を含む。
	SK076	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。灰白色粘土、炭化物、粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが①より多く混じる。粉状の土師片を含む。

表10　遺構土層註記表 (2)

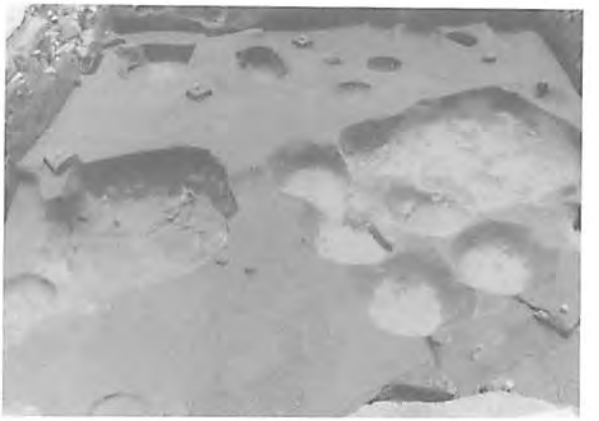
調査区	遺構番号	層順	土層註記 土層名	土色記号	特徴
3区（第15図）	SK066	①	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂、緑灰色細砂のブロックが混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。粉状の土師片、炭化物を含む。ブロック状である。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり大、粘性中。コンクリートのように硬くしまる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性大。ブロック状でボロボロ崩れやすい。
		⑤	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり大、粘性大。粉状の土師片、炭化物を含む。
		⑥	橙色粘土	Hue7.5YR7/6	しまり中、粘性大。粗砂粒が混じる。
		⑦	黒褐色シルト	Hue7.5YR3/1	しまり大、粘性大。ブロック状である。粉状の土師片、炭化物を含む。
		⑧	橙色粘土	Hue7.5YR7/6	しまり中、粘性大。粗砂粒が混じる。
		⑨	橙色粘土	Hue7.5YR7/6	しまり中、粘性大。粗砂粒が混じる。意図的に全面に貼り付けられている。
	SK071	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。焼土、炭化物を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
	SK072	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが①より多く混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		③	暗褐色シルト	Hue10YR3/4	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが②より多く混じる。
		④	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。暗褐色シルトのブロックが若干混じる。
	SK073	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂・黄色細砂のブロックが混じる。炭化物、粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが②より少なく混じる。
		④	にぶい黄褐色シルト	Hue10YR4/3	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが混じる。
	SK074	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性小。黒褐色シルトのブロックが混じる。
	SK075	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK077	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。粉状の土師片、炭化物を含む。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。灰、粉状の土師片を含む。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		④	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。褐灰色シルト・黒褐色シルトのブロックが混じる。
3区（第16図）	SK080	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。焼土、炭化物を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂・黄色細砂のブロックが混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
		④	黄色細砂	Hue2.5Y8/6	しまり大、粘性中。黒褐色シルトのブロックがわずかに混じる。
	SK081	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックがわずかに混じる。
		③	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが約40%混じる。
	SK089	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが①より多く混じる。
		③	黄色細砂	Hue2.5Y8/6	しまり大、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
	SK090	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが混じる。
	SK087	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂、明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK095	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが若干混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが約40%混じる。
	SK097	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが約25%混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックがわずかに混じる。
	SK098	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。黄色細砂のブロックが混じる。
	SK100	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SI094	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。炭化物、粉状の土師片を含む。
	SK093	③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑤	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり大、粘性中。褐灰色シルトのブロックが若干混じる。鉄分が沈着する。

表11　遺構土層註記表（3）

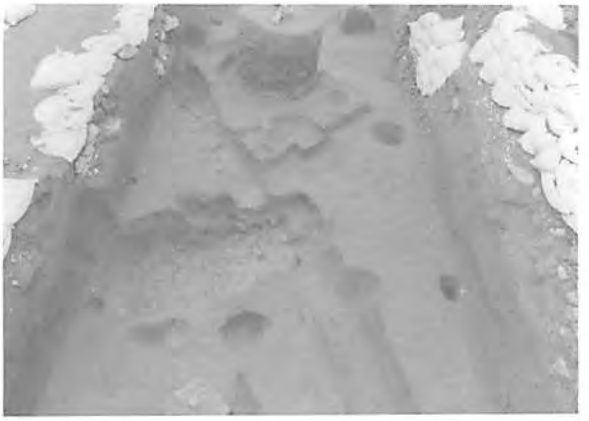
調査区	遺構番号	層順	土層註記		特徴
			土層名	土色記号	
3区（第17図）	SK085	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。炭化物を含む。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。炭化物、粉状の土師片を含む。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SK088	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。焼土、炭化物を含む。
		②	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。褐灰色シルトのブロックが混じる。
	SK091	①	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
	SD065	①	暗褐色細砂	Hue10YR3/3	しまり中、粘性小。暗褐色シルト、明黄褐色細砂のブロックが混じる。粉状の土師片、炭化物を含む。
		②	暗褐色細砂	Hue10YR3/3	しまり大、粘性中。①よりシルト質で混入物は類似している。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。暗褐色細砂が混じる。粉状の土師片を含む。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		⑤	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SD069	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		②	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが混じる。
		③	褐灰色シルト	Hue10YR4/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		④	灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	しまり大、粘性小。明黄褐色細砂が約40%混じる。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが混じる。
		⑤	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり大、粘性小。褐灰色シルトのブロックが混じる。
		⑥	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり大、粘性小。褐灰色シルトのブロックがわずかに混じる。
		⑦	にぶい黄褐色シルト	Hue10YR4/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが混じる。
3区（第18図）	SD104	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
	SD105	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SD101	①	黒褐色シルト	Hue7.5YR3/1	しまり大、粘性中。黄色細砂のブロックがわずかに混じる。粉状の土師片を含む。
		②	黒褐色シルト	Hue7.5YR3/1	しまり大、粘性中。明黄褐色細砂、黄色細砂のブロックが若干混じる。粉状の土師片を含む。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
		④	黒色シルト	Hue10YR2/1	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが約40%混じる。
	SD102	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。
		②	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり大、粘性中。焼土、炭化物を含む。
		③	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。
		④	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。
	SD103	①	黒褐色シルト	Hue10YR3/2	しまり中、粘性中。焼土を含む。
		②	明黄褐色細砂	Hue10YR6/8	しまり中、粘性中。黒褐色シルトのブロックが混じる。
4区（第20図）	SK106	①	暗褐色シルト質	－	土師片、白色粘土、炭化物含む。しまり中、粘性中。
		②	暗褐色シルト質	－	土師片、白色粘土、炭化物含む。しまり中、粘性中。
	SK107	①	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。焼土を多く含む。
		②	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが若干混じる。灰白色粘土のブロック、炭化物を含む。
		③	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。灰白色粘土のブロックを多く含む。
		④	暗褐色シルト	Hue10YR3/3	しまり中、粘性中。明黄褐色細砂のブロックが混じる。

表12　遺構土層註記表 (4)

PL. 1　１－Ａ区　完掘状況（北→南）

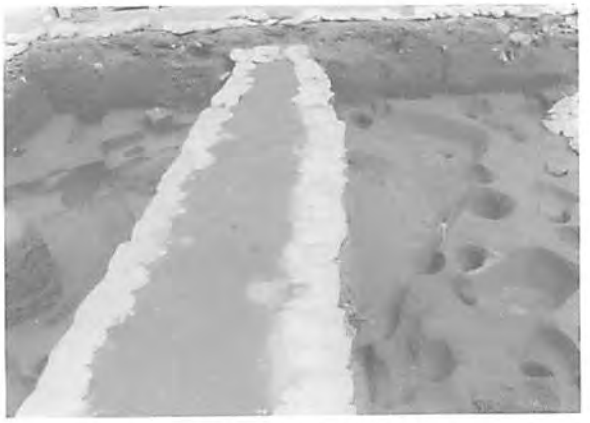


PL. 2　１－Ｂ区　東側Ⅴ層検出状況（東→西）



PL. 3　１－Ｂ区　西側完掘状況（北→南）

PL. 4　１－Ｃ区　Ⅴ層検出状況（西→東）

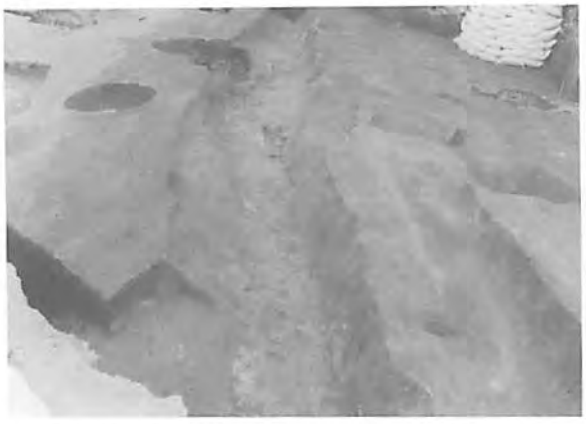


PL. 5　１－Ｂ区　ＳＩ017完掘状況（南→北）

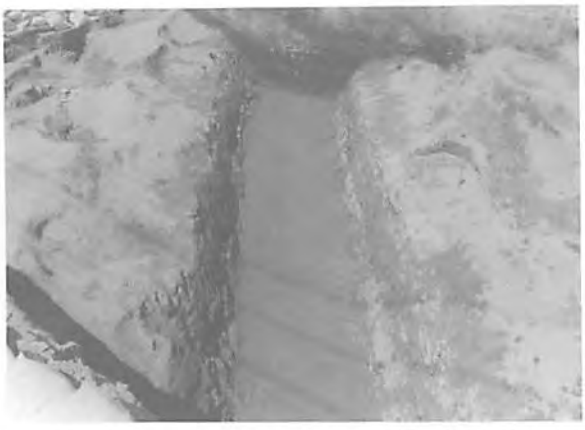
PL. 6　１－Ｂ区　ＳＩ017竈完掘状況（東→西）

PL. 7　１－Ａ区　ＳＫ058完掘状況（北→南）

PL. 8　１－Ａ区　ＳＫ060完掘状況（北→南）



PL. 9　１－C区　SD032完掘状況（東→西）



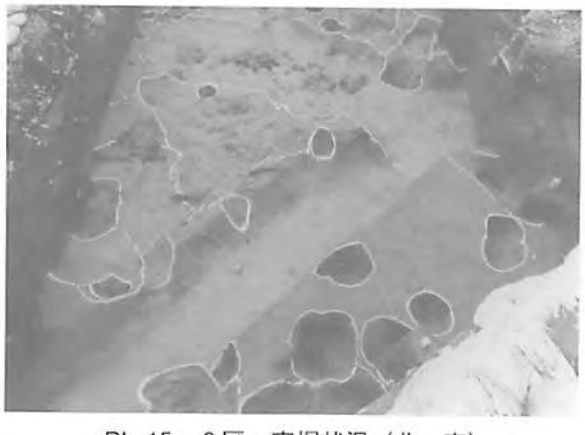
PL. 10　１－C区　SD034完掘状況（東→西）

PL. 11　１－C区　SE041完掘状況（東→西）

PL. 12　１－C区　SE055完掘状況（西→東）

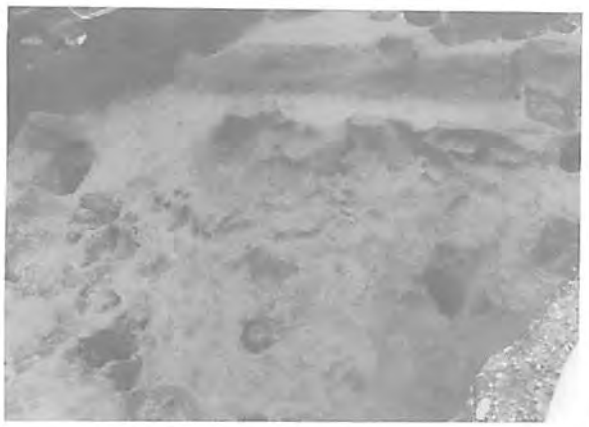
PL. 13　２－A区　完掘状況（西→東）

PL. 14　２－B区　完掘状況（西→東）



PL. 15　３区　完掘状況（北→南）

PL. 16　３区　北側完掘状況（北→南）



PL. 17　３区　SI110完掘状況

PL. 18　３区　SI110竈遺物出土状況（東→西）

PL. 19　３区　SK078遺物出土状況（西→東）

PL. 20　３区　SK078完掘状況（南→北）

PL. 21　３区　SK067完掘状況（西→東）

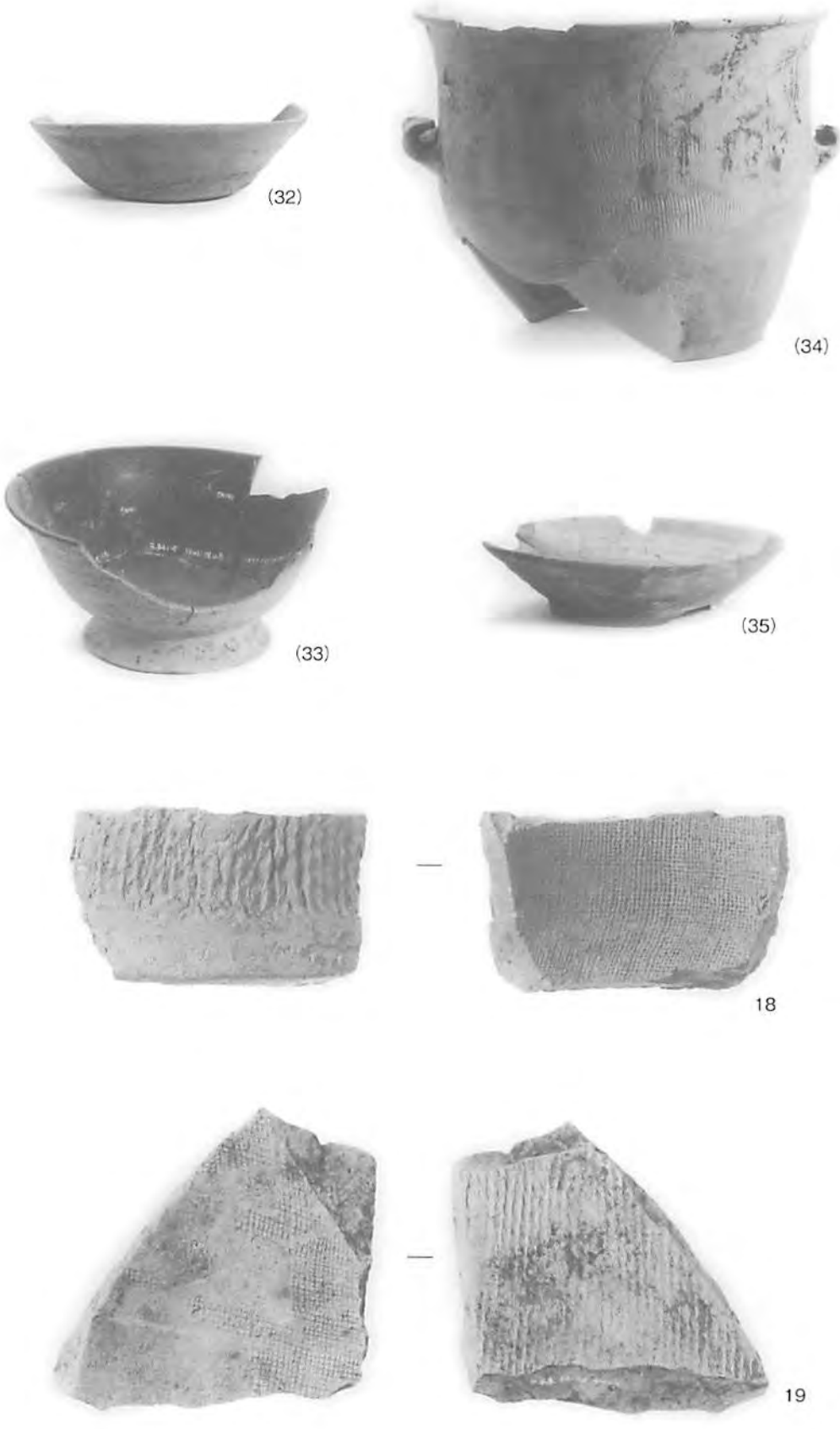
PL. 22　３区　SK077遺物出土状況（東→西）

PL. 23　４区　完掘状況（西→東）

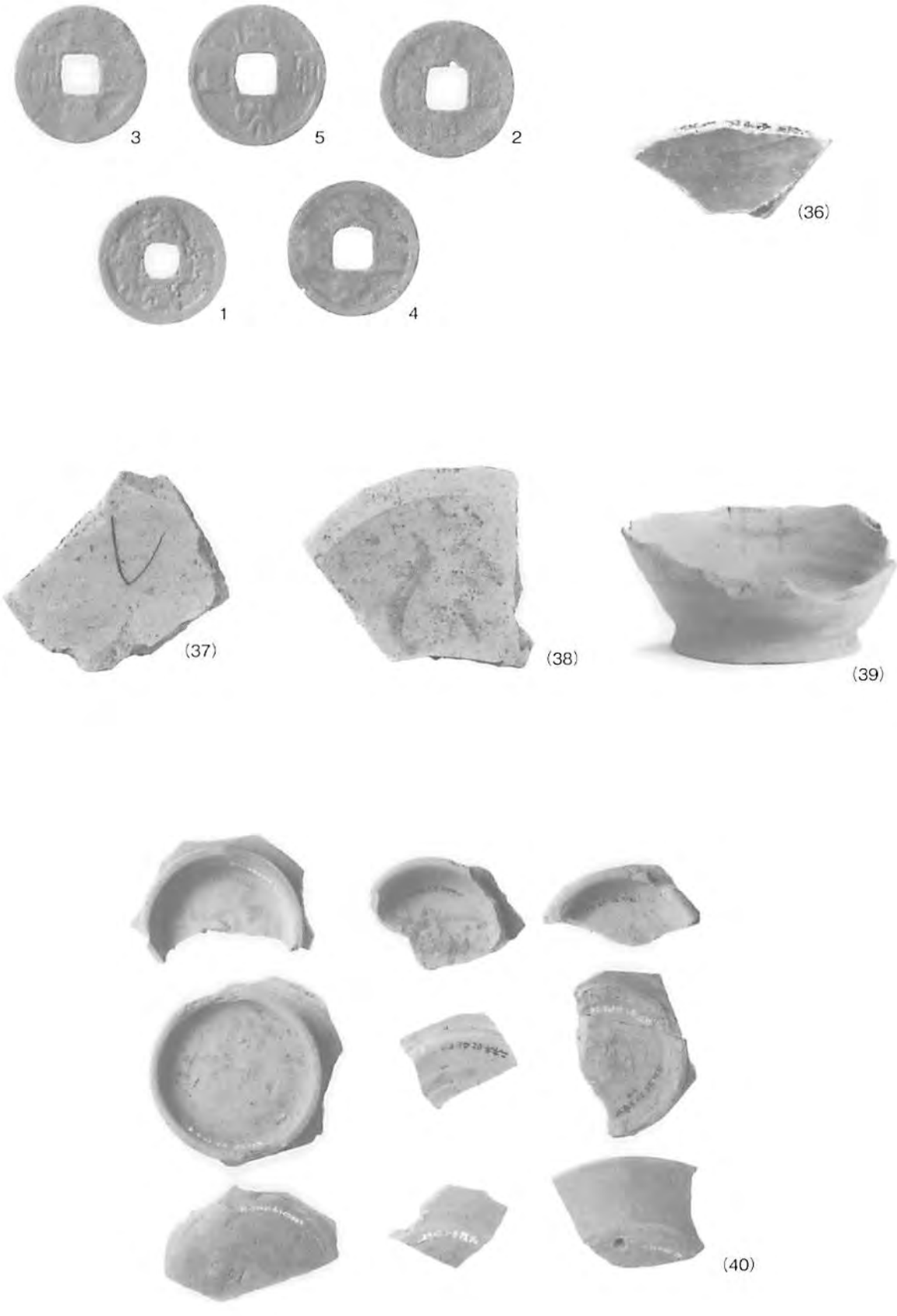
PL. 24　４区　SK107遺物出土状況（北→南）

PL. 25　出土遺物 (1)　(　) は写真のみ

PL. 26　出土遺物 (2)　(　) は写真のみ



PL. 27　出土遺物 (3)　(　) は写真のみ



PL. 28　出土遺物 (4)　(　) は写真のみ

第Ⅵ章　春日地区第４次調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査経緯

平成15年度発掘調査に係る法手続き等は、以下のとおりである。

文化財保護法（以下、「法」という。）第57条の３の規定に基づく発掘通知は、平成15年９月２日付け熊土第709号で熊本県知事から熊本県教育長あて通知され、教文第1236号で熊本県教育長から熊本県知事あてに発掘調査が指示された。

調査依頼は、平成15年７月８日付け熊土第709号で熊本県知事から熊本県教育長あて依頼があった。以後、法第58条の２第１項の規定に基づく発掘調査通知は平成15年10月１日付け教文第1741号で熊本県教育庁文化課長から熊本県教育長あて通知により、法第59条第２項で準用する第59条第１項の規定に基づく文化財発見の通知は平成16年１月20日付け教文第2884号で熊本県教育長から熊本南警察署長あて通知により、各々通知された。

２　調査体制

二本木遺跡群の平成15年度発掘調査は、平成15年11月10日から平成16年１月９日まで実施した。

なお、調査組織は以下のとおりである。

調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
調査総括　島津義昭（教育審議員）
　　西住欣一郎（文化財調査第二係長）
調査担当　宮崎敬士（主任学芸員）
　　増田直人（非常勤嘱託）
　　福永雅美（非常勤嘱託）
　　阿南麻衣（非常勤嘱託）
　　稲富陽子（非常勤嘱託）
発掘作業員　押方富江、小田須磨子、加藤利勝、河野義勝、小細工洋子、白石美智子、高松北子、遠山英記、福田久美子、前田宏一郎、前田日出男、松井昭子、武藤雅治、森田登、森川護、森川征子

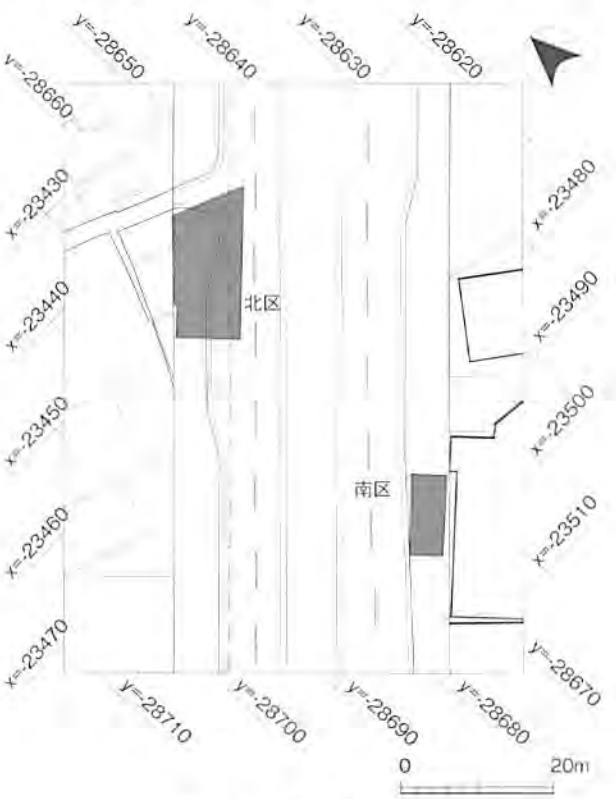
３　調査経過

調査は、熊本駅北部線を挟み、南区及び北区の二調査区に分割して実施した。南区の調査は平成15年11月10日から平成15年12月22日までの期間に、北区の調査は平成15年11月11日から平成16年１月９日までの期間に実施した。

南区と北区とは連続して表土剥ぎを実施し、後、南区から掘削等の発掘作業に着手している。両地区は並行して調査が進行した時期があるが、これは南区が狭小な面積であることに因る。

なお、当初は宮崎、増田両名が調査担当となったが、調査の迅速性確保のため、福永、阿南、稲富各氏の参加を得ることとなった。

また、報告書作成に際しては、遺物実測では六田育子、橋口冬美（非常勤嘱託）、渡邊いわ子、川井田久子、田中知恵美（整理作業員）、金属器の保存処理では今田里枝、谷川亜紀子（非常勤嘱託）、大塚トシ子、平川早苗（整理作業員）、版組では工藤光美（整理作業員）各氏の手を煩わせた。記して感謝申し上げる。



第１図　調査区位置図

4　調査方法

調査に際しては、グリッド法及び分層発掘法を用いた。

グリッドは、日本測地系に準拠し、各調査区内に10mグリッドを設定した。これは、既往調査に際して日本測地系が用いられていること、既往調査のグリッドとの整合性を保つ必要があると考えたことに因る措置である。なお、グリッド設定に係る測量業務は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。

土層は、包含層、遺構埋土に分かち、それぞれを日本土色帳に準拠して記録した。各層の名称は、大別した層には上層から１層、２層と算用数字を充て、各大別層を細分する場合には上層から１a層、１b層と英小文字を付加している。

各遺構には、遺構の種別に応じ略号を付し、さらに、調査区の別、遺構の種別等を問わず、連番を付加した。遺構略号は、SD：溝、SK：土壙、SX：その他、を用いた。出土遺構は、南区はSD１からSK12まで、北区はSK31からSK43までが出土し、途中の遺構番号13から30までは欠番となっている。

第２節　調査の成果

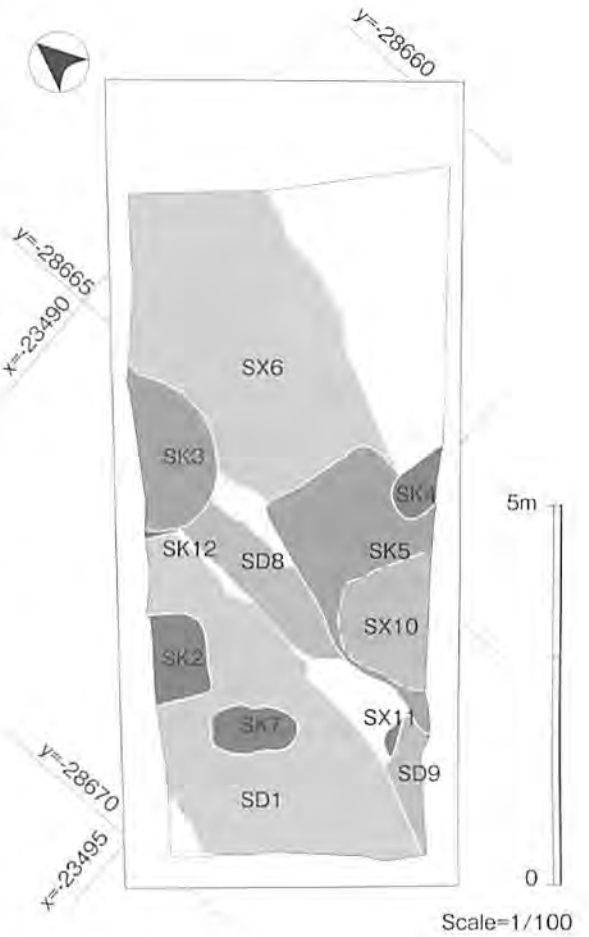
1　概要

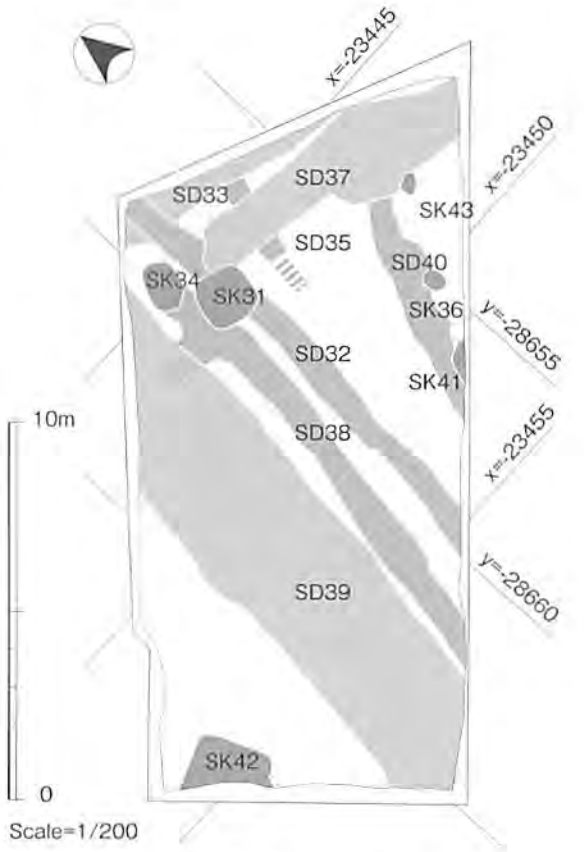
二本木遺跡群は、弥生時代から古代までの遺跡であるが、平成15年度発掘調査区が所在する春日１丁目近辺は、主に古代から中世の遺構が存在する地区である。

平成15年度は、古代から中世の土器等を包含する包含層及び中世の遺構を確認し、発掘した。包含層は近世以降に形成されたものであり、古代の土器等と近代の陶磁器とが混在する。包含層除去後、遺構確認面となるが、中世の遺物を包含した溝が主体であり、この溝を中世以降の土壙等が切る状況で確認された。

2　層序

二本木遺跡群における既往調査では、各調査区で基本的な層序が異なっていた。これは、当該地域における開発行為の激しさに起因すると考えられ、所





第２図　遺構配置図

謂地山層である黄色シルト層に達して初めて層が一致するような状況である。

南区の基本層序は、表土である１層：基礎コンクリート等を含む整地層、２層：黄褐色細砂を基調とした包含層、３層：暗褐色シルトを基調とした包含層、４層：黄色シルトを基調とした地山層により構成される。

北区の基本層序は、１～２層、４層は南区と概ね同じであるが、３層は様相が異なり、３層：黒褐色シルトを基調とした包含層となる。

なお、既往調査との対応は、南区３層が第１次調査におけるⅣ層に対応し、４層が地山層として共通しているものと考えられる。

また、今回の報告では層序図等の掲載に至らなかった。これは、掲載遺物を遺構出土遺物に絞ったことの他、紙幅の掣肘にも因るものである。

3　遺構

(1)溝（SD）

溝は、南区から３条、北区から７条、合計10条を確認した。

SD１は、南北に走向する大溝である。5.65×2.75mと幅が広く、埋土途中に硬化面も認められるため、切通の道路として使用された時期もあったと考える。SD９を切る。

SD８は、南北に走向する溝である。3.98×0.84mを測る。

SD９は、東西に走向する溝である。1.90×0.60mを測り、SX11を切る。

SD32は、南北に走向する溝である。9.12×1.27mを測り、SD33を切る。

SD33は、東西に走向する溝である。2.40×6.31mを測り、SD35を切る。

SD35は、南北に走向する溝である。2.44×1.33mを測る。

SD37は、東西に走向する溝である。3.44×8.14mを測り、SD32、SD35、SD40を切る。

SD38は、南北に走向する溝である。6.97×1.65mを測る。

SD39は、南北に走向する大溝である。15.04×3.85mと幅が広く、埋土途中に硬化面も認められるため、切通の道路として使用された時期もあったと考える。SD38を切る。

SD40は、南北に走向する溝である。5.80×1.17mを測る。

(2)土壙（SK）

土壙は、南区から６基、北区から６基、合計12基出土した。

SK２は、平面形が方形を呈する土壙である。1.14×0.72mを測り、SD１を切る。

SK３は、平面形が円形を呈する土壙である2.05×1.05mを測る。SK12と同一遺構の可能性があるが、SX６、SD８を切る。

SK４は、平面形が楕円形を呈する土壙である。0.59×0.92mを測り、SK５を切る。

SK５は、平面形が不整な長方形を呈する土壙である。3.59×1.77mを測り、SX６、SD９、SX10を切る。

SK７は、平面形が楕円形を呈する土壙である。0.63×1.15mを測り、SD１を切る。

SK12は、平面形が円形を呈する土壙である。1.40×1.79mを測るが、SK３と同一遺構の可能性がある。

SK31は、平面形が方形を呈する土壙である。SD32、SD37、SD38を切る。

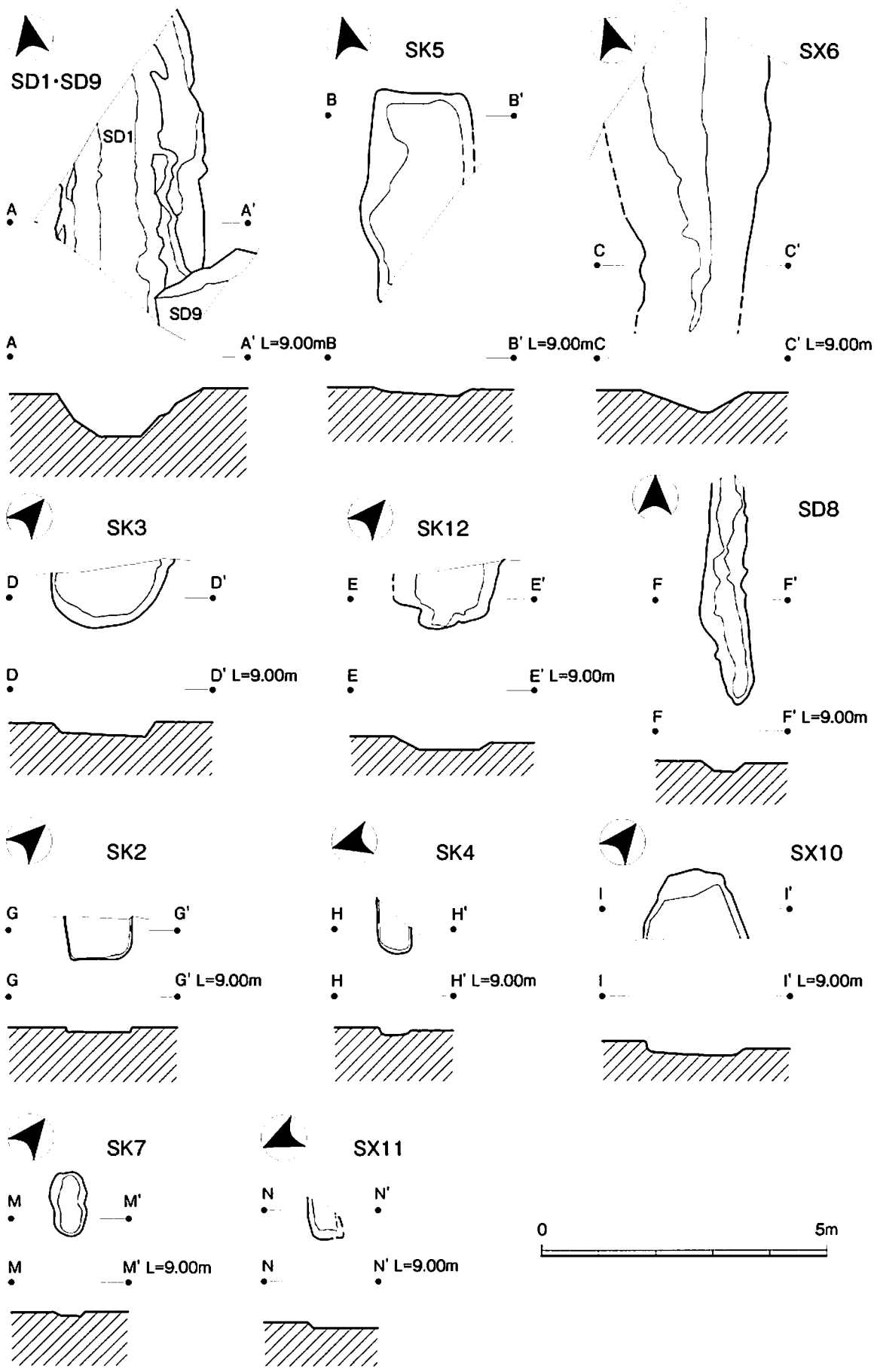
SK34は、平面形が楕円形を呈する土壙である。1.39×1.11mを測り、SD38を切る。

SK36は、平面形が円形を呈する土壙である。0.67×0.55mと規模が小さく、ピットとした方が適切であった。SD40を切る。

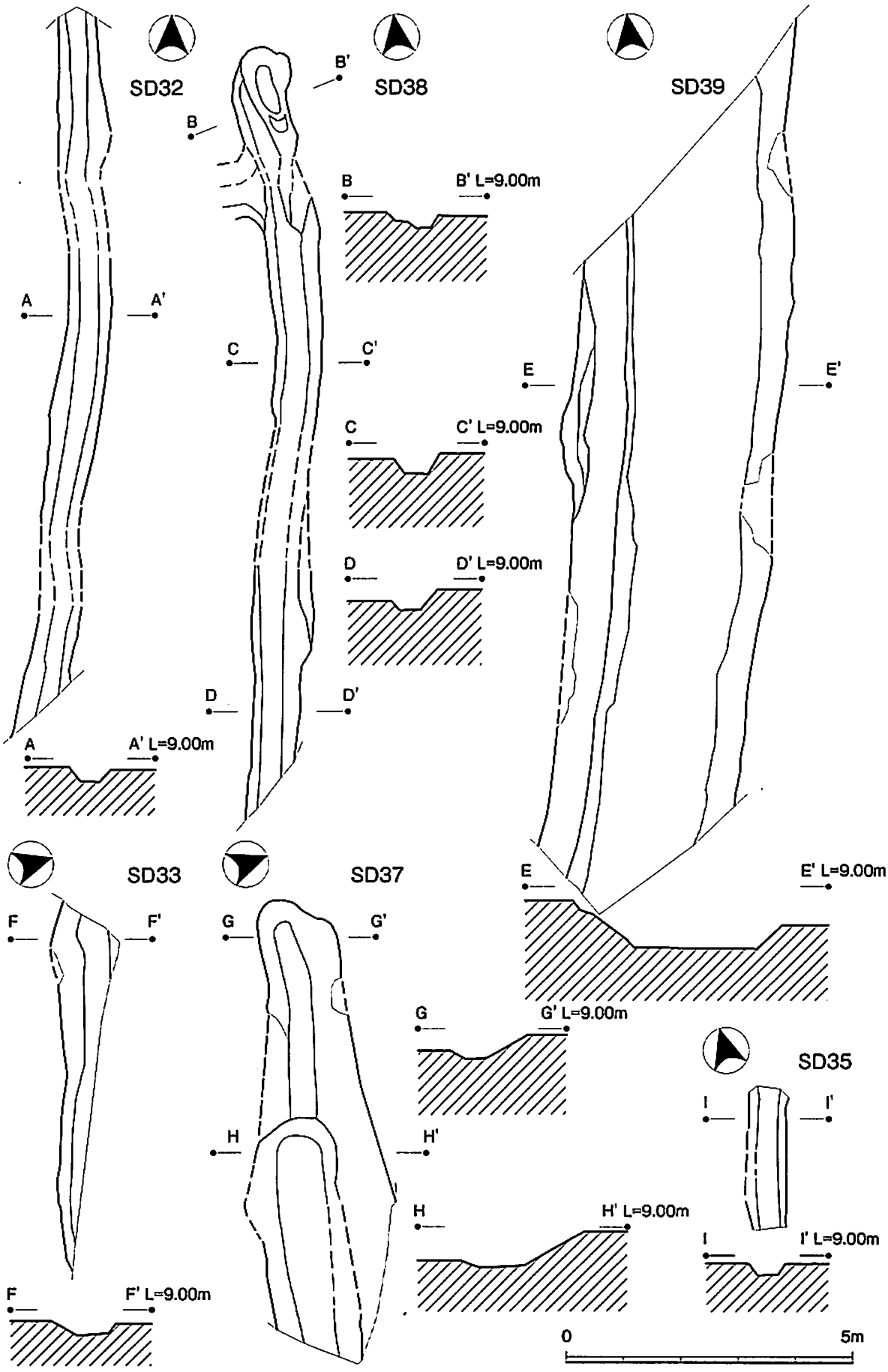
SK41は、平面形が方形を呈する土壙と考える。0.89×0.96mを測るが、遺構は調査区外に伸びている。SD40を切る。

SK42は、平面形が方形を呈する土壙と考える。2.15×0.86m測るが、遺構は調査区外に伸びている。

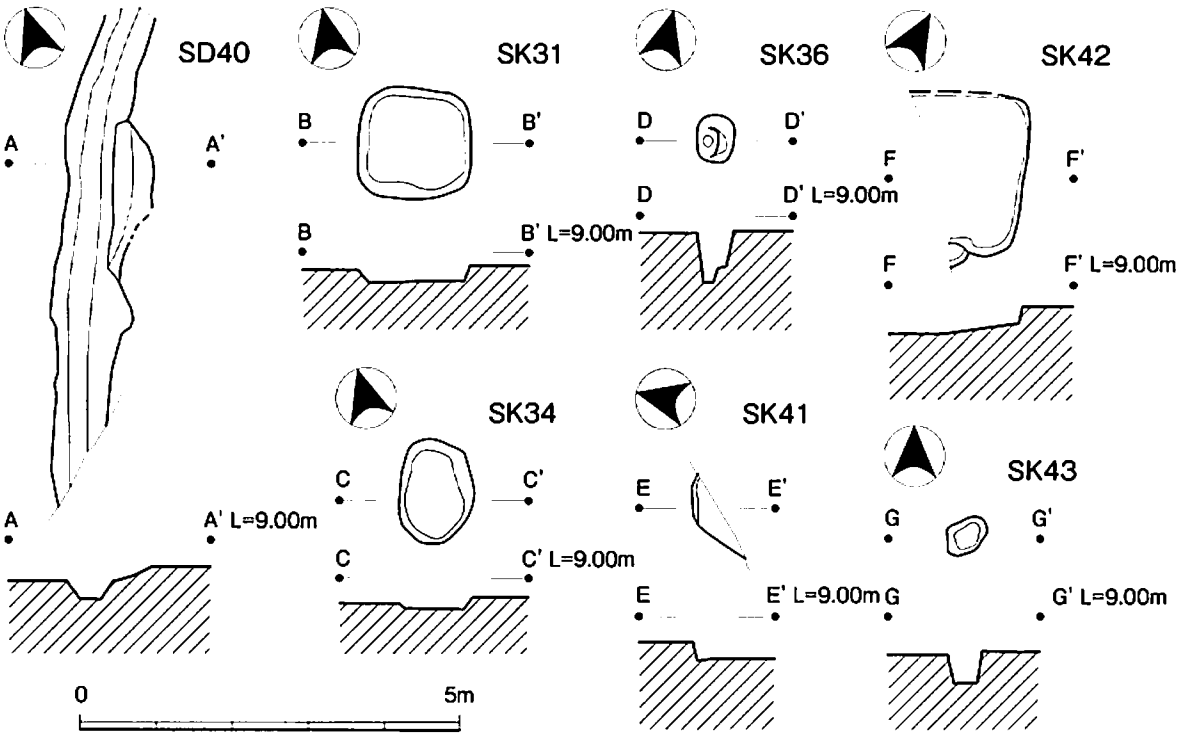
SK43は、平面形が楕円形を呈する土壙である。0.48×0.55mと規模が小さく、ピットとした方が適切であった。SD37を切る。



第３図　南区遺構実測図（SD１～SK12）



第４図　北区遺構実測図（SD）



第５図　北区遺構実測図（SK）

(3)その他の遺構（SX）

溝もしくは土壙との判断がつかない遺構を、その他の遺構として分類した。その他の遺構は、南区から３基、北区から０基、合計３基出土した。

SX６は、南北に走向する溝状の遺構である。5.37×2.20mを測るが、土壙又は溝の判別が困難なためその他の遺構とした。

SX10は、不整形の遺構である。1.54×1.68mを測るが、土壙と判別するには至らなかったため、その他の遺構とした。

SX11は、一部分のみが残存していた遺構である。0.82×1.51mを測るが、土壙又は溝の判別が困難なためその他の遺構とした。

(4)遺構内の層序

次項に出土遺物を掲載するが、掲載遺構のなかで、複数の埋土からの出土遺物を掲載した遺構について、その遺構内層序の概要を以下に記す。

SD１の埋土は３層に大別した。埋１層は灰褐色シルトで、粘性、締まりともに弱い。粒子が粗く、0.5～２cm大の黄褐色シルトブロックや灰オリーブ色砂ブロックを含む。埋２層は灰赤色シルトで0.5～１cm大のカーボン、灰オリーブ色の地山ブロックを多く含み、粘性が強い。短軸方向の真ん中付近で特によく締まっている。埋３層は赤灰色粘土で、大変固く締まっている。極少量の灰オリーブ色の地山ブロックを含み、赤褐色の筋が網目状に入り込んでいる。

SD39の埋土は３層に大別した。埋１層は、暗オリーブ褐色シルトに灰オリーブ色細砂の地山ブロックが混じる。締まりは中程度、粘性も中程度である。埋２層は、オリーブ褐色シルトにオリーブ褐色細砂の地山ブロックが混じる。締まりは中程度である。埋３層は、黄灰色シルトが薄層状に堆積し硬化面を形成している。

SK２の埋土は２層に分層した。埋１層は、灰黄褐色シルトで粘性は弱いが、極めて固く締まり、１～５cm大の灰オリーブ色の地山ブロックを多量に含む。埋２層は、褐灰色シルトで粘性が強く、締まりは中程度、２～３cm大の地山ブロックをごく少量含む。

SX６の埋土は３層に大別した。埋１層は、暗褐色シルトで灰オリーブ色の地山ブロック（２～３cm大）を少量含む。細粒で締まりは殆ど無く、砂粒もあまり含まない。埋２層は、暗褐色シルトに１～５cm大の黄褐色ブロックを含む。埋３層は、褐色シルトで粘性が強く、よく締まり、地山ブロック等を殆ど含まない。

4　出土遺物

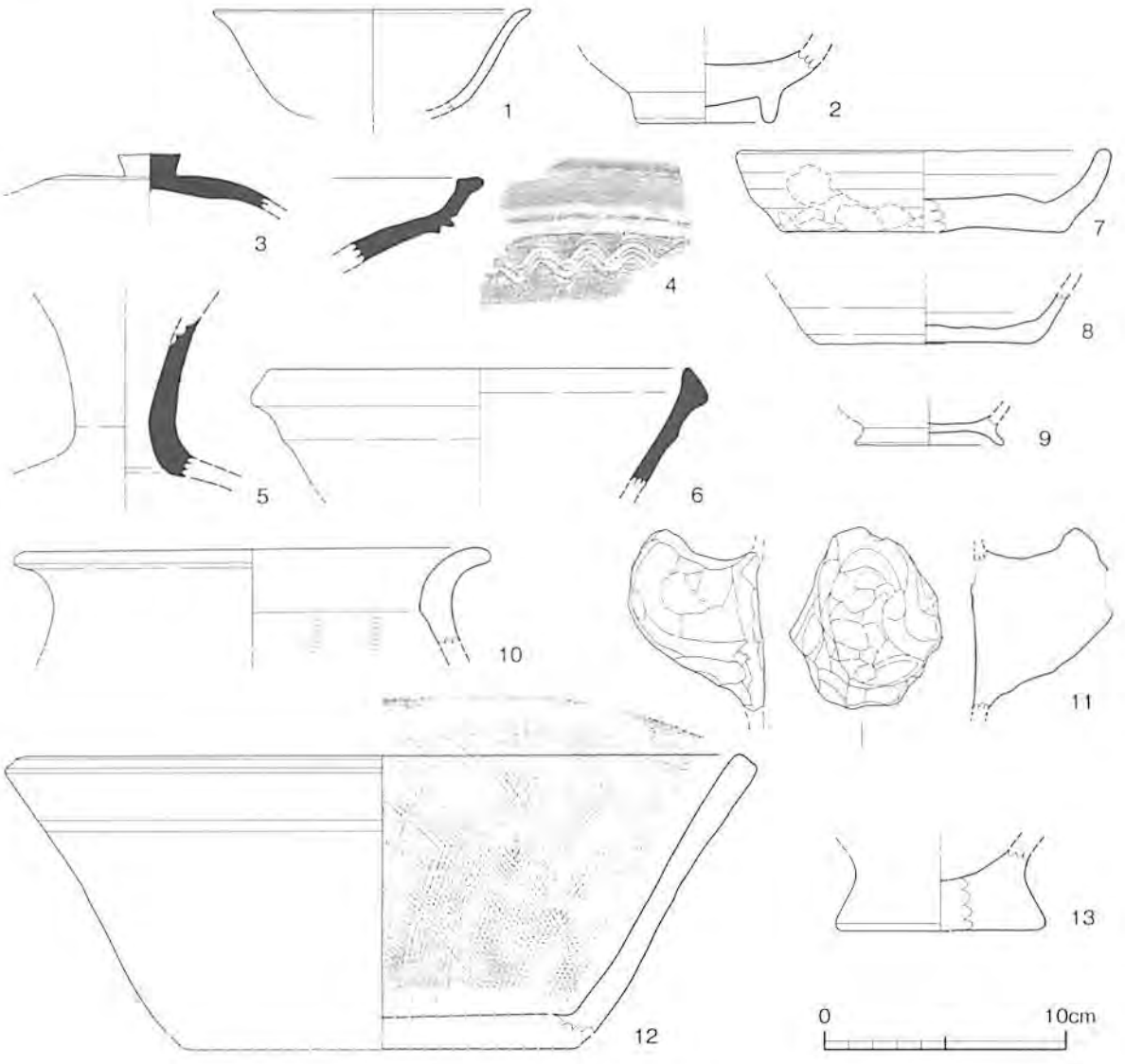
出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁等の土器、土錘等の土製品、鉄器、貨銭等の金属器が出土した。以上については、特徴的なもの209点について図化し、種別を問わず連番を付して掲載している。土器一般については、遺構毎にとりまとめ、墨書土器、穿孔土器、土製品、金属器については、種別ごとにとりまとめた。

なお、この他、有舌尖頭器等の石器、古代の鉄滓、馬骨等の動物遺体、近世の陶磁器等も出土しているが、紙幅の掣肘により掲載するに至っていない。

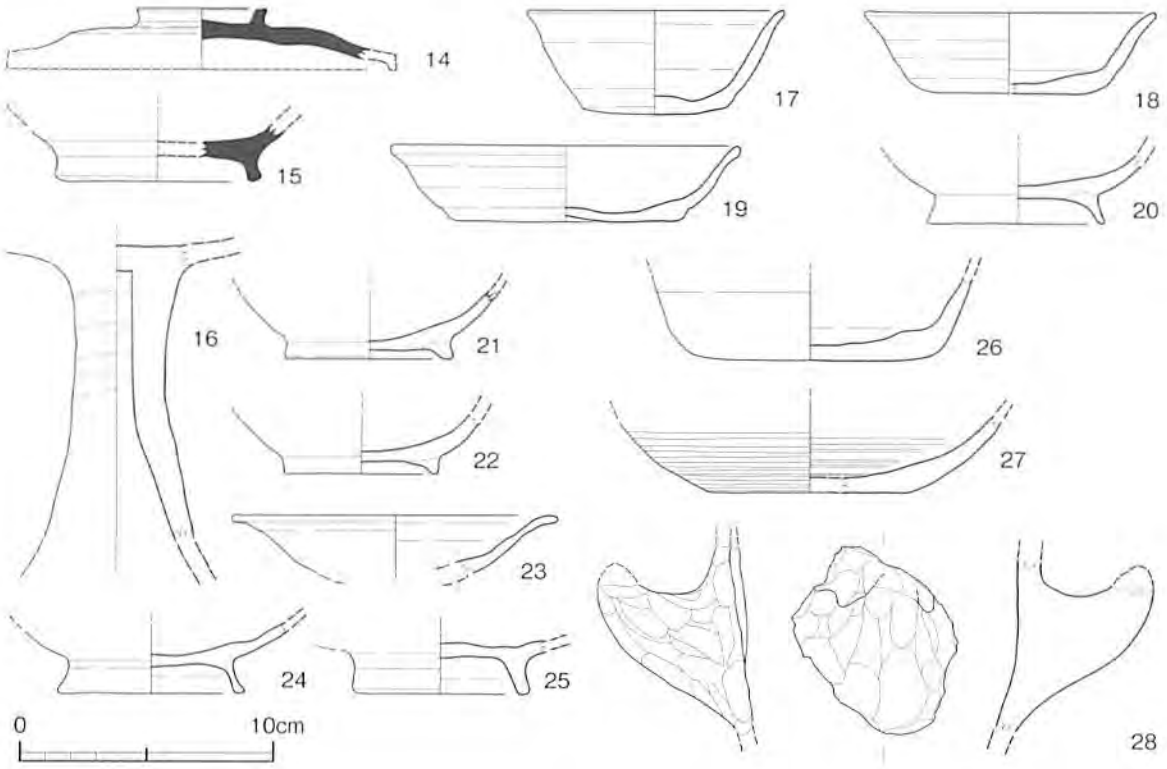
(1)土器

１～190は土器である。内訳は白磁１点、青磁３点、瓦器15点、須恵器43点、土師器126点、弥生土器２点である。なお、土師器には墨書土器５点、穿孔土器６点が含まれる。

１～13はSD１出土土器であり、１は埋３層、６は埋２層、その他は埋１層から出土した。１は白磁、２は青磁、３～６は須恵器、７～12は土師器、13は弥生土器である。１は口唇部の釉を禿ぐ、口禿の造りの椀である。２は白色胎土で清澄な釉薬の椀である。３は坏蓋、４、６は甕、５は壷、７～９は椀である。７の底部は静止糸切りの後、ナデ処理が施され、側面には指頭圧痕が残る。８の底部は回転ヘラ切りの後、軽いナデ処理が施される。10は甕、11は甑、12は擂鉢である。13は黒髪式の甕脚部である。

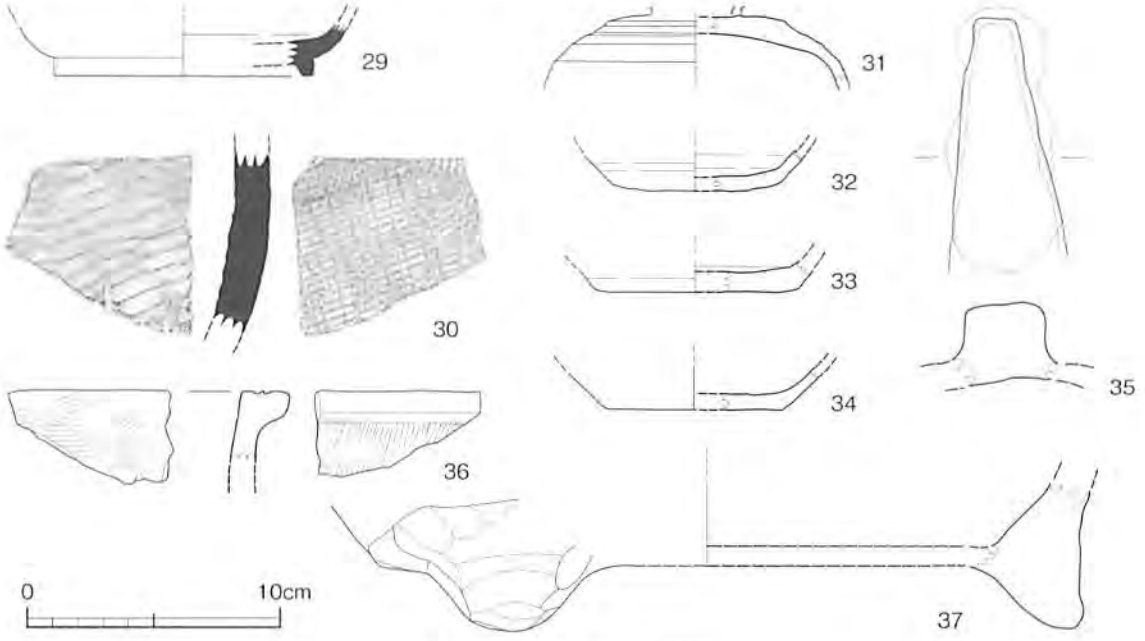


第６図　土器実測図（SD１）

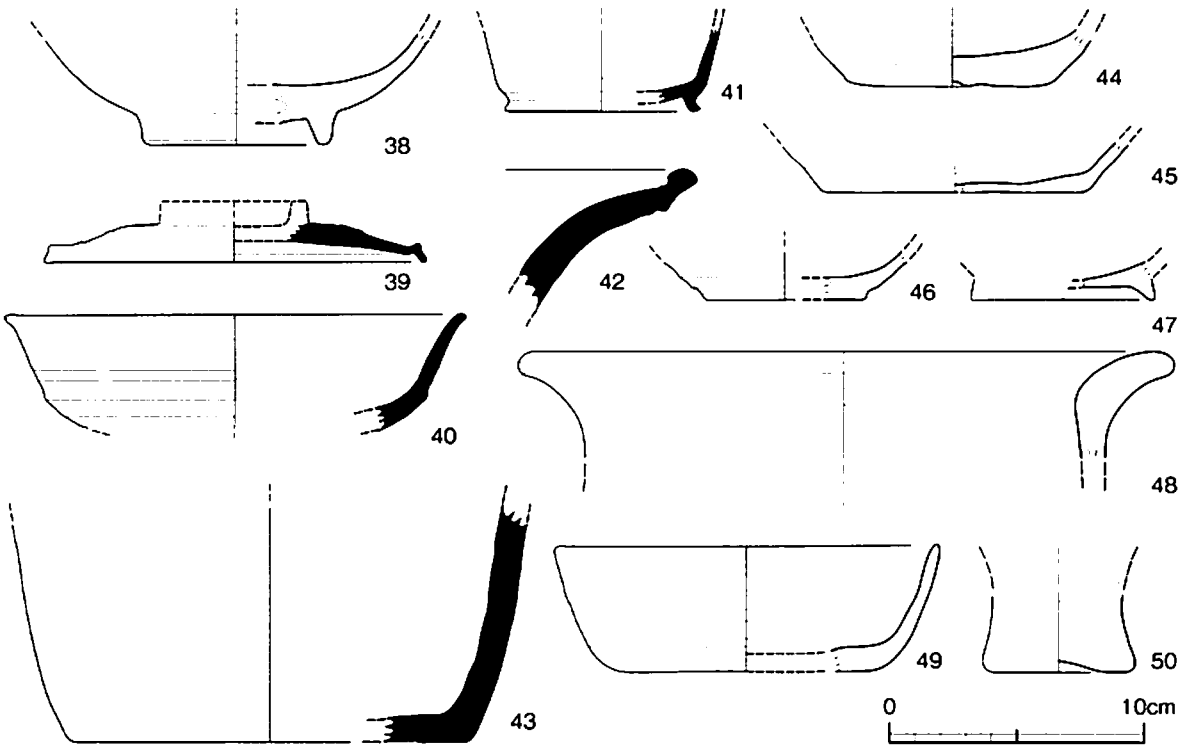


第７図　土器実測図（SD32）

14～28はSD32出土土器であり、埋１層から出土した。14、15は須恵器、その他は土師器である。14は蓋、15は坏、16は高杯、17～27は椀である。17の底部は回転ヘラ切りの後、軽いナデ処理が施される。18の底部は回転ヘラ切りの後、回転ナデが施され、さらに一方向へのナデによる底部処理が加わる。19の底部は回転ヘラ切りの後、全体にナデを施す。なお、19は赤色土器であり、内面及び底部中央を除く外面に赤色泥を塗彩している。また、19は墨書土器である。20～22は黒色土器で、内面に黒色処理が施されている。26の底部は回転ヘラ切りの後、底部縁辺に回転ナデ、底部中央はナデが施される。27の底部は回転ヘラ切りである。内底面には暗紋状の横位回転ミガキが顕著に施され、外面にも同様のミガキ



第８図　土器実測図（SD33）



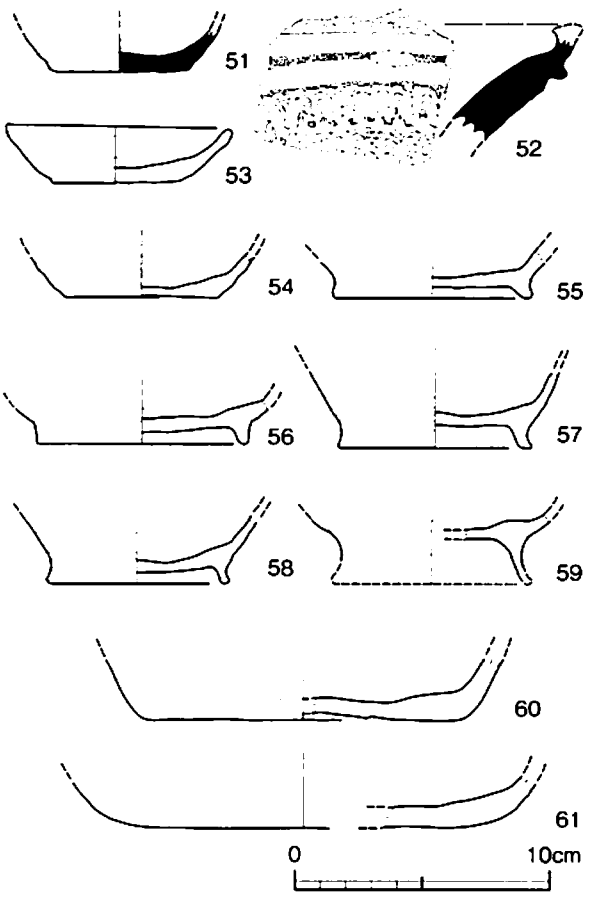
第9図　土器実測図（SD37）

が確認できる。28は甑である。

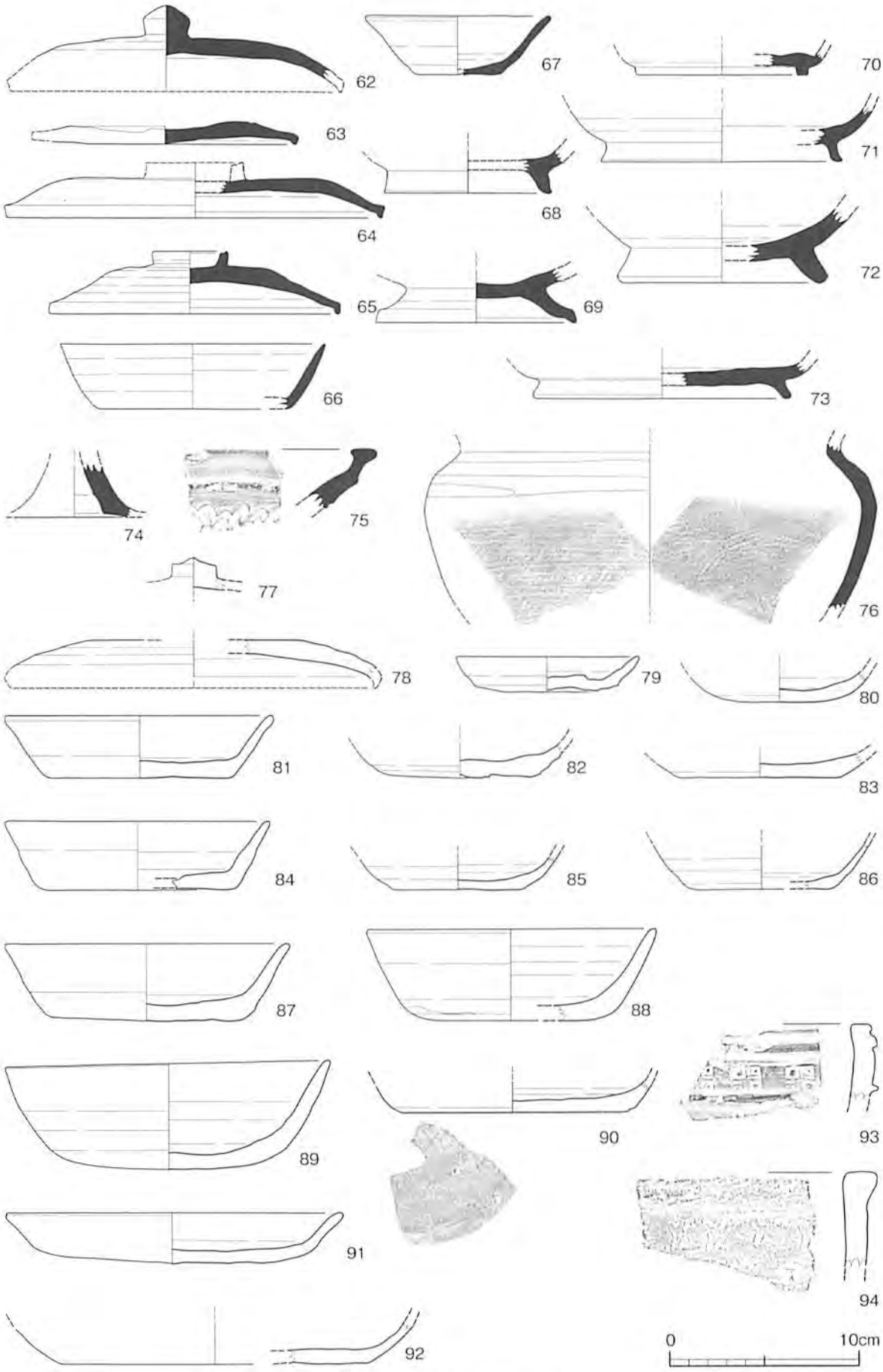
29～37はSD33出土土器であり、埋1層から出土した。29、30は須恵器、31～36は土師器、37は瓦器である。29は椀、30は甕、31は蓋である。31は須恵器模倣坏蓋で、つまみと口縁端部を欠損している。32～34は椀である。32、33の底部は回転ヘラ切り、34は回転糸切りである。35は移動式竈の可能性がある。35の外面には丁寧なナデが施され、煤も付着している。36は甕、37は4脚を有する火鉢である。

38～50はSD37出土土器であり、埋1層から出土した。38は青磁、39～43は須恵器、44～49は土師器、50は弥生土器である。38は灰色胎土で緑釉薬を施す。39は蓋、40、41は坏、42、43は甕である。44～47、49は椀である。44、45の底部は静止ヘラ切りの後、ナデ処理を施す。46の底部は回転糸切り。47は黒色土器で、内面に黒色処理を施す。49の底部は回転ヘラ切りの後、ナデ処理を施す。48は甕、50は黒髪式の甕脚部である。

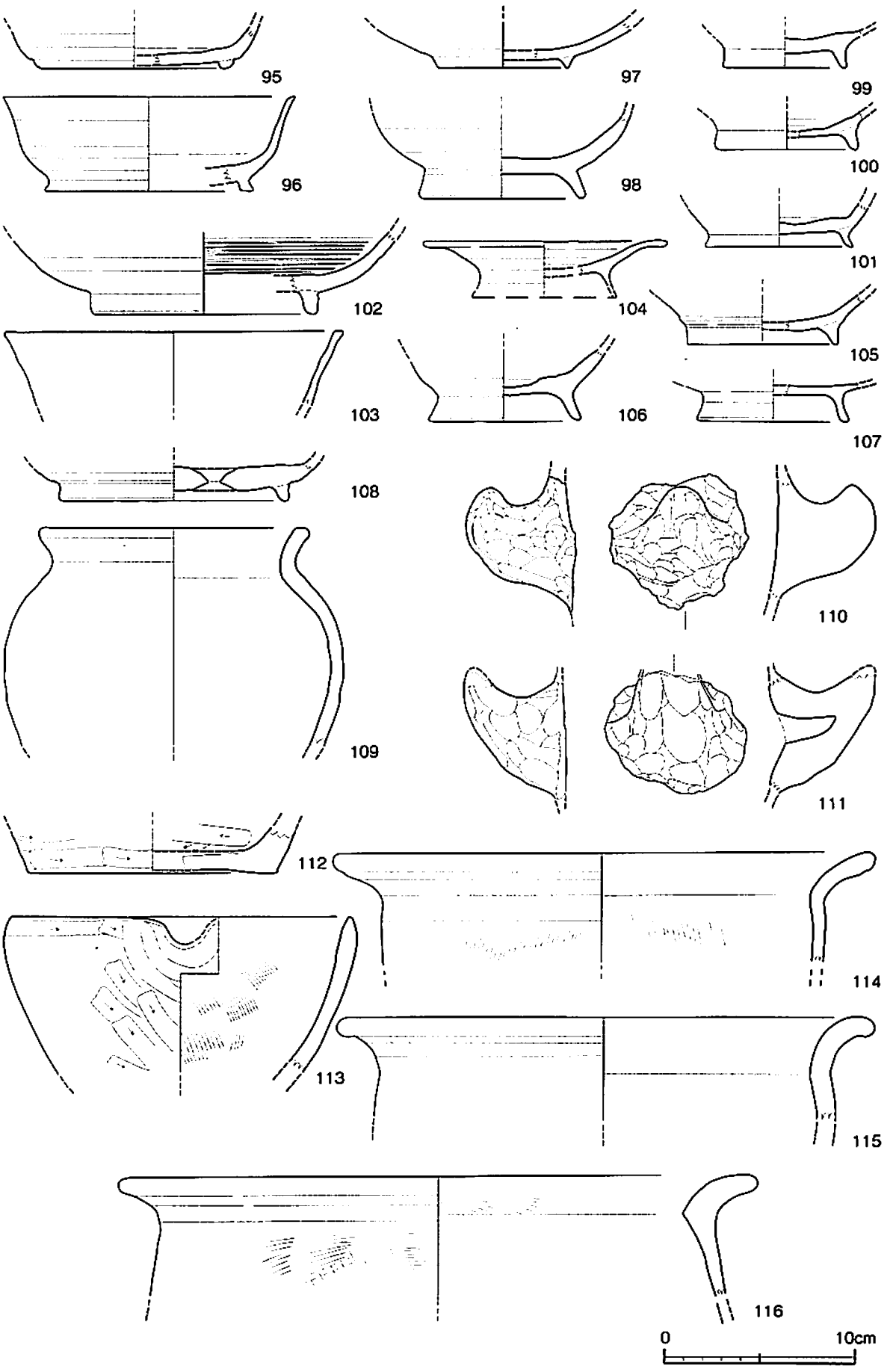
51～61はSD38出土土器であり、埋1層から出土した。51、52は須恵器、その他は土師器である。51は坏で、底部は静止ヘラ切りで未調整である。52は甕で、口縁内面には自然釉がかかる。53～61は椀で



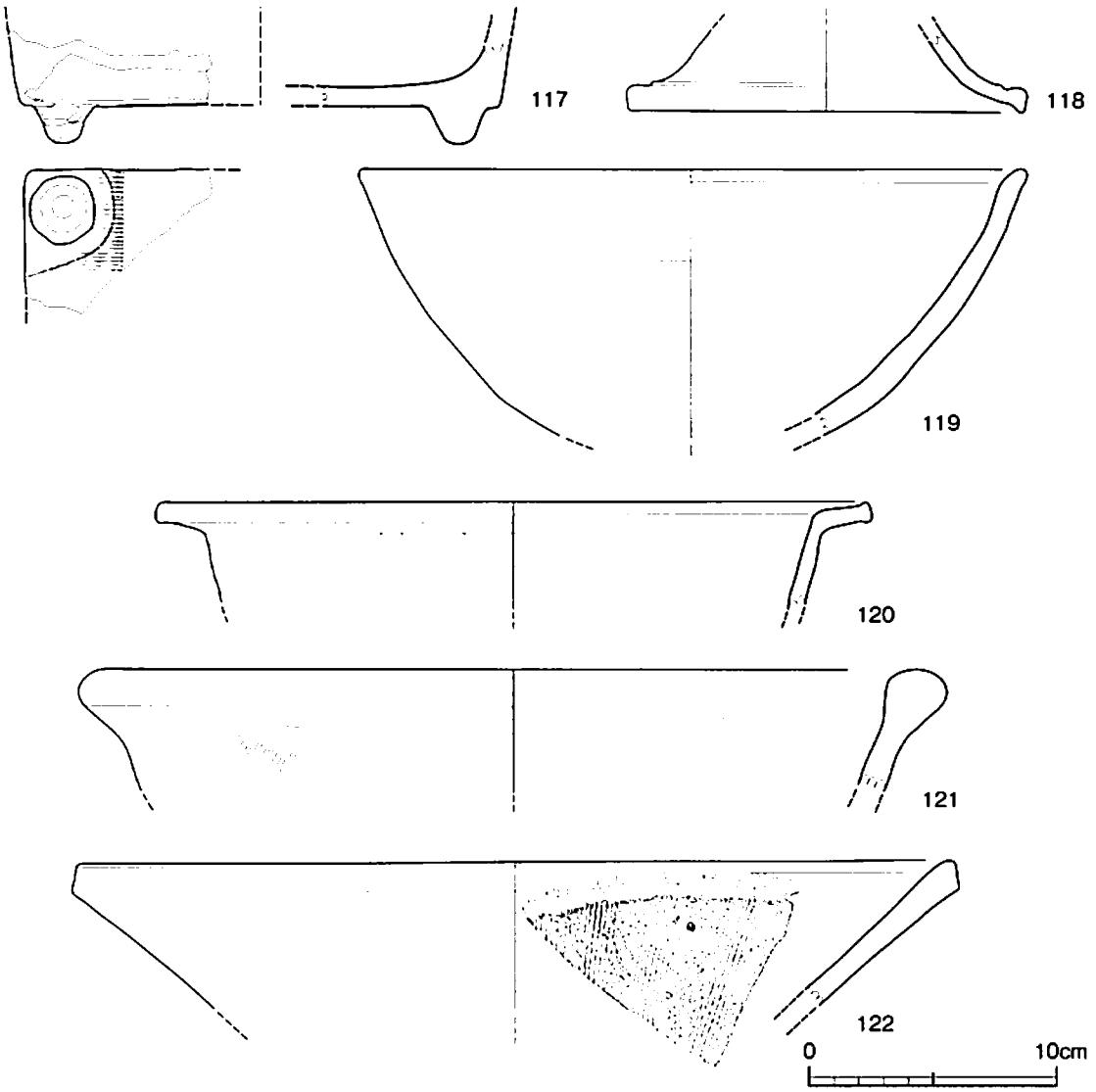
第10図　土器実測図（SD38）



第11図　土器実測図（SD39）



第12図　土器実測図（SD39）



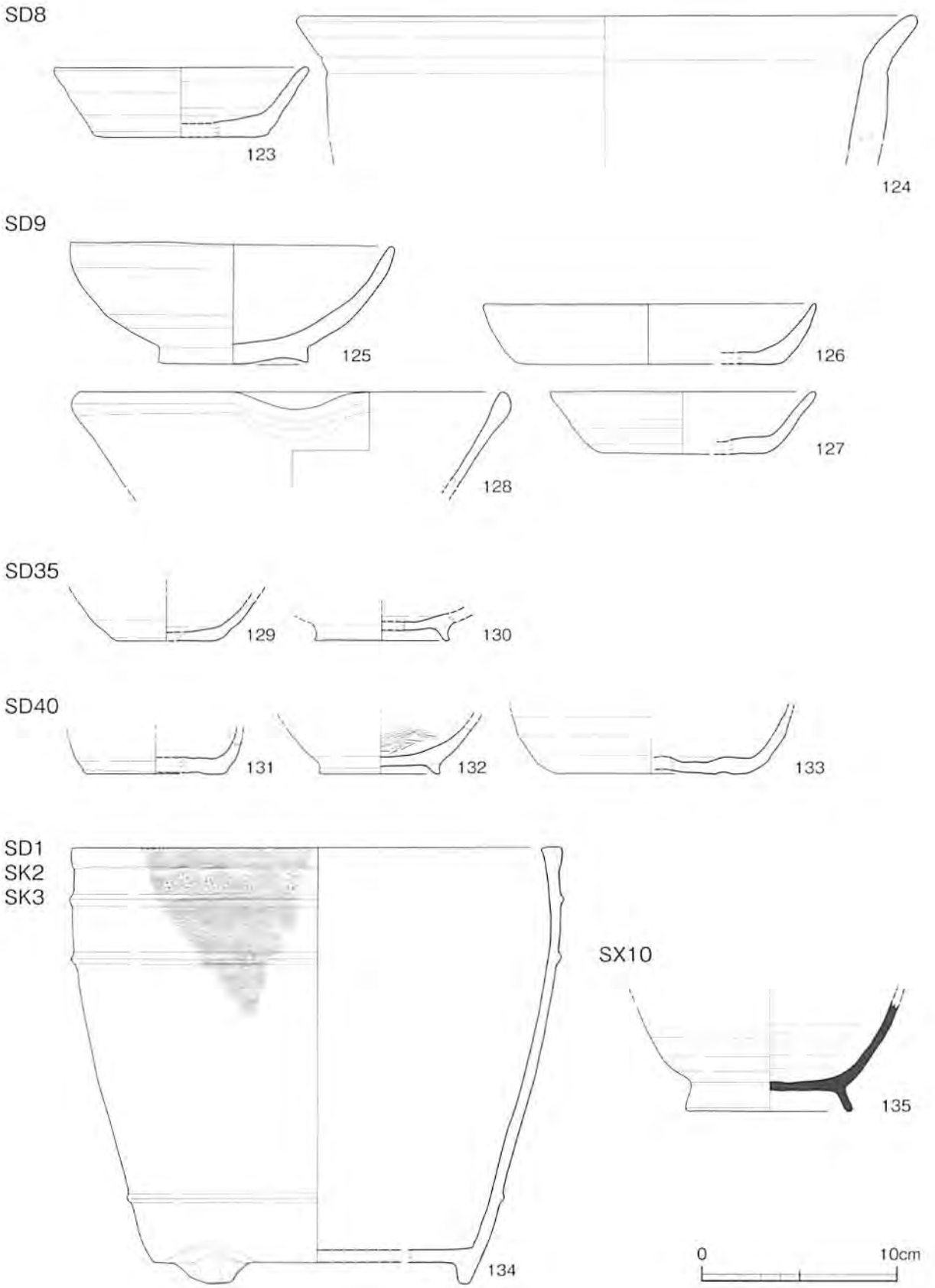
第13図　土器実測図（SD39）

ある。53の底部は静止糸切りの後、ナデ処理を施す。所謂「板目圧痕」が認められる。54の底部は、静止ヘラ切りの後、軽くナデ処理を施す。56は回転ヘラ切り底部に付高台を付し、高台裏に軽く回転ナデを施す。57、58は赤色土器である。高台裏を除き、内外面共に赤色泥を塗彩している。60、61の底部は回転ヘラ切りで、ほぼ未調整である。

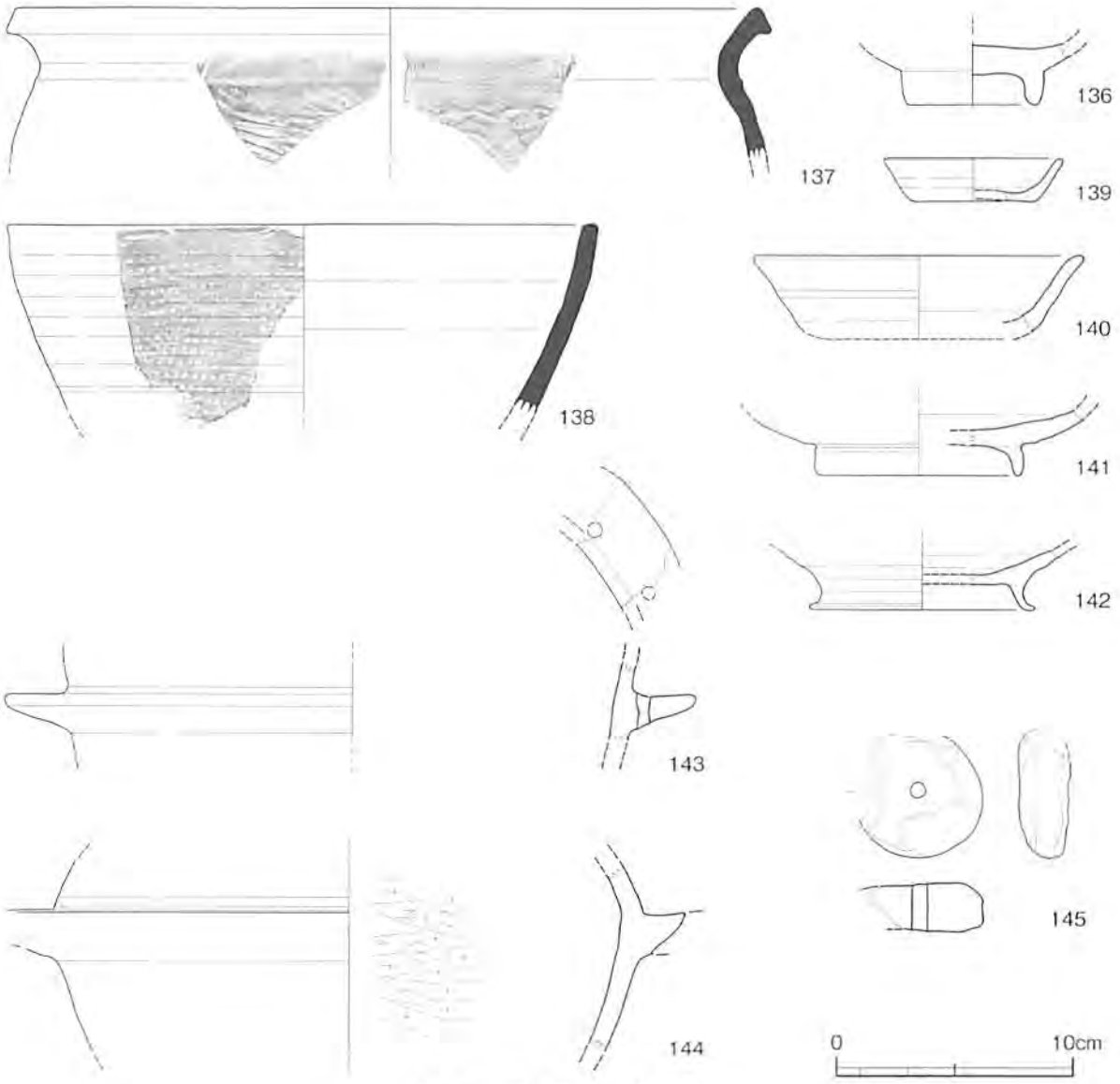
62～122はSD39出土土器であり、63、74～75、77、88、105、113は埋２層、111、66、69、94、122は埋３層、その他は埋１層から出土した。62～76は須恵器、93、94、117、122は瓦器、その他は土師器である。

62～65は蓋である。62は宝珠形、64、65は輪形のつまみを有し、63はつまみが無く、歪みが著しい。66～73は坏である。74は高台付壷の高台部、浄瓶の被せ蓋の可能性があるが不明である。75は甕、76は壷である。77、78は須恵器模倣坏蓋である。天井部外面に横位の回転ミガキを施す。79～92は椀である。79の底部は回転ヘラ切りの後、中央部にナデを施す。所謂「板目圧痕」が認められる。80の底部は回転ヘラ切りの後、回転ナデを施す。81の底部は回転ヘラ切りの後、中央部にナデを施す。82の内面は丁寧なナデが施されるが、底部は回転ヘラ切りの後、中央部のみを軽くナデる。この部分のみに所謂「板目圧痕」が認められる。83は底部を含む内外面共に回転ミガキを施す。84の底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。なお、84は赤色土器である。内外面に赤色泥を塗彩している。また、84は穿孔土器である。底部中央付近に穿孔を施す。85、89、91の底部は回転ヘラ切りの後、縁辺部を丁寧に、中央部を軽くナデる。86の底部は回転ヘラ切りで、後処理を施さない。

87、88の底部は回転ヘラ切りの後、縁辺部のみをナデる。90の底部は静止糸切りの後、中央部を軽くナデる。所謂「板目圧痕」が認められる。92の底部は切り離しの後、回転ケズリを施す。内面には横位の回転ミガキを施す。93、94は火鉢である。



第14図　土器実測図（SD）



第15図　土器実測図（SK２）

95～108は椀である。97は黒色土器である。内面に黒色処理を施す。100～103は赤色土器である。100は高台内と高台脇を除く外面及び内面に、101は高台内を除く内外面に、103は口唇部を含む内外面に、赤色泥を塗彩する。102は内外面共に赤色泥を塗彩し、塗彩後、内面に横位の回転ミガキを施す。105、106は高台貼り付け後に接合部をヨコナデするが、高台裏中央部にはナデが及ばず「板状圧痕」が残存している。108は底部に穿孔を有する。109は壷である。内面及び外面の口唇端部から７㎜までの範囲に赤色泥を塗彩する。110、111は甑である。111は甑把手に内面から刺突孔が加えられる。112、113は鉢である。113は片口が付く。114～116は甕である。

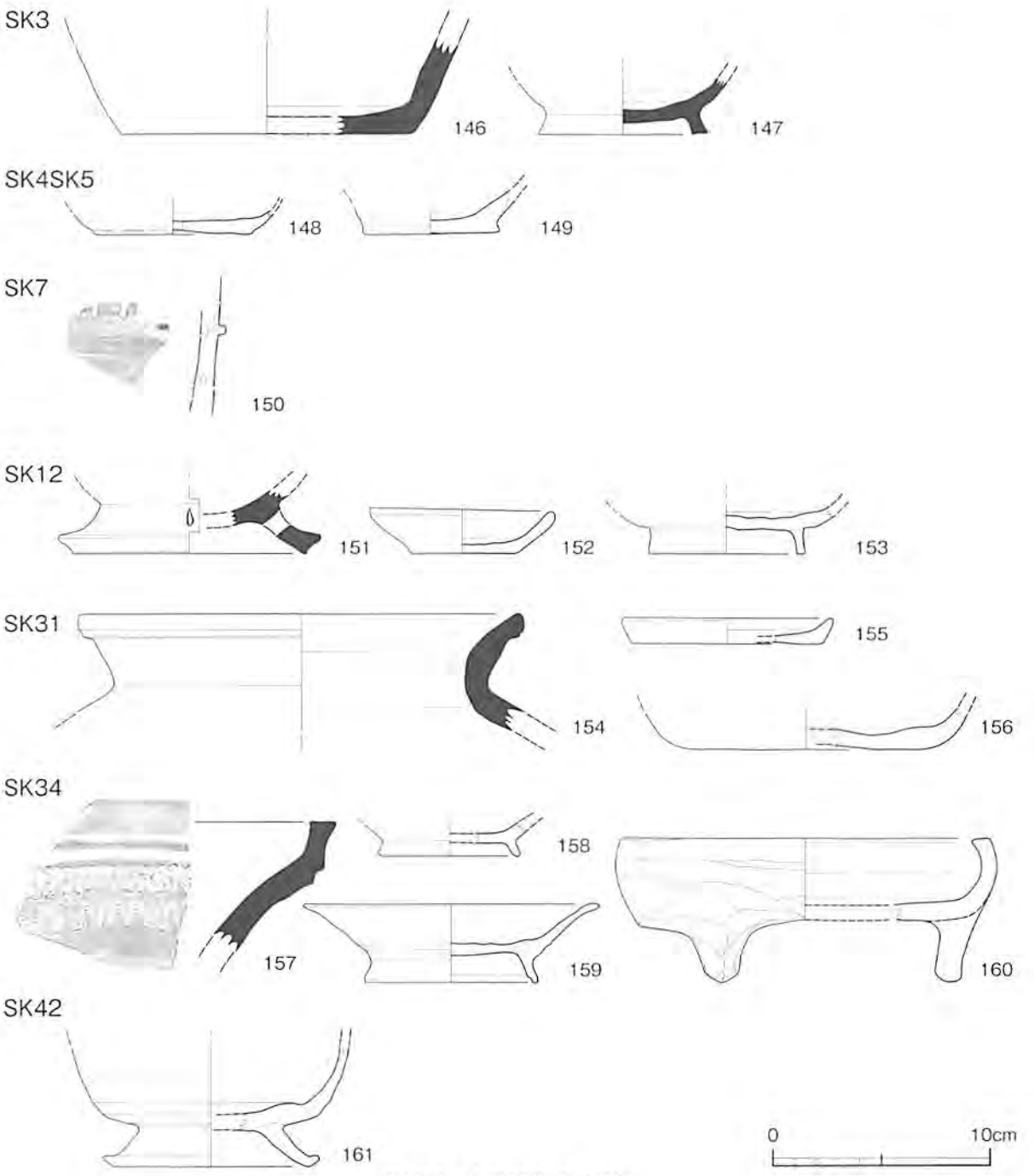
117は火鉢である。四方形の体部４隅に円錐形の脚部を付す。118は高杯、119～121は鉢、122は擂鉢である。擂目は７条１単位である。

123～124はSD８出土土器であり、埋２層から出土した。123～124は土師器である。123は椀で、底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。124は甕である。

125～128はSD９出土土器であり、埋１層から出土した。125、128は瓦器、その他は土師器である。

125～127は椀である。125は、外面の腰部から底部に回転ケズリを施した後、高台を付ける。126の底部は静止糸切りの後、未調整である。127の底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。128は鉢で、片口を付す。

129～130はSD35出土土器であり、埋１層から出土した。129～130は土師器である。129～130は椀で



第16図　土器実測図（SK）

ある。129の底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。所謂「板状圧痕」が残存する。

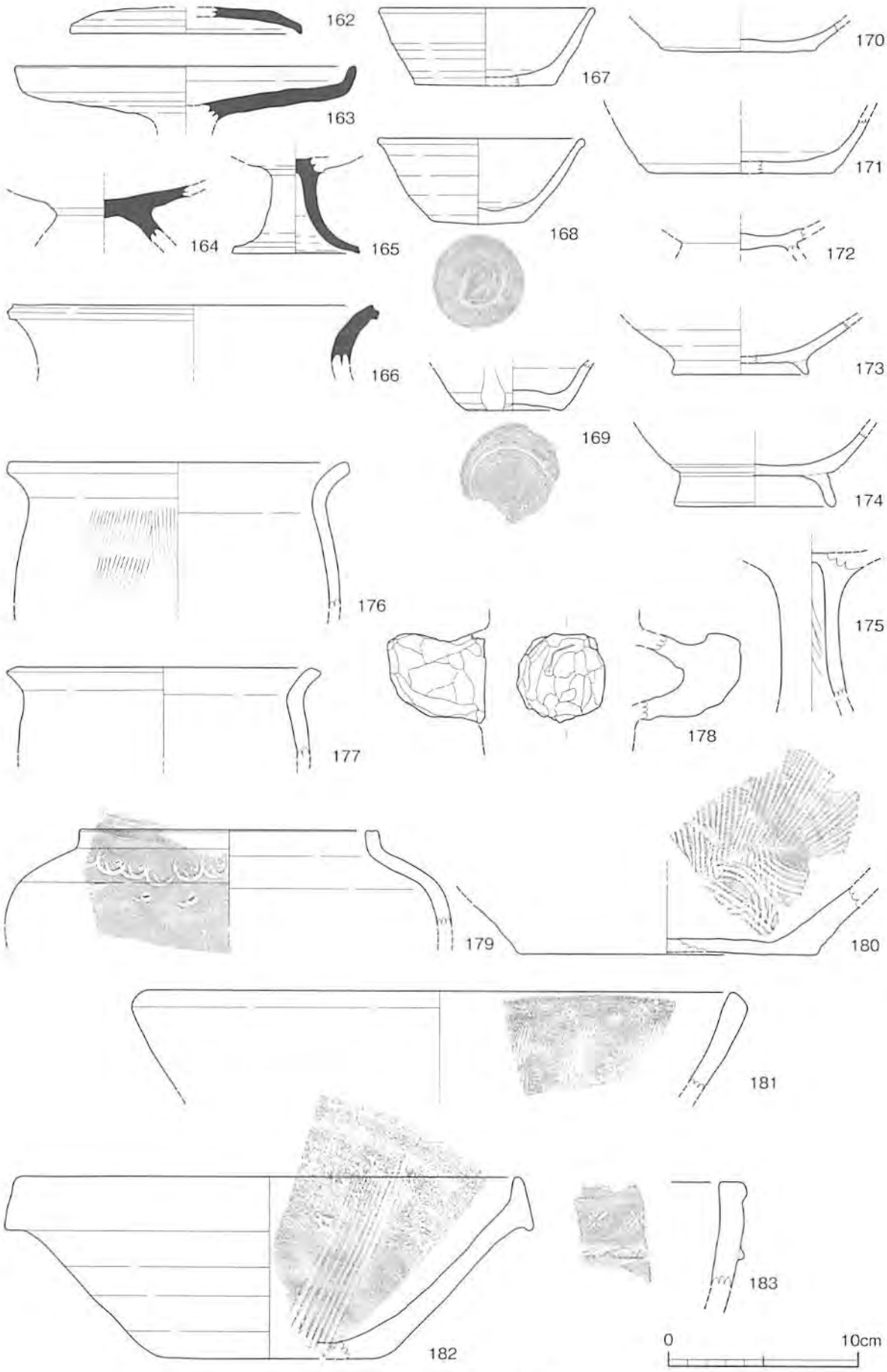
131～133はSD40出土土器であり、埋１層から出土した。131～133は土師器である。131～133は椀である。131の底部は糸切りの後、未調整である。132は黒色土器である。内面に黒色処理を施す。133の底部は回転ヘラ切りの後、ナデる。

134はSD１、SK２、SK３、SK12及び南区４層から出土した。134は瓦器である。134は火鉢である。

135はSX10出土土器であり、埋１層から出土した。135は須恵器である。135は坏である。

136～145はSK２出土土器であり、137、142は埋２層、その他は埋１層から出土した。136は青磁、137～138は須恵器、144は瓦器、その他は土師器である。136は白色胎土で緑色釉薬の椀である。137は甕、138は鉢である。139～142は椀である。139の底部は糸切りが施される。142は赤色土器である。内外面に赤色泥を塗彩する。143～144は羽釜である。145は紡錘車である。

146～147はSK３出土土器であり、埋１層から出



第17図　土器実測図（SX６）

土した。146は須恵器、147は須恵器に類似した窯焼成の土器である。146は壷、147は椀である。

148～149はSK４及びSK５出土土器であり、埋１層から出土した。148～149は土師器である。148～149は椀である。148、149の底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。共に「板状圧痕」が認められる。

150はSK７出土土器であり、埋１層から出土した。150は瓦器である。150は火鉢である。

151～153はSK12出土土器であり、埋１層から出土した。151は須恵器、その他は土師器である。151は高杯の脚部であり、刺突により窓孔を穿つ。152は小皿である。底部内面に黒く変色した部分が見られるため灯明皿と考えられる。153は赤色土器である。高台内を除く外面及び内面に赤色泥を塗彩する。

154～156はSK31出土土器であり、埋１層から出土した。154は須恵器、その他は土師器である。154は壷、155は小皿、156は椀である。155の底部は回転ヘラ切りの後、中央部をケズリ、縁辺部に板ナデを加える。156の底部は回転ヘラ切りの後、軽くナデる。

157～160はSK34出土土器であり、埋１層から出土した。157は須恵器、160は瓦器、その他は土師器である。157は鉢である。158～159は椀である。158は黒色土器である。内面に黒色処理を施す。159は赤色土器である。坏部の内外面には全面に、高台裏は高台の内脇のみに赤色泥を塗彩する。なお、159には墨書が付される。160は手焙り（火鉢）である。

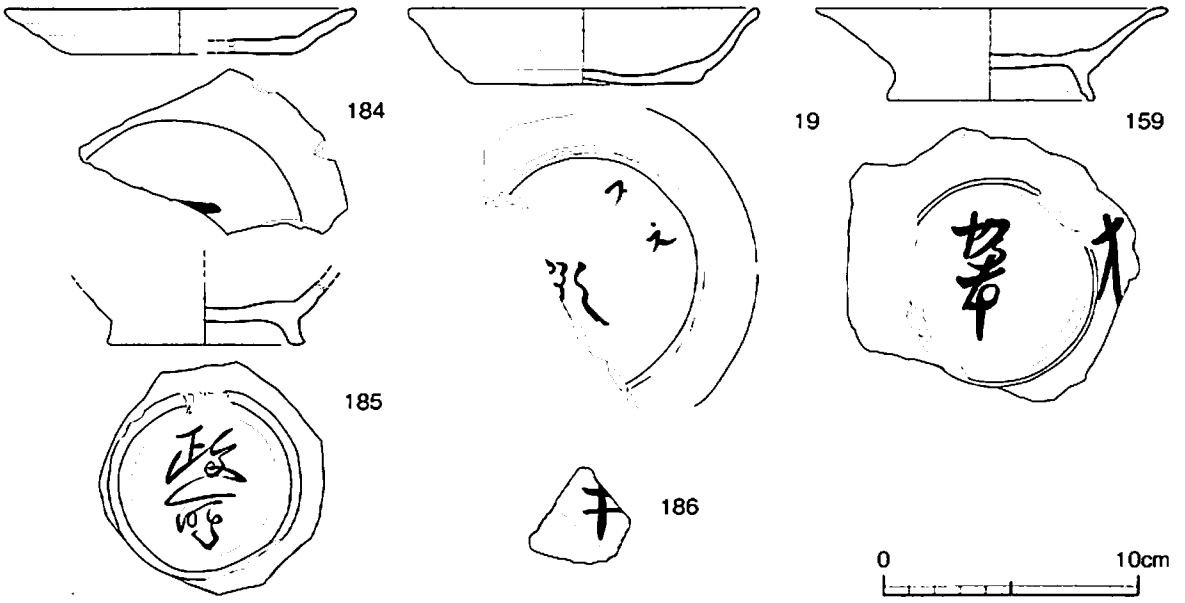
161はSK42出土土器であり、埋１層から出土した。161は土師器である。161は椀である。

162～183はSX６出土土器であり、162～163、173、177は埋１層、169、171～172、174、179、183は埋２層、その他は埋３層から出土した。162～166は須恵器、180～183は瓦器、その他は土師器である。162は蓋、163～165は高杯、166は甕である。167～174は椀である。167～168の底部は回転ヘラ切り、169は静止糸きりで共に切り離し後の調整を略している。170の底部は回転ヘラ切りの後、縁辺部をナデる。「板状圧痕」が残存する。171の底部は回転ヘラきりの後、全体を丁寧にナデる。172は黒色土器である。内面に黒色処理を施す。175は高坏、176～177は甕、178は甑である。178は甑把手に内面から刺突孔が加えられる。179は短頸壷であり、肩部に印紋を施す。180～182は擂鉢、183は火鉢である。

(2)墨書土器

19、159、184～186は墨書土器である。墨書土器は全点を掲載している。

19はSD32の埋１層、159はSK34の埋１層、184は北区の３層、185～186は北区の撹乱層から出土した。いずれも土師器であり、椀であり、赤色土器である。19の底部は回転ヘラ切りの後、全体にナデを施す。なお、内面及び底部中央を除く外面に赤色泥を塗彩している。また、墨書が認められるが解読できない。



第18図　土器実測図（墨書土器）

159は高台を有する。なお、坏部の内外面には全面に、高台裏は高台の内脇のみに赤色泥を塗彩する。また、高台裏には「杉本」と墨書を付す。184の底部はヘラ切りの後、回転ナデを施す。なお、内面に赤色泥を塗布する。また、墨書の一部が確認できる。185は高台を有する。なお、内外面に赤色泥を塗彩している。また、高台裏には「政所」と墨書を付す。186の底部はヘラ切りの後、軽いナデを施す。なお、内面に赤色泥を塗布する。また、底部に「井」と墨書を付す。

(3)穿孔土器

椀等の底部に穿孔を施す例が確認されたため、この項を設けた。

84、108、187～190は、底部に穿孔を有する土器である。84はSD39埋１層、108はSD39埋１層、187、190は北区撹乱層、188は北区３層、189は南区３層から出土した。いずれも土師器であり、椀である。

84は赤色土器であり、内外面に赤色泥を塗彩している。外面からの打撃により0.5cm程度の穿孔を施す。108は内外両面から打撃により0.5cm程度の穿孔を施す。187は赤色土器であり、内外面に赤色泥を塗彩する。内面からの打撃により1.5cm程度の穿孔を施す。188は赤色土器であり高台裏を除く外面に赤色泥を塗彩する。内面からの打撃により１cm程度の穿孔を施す。189は外面からの打撃により0.5cm程度の穿孔を施す。190は外面からの打撃により1.5cm程度の穿孔を施す。

穿孔は土器焼成後に、間接打撃法により施されている。穿孔位置は、必ずしも土器底部中心ではなく、内面からの穿孔の場合は底面端から、外面からの穿孔の場合は高台または底部端から、２～３cm中心よりの箇所を選定している。

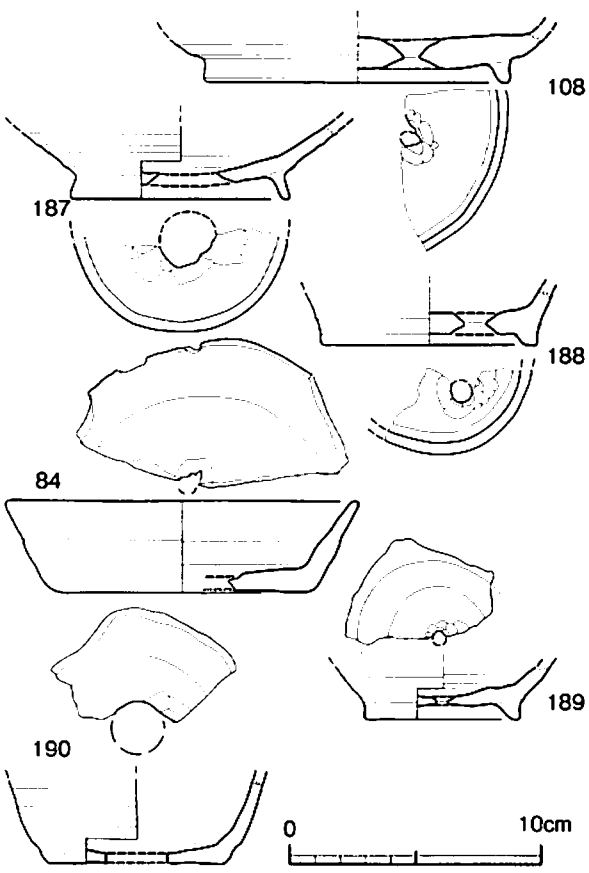
なお、穿孔土器は特徴的なものを選定し、掲載したため、赤色土器の割合等は別途調査する必要がある。

(4)土製品

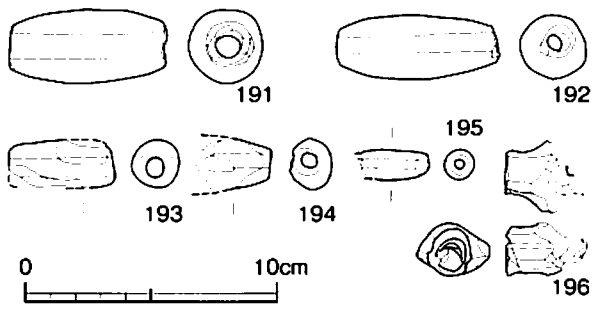
191～195は土錘、196は土製品である。土錘は全点を掲載している。

191～192は北区撹乱層、193は北区表土、194は南区３層、195は撹乱層から出土した。遺構に伴う土錘はない。

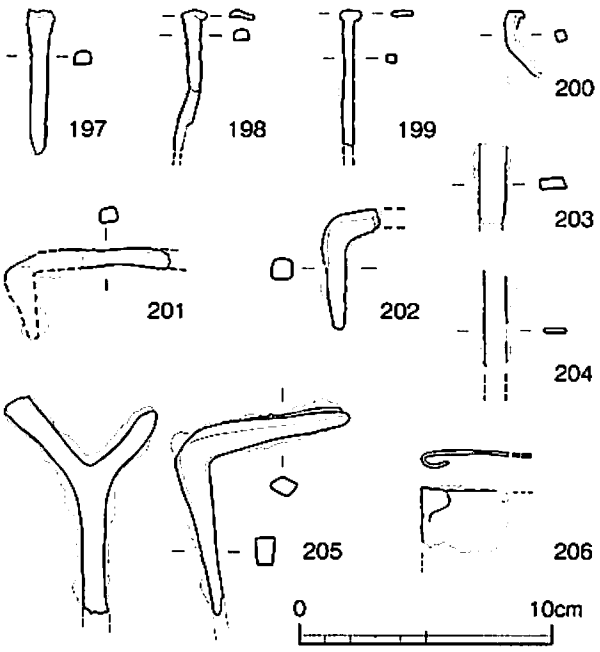
196は土師質、素焼き、詳細不明の土製品である。196はSD32埋１層から出土した。残存部は猪鼻に似た形態をとり、筒部には断面が三日月形を呈する中空部が注口状に貫通している。土製玩具の可能性がある。



第19図　土器実測図（穿孔土器）



第20図　土製品実測図



第21図　鉄器実測図

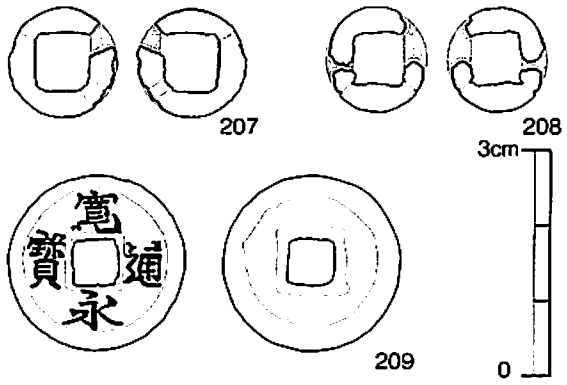
(5)鉄器

197～206は鉄製品である。197はSD38埋1層、201、203はSD1埋3層、その他はSD39埋1層から出土した。

197～200は鉄釘である。いずれも断面四角形の角釘で、釘頭は平らに叩き潰している。201～202は鎹である。いずれも断面四角形を呈する。203～204は不明鉄器である。いずれも幅1cm、厚み0.2cm程度の平板である。205は先端が二叉となった熊手形の鉄製品である。206は弥生時代の摘鎌である。

(6)貨銭

207～209は貨銭である。207は南区6層、208～209はSD39埋1層から出土した。207～208は無文銭、209は寛永通宝である。



第22図　貨銭実測図

第Ⅶ章　春日地区第５次調査の成果

第１節　調査の経緯

熊本県教育庁文化課は、平成11年５月10日付け熊土第433号で熊本県熊本土木事務所から埋蔵文化財の予備調査依頼を受け、平成12年１月19～21日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、平成12年度より調査を開始し、平成16年度調査箇所については、熊本県熊本土木事務所より文化財保護法第57条３項の規定に基づく発掘調査の通知（平成16年６月４日付け熊土第3155号平成16年９月16日付教文第1090号）を受けた。その後、発掘調査の期日等の協議を進め、熊本県熊本土木事務所より発掘調査の依頼文と承諾書（平成16年９月24日付け熊土第3590号）を受け、文化財保護法第58条第２項の規定に基づき、発掘調査実施の通知（平成16年10月４日付教文第1866号）を行った。そして、平成16年10月12日より発掘調査を開始し、同年12月10日に終了した。遺物整理・報告書作成については、平成19年度に行った。

第２節　調査の組織

【平成16年度　(2004) 本調査】

調査責任者　島津義昭（文化課長）
調査総括　倉岡　博（課長補佐）
　　西住欣一郎（文化財調査第二係長）
調査事務局　吉田　恵（課長補佐）
　　欄杭正義（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
　　小谷仁志（主任主事）
調査担当　松村洋史（文化財保護主事）
　　福永雅美（非常勤職員）
　　宮崎　拓（非常勤職員）

【平成19年度　(2007) 整理・報告書作成】

整理責任者　梶野英二（文化課長）
整理総括　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　江本　直（課長補佐）
　　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
整理事務局　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参事）
　　高松克行（主任主事）
整理担当　松村洋史（文化財保護主事）
　　加藤早織（非常勤職員）

第３節　調査の方法と経過

今回、調査を行った箇所は、二本木遺跡群の中でも北端に位置する部分である。市電の通りに面していて長さ約60m、幅は２mほどで、細長い調査区である。

調査は、まず重機による表土掘削を行った。その後、㈲坂井設計コンサルタントに委託し、日本測地系の国土座標軸を使用する区画設定をした。区画はより精度を増すため５m×５mで設定した。

表土掘削後、清掃し遺構検出を行ったが、かなり撹乱が多く難航した。遺構は土層断面図作成のため半裁し、図面をとったあと完掘して平面図の作成を行った。実測図については、その一部を㈱九州文化財研究所に業務委託を行ったが、各調査員が補足部分等は随時書き足しを行い、より精度の高いものとなるように努めた。遺構番号は、遺構の性格に関係なく通し番号とした。なおSK－２・12・13は、その後の精査で欠番とした。さらに、調査区全体の地形情報や遺構配置等を知るため、地形測量を㈱九州文化財研究所に委託した。また、空中写真撮影も行いたかったが、街中の狭い範囲であったので危険防止の意味も含めて今回は断念した。

発掘調査は、平成16年10月12日に開始し、同年12月10日に終了した。その間の経過は、次の通りである。

【平成16年10月】

12日　現場事務所設置。発掘調査機材等の搬入。
13日　現場事務所備品搬入。非常勤職員の増田直人氏(現植木町職員)来跡、指導を受ける。表土掘削開始。
14日　宮崎拓氏、この日より調査に合流。
15日　発掘作業員による作業開始。
20日　台風23号接近により作業中止。幸い被害は無し。
22日　２区遺構検出開始。

25日　メッシュ杭打ち開始。
27日　メッシュ杭打ち終了。
【平成16年11月】
４日　１区遺構検出開始。
10日　遺構実測開始。
12日　３区遺構検出開始。
16日　SE－９の掘削開始。大量の土師皿が出土。
　　２区の完掘撮影終了。
25日　SE－９完掘。
26日　３区の完掘撮影終了。
30日　２区の埋め戻し開始。
【平成16年12月】
２日　１区の完掘撮影終了。
６日　３区の埋め戻し開始。
７日　遺構実測終了。
８日　１区の埋め戻し開始。
９日　遺物や備品等の搬出。
10日　事務所の解体。調査終了。

第４節　調査の成果

１　基本土層（第１～３図）

今回の調査区の基本土層は以下の通りである。本調査区の基本土層は、８層に分層できる。上層より、Ⅰa層からⅧ層とし、Ⅰ層を包含物の違いなどからⅠa層とⅠb層に分けた。この基本土層は、すべて調査区の南壁の土層状況を検討して作成したものである。なお、今回の調査区内の全域に対して、この基本土層は適用できる。

Ⅰa層　表土。円礫や砕石が混じる。住宅による整地層。

Ⅰb層　表土。砂、焼土、漆喰などを敷き詰めた整地層。

Ⅱ層　近世～近代の整地層及び掘削層と思われる。暗褐色シルト（Hue10YR3/4）、褐灰色（Hue10YR4/1）、黒褐色細砂（Hue2.5Y3/2）、黄灰色シルト（Hue2.5Y4/1）から成る。これによる整地層及び掘りこみは撹乱として扱っている。

Ⅲ層　黒褐色シルト（Hue7.5YR3/1）。
しまり中、粘性中。Ⅳ層をベースにして褐灰色シルトと混ざりあう。小土器片、炭化物を含む。中世の遺物を含む。

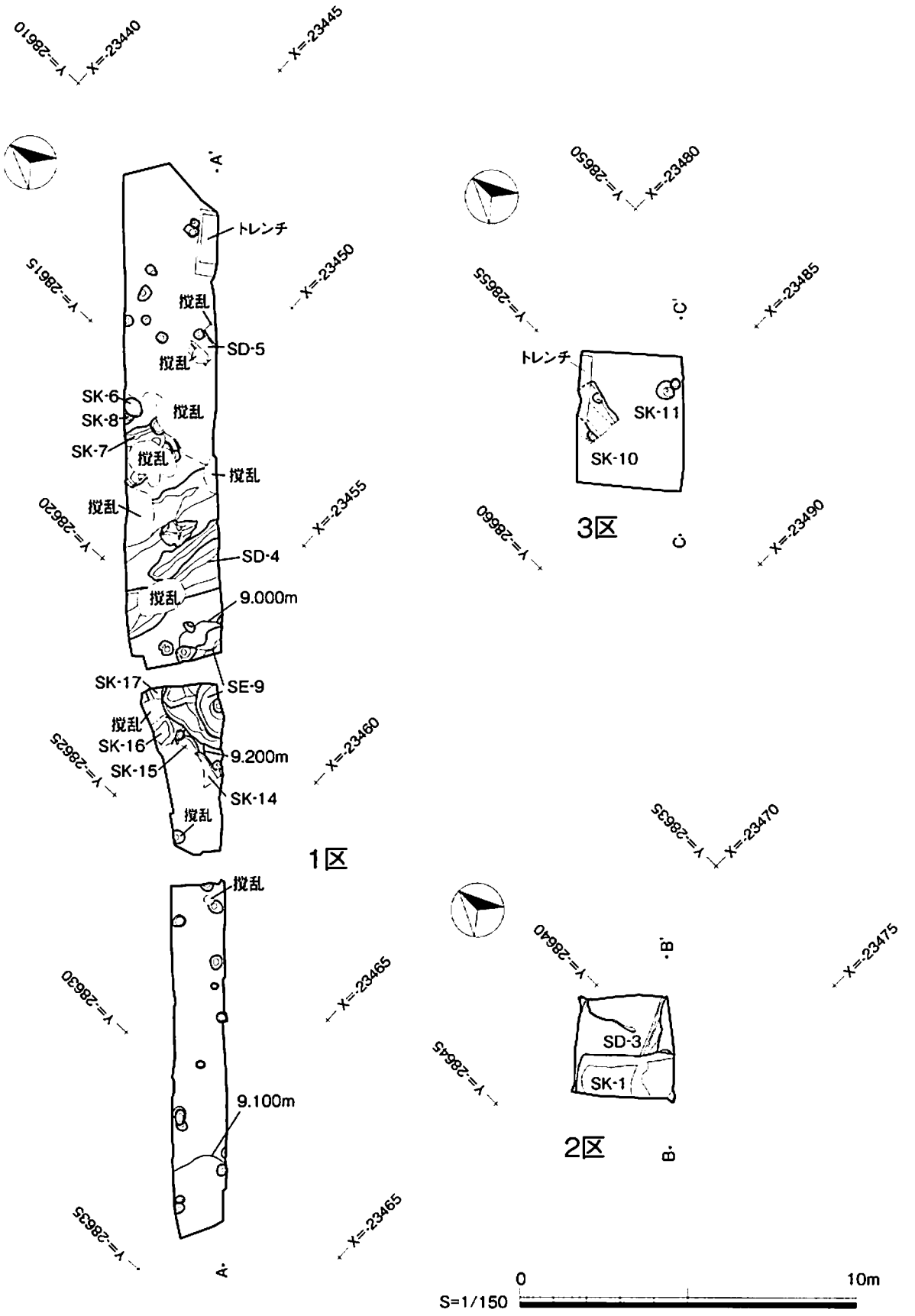
Ⅳ層　黒褐色シルト（Hue10YR3/2）。
しまり中、粘性中。やや砂質、古代の遺物包含層。明黄褐色細砂ブロックが若干混じる。上部の色調暗く、下部につれて明るくなる。

Ⅴ層　明黄褐色細砂（Hue10YR6/8）。
しまり小、粘性小。しまり弱く、無遺物層（Ⅴ層以下全て無遺物層）上面が遺構検出面。

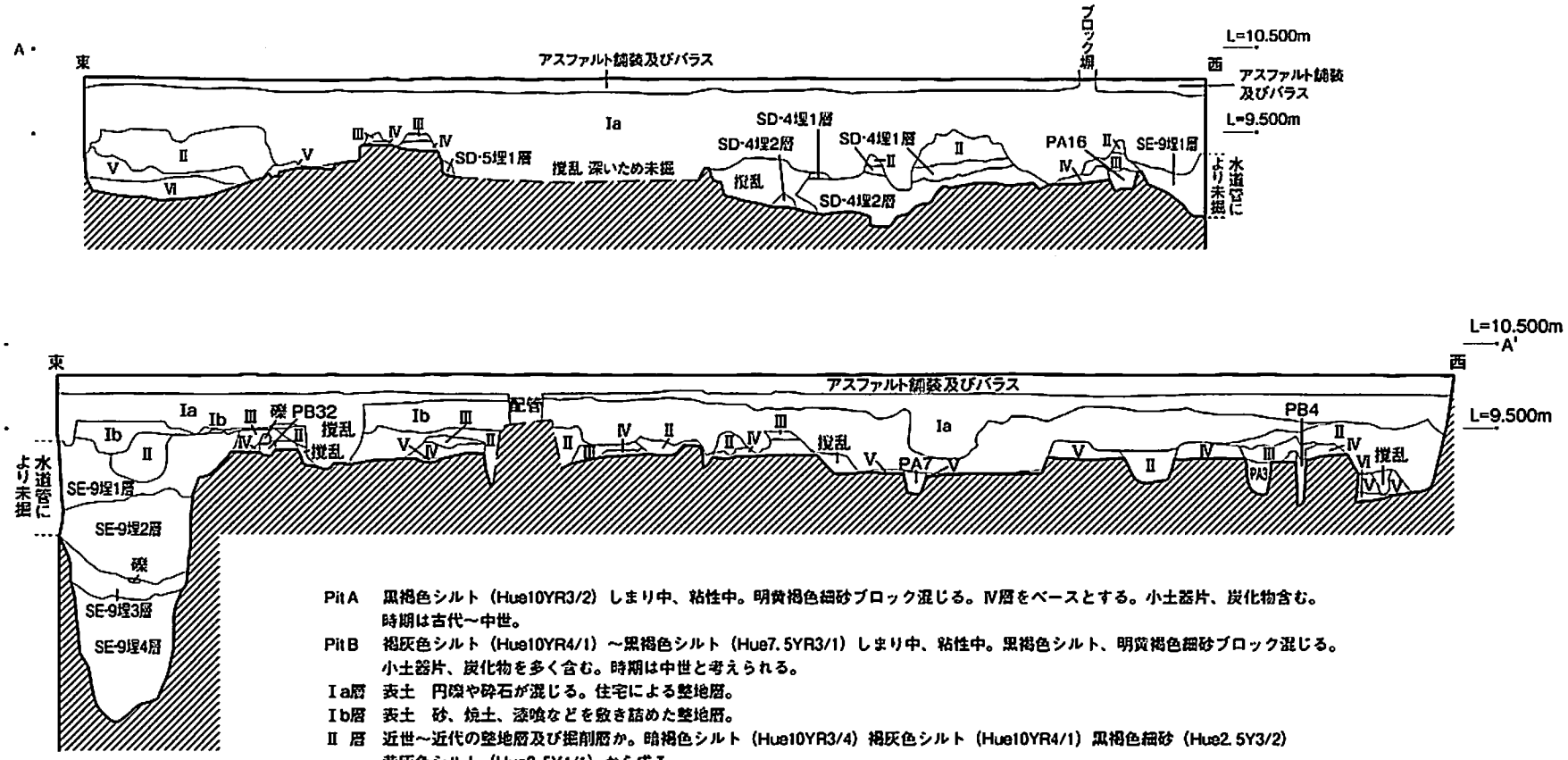
Ⅵ層　明黄褐色細砂（Hue2.5Y7/6）。
しまり中、粘性小。同色の固くしまるブロックとしまり中程度の細砂が混じりあう。

Ⅶ層　浅黄色細砂（Hue2.5Y7/4）。
しまり大、粘性小。固くしまる。

Ⅷ層　緑灰色細砂（Hue7.5GY6/1）。
しまり大、粘性小。さらに固くしまる。



第１図　遺構配置図（S＝１/150）



PitA　黒褐色シルト（Hue10YR3/2）しまり中、粘性中。明黄褐色細砂ブロック混じる。Ⅳ層をベースとする。小土器片、炭化物含む。
時期は古代～中世。

PitB　褐灰色シルト（Hue10YR4/1）～黒褐色シルト（Hue7.5YR3/1）しまり中、粘性中。黒褐色シルト、明黄褐色細砂ブロック混じる。
小土器片、炭化物を多く含む。時期は中世と考えられる。

Ⅰa層　表土　円礫や砕石が混じる。住宅による整地層。

Ⅰb層　表土　砂、焼土、漆喰などを敷き詰めた整地層。

Ⅱ 層　近世～近代の整地層及び掘削層か。暗褐色シルト（Hue10YR3/4）褐灰色シルト（Hue10YR4/1）黒褐色細砂（Hue2.5Y3/2）
黄灰色シルト（Hue2.5Y4/1）から成る。
これによる整地層及び掘り込みは搅乱として扱っている。

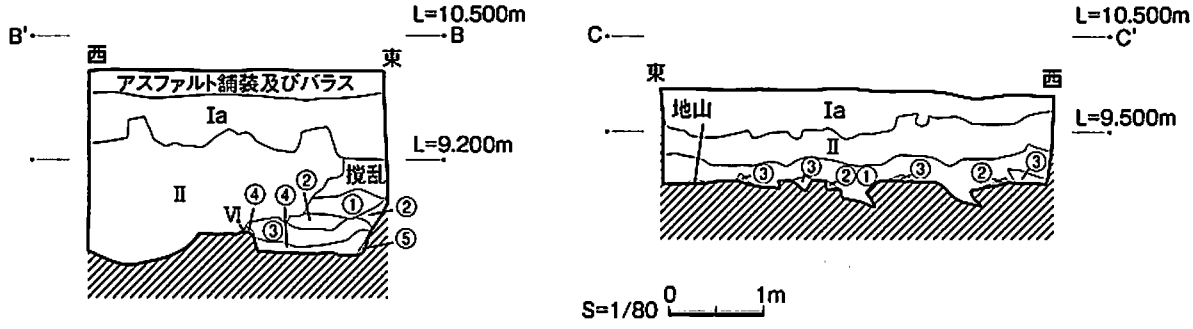
Ⅲ 層　黒褐色シルト（Hue7.5YR3/1）しまり中、粘性中。Ⅳ層をベースにして褐灰色シルトと混ざりあう。小土器片、炭化物含む。中世の遺物包含。

Ⅳ 層　黒褐色シルト（Hue10YR3/2）しまり中、粘性中。やや砂質、古代の遺物包含層、明黄褐色細砂ブロック若干混じる。
上部の色調暗く下部につれて明るくなる。

Ⅴ 層　明黄褐色細砂（Hue10YR6/8）しまり小、粘性小。しまり弱く無遺物（Ⅴ層以下全層無遺物）上面が遺構検出面。

Ⅵ 層　明黄褐色細砂（Hue2.5Y7/6）しまり中、粘性小。同色の固くしまるブロックとしまり中程度の細砂が混じり合う。

第２図　１区南壁土層断面図



①SK１埋1c層　黒褐色シルト（Hue10YR3/2）しまり中、粘性中。浅黄色細砂ブロック若干混じる。
②SK１埋1d層　暗褐色シルト（Hue10YR3/3）しまり中、粘性中。浅黄色細砂、にぶい黄褐色粘土ブロック混じる。土器細片多く含む。
③SK１埋２層
④SK１埋３b層
⑤SK１埋４層
SK１土層断面図に記載

①褐灰色シルト（Hue10YR4/1）しまり中、粘性中。Ⅱ層よりややしまりが弱い。明黄褐色細砂ブロック混じる。土器細片、炭化物含む。
②褐灰色シルト（Hue10YR4/1）しまり大、粘性中。黒褐色シルト、明黄褐色細砂ブロック混じる。土器細片、炭化物含む。
③黄褐色細砂（Hue10YR5/8）しまり中、粘性中。褐灰色シルトブロック混じる。Ⅴ層が撹乱された土。

第３図　２区・３区南壁土層断面図

２　遺構

SE－９（第４図）

今回、この調査区で検出された井戸跡は１基である。検出された位置が調査区の際であったため、全体の半分しか様子がつかめなかったが、完掘できたために復元することは可能であった。

平面プランの半分が、調査区外にある。推定で直径約４ｍ、深さ約3.4mの井戸である。埋土は大きく４層に分かれていて、上から埋１層となる。埋１層と埋３層は自然堆積による層と考えられ、埋２層は土器廃棄による堆積層と考えられる。埋４層については、埋め戻しによる堆積層と考えられる。埋３層からは炭化した種子を検出し、年代測定の結果、10世紀後半を示した。（詳細は４　自然科学分析参照）

つまり、それ以前に井戸が廃棄され、中世に至る過程で徐々に埋まっていったと考えられる。

SK－６（第５図）

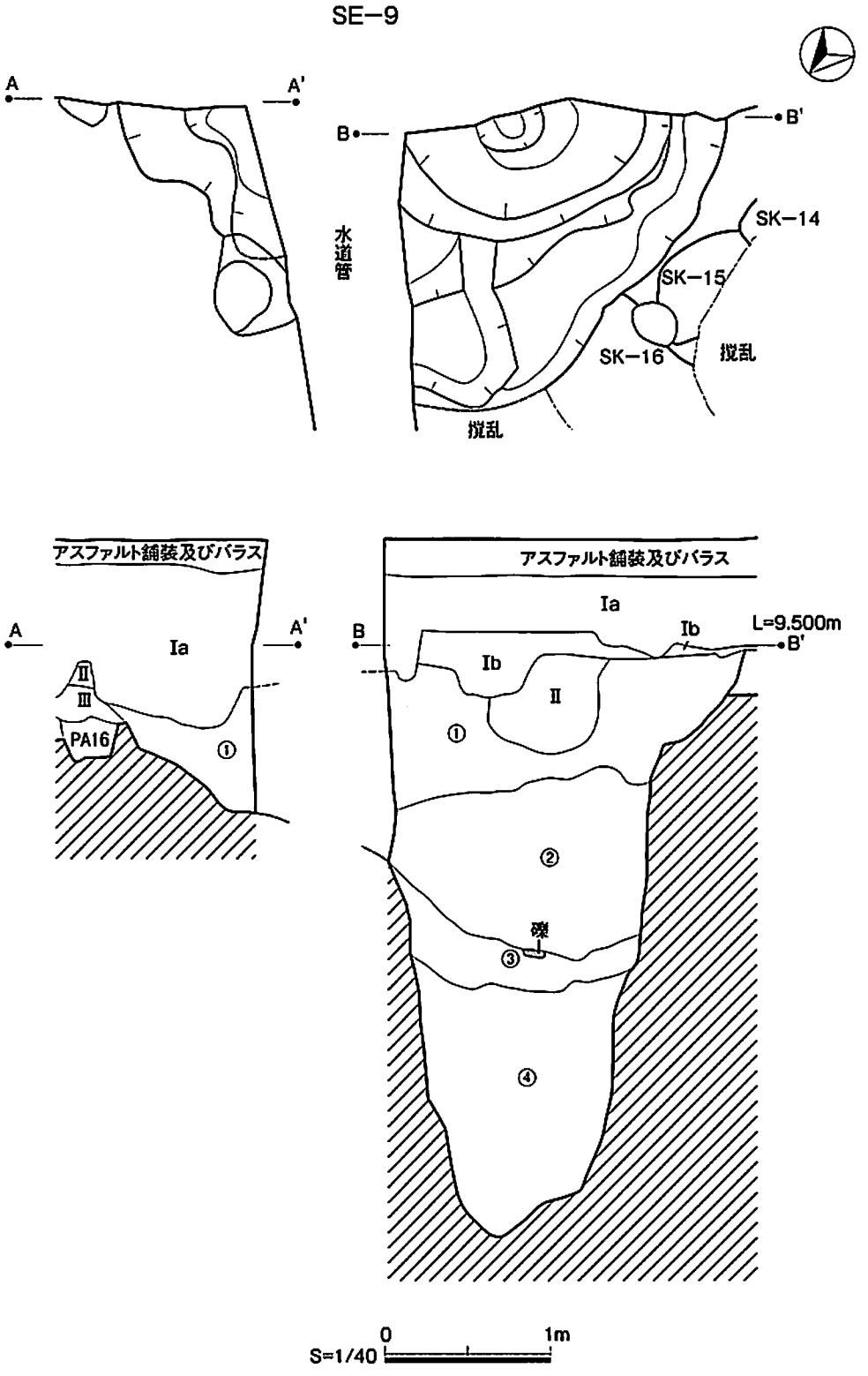
調査１区で検出した。平面プランは楕円形。SK－８を切っている。埋土は１層。遺物は、須恵器等が出土。

SK－７（第５図）

調査１区で検出した。平面プランは正方形に近い。遺構内に大きな撹乱があり、埋土の残りは悪いが、２層に分けられる。遺物はほとんどない。

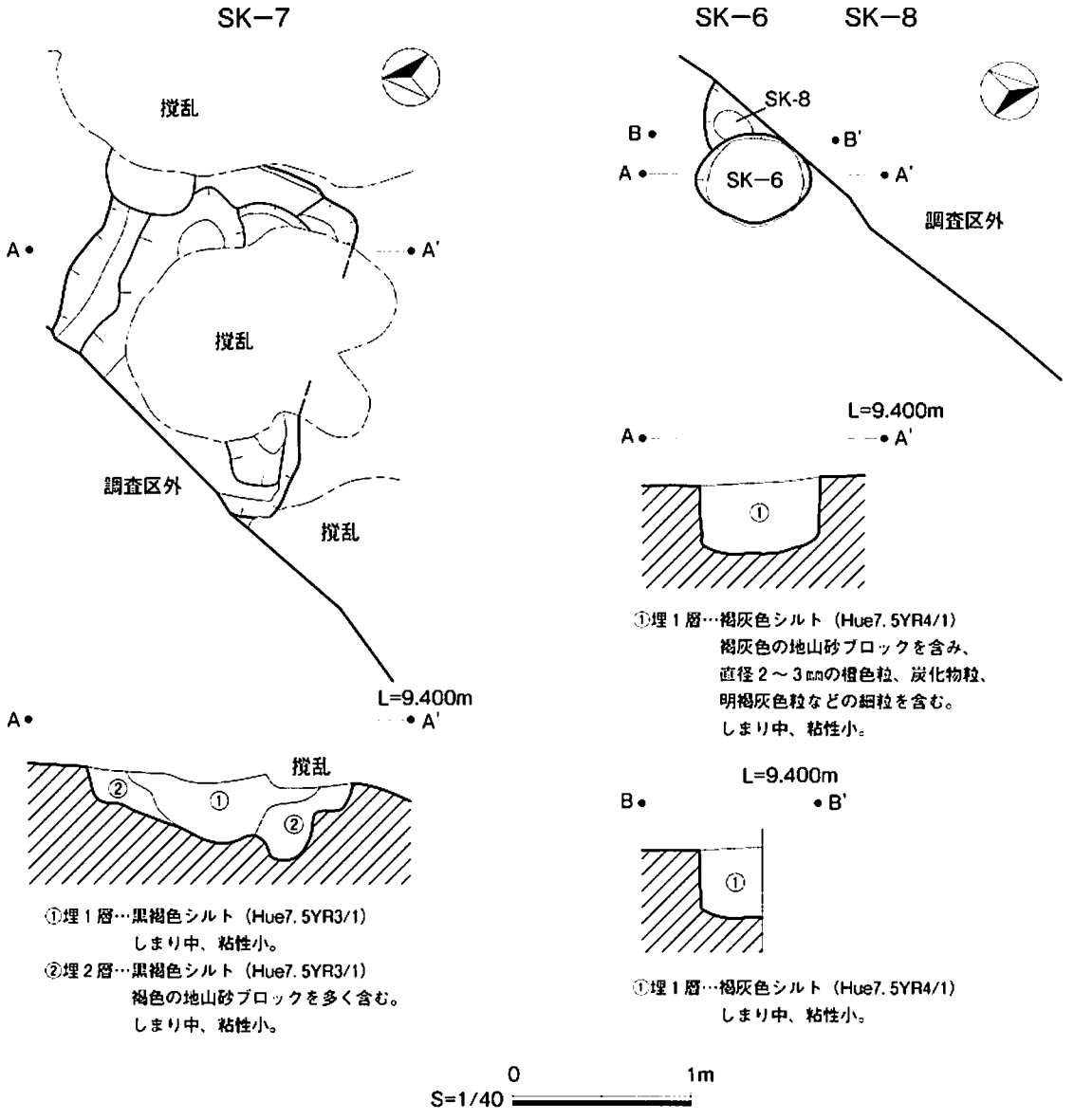
SK－８（第５図）

調査１区で検出した。SK－６に切られる。埋土は１層。ほとんどが調査区外にあるため、全体的なプランは不明。



①埋１層…暗褐色シルト（Hue10YR3/3）しまり大、粘性中。黄褐色細砂ブロック若干混じる。土器細片含む。
②埋２層…褐灰色シルト（Hue10YR4/1）しまり中、粘性中。灰、炭化物、焼土が混じり層を幾重にもなしている。
明黄褐色細砂ブロック混じる。遺物多量出土。
③埋３層…黒褐色シルト（Hue7.5YR3/1）しまり中、粘性中。明黄褐色細砂ブロック多く混じる。出土遺物は少量である。
④埋４層…オリーブ灰色細砂（Hue５GY5/1）しまり小、粘性小。黄褐色細砂ブロック混じる。
遺物はわずかしか出土していない。

第４図　井戸跡（SE−９）実測図



第５図　土壙（SK－６・７・８）実測図

SK－14（第６図）

調査１区で検出した。ほとんどが撹乱に切られているため、プランは不明である。深さもほとんどなく遺物も少ない。

SK－15（第６図）

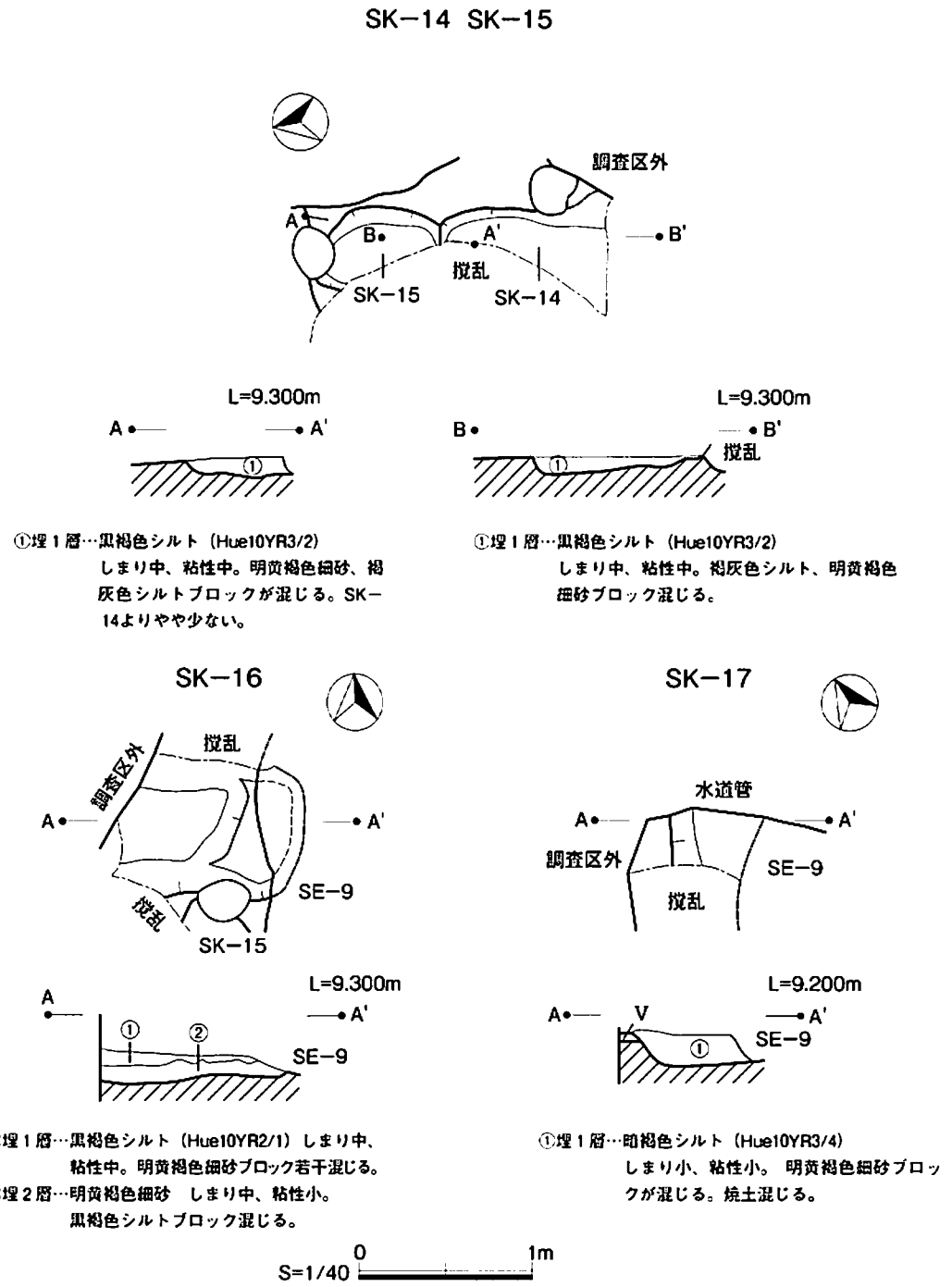
調査１区で検出した。SK－14に切られている。撹乱に切られているが、プランは楕円形と思われる。SK－14と同じく浅く、遺物はほとんどない。

SK－16（第６図）

調査１区で検出した。SE－９や撹乱に切られ、一部調査区外であるのでプランは不明である。埋土は２層に分けられるが浅く、遺物はほとんどない。

SK－17（第６図）

調査１区で検出した。SE－９や撹乱などに切られているため、平面プランは不明。埋土も１層で遺物はほとんどない。



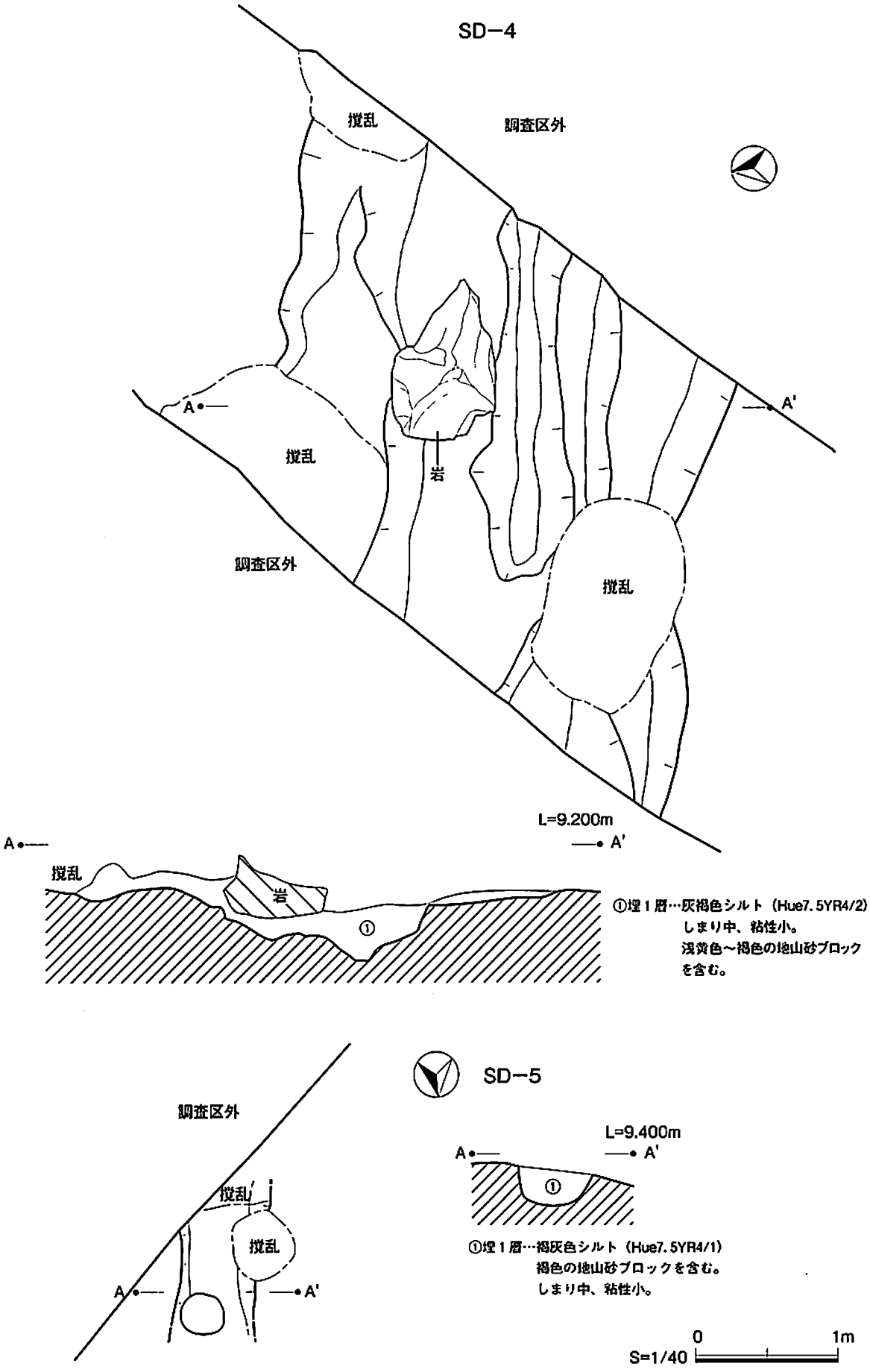
第６図　土壙（SK−14・15・16・17）実測図

SD－４（第７図）

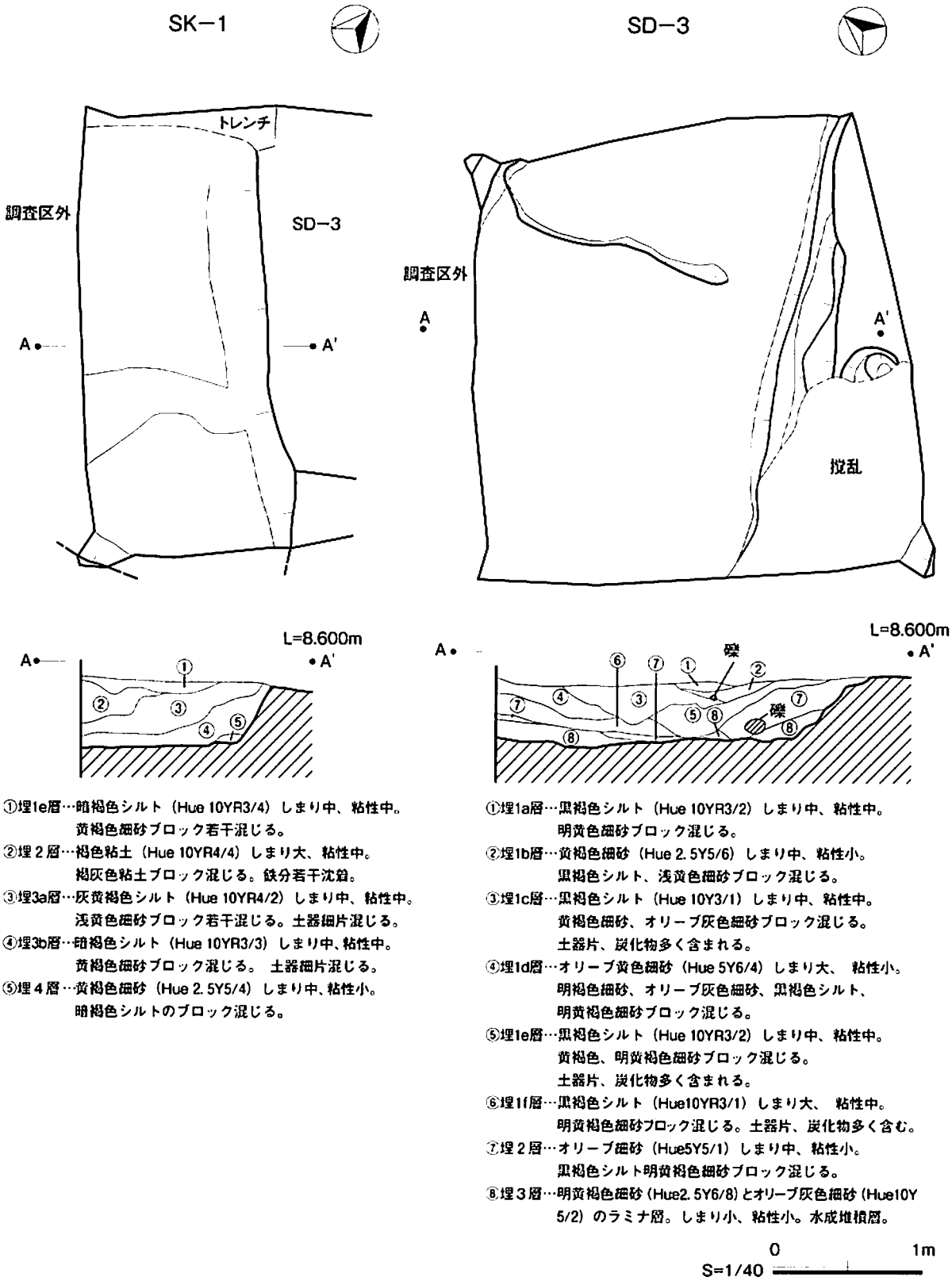
調査１区で検出した。東西に走る。撹乱に切られている部分も多いが、幅は約３ｍ、深さは約0.6mである。遺構の中心に岩があったが、埋土の上に浮いた状態であり、もともとの位置にあったものではないと考えられる。遺物は、土師器・須恵器・青磁等が出土し、溝として古代から中世にかけて存在していたと思われる。

SD－５（第７図）

調査１区で検出した。ほとんどが激しく撹乱を受けており、ごく一部しか検出できなかった。幅は約0.5m、深さは約0.2mと浅い。遺物は、土師器が出土したが小片であるため、溝の年代特定には至っていない。



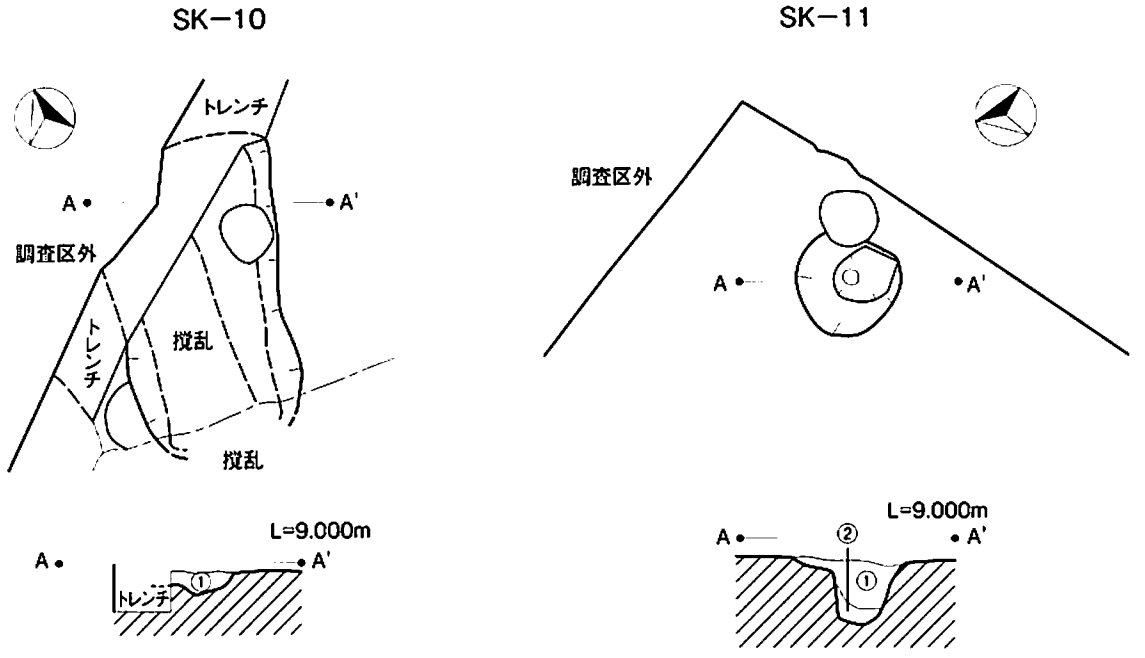
第７図　溝跡（SD−４・５）実測図



第８図　土壙（SK－１）・溝跡（SD－３）実測図

SK－１（第８図）

調査２区で検出した。SD－３を切っている。全体のプランは、調査区外の部分が多いため不明であるが、南端に下端ラインが確認できるので長方形もしくは楕円形と考えられる。遺物は、青磁や瓦質土器、土師器、須恵器等が出土。



①埋１層…黒褐色シルト（Hue10YR3/1）ところどころに黄褐色シルト（Hue10YR5/6）ブロック（１～３cmくらい）が含まれる。しまり中、粘性小。中世の土師器や須恵器が出土。

①埋１層…黒褐色シルト（Hue10YR3/1）ところどころに黄褐色シルト（Hue10YR5/6）ブロック（１cmほど）が含まれる。SK-10の埋1層とほぼ同じ。しまり中、粘性小。土器片少量出土。

③埋２層…灰褐色シルト（Hue10YR4/1）限りなくⅥ層に近い。灰黄褐色シルト（Hue10YR6/2）ブロック（５cmほど）が含まれている。砂質により近い。しまり小、粘性小。遺物はなし。

S=1/40　0　1m

第９図　土壙（SK－10・11）実測図

SD－３（第８図）

調査２区で検出した。SK－１に切られている。東西に走る。北側の立ち上がりは、ほぼ調査区外であるが、わずかに調査区角にみられる。幅は約2.5m、深さは検出面より0.4m程度である。埋３層は、水成堆積と思われ、掘られた当時は水が流れていたと考えられる。遺物は、古代の土師器・須恵器から中世の白磁等まで含まれており、かなりの幅があって長期間使用された可能性がある。

SK－10（第９図）

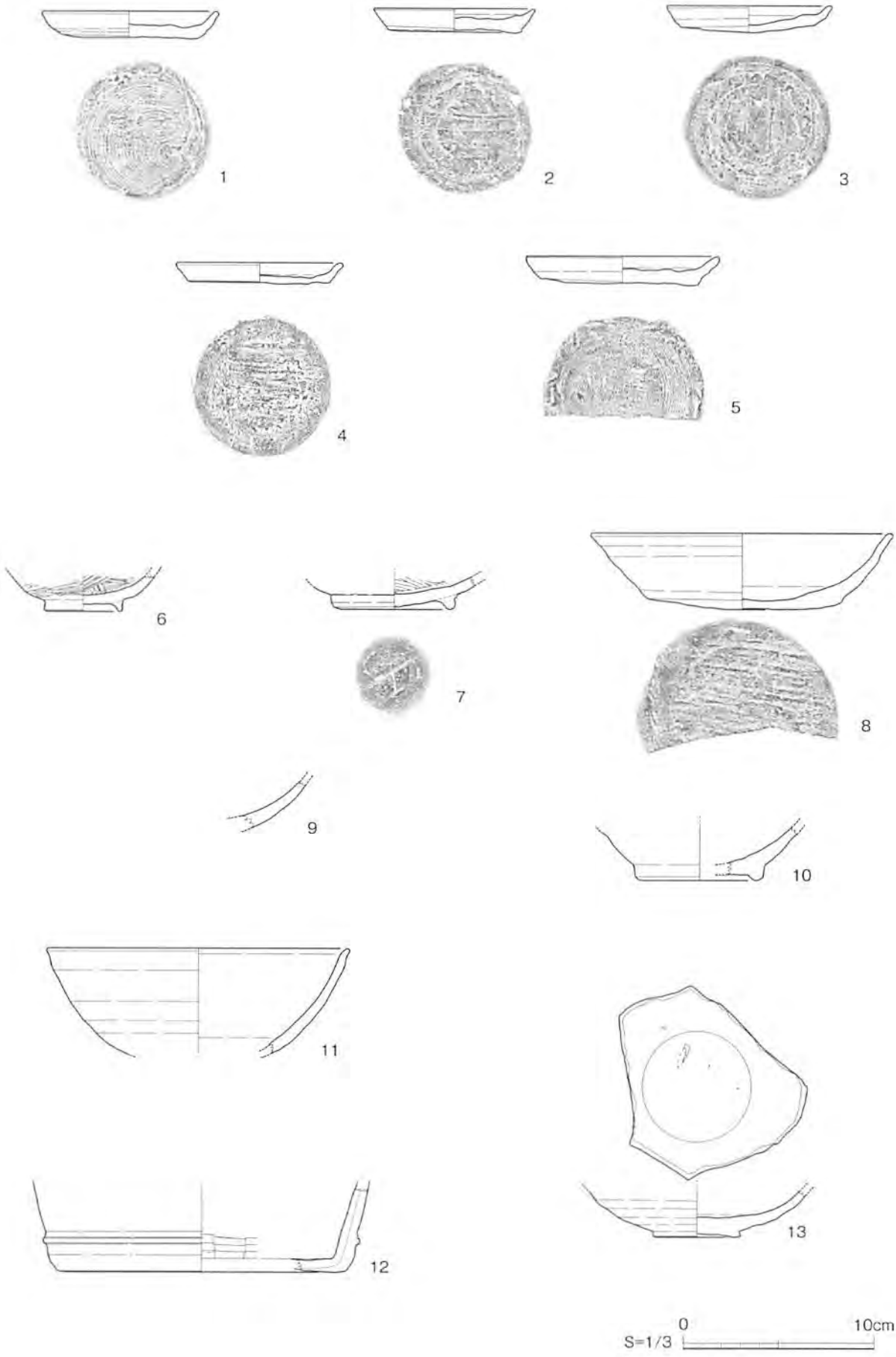
調査３区で検出した。撹乱に切られているが、全体のプランとしては長方形に近いと考えられる。埋土は１層のみで、遺物もほとんど出土しなかった。

SK－11（第９図）

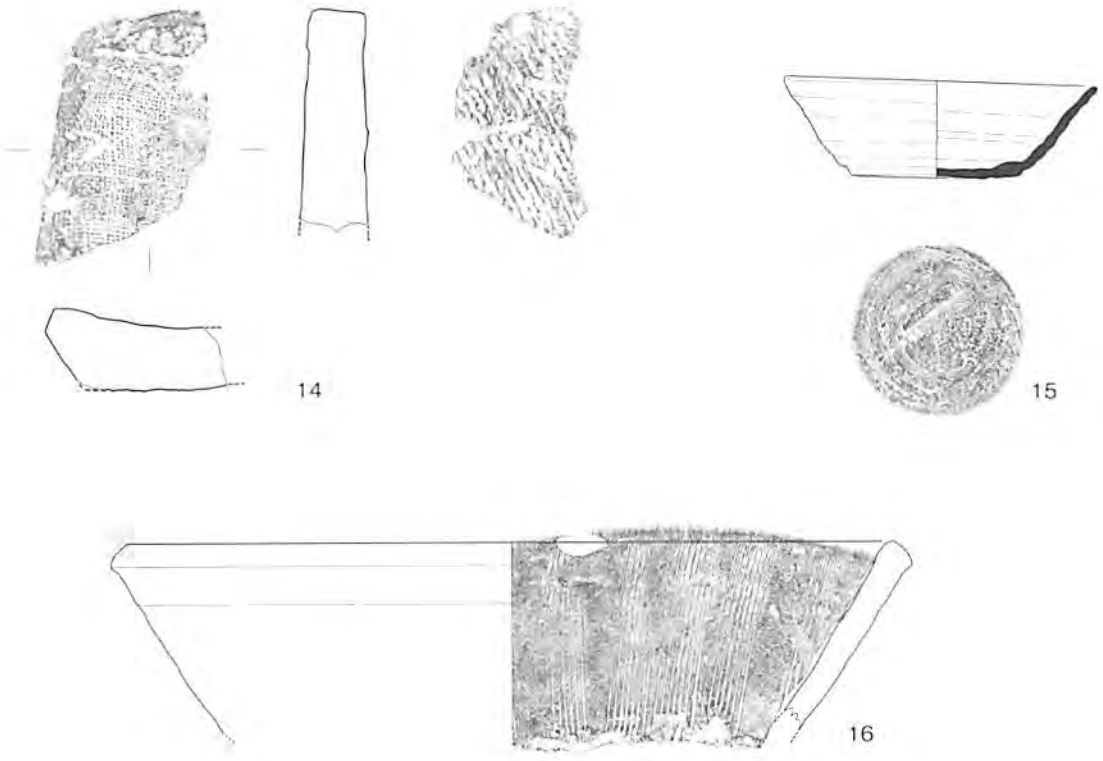
調査３区で検出した。プランはほぼ円形。埋土は２層で遺物は土師器片が２点のみ出土した。

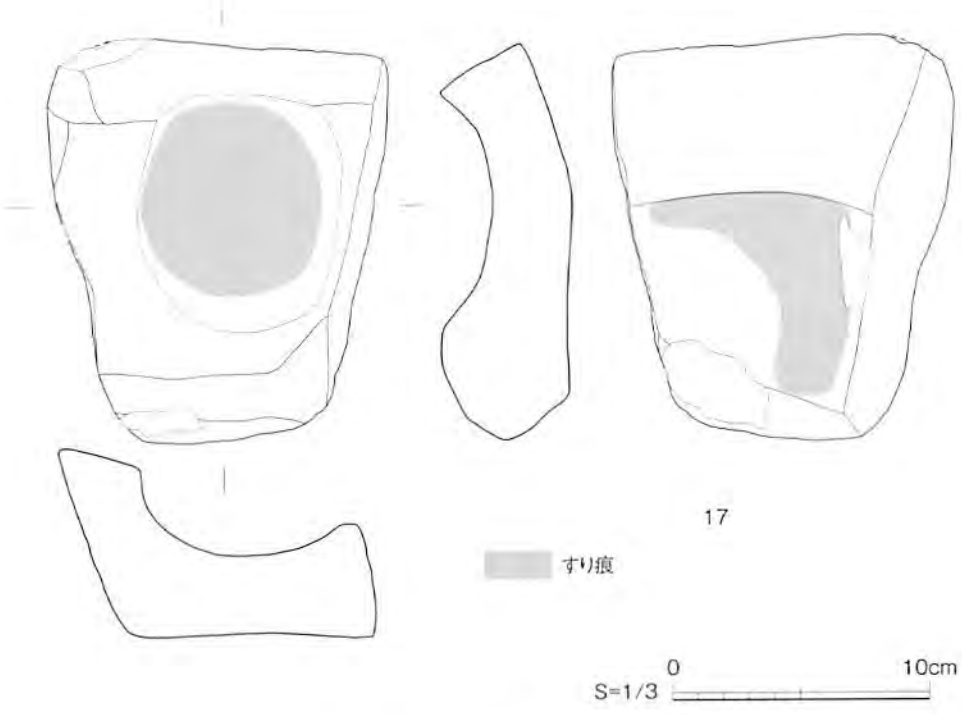
3　遺物

遺物に関しては、表１～３観察表にて説明する。

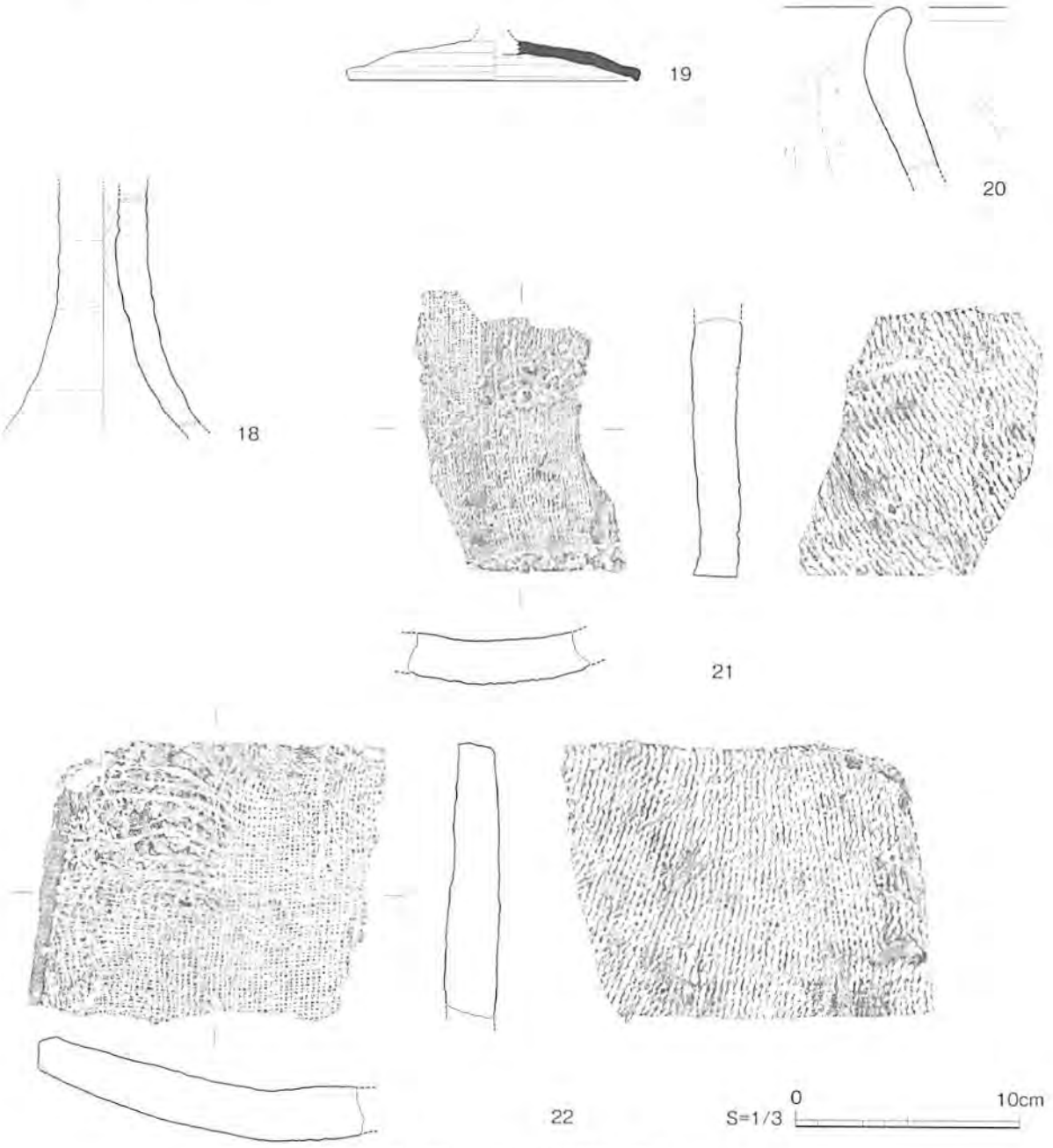


第10図　１区出土遺物実測図 (1)





第11図　１区出土遺物実測図 (2)



第12図　２区出土遺物実測図

図版番号	遺物番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材・石質	出土地点	層位	取り上げNo.	備　考
11	17	石皿	15.95	13.40	7.50	1700	安山岩	１区６G	Ⅲ層	南壁面抜き取り	

表１　石器観察表

図版番号	遺物番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土地点	層　位 (取上No.)	備　　考
11	14	平瓦	10.3～	7.6～	2.8	古代	１区SD－４	東側埋１層	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
12	21	平瓦	12.5～	10.7～	2.2	古代	２区SK－１	埋３層	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり
12	22	平瓦	12.6～	15.7～	2.4	古代	２区SK－１	－	表に布目、裏に縄状のタタキ目あり

表２　瓦観察表

法量（　）は復元値

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	時期	出土地点	層位 (取上No)	胎土	備考
10	1	土師器	灯明皿	ほぼ完形	9.3	7.1	1.5	−	ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR 6/3	橙 2.5YR 6/6	良	中世	1区SE−9	2層	砂粒	底部に板状圧痕と糸切り痕
10	2	土師器	灯明皿	完形	8.6	7.3	1.3	−	ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 5YR 6/4	良	中世	1区SE−9	2層	微細な砂粒	底部に板状圧痕と糸切り痕 外面に赤色顔料痕跡あり
10	3	土師器	灯明皿	完形	8.7	7.1	1.4	−	ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰白 10YR 8/2	灰白 2.5YR 8/2	良	中世	1区SE−9	2層	混入物なし	底部に板状圧痕と糸切り痕
10	4	土師器	灯明皿	完形	8.8	7.5	1.1	−	ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	橙 2.5YR 6/6	橙 5YR 6/6	良	中世	1区SE−9	2層	微細な砂粒、赤褐色粒	底部に板状圧痕と糸切り痕
10	5	土師器	灯明皿	口縁〜底部	10.2	8.3	1.55	−	ナデ、スス付着	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	良	中世	1区SE−9	2層	混入物なし、赤褐色粒	底部に板状圧痕と糸切り痕
10	6	瓦器	椀	底部	−	4.2	−	1.9〜	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/4	良	古代	1区SE−9	2層	微細な砂粒、角閃石、石英	小型のものである
10	7	黒色土器	椀	底部	−	6.5	−	1.7〜	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヨコナデ	黒 10YR 2/1	黒 10YR 2/1	良	古代（平安末）	1区SE−9	2層	微細な砂粒	底部に板状圧痕とヘラ記号
10	8	土師器	杯	口縁〜底部	(16.0)	10.3	4.0	−	ナデ、スス付着	ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ	橙 5YR 6/6	橙 2.5YR 6/6	良	古代	1区SE−9	2層	砂粒	底部に板状圧痕
10	9	白磁	椀	胴部	−	−	−	2.5〜	施釉	施釉	リリーホワイト	リリーホワイト	良	中世	1区SE−9	2層	精	
10	10	白磁	椀	底部	−	(6.8)	−	2.8〜	施釉	施釉	ミストグリーン	ミストグリーン	良	中世	1区SE−9	埋土層	精	
10	11	白磁	椀	口縁〜胴部	(16.0)	−	−	5.5〜	施釉	施釉	リリーホワイト	リリーホワイト	良	中世	1区SE−9	2層	精	
10	12	瓦質土器	火鉢	底部	−	(25.2)	−	7.5〜	ナデ、工具ナデ	ヨコナデ、工具ナデ	灰 5Y 6/1	にぶい黄 2.5YR 6/3	良	中世?	1区SE−9	1層	微細な砂粒、雲母	
10	13	白磁	椀	底部	−	4.6	−	2.5〜	施釉	施釉	ミストグリーン	ミストグリーン	良	中世	1区SE−9	2層	精	両面細かい貫入あり、削りだし高台
11	15	須恵器	杯	口縁〜底部	(12.3)	6.6	4.1	−	ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰 5Y 5/1	暗灰黄 2.5Y 5/2	良	古代	1区9G	Ⅳ層	微細な砂粒	
11	16	瓦質土器	擂鉢	口縁	(31.8)	−	−	7.4〜	ナデ、工具による櫛目	ナデ	灰 N 4/	灰 N 5/	良	近世	1区SD−4	2層	砂粒少ない 緻密	
12	18	土師器	高杯	脚部	−	−	−	10.5〜	しぼり痕	ヨコナデ	橙 5YR 6/6	橙 2.5YR 6/6	良	古代	2区SK−1	3層	赤褐色粒、微細な砂粒、雲母	
12	19	須恵器	蓋	口縁〜体部	(13.4)	−	−	1.9〜	ナデ	ヨコナデ	灰 5Y 5/1	黄灰 2.5Y 5/1	良	古代	2区SK−1	3層	微細な砂粒	つまみ欠損
12	20	土師器	甕	口縁	−	−	−	7.6〜	ヘラケズリ	ヨコナデ、工具ナデ	橙 2.5YR 6/6	橙 2.5YR 6/6	良	古代	2区SD−3	1c層東側	砂粒、角閃石、石英、長石	

表3　土器観察表

4　自然科学分析

二本木遺跡群の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二本木遺跡群は、坪井川両岸の沖積地に立地し、東は白川右岸まで達する。これまでの発掘調査により、弥生時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。

今回の分析調査では、遺構の年代確認のための年代測定と植物利用を確認するための種実同定を実施する。

1．試料

試料は、１区の埋３層SE９から検出された種実遺体１点である。

2．分析方法

(1)放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HCｌにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCｌによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C－AMS専用装置（NEC Pelletron 9 SDH－２）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX－Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5.568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 5.02（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2)種実同定

種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定する。分析後の種実は、年代測定対象とする。

3．結果

同位体効果による補正を行った年代測定結果および種実同定結果を表１、暦年較正結果を表２に示す。補正年代は、970±30を示す。また、測定誤差をσとして計算させた暦年代は、calAD1.020－1.150である。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。試料が種実遺体であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲であ

る。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

なお、種実は、ブナ科コナラ属（*Quercus*）の子葉に同定された。炭化しており黒色、長さ1.2cm、径7.5mm程度の卵状楕円体。２枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦半分に割れた破片１個と、半分未満の破片３個が確認された。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には径１mm程度の小さな孔（主根）がある。

４．考察

コナラ属には、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑のアカガシ亜属と二次林等を構成する落葉のコナラ亜属がある。いずれも現在の本地域周辺で普通に見られる種類であり、当該期にも遺跡周辺に分布していたことが推定される。

コナラ亜属の果実（ドングリ）は、一部を除いて灰汁抜きを必要とするが、食用可能である。長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護、採取されてきた有用植物であり、本遺跡でも食糧等として利用された可能性がある。

引用文献

石川茂雄．1994．原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会．328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志．2000．日本植物種子図鑑．東北大学出版会．642p.

表１　二本木遺跡群の放射性炭素年代測定および種実同定結果

地区	遺構	層位	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
１区	SE９	埋３層	種実遺体（コナラ属）	970±30	−28.31±0.60	1,030±30	9612−２	IAAA−62853

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２　二本木遺跡群の暦年較正結果

地区	遺構	層位	種別	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
１区	SE９	埋３層	種実遺体	971±34	σ	cal AD 1,020 - cal AD 1,048	cal BP 930 - 902	0.407	9612−２
						cal AD 1,086 - cal AD 1,123	cal BP 864 - 827	0.446	
						cal AD 1,138 - cal AD 1,150	cal BP 812 - 800	0.148	
					２σ	cal AD 999 - cal AD 1,002	cal BP 951 - 948	0.005	
						cal AD 1,013 - cal AD 1,158	cal BP 937 - 792	0.995	

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01(Copyright 1986−2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
４）統計的に真の値が入る確率はσは68%、２σは95%である
５）相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

図版１　二本木遺跡群の種実遺体

１－４．コナラ属　子葉（１区；埋３層 SE９）

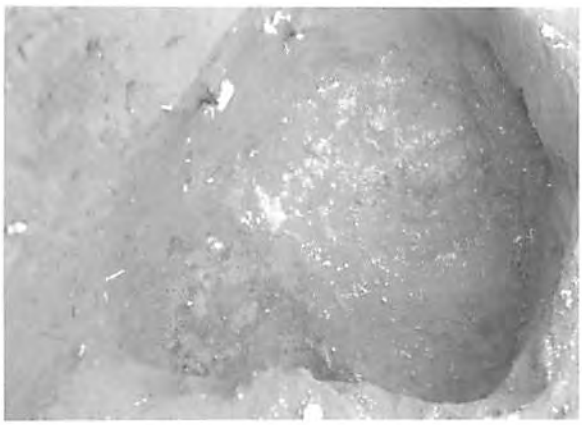
第５節　まとめ

今回、調査を行った箇所は、広い二本木遺跡群の北端に位置し、白川の河岸に程近いところであった。そのため、流れ込みと思われる土砂の堆積や、電車通りに面しているため、開発につぐ開発で撹乱も非常に多く、遺構はあまりなかった。ほとんどが、土壙、溝、ピットという状況のなかで、井戸が１基見つかった。井戸の埋３層で検出された炭化種子は、^{14}C年代測定で10世紀後半を示し、それ以前に井戸が廃棄されたことが確認された。またその上層である埋２層からは廃棄された中世の土師皿が大量に出土し、井戸としての機能を失った後はごみ捨て穴として使用された可能性がある。

今回の調査において、二本木遺跡群の集落の北端の広がりを確認できたことは成果としてとらえることができる。

PL. 1　1区　SK－６完掘状況（東→西）

PL. 2　1区　SK－７完掘状況（西→東）



PL. 3　1区　SK－８完掘状況（南→北）

PL. 4　1区　SK－14完掘状況（西→東）

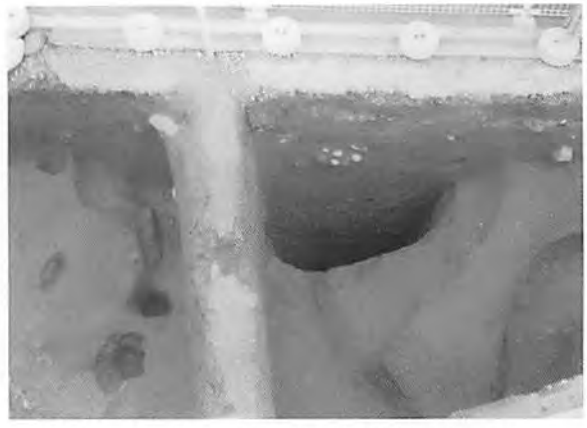
PL. 5　1区　SK－15完掘状況（西→東）

PL. 6　1区　SK－16完掘状況（西→東）

PL. 7　1区　SK－17完掘状況（西→東）

PL. 8　1区　SD－４完掘状況（北→南）

PL. 9　1区　SD－５完掘状況（南→北）



PL. 10　1区　SE－９完掘状況（北→南）

PL. 11　1区　SE－９内部状況（北→南）

PL. 12　2区　SK－１完掘状況（西→東）

PL. 13　2区　SD－３完掘状況（南→北）

PL. 14　3区　SK－10完掘状況（北→南）

PL. 15　3区　SK－11完掘状況（西→東）

PL. 16　作業風景

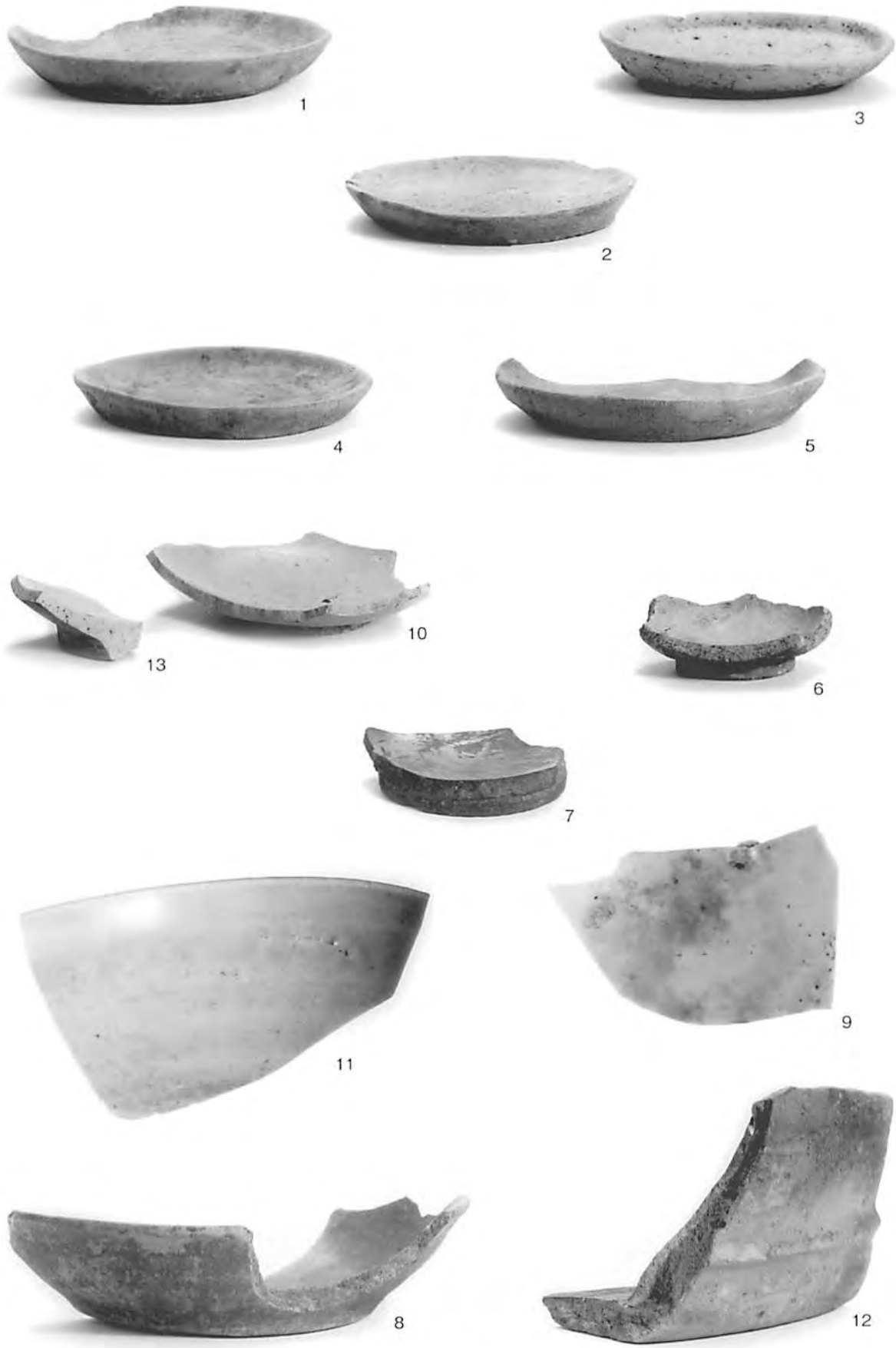
PL. 17　１区　東側全体完掘状況（東→西）

PL. 18　１区　西側全体完掘状況（西→東）

PL. 19　２区　全体完掘状況（南→北）

PL. 20　３区　全体完掘状況（西→東）

PL. 21　調査区遠景

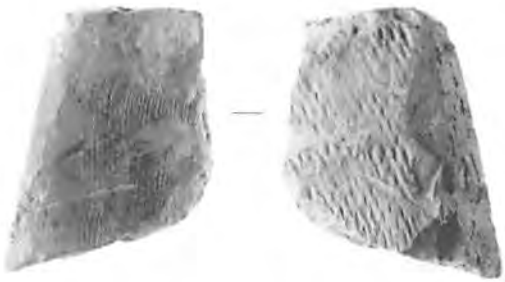


PL. 22　出土遺物（1）

15

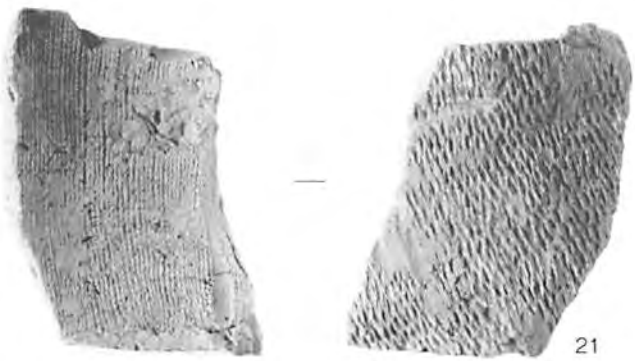
17

16

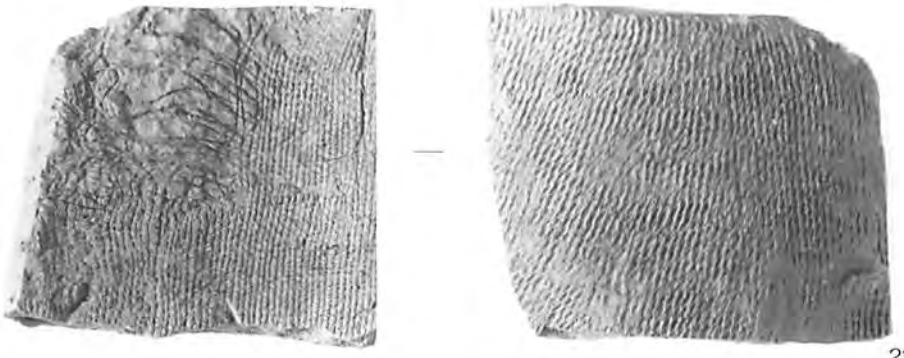

14

20

19


21

18


22

PL. 23　出土遺物 (2)

第Ⅷ章　春日地区第７次調査の成果

第１節　調査に至る経緯

本遺跡の調査は、熊本駅北部線街路改良事業に伴う事前の記録保存を目的とした発掘調査である。

事業の実施に先立ち予定地内が二本木遺跡群の中に含まれ、埋蔵文化財が存在する可能性が高いことから、確認調査を実施した。その結果、古代、中世の遺構や遺物が発見され、遺跡の存在が確認された。

その後、埋蔵文化財の発掘調査が必要な範囲を確認し、熊本県熊本土木事務所と協議を重ねた上で、調査を行う運びとなった。

第２節　調査の組織

確認調査は平成14年度、発掘調査は平成18年度、報告書作成及び印刷は平成19年度に行った。

【平成14年度（2002）確認調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　　島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　木崎康弘（文化財調査第二係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）
　　中村幸宏(主幹兼総務係長)
　　天野寿久（主任主事）
　　杉村蝦彦（主　事）
調査担当　亀田　学（主任学芸員）
　　宮崎　拓（非常勤職員）

【平成18年度（2006）発掘調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　江本　直（課長補佐）
調査総括　西住欣一郎（文化財調査第二係長）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　高宮優美(主幹兼総務係長)
　　塚原健一（参　事）
　　小谷仁志（主任主事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　　後藤克博（文化財保護主事）
　　波多野芳郎（非常勤職員）
　　末永浩平（非常勤職員）

【平成19年度（2007）　報告書作成】

整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　梶野英二（文化課長）
整理総括　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　江本　直（課長補佐）
　　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
整理事務局　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参　事）
　　高松克行（主任主事）
整理担当　岡本真也（参　事）
　　加藤早織（非常勤職員）

調査協力者（順不同・敬称略）

杉山武久（春日地区13町内自治会長）、タテオカ商店、原田範昭（熊本市教育委員会）、長谷部善一（熊本県教育委員会）、池田朋生（熊本県立装飾古墳館）、長井勲（美里町文化財保護委員）

調査作業員

西岡正治・チズ子、三宅幸生、吉川雅信

第３節　調査の過程

本調査は平成18年（2006）５月９日から同年５月29日まで行った。

以下に調査の中から特筆すべき事項や内容を簡単に述べたい。

【５月】

９日、表土剥ぎを行う。石垣が出土する。１箇所は間知(けんち)石の石列で溝があった場所に排水管が敷設されており、もう１箇所は以前当地にあった久末(ひさすえ)神社に伴う石垣の一部と推測される。

10日～15日、撹乱土を除去しながら石垣の実測を行う。原田氏と長谷部氏が来跡、周辺の基本土層について御教示いただく。また、杉山武久氏らからこれらの石垣について貴重な証言をもらう。

16日～23日、神社の石垣を取り除き、掘り下げる。この石垣の下も撹乱を受けていることが、下層には、大溝が存在することが判明する。出土遺物は、古代・中世・近世・近現代の遺物が混在する。

24日、作業の効率を図るために、大溝上部にある撹

乱層を重機を用いて除去する。その後は手作業で慎重に掘り下げを行う。神社の石垣の下に溝が存在していることが判明する。

29日、大溝断面の土層注記を終えて発掘作業を全て終了する。

第４節　調査の概要

調査は、調査区約２ｍ×10mの周辺に設けた以下の３点の座標値(新測地系)及び基準値をもとに行った。(第１～２図参照)

(①X＝－23417.833、Y＝－28581.901、Z＝10.021m、
②X＝－23420.495、Y＝－28587.722、Z＝9.894m、
③X＝－23426.203、Y＝－28590.831、Z＝9.997m)

まず、調査区約20㎡について表土層及び撹乱層までを重機で除去した後、人力で掘り下げていく方法をとった。しかし、ほとんどが近現代の撹乱であり、近世以前に溯る遺構としては溝１条のみであった。この溝の実測図、遺構配置図及び調査区北面と西面の断面図を1/20の縮尺で作成した。

また、それぞれの調査段階において、適宜35㎜と中判のモノクロ及びカラーポジの２種類を用いて写真撮影を実施した。

二本木遺跡群周辺の基本層位は、ほぼ同じ(1)ということであり、熊本駅構内は近世・中世・古代・縄文の遺物包含層及び遺構確認面がそれぞれ層別に存在するようだ。上層から表土、近世の遺物包含層（褐色粒を含む暗褐色土)、中世の遺物包含層（やや色調の薄い暗褐色土)、古代の遺物包含層（やや色調の濃い暗褐色土)、漸移層、褐色砂質土（上層に縄文時代後晩期の遺物包含層が存在)、ガチガチの砂質土、きめの細かい砂質土、シルト土、ガチガチに硬くしまる黒褐色～青灰色土（縄文海進層）と続くようだ。それを基に考えると、この調査区には近世から縄文時代までの遺物包含層は失われており、溝の最下面の約20cm下に縄文海進層と考えられるガチガチに硬くしまる黒色硬質土層が確認される。

【註】

(1)熊本市文化財課の原田氏及び県文化課の長谷部氏のご教示による。

第５節　調査の結果

１　はじめに

【遺　構】

ここでは、客土層を除去した上面で確認した石列１～４及び矢穴のある石材（近現代)、更に下層で確認した溝１条（中世後期から近世）について述べたい。(第２～６図参照)

【遺　物】

出土遺物は、遺構、包含層を含めて、網コンテナ（46cm×61cm×20cm の大きさ）に約３箱分の量であった。撹乱層から約1.5箱、古代から近現代の遺物が混在して出土した。溝からは約1.5箱の出土量であり、上層から近世の遺物を含んだ古代・中世の遺物、下層から古代・中世の遺物が出土した。

この報告書に掲載した遺物実測図は、全て溝からの出土遺物である。写真のみの遺物も３点を除き溝からの出土遺物である。

２　遺構及び遺物

(1)上面（近現代）（第２～４図)

①石列１

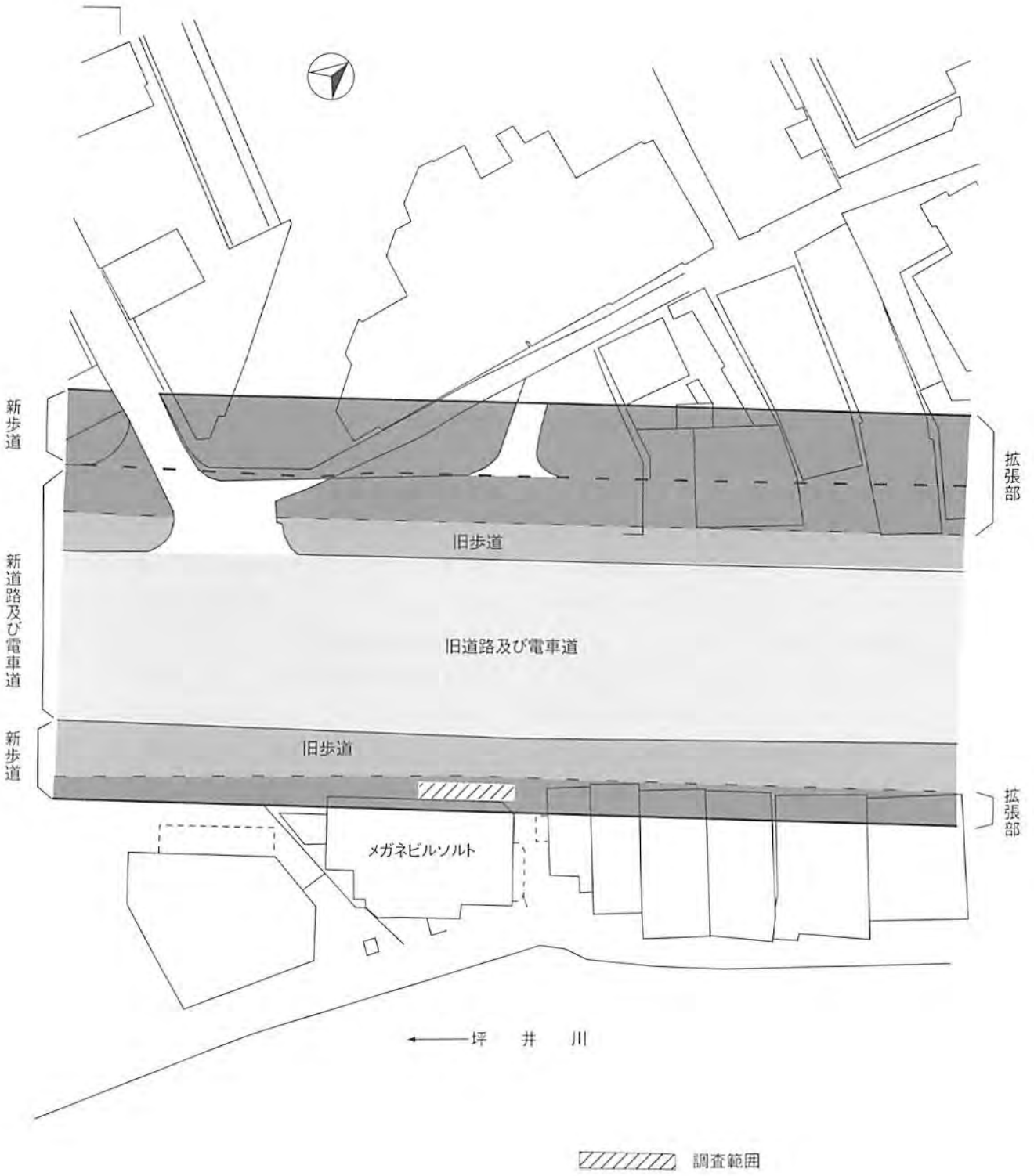
石列１は、幅約30～50cm、高さ約30～35cmの間知石（安山岩）が４個並んでいるだけであるが、元々はもっと多くの石列が並び数段の石垣があったものと考えられる。春日地区13町内自治会長の杉山武久氏の話では、調査区に隣接して昭和40年代まで「久末(ひさすえ)神社」があったということであるので、神社の石垣の可能性が考えられる。石垣は、布積(ぬのづ)みであったと考えられる。

②石列２

石列２は、石列１の石よりやや大きく幅約40～60cm、高さ約45～60cmの石（安山岩）が２個、原位置を留めていない状況で確認された。久末神社あるいは付近で使用されていた石が動かされたと考えられる。

③石列３

石列３は、幅約35～40cm、高さ約30cm以上の間



第１図　調査区位置図（S＝1/500）

知石（安山岩）が６個並んで確認された。石の加工面は南西側を向いていることから、元々は南西側に対の石列があったと考えられる。おそらく両側が石垣の溝であったと推定される。そして、土管が敷設されている状況から推察すると、南西側にあった石列は撤去されて土管が敷設されたのであろう。ちなみに土管が敷設されたのが、昭和59年（1984）７月という証明があることから客土の山砂は、昭和59年７月以前のものと考えられる。

④石列４

石列４は、幅約20～65cm、高さ約20～40cmの面取りのある石が向き合いながら５～６個並んでいる。原位置を留めていないものもあるが、幅約25cmの溝を形成し、ほぼ西側から東側に向かって坪井川へ流れていると推定される。一部安山岩も混じるが、ほとんどが凝灰岩である。

⑤矢穴のある石材

幅約25cm、長さ160cm 以上ある矢穴のある石材である。この石には７～10cm間隔で９箇所に矢穴痕跡があり、いずれも深さ2.5～３cmで幅が６～７cmを測る。石材は安山岩である。

杉山氏の話では、この敷地に接して杉山氏の家があったということで、矢穴のある石材は家の敷居の一部であった可能性が考えられる。大正13年頃、市電が通った際に家を坪井川側に建て直したということで、その時のものであろう。しかしながら、石材自体は大正13年以前に使用されていた転用材の可能性も考えられる。

⑵下面（中世後期～近世）（第５図）

①溝

〔規模・形状〕幅は上段では約３～3.5m、下段では約２m、溝底面では、約1.4mを測る。長さは1.5m以上である。深さは上段から底面まで約1.5～1.8m、下段から底面まで約40～50cmを測る。形状は２段のステップをもつ人工的な掘り込みを持つ。下段のステップの北側には拳大から人頭大の礫が多く敷き詰められており、水流で溝の端が壊されないための工夫であると考えられる。

〔覆土〕４層に分層。

１層：黒色粘質土：古代･中世･近世の遺物を含む。

２層：黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）：ややしまる粘質土。古代・中世の遺物を含む。

３層：黒色砂層（Hue10YR2/1）：古代の遺物を含む。

４層：灰黄褐色粘質土：非常に硬くしまる粘質土。古代の小片の遺物を含む。

〔遺構の性格など〕溝底面の高低差が７cmあることから西から東に流れていたと考えられる。おそらく当時の坪井川あるいは白川に注いでいた排水路であろう。

２～３層に中世の遺物、１層に近世の遺物が混在することから中世から近世にかけて存在した排水路であったと推定され、溝３層と４層からの出土炭化物による放射性炭素年代（AMS法）や出土遺物を参考にすれば、上限は15世紀中～後半にまで溯ることもできよう。下限は出土遺物から18世紀後半～19世紀初頭と推定される。（第４図参照）

また、平面では確認できなかったが溝断面の観察により、大溝が埋まった１層から更なる掘り込みが確認された。幅約1.2m、深さ約１mを測る。掘り込み面が１層であることから、おそらく近世期に掘り込まれた溝と推定される。

〔出土遺物〕溝から出土した遺物は、網コンテナ（46cm×61cm×20cmの大きさ）に約1.5箱分の量であり、古代・中世・近世の遺物が混在していた。

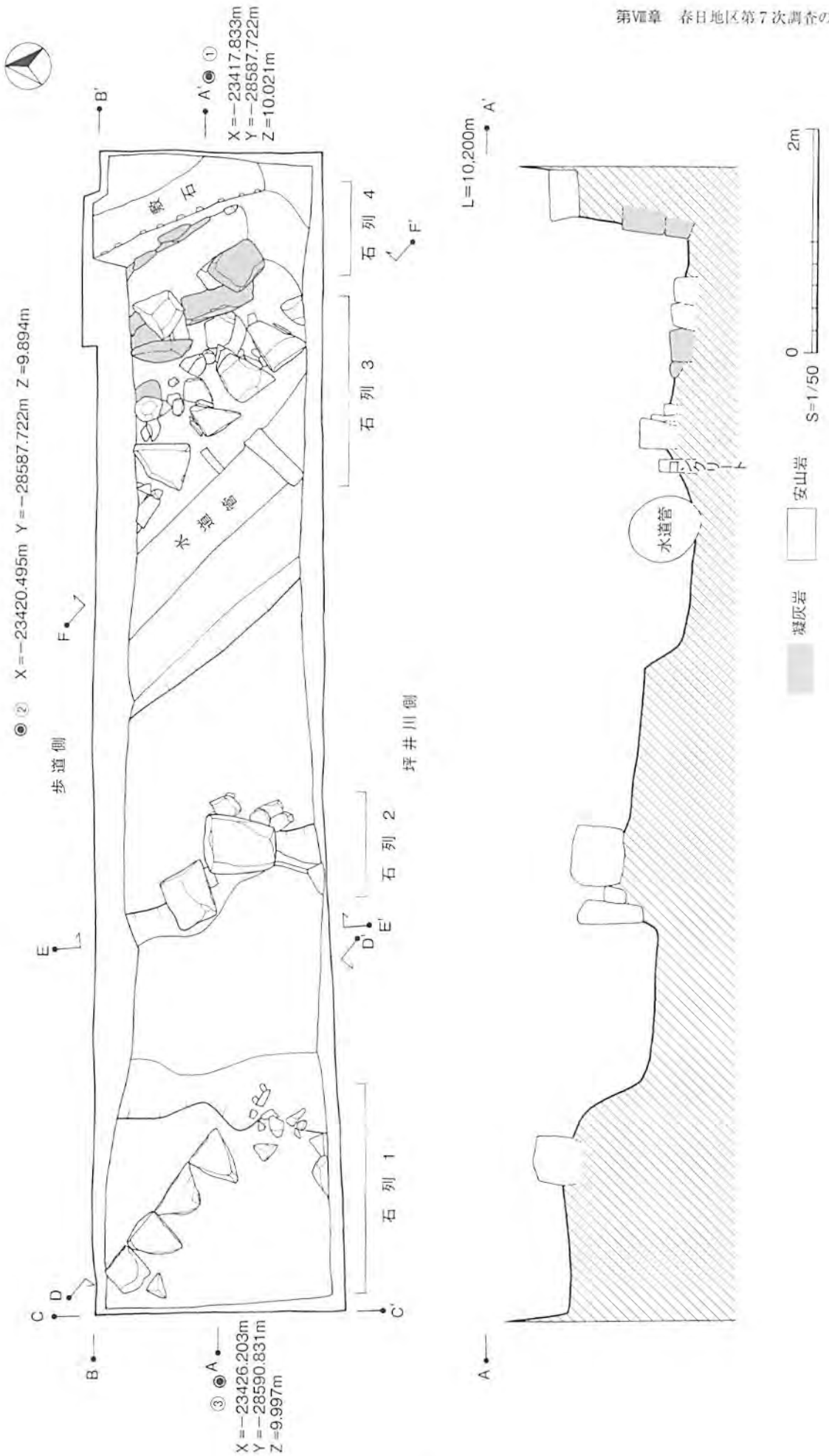
ここでは10点の遺物を紹介する。

１は、土師器の小皿で２層からの出土である。復元口径7.4cm、復元底径5.6cm、器高1.5cmである。底部は糸切り底であることから、12世紀後半以降の中世期の所産である。

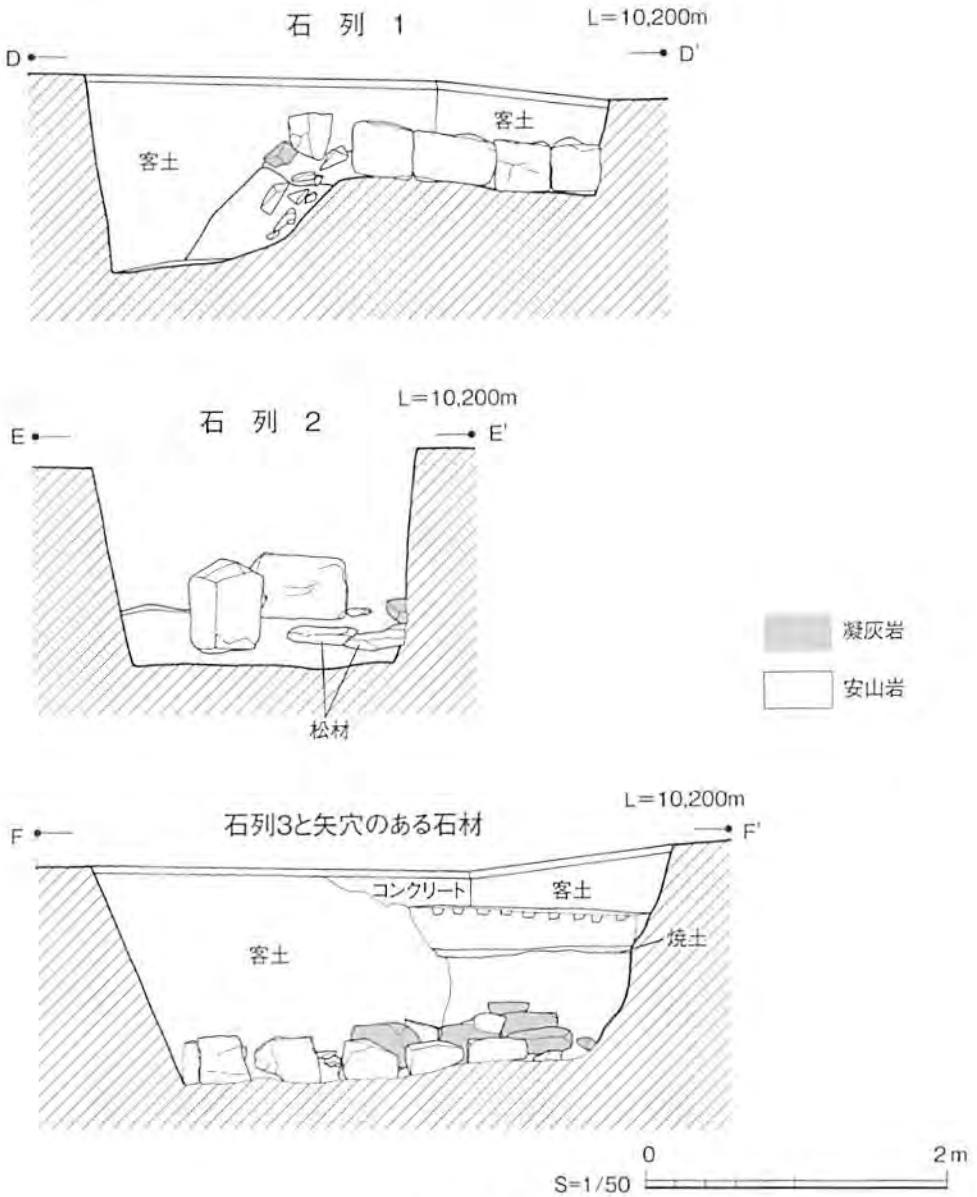
２は、瓦質土器で擂鉢の口縁部である。２層からの出土である。残存高は7.5cm以上で、３～５本の櫛目が２箇所に観察される。中世期の所産である。

３は、輸入陶磁器の白磁皿の底部で２層からの出土である。復元底径3.2cm、残存高1.4cm以上である。山本信夫氏による大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年によれば、皿Ⅴ類あるいは皿Ⅵ類に分類され、C期（11世紀後半～12世紀前半）の時期にあたると考えられる。

４は、瓦質土器で擂鉢の底部である。２層からの



第2図　石列（上層）平面図及び断面図



第３図　石列見通し断面図

出土である。残存高は7.6㎝以上で、４～６本の櫛目が３箇所に観察される。中世期の所産である。

５は、古代の須恵器の壺か甕の口縁部である。２層からの出土で、残存高は、4.1㎝以上を測る。

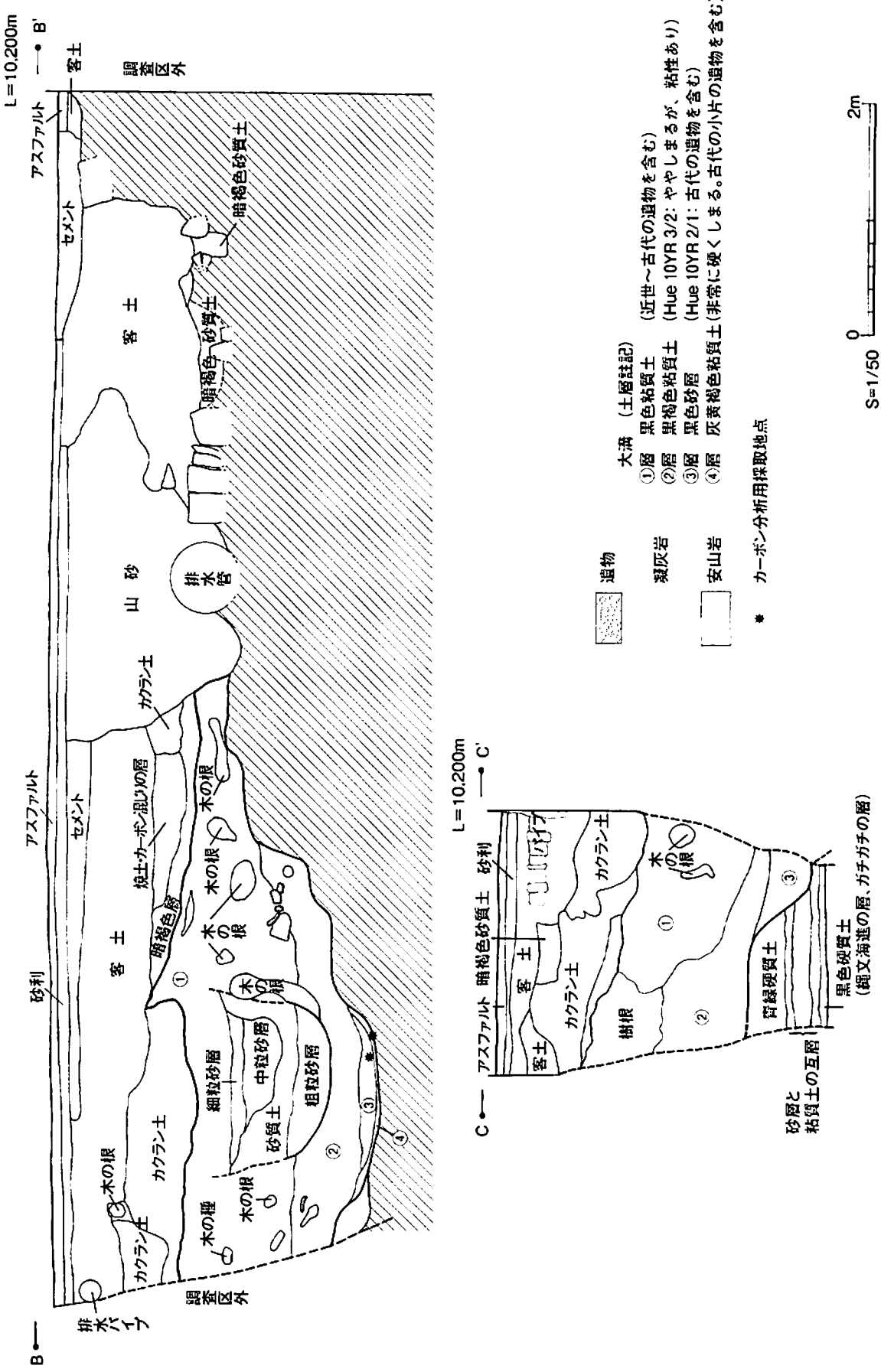
６は、中世須恵器の壺の口縁部から胴部にかけての資料である。２層からの出土で、復元口径13.2㎝、残存高は7.3㎝以上を測る。内外面にはハケ目が残る。

７は、古代の須恵器の壺か甕の胴部である。２層からの出土で、残存高は10.1㎝以上を測る。内面には同心円文の当て具痕、外面には平行直線文のタタキ痕が残存する。

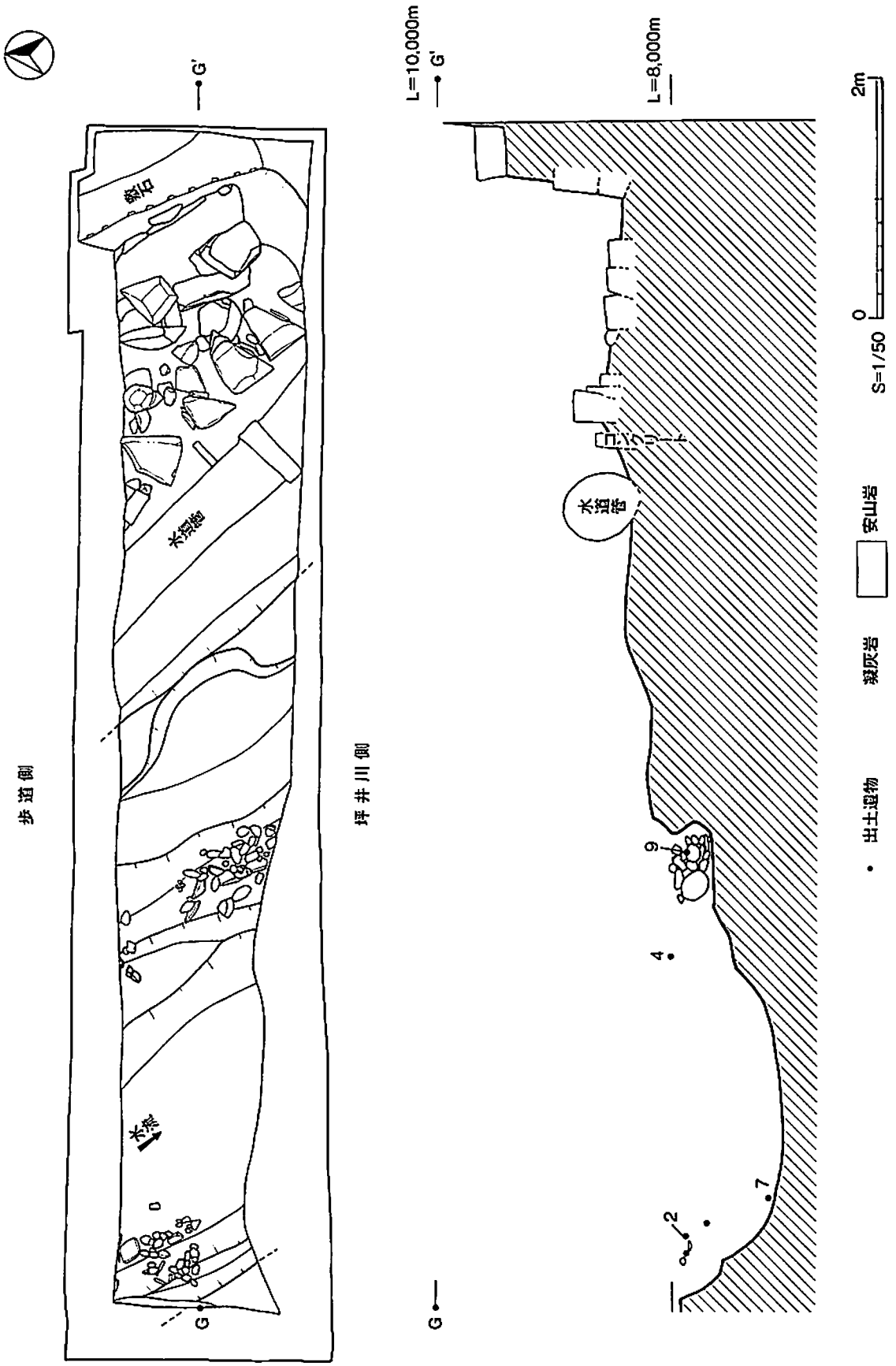
８は、土師質土器で古代の移動式カマドの脚部と考えられる。２層からの出土で、残存高は6.7㎝以上を測る。内面にはケズリ、外面にはハケ目が残る。

９は、古代の平瓦の一部である。２層からの出土で、残存長6.5㎝、残存幅8.7㎝、厚さ2.2㎝を測る。内面に布目、外面に縄状のタタキ目が残る。

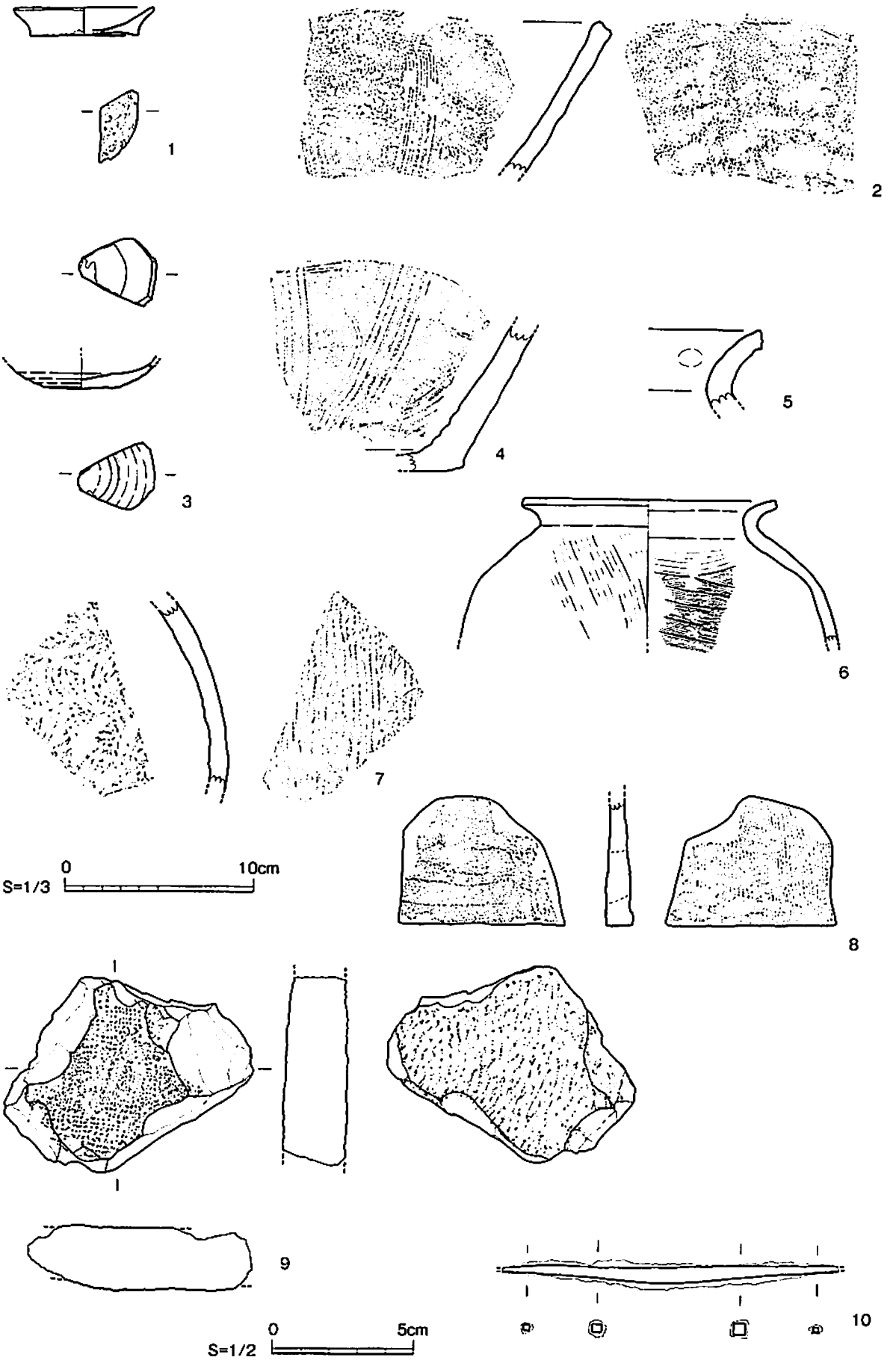
10は、鉄製の両釘と考えられる。２層からの出土であり、長さ11.8㎝以上、幅1.1㎝、厚さ0.6㎝、重量10.38ｇである。時期は不明であるが、古代から中世の所産と考えられる。（第６図参照）



第４図　調査区北・西壁土層断面図



第５図　大溝（下層）平面図及び断面図



第６図　出土遺物実測図

法量（　）は復元値

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
6	1	土師器	小皿	口縁～底部	(7.4)	(5.6)	1.5	－	ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良	大溝	2層 240～264下	1㎜以下の輝石、褐色粒	底部に糸切り痕
6	2	瓦質土器	擂鉢	口縁部	－	－	－	7.5～	ヨコ・ナナメ方向のナデ後櫛目	不定方向のナデ	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	良	大溝	2層No.7	長石、石英、褐色粒、黒色粒	工具による5本単位の櫛目描き
6	3	白磁	皿	底部	－	(3.2)	－	(1.4)	－	－	灰白 5GY8/1	灰白 5GY8/1	良	大溝	2層 240～280下		輸入磁器
6	4	瓦質土器	擂鉢	底部	－	－	－	7.6～	ヨコ方向のナデ後櫛目	ヨコナデ	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/8	良	大溝	2層No.1	長石、赤褐色粒、砂粒	タテ・ナナメに5本単位の櫛目描き
6	5	須恵器	壺か甕	口縁部	－	－	－	4.1～	ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ	灰 N5/	灰 N5/	良	大溝	2層 240～264下	1㎜以下の輝石	内面に工具の跡か?
6	6	須恵器	壺	口縁～胴部	(13.2)	－	－	7.3～	ヨコ方向のハケ目	ナナメ方向のハケ目	灰 5Y5/1	灰 N5/	良	大溝	2層 215～240下	長石、角閃石、雲母、黒色粒	
6	7	須恵器	壺か甕	胴部	－	－	－	10.1～	同心円文の当て具痕	平行直線文のタタキ痕	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	良	大溝	2層No.2	長石、黒色粒	
6	8	土師質土器	移動式カマド	脚部	－	－	－	6.7～	ナナメ・ヨコ方向のケズリ	ヨコ方向のハケ目	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良	大溝	2層 215～240	1～2㎜の白い小石、1㎜以下の白・黒・褐色の石、石英、雲母	

表1　土器観察表

図版番号	遺物番号	器種	部位	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	層位 (取上げNo.)	備考
6	9	平瓦		6.5	8.7	2.2	大溝	2層	内面に布目、外面に縄状のタタキ目あり

表2　瓦観察表

図版番号	遺物番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	層位	取り上げNo.	備考
6	10	両釘	11.8～	1.1	0.6	10.38	大溝	2層240～264下	No. 9	

表3　鉄器観察表

３　自然科学分析

二本木遺跡群出土炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二本木遺跡群は、坪井川両岸の沖積地に位置し、東は白川右岸まで達する。これまでの発掘調査により、弥生時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。今回の調査地点は、二本木遺跡群の北部に位置し、大溝が１条検出されている。最上層には近世の陶磁器片を含むが、中層から下層には中世から古代の遺物が含まれていた。

今回の分析調査では、大溝の下層の年代を確認するために、下層中から検出された炭化物２点について放射性炭素年代測定を実施する。

１．試料

試料は、大溝下層の埋土２層中（砂層下）から出土した炭化物と、最下層床面から３cm上の白色粘土層中から出土した炭化物の２点である。いずれも、土壌中に微細な炭化物が少量混じる検出状態であった。

２．分析方法

試料を自然状態で乾燥させた後、実体顕微鏡で観察しながら炭化物をピンセットで拾い出す。この過程で、炭化物に見られる組織構造なども観察・記録を行う。炭化物に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC１により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC１によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃ で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C－AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH－２）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX－Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5.568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

３．結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表１に示す。埋土２層中の炭化物は、520±40BP、最下層床面から３cm上の白色粘土層中の炭化物は580±40BPを示す。なお、測定前に実体顕微鏡で観察した結果、埋土２層中の炭化物は炭化材であり、道管配列の特徴からコナラ属アカガシ亜属またはコナラ属コナラ亜属クヌギ節であるが、小片のため判別には至らなかった。一方、最下層床面から３cm上の白色粘土層中の炭化物は微細な炭粉状のものであり、組織等が観察できなかったため由来等は不明である。

暦年較正を行った結果を、表２に示す。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位

で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。今回は、２点とも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、２σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、埋土２層中の炭化物はcalAD1,334－1,438、最下層床面から３㎝上の白色粘土層中の炭化物はcalAD1,314－1,409であり、いずれも中世の年代に相当する。

表１　放射性炭素年代測定結果

遺構	層位等	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
大溝	埋土２層中（砂層下）	炭化材（アカガシ亜属またはクヌギ節）	520±40	－28.21±0.93	570±40	9355－１	IAAA－61086
大溝	最下層床面から３㎝上の白色粘土層中	炭化物（由来不明）	580±40	－25.88±0.77	590±40	9355－２	IAAA－61087

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
大溝埋土２層中（砂層下）	521±38	σ	cal AD 1,334 - cal AD 1,336	cal BP 616 - 614	0.013	9355－１
			cal AD 1,398 - cal AD 1,438	cal BP 552 - 512	0.987	
		２σ	cal AD 1,317 - cal AD 1,354	cal BP 633 - 596	0.207	
			cal AD 1,389 - cal AD 1,446	cal BP 561 - 504	0.793	
大溝最下層床面から３㎝上の白色粘土層中	579±37	σ	cal AD 1,314 - cal AD 1,356	cal BP 636 - 594	0.664	9355－２
			cal AD 1,388 - cal AD 1,409	cal BP 562 - 541	0.336	
		２σ	cal AD 1,298 - cal AD 1,371	cal BP 652 - 579	0.650	
			cal AD 1,378 - cal AD 1,422	cal BP 572 - 528	0.350	

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
４）統計的に真の値が入る確率はσは68％、２σは95％である
５）相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第６節　まとめ

１　はじめに

今回の発掘調査により近現代の石列を除き、中世後期から近世にかけての溝１条が確認された。
ここでは、中世から近世にかけて周辺地域の沿革を元に考察を試みたい。

２　各時代の考察

中世

(1)歴史的背景

鎌倉期になると、飽田郡には飽田郷・立田郷・鹿子木荘・活亀（いけがめ）荘・河尻荘、託麻郡には安富荘・神蔵荘・六箇荘などが現れてくる。さらに少し時代が下ると、飽田郡には南・北両郷に鹿子木荘も東・西両荘に区分され、藤崎荘・宮内荘・八王子荘・藤崎郷なども見えてくる。託麻郡内の大荘園は神蔵荘で江津湖以西の部分を占め、さらに同荘の西側には安富荘があり、安富本荘がその中心地で現在の本荘町がその地にあたり、神蔵・安富両荘の地頭は託麻氏であった。

平安期の大社には藤崎八幡宮・祇園宮（後の北岡神社）・代継宮などがあるが、祇園宮は天元２年(979)に祇園山（現花岡山）に移っている。

応仁～文明年間(1467～87)の頃、千葉城（現NHK熊本放送局）には出田秀信が在城した。秀信の死後、楠原城城主の鹿子木親員（寂心）が隈本城に入り、茶臼山の南西部に新城を構えて移った。この城は今日では古城（ふるしろ）と呼ばれているが、これが近世初頭に至る隈本城である。

天正15年(1587)豊臣秀吉が九州攻めを開始すると、島津氏は全軍をあげて薩摩に退き、城久基も隈本城を秀吉に明け渡して退去した。秀吉は佐々成政を隈本城主として球磨郡を除く肥後一国を与えた。しかし、検地を強行しようとして国衆一揆を起こした責任を問われ切腹を命じられた。その後、肥後の北半分と葦北郡の一部の19万5000石は加藤清正の領国となった。(1987　鈴木)

(2)発掘調査地点の推定

調査地点は、飽田郡の飽田郷か託麻郡の安富荘に属していたと推定される。また、祇園宮（後の北岡神社）の周辺に位置している。確認された溝は、白川あるいは坪井川に注いでいたと考えられる排水路と推定される。用途は農業用の可能性が考えられる。

時期は、溝３・４層出土の炭化物による放射性炭素年代（ＡＭＳ法）や出土遺物を参考にすれば、15世紀中～後半と推定されよう。

近世

(1)歴史的背景

近世に入り、加藤清正は肥後入国後、豊臣秀吉の命によって検地を実施し、また、土木・治水工事に力を入れ、白川筋・緑川筋の改修を開始した。清正は慶長５年(1600)の関ヶ原の戦では東軍につき、西軍の中心となった小西行長の宇土城・八代城を攻略し、次いで小西領を合わせて領することとなった。

清正の茶臼山新城の築城開始時期は明らかではないが、同12年(1607)熊本城が完成している。

慶長16年清正の死後、子の忠広が相続したが、幼少のため幕府の厳しい介入のもとでの統治が行われた。寛永９年(1632)加藤家は取り潰され、豊前小倉から細川忠利が就封した。以後細川氏は明治維新まで12代240年余肥後を統治する。(1987　鈴木)

熊本城下は白川の右岸に構成され，城内の二の丸・三の丸は重臣の邸宅にあてられ、城の北側の京町台地から東面の坪井・子飼・千反畑・上林・手取・高田原一帯に侍屋敷が配置された。城の南手には古町と呼ばれる町屋、南西部には新町の町屋が並び、さらに坪井にも町屋が設けられた。城下の外郭は水濠と土居で囲まれ、城下から外への出口には番所が設けられ、夜間は門を閉じる決まりであった。城下町は、はじめその職種によって同業者を同じ地域に集めたため、古町には細工町・板屋町・鍛冶屋町・米屋町・魚屋町・紺屋町・大工町・呉服町・桶屋町・など、新町には塩屋町・檜物屋町・瓶屋町・鳥屋町・職人町・桶屋町・魚屋町など、坪井には米屋町・魚屋町・八百屋町・職人町・鳥町などがあったが、幕末になると本格的な職種に必ずしも拘束されなくなっている。(1987　鈴木)

近年、熊本市古町遺跡の調査成果（2004　美濃口・原田）が公表され、町屋の様子が明らかにされつつ

ある。

熊本城下への日常生活必需品は主に海路で高橋港に運び込まれ、坪井川を経て輸送された。そのため高橋にも多くの運送業者や商店が軒を並べ、幕末にはさらに下手の小島が物資搬入保管の港町として栄えた。南の川尻も加藤氏の時代から藩の米倉庫が設けられ，緑川流域の年貢米が集積され、多くの労働者が集中し、そのにぎわいに拍車をかけた。年貢米を運んできた船は，帰りに農業および日常生活に必要な道具類を買い入れたため、川尻は刃物と木製品の製造ならびに木造船の製作が盛んで、高橋とともに五ヶ町のうちに加えられ商業の中心地ともなった。

飽田郡の南部と託麻郡の大半は水田地帯で米作の中心地であり、馬場楠井手・大井手などの取水によって用水を賄った。飽田郡北部の金峰山麓や託麻郡東部の台地では畑作が主体で、麦・大豆・小豆・粟などの穀物が主体であったが、中期頃には城下町へ供給するダイコン・ナス・カブ・唐芋・ニンジン・ゴボウなどの野菜（主として根菜類）が近郊農村で栽培され、販売されるようになった（番太日記）。

幕末の特産品として「肥の後州名所名物数望附」のなかに松尾の唐芋、水前寺の晒し葛、熊本織、熊本白髪素麺、水前寺もやし、熊本生蕎麦切、水前寺苔、白川の鮎、江津の鯉鮒、はえ、熊本大小金具彫物、細工町キセル、象嵌鍔、加世以多、朝鮮飴、真珠丸などが見える。(1987　鈴木)

肥後藩における地方行政単位として手永制度が用いられていた。手永は郡と村の中間にあって、数村あるいは数十村を一つの単位とする行政単位であった。

村を統括し、村を代表するのが庄屋である。村役人のうち庄屋・頭百姓・村横目を村方三役といった。村政は、郡代・惣庄屋を通して達せられる「法令」（村人への伝達方法は高札または口達）に基づいてなされる。村は村山・神田・用水路などの財産を持ち、自治的に運営された。村規約・村役人・座祭・年中行事・農作業など村の重要な事柄は農民の寄り合いで決定された。とくに正月10日前後に開かれる初寄り合いはその年の基本的な約束事を決めるものとして重視された。寄り合いの決定事項は村規約として記録され，共同作業に多く依存した村社会では、違反者には出不足銭や過料銭その他の罰則が課せられた。

肥後では天草島原の乱後に武士･町人･農民をそれぞれ５人から７人ずつ組み合わせ、檀家名簿を作り誓詞を書かせた。もともとキリシタン宗門取締りを目的としていた五人組も、のちには農作業における相互扶助・連帯責任を義務づけられ、法を犯す者が出れば五人組は連帯責任を問われて罰せられた。（2004　松本）

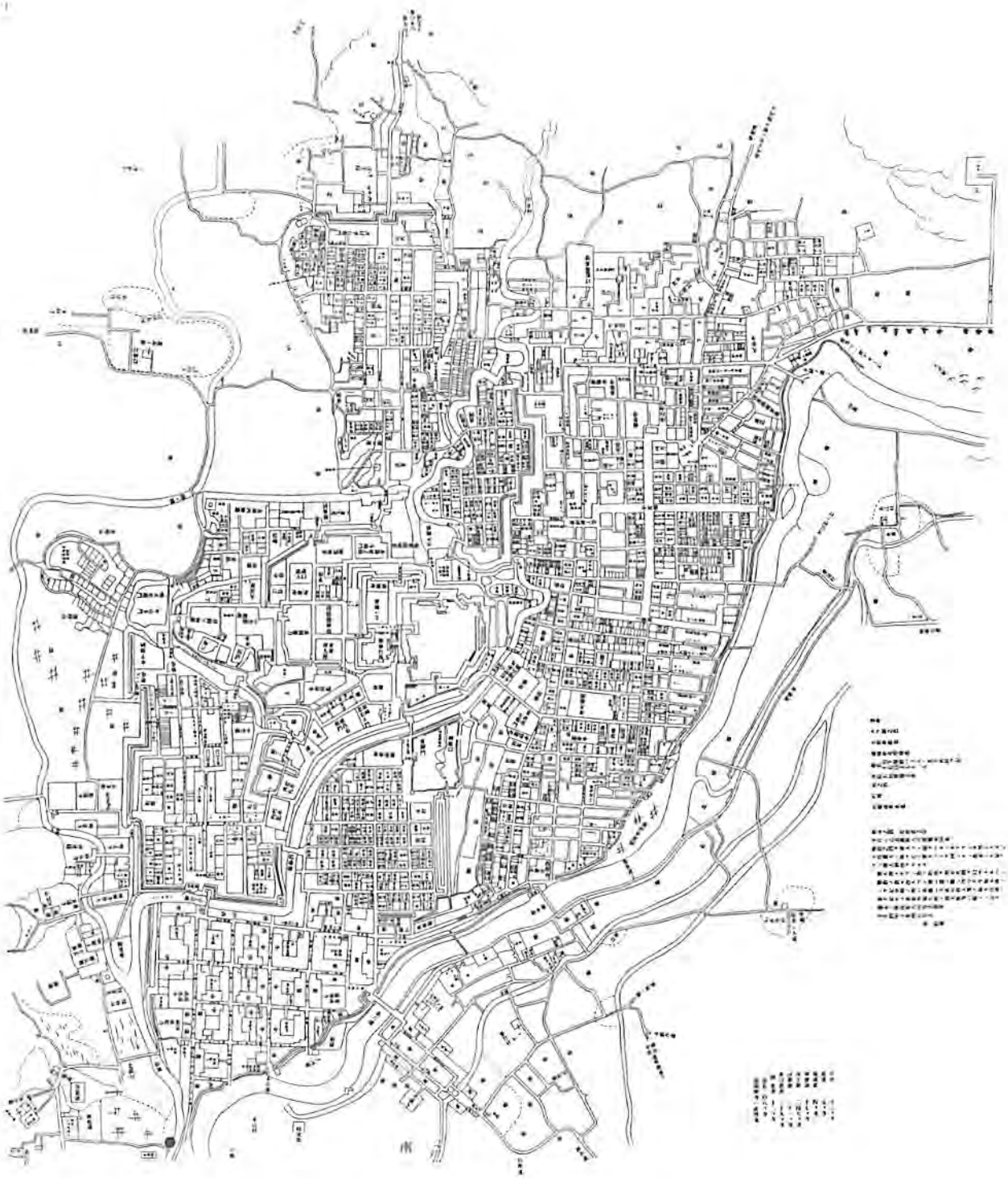
(2)発掘調査地点の推定

「熊本之図」(文化２年(1805)の原図を嘉永３年(1850)に、さらにそれを文久４年(1864)に模写）を参考にして調査地点を推定すれば、城下町から外れた祇園社（北岡神社）の南側に位置し北岡村に属していたと考えられる。地図の記号「＃」から荒地か林だったのであろう。

調査区内の石材に刻まれた矢穴は43個確認され、矢穴幅の平均が9.1cmであり、３寸(９cm)を超えることから江戸前期に溯る可能性が考えられる。確認された溝は、中世期同様に坪井川に注いでいた排水路と推定される。用途も農業用であろうか。

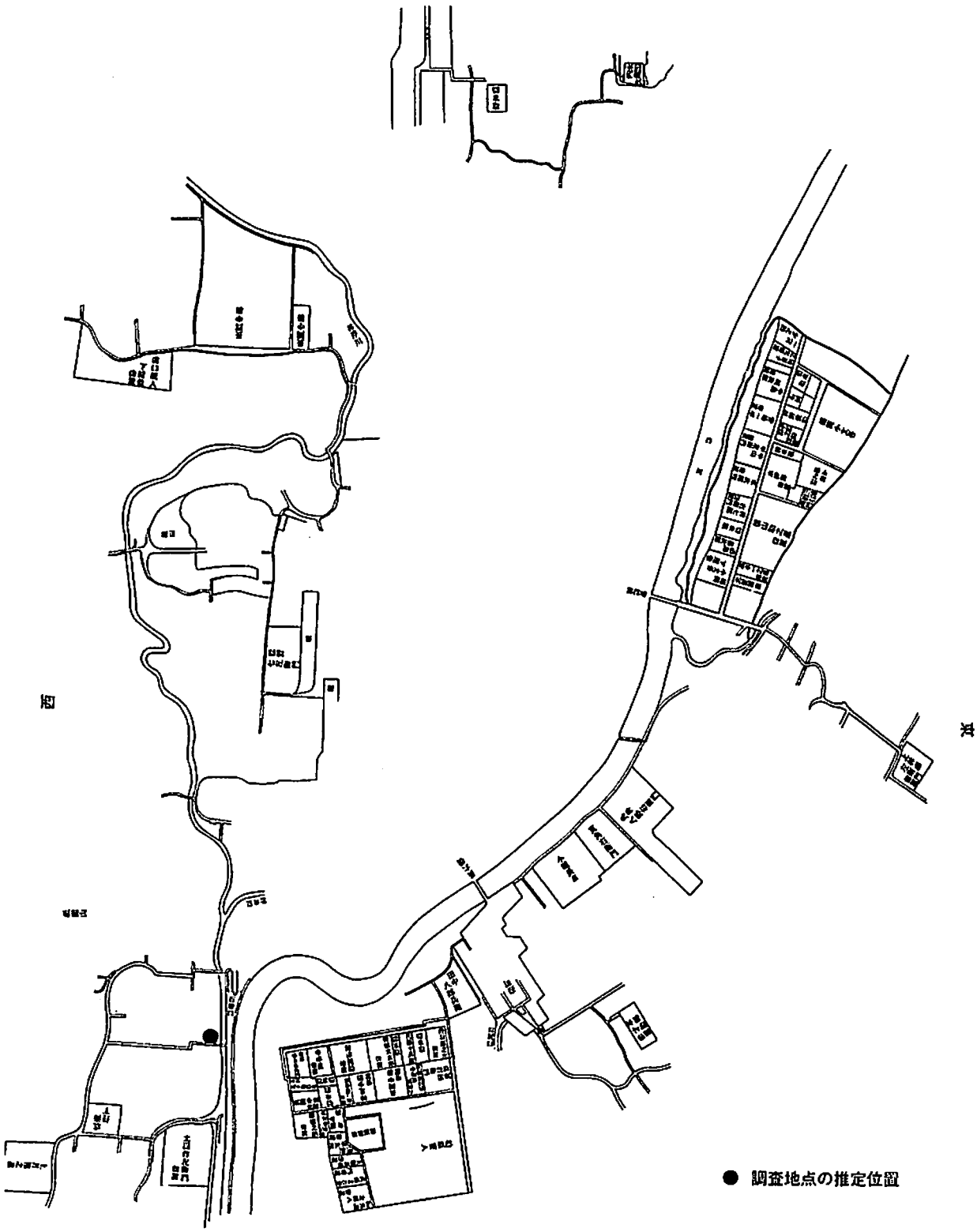
溝内から出土した遺物の下限は18世紀後半から19世紀初頭と考えられることから、「熊本之図」は溝の終末期の状況を呈していることになる。

（第７～８図参照）



●調査地点の推定位置
※文化2年（1805）の原図を嘉永3年（1850）にさらにそれを文久4年（1864）に写したもの。

第７図　熊本之図



※安政４年（1857）以降

第８図　熊本所分絵図　飽田　託麻之内屋敷絵図

引用・参考文献

鈴木　喬　1987「熊本市」『角川日本地名大辞典　43　熊本県』角川書店

熊本市　1993『新熊本市史』別編　絵図地図　上：中世、近世　下：近代、現代　新熊本市史編纂委員会

網田龍生　1994「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
日本中世土器研究会

美濃口雅朗　1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
日本中世土器研究会

山本信夫　1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社

中世土器研究会編　1995『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

美濃口雅朗　1996「御幸木部遺跡群」『新熊本市史』史料編　第１巻　考古資料
新熊本市史編纂委員会

大橋康二・西田宏子監修　1998「古伊万里」　別冊太陽　日本のこころ63　平凡社

水野哲郎　2000『祇園遺跡』　熊本県文化財調査報告第188集　熊本県教育委員会

大橋康二・家田淳一・野上建紀・中野雄二・船井向洋・東中川忠美　2000「九州陶磁の編年」
－九州近世陶磁学会10周年記念－九州近世陶磁学会

大橋康二構成　2002『実物大　そば猪口事典』　別冊太陽　骨董をたのしむ－42　平凡社

九州近世陶磁学会　2002『国内出土の肥前陶磁』　－西日本の流通をさぐる－　第一・二分冊
第12回九州近世陶磁学会　資料

松本寿三郎・池上尊義　2002「第五編　熊本城下をとりまく村々と農民の社会生活」
「第六編　熊本城下をささえる港町と交通・運輸」
『新熊本市史』通史編　第４巻　近世Ⅱ　新熊本市史編纂委員会

網田龍生　2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』
－考古学研究室創設30周年記念論文集－　龍田考古学

美濃口雅朗　2006「熊本市古町遺跡出土の陶磁器組成について」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　九州編』　第16回九州近世陶磁学会資料　九州近世陶磁学会

PL. 1　調査地遠景１（白川左岸より）

PL. 2　調査地遠景２

PL. 3　調査地近景（表土剥ぎ前）

PL. 4　上層の石列検出状況

PL. 5　石列１・２検出状況

PL. 6　石列３・４検出状況

PL. 7　久末（ひさすえ）神社前の仮装行列の参加者
（昭和15年ごろ）（杉山武久氏提供）

PL. 8　石列１検出状況

PL. 9　敷石に残る矢穴痕跡

PL. 10　下層の大溝掘削状況１

PL. 11　下層の大溝掘削状況２

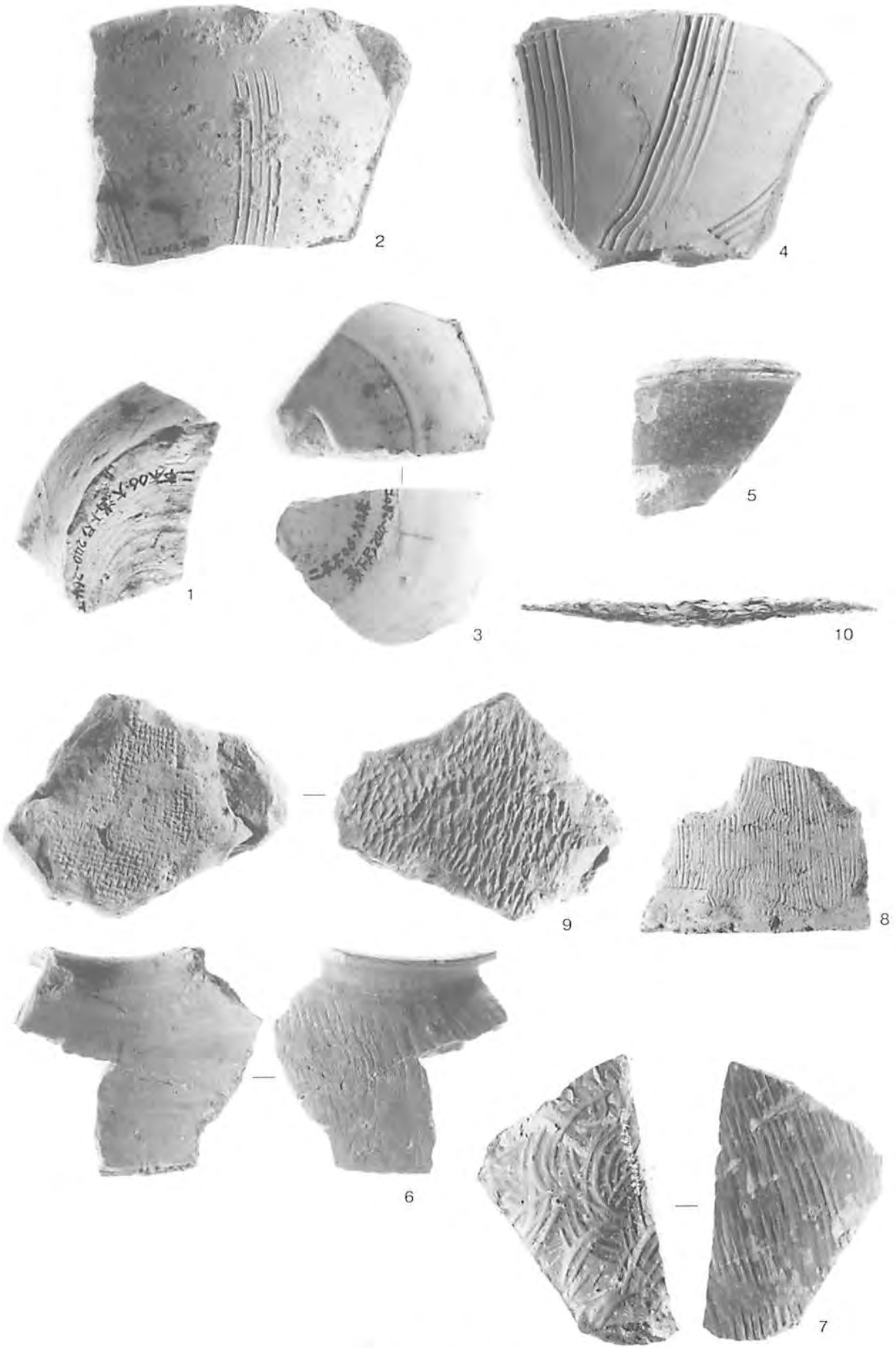
PL. 12　下層の大溝掘削状況３

PL. 13　大溝の南西側断面状況

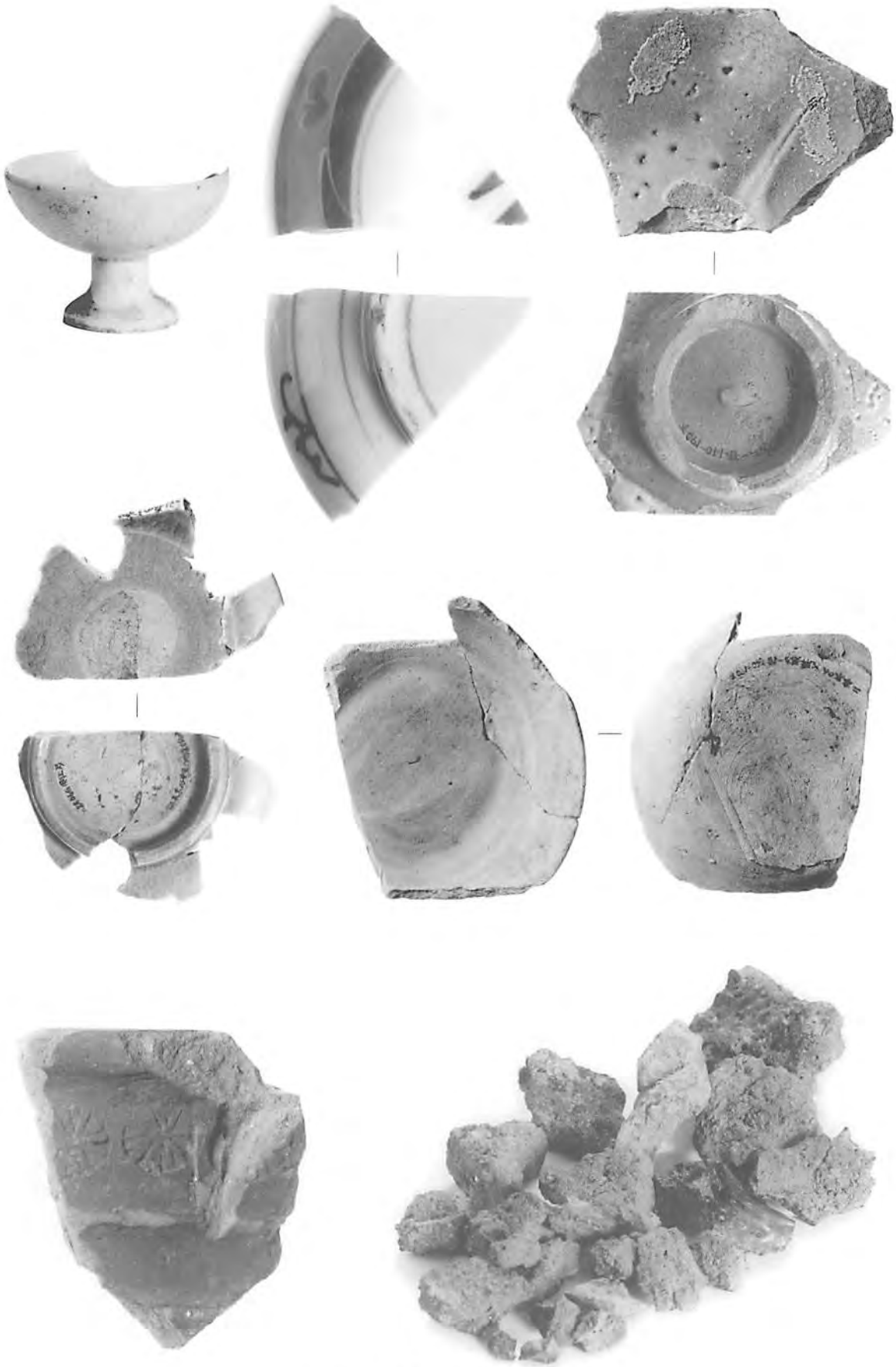
PL. 14　大溝の北西側断面状況

PL. 15　大溝の完掘状況１

PL. 16　大溝の完掘状況２



PL. 17　出土遺物 (1)



PL. 18　出土遺物 (2)（写真のみ）

第Ⅸ章　総括

今回、発掘調査を実施した地点は、二本木遺跡群の北側端部にあり、北側縁辺部の遺跡の様相の一端を確認できたことになる。

春日地区第１次調査では、古代の溝状遺構・竪穴住居跡を確認した。溝状遺構については古代の区画の一部ではなかろうか。

春日地区第２次調査では、古代・中世・近世の遺構を検出した。古代の遺構は溝状遺構１基、２群の土壙群、中世の遺構は溝状遺構１基、小土壙数基、近世の遺構は溝状遺構１基、小土壙３基である。出土遺物は古代から近世のものである。

春日地区第３次調査では、８世紀後半～９世紀前半の竪穴住居跡や井戸跡、北西から南東方向の同じ方向に伸びる７条の重複した溝跡を検出した。溝跡は切り合い関係から、８世紀後半～９世紀前半以前と考えることができる。この他には中世・近世の遺物が出土している。

春日地区第４次調査の検出遺構の主体は、中世の遺物を包含した溝跡10条で、これらを中世以降の土壙等が切る状態である。包含層からは古代から中世の土器等が出土している。

春日地区５次調査では、古代の井戸跡１基を確認した。井戸跡の覆土３層出土の炭化種子の14Cの年代測定結果は、10世紀後半であり、井戸の廃棄がそれ以前であったことが判明した。この他に、中世の土師質土器が多量に出土した。

春日地区第７次調査では、中世後期～近世の溝跡１条を検出した。その他、古代の遺物も出土している。

二本木遺跡群の過去の調査成果から全体を見てみる。この地域は熊本市教育委員会文化財課による発掘調査が数多く行われている。その成果をまとめると、二本木遺跡群は、奈良時代後半～平安時代前半・平安時代後半～室町時代を主体とする複合遺跡である。中でも、８世紀後半～９世紀前半には、竪穴住居跡や溝跡が広範囲に確認されている。この時代の出土遺物としては、陶硯、銅銙、石銙などの官衙遺跡から出土する遺物も多く見られる。その後、11世紀末～13世紀代に資料が増加し、掘立柱建物跡、溝跡、土壙、井戸などが高い密度で存在している。出土遺物では国内外の輸入品、畿内産の瓦器椀が注目できる（文献１）。

最近の調査の中でも、熊本市教育委員会文化財課が平成11年度、平成14・15年度に実施した二本木遺跡群第13次調査区の成果は注目すべきものである。南北方向の主軸をもつ８間×８間の大型掘立柱建物跡１棟、この建物跡の周辺隣接地に東西方向の主軸をもつ掘立柱建物跡３棟（うち、１棟は３間×７間）、南北方向の主軸をもつ掘立柱建物跡２棟、区画と考えられる柱列２列、溝跡２条が確認されている。これらの建物群は出土遺物から８世紀後半と考えられている（文献２）。これらの中でも、８間×８間の建物は特殊で、桁行８間で梁行が４間と３間の２棟の建物を隣接して建設し、一体として利用していると推定できる。床を支える柱穴もあることから床貼りの建物である。古代において、床面積を広げるために複数の建物を接して建てることを双堂と呼んでいる。双堂の例は日本では平城宮の内裏、長屋王邸、西大寺、奈良時代後半の西宮にある。二本木遺跡群の建物は規模・構造の点から中央の例に準じるもので、単なる地方官衙の施設とは考え難い。双堂の検出は、肥後国府の一部を確認している可能性が高い（文献３）。そうなると、今回検出した８世紀後半の遺構は国府または国府関連遺構の北端部のものとしての価値づけができる。

参考文献

(1)「新熊本市史」別編　第２巻　民俗・文化財　熊本市　平成８年
(2)「二本木遺跡群Ⅱ」熊本市教育委員会　平成19年
(3)玉田芳英「古代地方官衙遺跡研究の新展開」「月刊文化財」４月号（499号）　平成17年

あとがき

埋蔵文化財の発掘調査は、発掘調査現場、資料整理・報告書作成、発掘調査成果の活用に大きく分けることができます。

発掘調査現場では、土を掘り下げ、土の色や性質、堆積状態などから、昔の人々が地面に残した生活の跡を確認します。様々な分野で機械化が進んでいますが、発掘調査での作業の多くは手作業です。地面に残っている穴などは手作業でないとうまく掘ることができないからです。そのため、現場で作業をされる方々は毎日土と戦っています。時には、地面から湧いてくる水とも戦わなければなりません。

資料整理・報告書作成では、遺跡から出土した土器や石器などの遺物に付着している土を水洗いすることから始めます。寒い時に水洗いするのは辛い作業です。次の段階は、水洗い後の遺物一点ごとに遺跡名、出土地点・層位などを墨で注記します。撮影の妨げにならない場所に小さな文字・記号を注記します。細かな遺物への注記は拡大レンズが必要で、大変な作業です。注記しないと出土した遺物の情報が無くなり、拾った遺物と同じになります。次に、注記後の遺物の接合作業を行います。多くの破片から接合する破片を探し出す作業は根気がいります。接合が済んだ遺物の実測、写真撮影が次の仕事です。実測は方眼紙に遺物の形状、調整などを記録します。写真では実測では表現できない質感などの表現に気をつけて撮影をします。また、遺物の整理作業と並行して、現場で記録した図面を整理し、印刷用のトレース、印刷の版組などを行います。

発掘調査成果の活用では、発掘調査成果をまとめた報告書、出土遺物などを中心に、多くの方々に利用してもらうことが大切です。

以上のように、埋蔵文化財の発掘調査は担当者一人でできるものではありません。色々な場面で、多くの人が業務に携わっています。これらの人々のお陰で、発掘調査の成果をまとめた報告書が完成します。

これまで、色々な業務に携わった関係者の方々に感謝いたします。大変お世話になりました。皆様のご苦労に報いるためにも今後の活用に力を注いでいきます。

整理作業に携わった方々（敬称略、あいうえお順）

石田　敦子	今村　幸枝	上野　栄子	上村　孝子	浦田　和恵	江島　園子
大澤　由美	大塚トシ子	川井田久子	木村　典子	木村　雅子	工藤　光美
國竹真由美	興梠富貴子	古閑　知子	後藤　直美	佐藤　淳子	篠崎チカ子
瀬口　絹代	高濱　悦子	高松　孝子	田中知恵美	ト・キエン	冨田　知子
中島ひろみ	野添千津子	野田　　愛	平川恵里子	平川　早苗	府内　博子
古庄美伊子	益田　久子	松本　直枝	松本　裕子	宮崎　典子	吉岡　直子
吉武知佐子	吉本　清子	米倉　五月	渡邊いわ子		

報告書抄録

ふりがな	にほんぎいせきぐん
書名	二本木遺跡群Ⅱ
副書名	熊本駅北部線街路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第243集
編集者	西住欣一郎、岡本真也、坂口圭太郎、宮崎敬士、帆足俊文、松村洋史
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－8609　熊本市水前寺6丁目18番1号　TEL096－333－2707
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
にほんぎいせきぐん 二本木遺跡群	くまもとしかすが　ちょうめ 熊本市春日1丁目	43201	265	32度47分17秒	130度41分38秒	第1次 2000.08.10～2000.10.31 第2次 2001.12.19～2002.01.31 第3次 2002.06.03～2002.11.29 第4次 2003.11.10～2004.01.09 第5次 2004.10.12～2004.12.10 第7次 2006.05.09～2006.05.29	1736㎡	道路 建設

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二本木遺跡群	古代	竪穴住居跡 井戸跡 溝跡 土壙	須恵器 土師器	
	中世	溝跡 土壙	土師質土器	
	近世	溝跡	陶磁器	

熊本県文化財調査報告　第243集

二本木遺跡群Ⅱ

（春日地区第１～５・７次）

発行年月日　平成20年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
TEL. 096(333)2707

印　刷　敷島印刷株式会社
〒869-0542　宇城市松橋町豊崎1959番地
TEL. 0964(32)7272

19 教委 教文
② 002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 243 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：二本木遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/